

Title	モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究
Author(s)	塩谷, 茂樹
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 2007, 35, p. 1-205
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80078
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2006

大阪外国語大学
学術研究双書

35

モンゴル語ハルハ方言における
派生接尾辞の研究

塩谷茂樹 ◆

大阪外国語大学学術研究双書 35

モンゴル語ハルハ方言における
派生接尾辞の研究

塩谷茂樹 著

2006

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No.35 2006

**A Study of the Derivational Suffixes
in Khalkha Mongolian**

**Монгол хэлний халхын аялгуун дахь
үг бүтээх дагаврын судалгаа**

Shigeki SHIOTANI

前書き

本書『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』は、筆者が過去二十年余り一貫して研究を行ってきた「モンゴル語ハルハ方言の語構成分析」の結果の集大成として、計 218 の接尾辞を取り上げ、今回初めてその成果を発表するものである。

ここで言うモンゴル語ハルハ方言 (Khalkha Mongolian) とは、モンゴル国 (Mongolia) の標準語であり、1941 年以後、キリル文字表記による正書法の確立した言語を指すものである。

さて、本書の意義は、以下の二点に要約される。

1. 教育的側面

モンゴル語は、アルタイ諸語 (Altaic languages) に属し、語幹に接尾辞を接続して語を派生させるという膠着語的性格を有しており、そのため、派生接尾辞の研究は、モンゴル言語学の形態論研究の主要部分を占めていることは言うまでもない。

事実、国内外を問わず、モンゴル語の文法書は、これまでたくさんあるものの、「モンゴル語ハルハ方言の派生接尾辞」だけを取り扱った、網羅的かつ詳細な記述的研究は意外に少なく、特に国内では皆無である。

しかしながら、モンゴル語を習得する際、派生接尾辞に対する体系的な理解なしでは、当該言語習得が不可能なのは、紛れもない事実であり、この点で本書の教育的意義は少なくないと考える。

2. 学術的側面

筆者は、これまでモンゴル語の派生接尾辞に関して、以下の二点の研究資料を公刊してきた。

- (1) 「中国領内の蒙古系孤立的諸言語における接尾辞一覧・蒙古文語索引」、『日本モンゴル学会紀要』No.23, pp.165-199, 東京, 1992.
- (2) 「蒙古文語及び中国領内の満洲・ツングース諸語における対応する接尾辞について—特に女真語・満洲文語・錫伯語・三家子満洲口語及び鄂温克語・鄂倫春語・赫哲語を取り上げて」、『大阪外国語大学論集』第 30 号, pp.109-148, 大阪, 2004.

(1)は、1980年代後半に入り、ようやくその全体像が明らかとなってきた中国領内のモンゴル系孤立的諸言語 ^{バオアン}保安語・^{ドワンシャン}東郷語・^{モンゴル}土族語・^{シラ・ユグル}東部裕固語・^{ダウル}達斡爾語の構詞法に見られる主な派生接尾辞を、それぞれに対応する蒙古文語の項目の下に整理し、さらに、各接尾辞の表示する意味、異形態、及び再構形等を併記することにより、今後のモンゴル歴史比較言語学の形態論研究に寄与することを目的としたものである。

また、(2)は、モンゴル語と満洲語、とりわけ蒙古文語と満洲文語における構詞法の類似性に着目し、両者に共通して見られる接尾辞を網羅的に取り上げ、今後これら相互間における接尾辞の親縁関係を論ずる上で、明確な研究資料を提供することを目的としたものである。

本書は、これら二点の研究資料のそもそもの出発点となった、拙著、『現代モンゴル語ハルハ方言における語構成分析—特に派生接尾辞を中心とした考察』(付録)『共通蒙古語における接尾辞の形態的構造の分析』、大阪外国語大学提出卒業論文、1985を基にし、しかも、その後二十年余り絶えず加筆訂正を加えながら、完成させたものであり、学術的にも、とりわけ共時的記述研究の点で少なからず貢献するものと期待する。

最後に、今回膨大な手書き原稿をコンピューターに入力し協力してくれた大阪外国語大学、大学院博士後期課程修了の中嶋善輝君に対し、また、特に第5章出小動詞接尾辞の、非生産的可変語根及びオノマトペの意味記述に関し、筆者の再三の質問に対しても、常に快く的確なアドバイスをして全面的に協力してくれた同大学、大学院博士前期課程2年のヤマーフー・バダムハンドさんの両氏に対して、ここに記して、心から感謝の意を表したい。

2006年11月20日

大阪外国語大学、アジアI講座 モンゴル語

塩谷茂樹 (Shigeki SHIOTANI)

目次

0. モンゴル語の語形式の内部構造と派生接尾辞	1
1. 出名名詞接尾辞 (Denominal nominal suffixes / N→N)	4
① {-ааль} = /-ааль ∞ -аал /	4
② {-вар} = /-вар ∼ -бар /	4
③ {-втар}	5
④ {-вхи} = /-вхи ∞ -вх /	6
⑤ {-вч}	6
⑥ {-га}	7
⑦ {-ган}	7
⑧ {-гана}	8
⑨ {-гтай}	8
⑩ {-гч}	9
⑪ {-гш} = /-гш ∼ -ш /	10
⑫ {-гүй}	11
⑬ {-д}	12
⑭ {-дай} = /-дай ∞ -ндай /	14
⑮ {-дар}	14
⑯ {-дуу}	15
⑰ {-ж}	16
⑱ {-жин}	17
⑲ {-жээр} = /-жээр ∼ жээл /	17
⑳ {-з}	19
㉑ {- (а)й}	19
㉒ {-лаг}	19
㉓ {-лдай}	21
㉔ {-лж} = /-лж ∞ -лжин /	22
㉕ {-м}	23
㉖ {-маг}	24
㉗ {-мад}	24
㉘ {-мсаг}	24
㉙ {-мсан}	25
㉚ {-н}	26
㉛ {-на}	29
㉜ {-нгуй} = /-нгуй ∞ -нхуй /	29
㉝ {-нхи} = /-нхи ∞ -нх /	30
㉞ {-нцар}	30
㉟ {-р}	32
㊱ {-р}	32
㊲ {-рхаг} = /-рхаг ∼ -рхуу /	33
㊳ {-с} = /-с ∞ -сан /	35
㊴ {-саг} = /-саг ∼ -суу /	35
㊵ {-т}	36
㊶ {-тай}	37
㊷ {-тан}	38
㊸ {-уур}	38
㊹ {-х} = /-х ∞ -хь (-хи) /	40
㊺ {-хай} = /-хай ∞ -гай /	41
㊻ {-хан}	43
㊼ {-хан}	44
㊽ {-ц}	45
㊾ {-цаг} = /-цаг ∞ -нцаг /	45
㊿ {-ч} = /-ч ∞ -чин /	46
51 複数接尾辞	48
(1) {-ууд} = /-ууд ∼ -нууд /	48
(2) {-д}	50
(3) {-с}	52
(4) {-чууд} = /-чууд ∼ -чуул /	52
(5) {-нар}	53
52 数詞接尾辞	54

(1) a) {-дугаар} = /-дугаар	(2) {-уул(аа)}	56
∞ -тгаар /	(3) {-аад}	58
b) {-дахь}	(4) {-(-н)гаа}	58

2. 出動名詞接尾辞 (Deverbal nominal suffixes / V→N) 60

① {-аа} = /-аа ∞ -аан /	⑩ {-г}	69	③⑩ {-мж}	94
② {-ааж}	⑪ {-га} = /-га ~ -гаа /	62	③⑪ {-мсар}	95
③ {-аал}	⑫ {-галан}	62	③⑫ {-мт}	97
④ {-аар}	⑬ {-гар} = /-гар ∞ -гай /	63	③⑬ {-мхай} = /-мхай (~ -мгай)	97
⑤ {-аас}	⑭ {-гсад}	63	∞ -мгай /	97
⑥ {-аахай}	⑮ {-гч}	65	③⑭ {-мшиг}	100
⑦ {-аач}	⑯ {-д}	66	③⑮ {-мь} = /-мь ∞ -м /	100
⑧ {-в}	⑰ {-даг}	67	③⑯ {-н}	101
⑨ {-вар} = /-вар (~ -бар)	⑱ {-дал} = /-дал ~ -тал /	67	③⑰ {-н(г)}	103
∞ -мар /	⑲ {-дас}	67	③⑱ {-нга}	104
⑩ {-г}	⑳ {-з}	69	③⑲ {-нгуй}	105
⑪ {-га} = /-га ~ -гаа /	㉑ {-л}	69	③⑳ {-нхай} = /-нхай ∞ -нги	105
⑫ {-галан}	㉒ {-лан(г)}	69	(→ -нгийр) /	105
⑬ {-гар} = /-гар ∞ -гай /	㉓ {-лга}	75	④① {-р}	107
⑭ {-гсад}	㉔ {-лт}	76	④② {-ран(г)} = /-ран(г)	107
⑮ {-гч}	㉕ {-ль} = /-ль ∞ -л /	77	∞ -раг /	108
⑯ {-д}	㉖ {-м}	79	④③ {-рь} = /-рь ∞ -р /	109
⑰ {-даг}	㉗ {-м}	81	④④ {-с}	109
⑱ {-дал} = /-дал ~ -тал /	㉘ {-маг}	81	④⑤ {-с}	110
⑲ {-дас}	㉙ {-мал}	82	④⑥ {-уу} = /-уу ∞ -уун /	110
⑳ {-з}		82	④⑦ {-уул}	113
㉑ {-л}		83	④⑧ {-уур} = /-уур (~ -уул)	113
㉒ {-лан(г)}		84	∞ -уурга /	114
㉓ {-лга}		84	④⑨ {-уур}	117
㉔ {-лт}		85	④⑩ {-уурь} = /-уурь (~ -ууль)	117
㉕ {-ль} = /-ль ∞ -л /		87	∞ -уур /	118
㉖ {-м}		89	⑤① {-хай}	121
㉗ {-м}		90	⑤② {-хуй}	123
㉘ {-маг}		91	⑤③ {-хуун}	123
㉙ {-мал}		92	⑤④ {-ц}	125
		93	⑤⑤ {-ш}	126

3. 出名動詞接尾辞 (Denominal verbal suffixes / N→V) 128

- | | |
|--|----------------------|
| ① {-вчла-} 128 | ⑨ {-с-} 142 |
| ② {-да-} 128 | ⑩ {-са-} 145 |
| ③ {-жи-} = / -жи-
∞ -жира- / 131 | ⑪ {-та-} 146 |
| ④ {-ла-} = / -ла- ~ -на- / 132 | ⑫ {-ца-} 147 |
| ⑤ {-лда-} 138 | ⑬ {-чи-} 149 |
| ⑥ {-ра-} = / -ра- ~ -ла- / 139 | ⑭ {-чла-} 149 |
| ⑦ {-рха-} = / -рха-
~ -лха- / 141 | ⑮ {-шаа-} 151 |
| ⑧ {-с-} = / -с- (~ -部, -д-) / 142 | ⑯ {-ши-} 152 |
| | ⑰ {-шира-} 153 |

4. 出動動詞接尾辞 (Deverbal verbal suffixes / V→V) 155

- | | |
|--|--|
| ① {-уул-} = / -аа- ~ -га-
~ -уул- ~ -лга- / 156 | ⑦ {-лза-} = / -лза- ∞ -валза-
∞ -галза- / 175 |
| ② {-гда-} = / -гда- ~ -да-
~ -та- / 163 | ⑧ {-гана-} 176 |
| ③ {-лда-} 167 | ⑨ {-чих-} (~ 簡略形 -ч-) 176 |
| ③ の拡張形 {-цалда-} 170 | ⑩ {-аадах-} 177 |
| ④ {-лца-} 171 | ⑪ {-схий-} 178 |
| ④ の縮約形 {-ца-} 174 | ⑫ {-зна-} 180 |
| ⑤ {-цгаа-} 174 | ⑬ {-ра-} 181 |
| ⑥ {-ла-} 175 | ⑭ {-ни-} = / -ни- ∞ -но- / 181 |

5. 出小動詞接尾辞 (Departicle verbal suffixes / P→V) 183

- | | |
|----------------------|--|
| ① {-чи-} 183 | ⑨ {-хина-} = / -хина-
~ -гина- / 193 |
| ② {-л-} 184 | ⑩ {-чигна-} = / -чигна-
~ -жигна- / 195 |
| ③ {-ра-} 184 | ⑪ {-ра-} 196 |
| ④ {-ги-} 191 | ⑫ {-хира-} 196 |
| ⑤ {-ла-} 192 | ⑬ {-ши-} 197 |
| ⑥ {-хила-} 192 | ⑭ {-шира-} 198 |
| ⑦ {-на-} 193 | |
| ⑧ {-тна-} 193 | |

補遺：接尾辞総索引 199

参考文献 203

0. モンゴル語の語形式の内部構造と派生接尾辞

モンゴル語の語形式 (word-forms) とは、独立形式 (independent form) である語と従属形式 (dependent form) である語尾¹⁾ から成る単位である。

0.1. モンゴル語における語の形態的分類

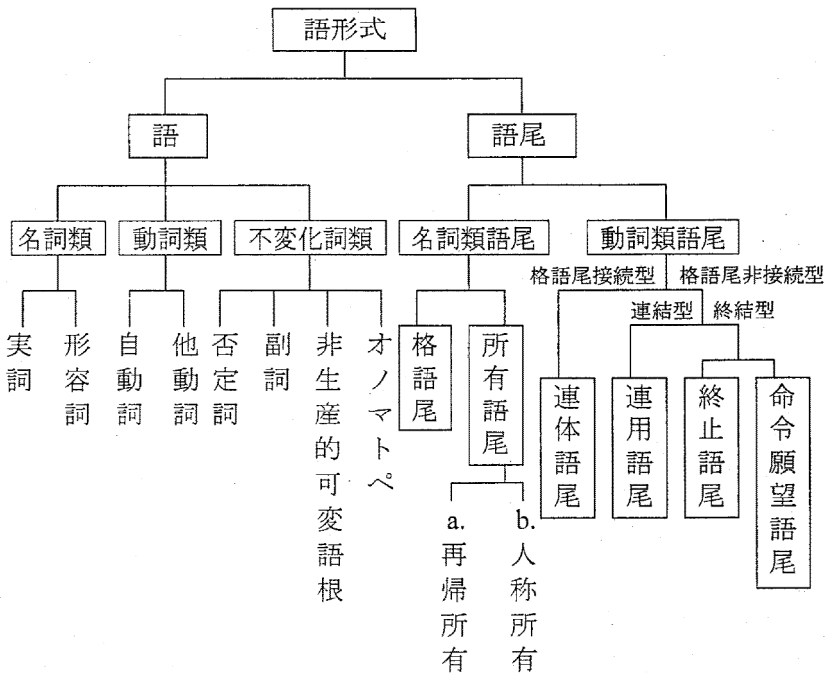
まず、語は、語尾による名詞と動詞の二つの大きな語形変化系列によって、前者の系列に現れうる名詞類 (nominal class, 以下 N と略すことがある)、後者の系列に現れうる動詞類 (verbal class, 以下 V と略すことがある)、そのいずれにも現れない不変化詞類²⁾ (particle class, 以下 P と略すことがある) の三つの語類に分類でき、これらはすべて語彙的意味を担っている。ただし、モンゴル語において、形容詞は、名詞 (狭義の) と形態的に区別できない場合が多く³⁾、明確に境界を設けると記述に一貫性がなくなるため、本稿では、形容詞を名詞 (広義の) に含め、特に両者を区別する必要がある場合に限って、実詞 (substantives) という語を用い、形容詞と区別した。

0.2. モンゴル語における語尾の形態的分類

これに対し、共時態における文法範疇の表示を表す語尾の方は、まず名詞類語尾が、格語尾 (配列 1)、所有語尾 (配列 2) (a.再帰所有、b.人称所有) の二つの下位系列に、また動詞類語尾が、さらに格語尾 (配列 1) を接続できるもの、すなわち格語尾接続型を、連体語尾 (配列 3) (従来は「形動詞語尾」(verbal nouns) と呼んだ) と称し、一方格語尾を接続できないもの、すなわち格語尾非接続型を、連用語尾 (配列 4) (従来は「副動詞語尾」(converbs) と呼んだ)、終止語尾 (配列 5)、命令願望語尾 (配列 6) と称し、計四つの下位系列に分類することができる。なお、配列 1 と配列 2 は、1-2 という配列順序が決まっているのに対し、配列 3, 4, 5, 6 は、相互排他的であるという特徴をもっている。

0.3. モンゴル語の語形式の内部構造

以上の事柄を要約すると、モンゴル語の語形式の内部構造は、概略次のように図示することができる。



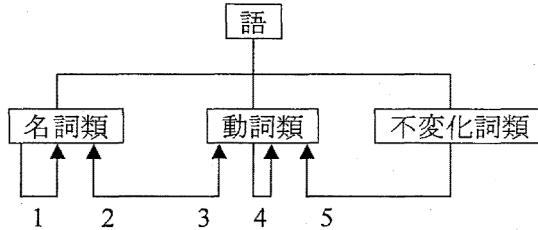
また、モンゴル語の語形式は、具体的に次の七つのタイプに再分類できる。

1. 名詞類 + 格語尾 (φ^{ゼロ}も含む)
2. 名詞類 + 格語尾 + 所有語尾 (a.再帰所有, b.人称所有)
3. 動詞類 + 連体語尾
4. 動詞類 + 連用語尾
5. 動詞類 + 終止語尾
6. 動詞類 + 命令願望語尾 (φ^{ゼロ}も含む)
7. 不変化詞類

0.4. モンゴル語の語の形態的分類と派生接尾辞

モンゴル語の派生接尾辞は、語形式のうち、もちろん語の内部構造でのみ見られるものであり、上述したように、モンゴル語の独立形式である語は、形態的に名詞類 (nominal class), 動詞類 (verbal class),

不変化詞類 (または小詞類) (particle class) の三つに大別されることから、これら相互間で、以下のように計五つの派生による語形成方法が見られるという特徴があり、この大原則の下で、本稿は構成されている。



モンゴル語の派生接尾辞による語形成方法

1. 出名名詞接尾辞 (Denominal nominal suffixes / N→N)
2. 出動名詞接尾辞 (Deverbal nominal suffixes / V→N)
3. 出名動詞接尾辞 (Denominal verbal suffixes / N→V)
4. 出動動詞接尾辞 (Deverbal verbal suffixes / V→V)
5. 出小動詞接尾辞 (Departicle verbal suffixes / P→V)

したがって、この五つの派生方法をそれぞれ順に章として設定し、以下、モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の形態素分析の結果を詳細に記述することにする。

なお、本稿では、/BV/は、モンゴル語文法で言う男性語 (эр үг) を、/FV/は、女性語 (эм үг) を表すものとする。

- 1) モンゴル語研究では、従来から伝統的に「屈折接尾辞」(inflectional suffixes) のことを「語尾」(endings) と呼んでいる。また、モンゴル語でも、語尾のことを、үг бүтээх дагавар (派生接尾辞) に対し、үг хувилгах дагавар (屈折接尾辞) ということもあるが、現在では、通常単に нөхцөл (語尾) という用語を用いることが多い。
- 2) 不変化詞類の代表的な例として、次のものがある。
 - a) 否定詞 бүү, эс, үл, битгий
 - b) 副詞 нэн, яг, маш, ялангуяа ... etc.
 - c) 非生産的的可変語根 хага, хуга, бут, хэмх, бяц ... etc.
 - d) オノマトペ шуу, бүв, жин, сэр, пур, аа, ээ ... etc.
- 3) N. Poppe も、Introduction to Altaic Linguistics, Wiesbaden, 1965, p.195 で、In Mongolian no line between substantives and adjectives can be drawn. と述べる。

1. 出名名詞接尾辞

(Denominal nominal suffixes / N→N)

① {-ааль} = /-ааль ∞ -аал/

この接尾辞は、ごく若干の名詞語幹に接続し、《親族関係》を表す実詞を形成するが、化石的形態でその環境は極めて限定されている。

үеэл いとこ (Mo.üyeli) (< үе 世代, үенцэр いとこの子)

хаяал 又いとこ (Mo.qayali) (<? хаяа ものの縁, 端)

またその他、авааль 《正式に結婚した》(Mo.abali ~ abayali) も見られるが、これはおそらく動詞語幹 ав- 《(妻を)めとる》から派生したものと思われる。

② {-вар} = /-вар ~ -бар/

この接尾辞は、若干の色彩語に接続し、《その色彩の程度がやや弱い》ことを表す。なお、この接尾辞と同じような意味をもつ語に、③の接尾辞 {-вгар} があるが、② {-вар} が色彩語のみに接続し化石的形態であるのに対し、③の接尾辞は、色彩語を含むその他多くの形容詞に生産的に接続する点で、その機能を異にするものである。

улбар 赤味がかった (Mo.ula-bur) (< улаан 赤色の (Mo.ulayan))

улаавар 赤に黄色または黒を混ぜた色 (Mo.ulaya-bur)

(< улаан 赤色の)

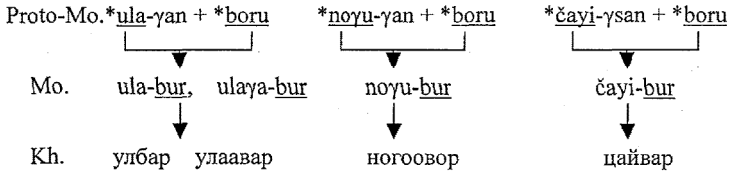
ногоовор 緑色がかった (< ногоон 緑色の)

その他、цайвар 《白味がかった、白っぽい》(Mo.čayibur) も見られるが、これは動詞語幹 цай- 《白くなる》から派生したものであるろう。

<考察>

- 1) この接尾辞 {-вар} (Mo.-bur) は、通時的に色彩語 бор (Mo.boru) 《灰色の、浅黒い》が接尾辞化したとする説が一部のモンゴル人の学者の間にあり、これには一種の民間語源が働いていると考えられるが、その蓋然性はかなり大きいようにも思われる。

すなわち、通時的には次のような形成過程を経て成立した蓋然性が大きいと考えられる。



2) モンゴル文語では、-bur と同一機能をもつ接尾辞 -bir も見られるが、これは「赤」と「白」を意味する名詞語幹 — ulayan, čayan — にのみ接続して見られる化石的形態で、共時的には -bur の形態的に条件づけられた異形態とみなすことができようが、通時的に同一起源に遡れるかどうか、今の所定かではない。

Mo.-bur = /-bur ∞ -bir / (-bur < *boru 灰色の >? -bir)

基本形	派生形	Kh.
(ulayan >)	ulabur ~ ulabir ulayabur ~ ulayabir	улбар улаавар
*ča- — (čayan >) (čayi- >)	čayabur ~ čayabir čayibur ~ čayibir	цайвар

③ {-vтар}

この接尾辞は、主として、1. 《色彩語》 2. 《人・物の外観・外形》等を表す形容詞に接続し、《その性質の程度を弱める》ことを意味する形容詞を形成する。(1. 《～がかった、～っぽい》, 2. 《やや～, 少し～》) (“арай～” гэсэн утгатай)

1. харавтар 黒味がかかった (< хар 黒色の)
- шаравтар 黄色がかかった (< шар 黄色の)
- хөхөвтөр 青味がかかった (< хөх 青色の)
- боровтор 灰色がかかった (< бор 灰色の)
- улаавтар 赤味がかかった (< улаан 赤色の)
- цагаавтар 白っぽい (< цагаан 白色の)
- хүрэвтэр 褐色がかかった (< хүрэн 褐色の)
2. туранхайвтар やややせた (< туранхай やせた)
- таргавтар やや肥えた (< тарган 肥えた)
- бүдүүвтэр やや太った (< бүдүүн 太った)
- нарийвтар やや細い (< нарийн 細い)

ихэвтэр やや大きい (< их 大きい)
 дугуйвтар やや円い (< дугуй 円い)
 гонзгойвтар やや馬づらの (< гонзгой 馬づらの)
 хөгшивтэр やや年とった (< хөгшин 年とった)

④ {-ВХИ} = /-ВХИ ∞ -ВХ/

この接尾辞は、ごく若干の名詞語幹に接続し、《語幹の意に関連した意》を表す実詞を形成するが、化石的形態である。

усавхи まずい酒；水っぽい (< ус 水)

идэвх 積極性 (< ид 力, エネルギー)

また、その他 чадавхи 《能力》という専門用語も見られるが、これはロシア語 потенциал からの翻訳借入であり、動詞語幹 чада- 《可能である》から造り出されたものである。

⑤ {-ВЧ}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、主として《物を覆う装具、物の覆い》を表わす実詞を形成する。

хуруувч 指貫き (< хуруу 指)

чихэвч 耳当て (< чих 耳)

элгэвч 腹巻き (< элэг 肝臓)

бугуйвч 腕輪 (< бугуй 手首)

хүзүүвч 首輪 (< хүзүү 首)

нуруувч 背中に重ねて着る服 (< нуруу 背中)

улавч (靴の) 敷き革 (< ул 足の裏)

хошуувч 口輪 (< хошуу (動物の) 鼻先)

далавч 翼 (<? дал 肩甲骨; cf. Виг. дали 翼)

үүргэвч リュックサック (lit. 荷を入れるもの) (< үүрэг 荷; 義務)

хөхөвч ブラジャー (< хөх 乳房)

бэлгэвч コンドーム (< бэлэг (эрхтэн) 性器)

хэгэвч 財布 (< хэт 火打ち金)

түрийвч 財布 (< түрий 長靴の胴)

<考察>

おおむね次の2つの意に縮約できそうである。

1. (～を) 覆うもの, (～の) 覆い 《бүрхэх юм》
2. (～を) 入れるもの, (～の) 入れもの 《хийх юм》

< 参照 >

以下のように、類推による機能的拡張例も見られる。

{-вч} : 1. N-N → 2. V-N

оновч 的を射たこと, 的確 (< оно- 命中する)

нуувч さんごう, 壕 (< нуу- 隠す)

⑥ {-га}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、《語幹の意に関連した意》を表わす。

A) 単一接尾辞 (Simple suffix) として

(1) Mo.-γα²に遡るもの

давхарга 層 (< давхар 二重(の))

хушга くるみ (< хуш 西洋スギ)

тоосго (Mo.toγusqa) レンガ (< тоос (шороо) (Mo.toγusu) ほこり)

мянга 千 (Mo.ming-γα(n); Tur.bin 千)

шарга 黄色っぽい (< шар 黄色い)

уянга 叙情的な (< уян 柔らかい, 弾力のある)

(2) Mo.-γu²に遡るもの

зарга 訴訟 (< зар 布告)

хайрга 小石, 砂利 (< хайр (чулуу) 小石, 砂利)

B) 複合接尾辞 (Compound suffix) の後項の形態素として

(1) ④⑧ {-уурга} (V→N) (< -уур (V→N) + -га (N→N))

(2) ②③ {-лга} (V→N) (< -л (V→N) + -га (N→N))

< 考察 >

この接尾辞 {-га} は、名詞語幹末の環境が流音 (л, р, 特に р) の場合に、多く接続されるようである。(vide ⑩ {-га} (V→N))

⑦ {-ган}

この接尾辞を伴う若干の語は、主に《親族語彙》を表す。

эмгэн おばあさん (cf.эмэг 祖母, эм 女)

өвгөн おじいさん (cf.өвөг 祖父)

бэргэн 兄嫁 (< бэр 嫁) (Mo.bergen (SH.berigen) 兄嫁 < Mo.beri 嫁)

хүргэн 婿, 娘の夫

самган 年老いた女; 妻

удган 女性のシャーマン

⑧ {-гана}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、《植物、動物の名前》を表わす実詞を形成する。(動植物名形成接辞)

харгана (植) くわ科の一つ (< хар 黒色の)

улаагана (植) 赤すぐり (< улаан 赤色の)

алтгана (植) きんぐさり (< алт 金)

жимсгэнэ いちごの類 (< жимс 果物)

зээргэнэ (植) まおう属 (< cf.зээрд (馬の)人参色の, 栗毛の)

хялгана (植) はねがや (< cf.хялгас (動物の)剛毛)

хулгана ねずみ (< cf.хул 葦毛色の, хулга- 恐れてびくびくする)

<考察>

Mo.-γana² 《動植物名形成》(N→N) は、形態的に条件づけられた異形態 -gina² をもつと考えられる。

{-γana²} = /-γana² ∞ -gina²/

Mo.songgina 《たまねぎ》(Kh.сонгино)

< *song (Ch.葱 (cōng) 《ネギ》) + -gina (N→N))

[cf.東部裕固語 tsəGəŋ (*tsong + -gina)]

⑨ {-гтай}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、1. 《尊敬》または 2. 《女性》の意味をもつ実詞を形成する。

1. эрэгтэй 男性 (< эр 男)

эмэгтэй 女性 (< эм 女)

хагагтай 女性に対する敬称 (< хаган 王妃, 貴族夫人)

2. ноёгтой¹⁾ 領主婦人, 婦人に対する敬称 (= Mrs.)

(< ноён 領主, 男性に対する敬称 (= Mr.))

эээгтэй²⁾ 家の女主人 (= гэрийн эмэгтэй эзэн)

(< эзэн 主人, 家長)

<考察>

2. で挙げた 2 語は、1. に対する類推 (analogy) によって二次的に形成された可能性がある。もしそうだとすれば、{-гтай} の原義は、あくまでも 1. 《尊敬》の方であり、2. 《女性》は、1. → 2. へと意味が派生して生じたと捉えることも可能であろう。

すなわち、この接尾辞の表示する意味は、次のようにまとめることができる。

N + {-ггай}

1. [+丁寧]

↓ 意味の派生

2. [-男性]

<例文>

1) Ноён, ноёгтой хоёр Робинсон гарч ирээд Нансалмаагийн таниулах тэмдгийг ажив.

ロビンソン夫妻は(飛行機から)出てきてナンサルマーのバッジに目を注いだ。

(Л. Лхагва, Ж. Лувсандорж, *Учитесь говорить по монгольски*, УБ, 1978, p.101 より引用)

2) Гүржав хөшгийг долоовор хуруугаараа бяцхан завсар гаргаж харвал гэрийн эзэгтэй зүүн орон дээр урт хар гээгээ асгаруулан самнаж сууна.

グルジャブは、カーテンを人差し指でわずかに隙き間を作り、見てみたところ、家の女主人は、左のベッドの上で長い黒髪を垂らし、髪をとかしている。

(С. Эрдэнэ, 'Агаархал', *Цэнхэрлэн харагдах уул*, УБ, 1981, p.164 より引用)

⑩ {-гч}

この接尾辞は、主として《色彩語》に接続し、《雌の家畜の毛色》を表わした形容詞を形成する。

харагч (雌の家畜の毛色が)黒い (< хар 黒色の)

цагаагч (雌の家畜の毛色が)白い (< цагаан 白色の)

шарагч (雌の家畜の毛色が)黄色い (< шар 黄色の)

улаагч (雌の家畜の毛色が)赤い (< улаан 赤色の)

хөхөгч (雌の家畜の毛色が)青い (< хөх 青色の)

борогч (雌の家畜の毛色が)灰色の (< бор 灰色の)

хүрэгч (雌の家畜の毛色が)褐色の (< хүрэн 褐色の)

эрээгч (雌の家畜の毛色が)雑色の (< эрээн 雑色の)

алагч (雌の家畜の毛色が)斑の (< алаг 斑の) etc.

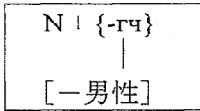
また、若干次のような例も見られる。

хормогч Эпрон(→主に女性が身につけるためか?)

(= хормойвч (lit. 裾のおおい)) (< хормой(服の)裾)

注) 文法的には、元来 хормойвч が正しい形式で、хормогч が後に新しく形成された形式だろうか? 換言すれば、前者が書き言葉で、後者が話し言葉の形式と言えようか?

<定式化>



(cf. ⑰ {-ж} (N→N), ⑨ {-гтай} (N→N))

⑪ {-гш} = /-гш ~ -ш/

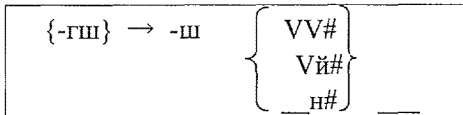
この接尾辞は、《場所》を示す語幹または語根に接続し、《中心から外へ向かう運動の方向性》を表す。

1. гадагш 外へ (<*гада-, cf. гадна 外に)
- дотогш 中へ (<*дото-, cf. дотор 中に)
- урагш 前へ, 南へ

(Mo. uru-γsi ; cf. uru-ldu- 競争する, uru-γu 下へ, ~の方へ)

- арагш¹⁾ 後へ (<ap 後)
- дорогш 下へ (~ доош) (<дор 下に)

また、この接尾辞 {-гш} は、音韻的に条件づけられた異形態 -ш をもち、これは次の環境で現れる。



(VV … 長母音, Vй … 二重母音)

異形態 -ш の例として、次のようなものがある。

2. a) дээш 上へ (<*дээ-, cf. дээр 上に)
- доош 下へ (<*доо-, cf. доор 下に)
- нааш こちらへ (<*наа-, cf. наана こちら側に)
- цааш 向こうへ (<*цаа-, cf. цаана 向こう側に)
- b) хойш 北へ, 後へ (<*хой-, cf. хойно 北, 後)
- зүүнш 東へ, 左へ (<зүүн 東, 左)
- баруунш 西へ, 右へ (<баруун 西, 右)
- ийш こっちへ

(<*ий-, cf. ийн このように(文語), ийм このような(に))

тийш そっちへ, あっちへ

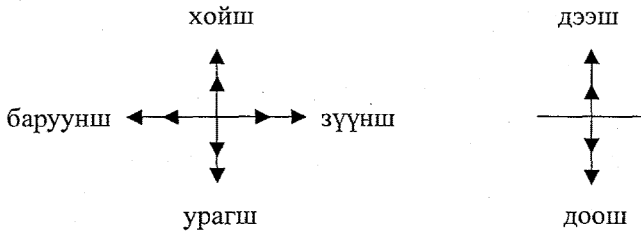
(<*тий-, cf. тийн そのように(文語), тийм そのような(に))

хааш どこへ, どちらへ (<хаа どこに)

(なお、モンゴル文語では、1. 及び 2. a) は、-ysi で、2. b) は、-si という形式で現れる)

<参考>

この接尾辞 {-гш} = /-гш--ш/を用いて、上下及び東西南北へ
の方向性を図式化して示すと、次のようになる。



(この図に関しては、

Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*,
УБ, 1978, p.103 参照.)

- 1) この語 арагш は、従来の辞書には全く記述がされていないが、筆者がモンゴル人民共和国滞在中、しばしば観察することができた。
すなわち、ハルハ方言では、一般に次のような関係が成り立っていると言えよう。

урагш 前へ ↔ хойш 後へ (文語および口語)
арагш 後へ (口語)

また、арагш に対する文語形はあまり見られないが、Mo.aru 《後ろ》から、容易に*aruysi と再構できよう。

(cf.(内モ) [aranʃ] (Mo.arunsi 後ろへ))

⑫ {-гүй}

これは、үгүй (Mo.ügei) 《ない》という語が、先行する名詞語幹と結合力を増すことによって一種の接尾辞化したもので、共時的には、現代モンゴル語における欠性接尾辞 (privative suffix) とも言ってもさしつかえないであろう。

хэрэггүй 必要のない, 不必要な (<хэрэг 必要)

ашиггүй 利益のない, 無益な (<ашиг 利益)

аюулгүй 危険のない, 安全な (<аюул 危険)

чадалгүй 力のない, 無力な (<чадал 力)

зориггүй 勇気のない, 臆病な (<зориг 勇気)

дургүй 好きでない, 嫌いな (<дур 好み)

завгүй 暇のない, 忙しい (<зав 暇)

<考察>

この {-гүй} という欠性接尾辞は、モンゴル文語では ügei と表され、通例名詞語幹には直接接尾せず、分離して記されるが、一部、すでに先行語に吸収され共時的に派生語としてではなく、ほぼ単一語として認識されるようになってしまった語も次のように若干見られる¹⁾。

Mo.ejegi (эзгүй) 無人の、住人のいない

(< eje ügei < ejen ügei < ejen 主人)

Mo.büsegüi (бүсгүй) 女性²⁾ (< büse ügei < büse 帯)

Mo.kelegei (хэлгий) おしの

(< kele ügei (хэлгүй) おしの < kele 舌)

-
- 1) Б. Ринчен, *Монгол бичгийн хэлний зүй, өгүүлбэр зүй, дөтгөөр дэвтэр*, УБ, 1967, p.39.
 - 2) モンゴル人の話によると、かつて、モンゴルの既婚女性は、“デール(モンゴル服)に帯をしない”(бүс бүсэлдэггүй) 習慣があったという。したがって、このことから、一般に《女性》を бүсгүйと称するようになり、その逆の бүстэйが《男性》を意味するようになったものと考えられる。

⑬ {-д}

- A) この接尾辞は、名詞語幹または語根 (root)¹⁾ に接続し、主として 1. 《場所》, 2. 《時》等を表わす名詞語幹を形成する。
(なお、この接尾辞は、通時的には与位格語尾 Mo.-da / -de に遡るものである。)

1. эндここに (cf.энэこれ)

тэндそこに, あそこに (cf.тэрそれ, あれ)

хажуудそばに (< хажууそば)

дэргэд傍らに (Mo.derge-de)

дунд間に, 中央に (Mo.dum-da)

хооронд間に (Mo.qoyurundu ← *qo-yur-un-du

< Proto-Mo.*qoyar dumda)

2. үргэлжид常に, 絶えず (< үргэлж常に, 絶えず)

насад常に, 一生の間 (< нас年齢)

хэзээдいつも, 常に (< хэзээいつ)

өнөд永遠に (< өнө古代, 長い間)

батад 常に (< бат 堅固な, 堅い)
 үүрд 永久(永遠)に (Mo.egüri-de)
 ашид 永久の(に) (Mo.asi-da)

B) この接尾辞は、主として場所を示す名詞語幹または語根に接続し、位置を表わす形容詞を形成する。

(なおこれは、通時的には与位格語尾 -du / -dü (Mo.) に遡るものである。)

хойт ~ хойд 北の, 後の (cf.хойно 北, 後)
 умард 北の (< умар 北)
 урд 南の, 前の (cf.урьд 以前に, 前に)
 өмнөд 南の, 前の (< өмнө 南, 前)
 дорнод 東の, 東洋の (< дорно 東, 東洋)
 өрнөд 西の, 西洋の (< өрнө 西, 西洋)
 дээд 上の (cf.дээр 上に)
 доод 下の (cf.доор 下に)
 гадаад 外の, 外国の (< гадаа 外(に))
 дотоод 内の, 国内の (< дотоо 内(に))
 наад こちら(側)の (cf.наана こちら側に, нааш こちらへ)
 цаад 向こう(側)の (cf.цаана 向こう側に, цааш 向こうへ)
 дундад 中央の (< дунд 間に, 中央に)
 зуурд 間の, 途中の (< зуур 間で, 途中で) etc.

<参考>

現代ハルハ方言では、《東西南北》の方向は、概して言えば次の二種類で表わされることが観察できた。

хойд баруун ——— ——— зүүн урд	умар өрнө ——— ——— дорно өмнө
--------------------------------------	--------------------------------------

ярианы хэл 口語

бичгийн хэл 文語

1) 通時的立場からのみ抽出される要素のことで、具体的には《同一語源より派生した形式と意味が類似する語群を比較した結果、抽出される最小の単位》を指す。

⑭ {-дай} = /-дай ∞ -ндай/

この接尾辞は、《語幹の意に関連した、または類似した意》を示す。
この接尾辞は、次のように母音調和による三つの交替形をもつ。

-дай, -дой	/	/BV/	___
-дий	/	/FV/	___

хамардай 大きい鼻 (<хамар 鼻)

эвэрдий ①牛の角につけた綱, ②小さい角の生えた牛 (<эвэр 角)
(ただし, ②は『蒙漢辞典』より)

さらに, 若干の名詞に接続し, 人名を表示する。

(cf. ⑬ {-лдай} (N→N))

хонгордой 民話に登場するおじいさんの名前

(<хонгор 恋しい, 愛する)

また, この接尾辞 {-дай} は, 形態的に条件づけられた異形態
-ндай をもつ. (cf. ④⑨ {-цаг} = /-цаг ∞ -нцаг / (N→N))

бухандай 2歳未満の種牛 (<бух 種牛)

(cf. бухандай бяруу = бухан бяруу 2歳未満の種牛)

цоохондой リビアネコ (<цоохор まだらの, 斑点の)

<考察>

ただし, ⑬ {-лдай} (N→N) は, 共時的には, 上述の接尾辞 {-дай}
(∞ -ндай) と次のいかなる関係で捉えるべきであろうか。

1) 形態的に条件づけられた異形態

{-дай} = /-дай ∞ -ндай ∞ -лдай)

2) 全く異なる別の形態素

{-дай} = /-дай ∞ -ндай / ; {-лдай}

これは, 今後さらに考究すべき問題である。

⑮ {-дар}

これは, өдөр (Mo.edür) 《日》という語が, 先行する語幹と結合
力を増すことによって, 一種の接尾辞化してしまったもので, 語
形成の際, 母音調和が単に語幹内のみに留まらず接尾辞にまで及
ぶという現代モンゴル語の特徴がよく保存されている。

1. урждар ~ уржигдар おととい
2. өчигдөр ~ өцөгдөр 昨日
3. өнөөдөр 今日
4. маргаадар¹⁾ 明日
5. нөгөөдөр あさつて

なお、通時的には、それぞれ次のような形成過程を経て成立をしている。(以下、モンゴル文語の語形を示す)

1. *urjīdur, urjīy_{du}r* < *urji + *edür* ; cf. *urji-nun* おととし
2. *öcüg_{edür}* < ? *öcüg + *edür*
3. *önüdü_r* ~ *önüg_{edür}* < *önüge* + *edür*
4. *maryadur* < *maryada* + *edür*
5. *nögüg_{edür}* < *nögüge* + *edür*

1) 現代ハルハ標準方言では *маргааш* であるが、筆者がモンゴル人民共和国滞在中、*маргаадар* という語もしばしば観察することができた。

また、もう一つの文語形 *Mo.manayar* は廢語となり、現在では、話し言葉でも、書き言葉でも全く用いられていない。

⑩ {-дуу}

この接尾辞¹⁾は、基本的には③の接尾辞 {-втар} (N→N) とほぼ同じ機能を持ち、1. 《色彩語》 2. 《人・物の外観・外形》等を表す形容詞に接続し、《その性質の程度を弱める》意味を示す²⁾。

(1. 《～がかった、～っぽい》, 2. 《やや～, 少し～》)

1. *улаандуу* 赤味がかった (< *улаан* 赤色の)
хөхдүү 青味がかった (< *хөх* 青色の)
цэнхэрдүү 空色がかった (< *цэнхэр* 空色の)
бараандуу かなり薄黒い (< *бараан* 薄黒い)
2. *цоохордуу* ややまだらな (< *цоохор* まだらな)
монхордуу ややわし鼻の (< *монхор* わし鼻の)
жартгайдуу やや細くてつり上がった目をした
(< *жартгай* 細くてつり上がった目をした)
нарийндуу やや細い (< *нарийн* 細い)
хөгшиндүү やや年取った (< *хөгшин* 年取った)
гандуу かんぱつ気味の、ややかんぱつ状態の
(< *ган* かんぱつ, ひでり)

なお、この接尾辞 {-дуу} は、通時的には次のような形成過程

Proto-Mo. *-da + *γū > Mo.-*dayu* ~ *-duu* > Kh. {-дуу}

(N→N) (V→N) (N→N)

を経て成立したと推定され、元来、出名動詞接尾辞 *-da-* と出動名詞接尾辞 *-yu* (Kh. {-yy}) との複合接尾辞であった蓋然性は大きい。(vide ②, B) {-да-} (N→V)); ⑩ {-yy} (V→N))

<考察>

さらに、語構成分析の点から、筆者の調査した所では、この接尾辞は出勤名詞接尾辞 {-rap} の後、すなわち、次の環境でかなり生産的に用いられるようである。

{-дуу}	/	{V} + {-rap}	—
(N→N)		(V→N)	

また、この環境において、{-дуу} の代りに、ほぼ同じ機能をもつ {-вrap} は、あまり用いられないことが観察された。これはモンゴル語では、流音 p (/r/) の重複を避ける傾向が著しいことに起因している。

e.g. буржгардуу やや縮れた (< буржгар < буржий- 縮れる)
 бөмбөгөрдүү やや球形の
 (< бөмбөгөр < бөмбий- 丸い形になる)

1) この接尾辞は、「元来、話し言葉でかなり生産的に用いられるが、現在では、書き言葉でも生産的に用いられるようになった」という。(ШУАХ, *Орчин цагийн монгол хэл зүй*, УБ, 1966, p.110)

2) ⑩ {-дуу} (N→N) ≡ ③ {-вrap} (N→N)
 { арай ~, ~ юм шиг
 бага зэрэг ~, ~ байдалтай } гэсэн утгатай

⑰ {-ж}

この接尾辞は、ごく若干の家畜の年齢を表わす名詞語幹に接続し、《その家畜の雌》を示す実詞を形成する。

1. гунж 三歳の雌の家畜 (牛・ラクダ等) (Ord.gunaži)

(< гуна 三歳の雄 < cf. гурав 三)

2. дөнж 四歳の雌の家畜 (牛・ラクダ等) (Ord.dönözi)

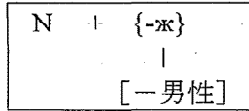
(< дөнө 四歳の雄 < cf. дөрөв 四)

なお、モンゴル文語では、それぞれ次のように現われる。

1. гунaji(n) < гунa(n) (cf. гурба)

2. дөnej(i)n < дөne(n) (cf. дөрбе)

<定式化>



(cf. ⑩ {-гч} (N→N), ⑨ {-гтай} (N→N))

⑱ {-жин}

この接尾辞は、《季節、日》を表わす名詞語幹に接続し、《その期間》を表わす。

хаваржин 春の間、春じゅう (< хавар 春)

зунжин 夏の間、夏じゅう (< зун 夏)

намаржин 秋の間、秋じゅう (< намар 秋)

өвөлжин 冬の間、冬じゅう (< өвөл 冬)

өдөржин 一日中 (< өдөр 日)

шөнөжин 一晚中 (< шөнө 夜)

なお、この接尾辞は、通時的には次のような形成過程

Mo.-ji- + -n > Kh. {-жин}

(N→V) (V→N)

を経て成立しており、複合接尾辞である。(vide ⑤⑥ {-н} (V→N))

⑲ {-жээр} = /-жээр ~ -жээл/

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、その語に関連した形容詞を形成するが、非生産的で、その環境は極めて限定されている。

өвөгжөөр ~ өвөгжөөл (男性に対して)年輩の、初老の
(< өвөг (эцэг) 祖父)

эмэгжээр ~ эмэгжээл (女性に対して)年輩の、初老の
(< эмэг (эх) 祖母)

хижээл (男女を問わず)初老の (= ахимаг нас)

なお、この接尾辞は、モンゴル文語では、-jiyer, -jiyel の形で現れる。

—<хижээлに関する若干の考察>—

筆者がモンゴル人民共和国滞在中、ハルハ方言では хижээл という語は、例えば、Хижээл хүн болж дээ。《初老になったよね》のように、しばしば観察することができたが、従来の辞書には、普通記述されておらず、例えば現在のところ最良の辞書である Я.

Цэвэл, Монгол хэлний товч тайлбар толь (УБ, 1966) にも記述されていないが、後に, Ц. Дамдинсүрэнが, 'Цэвэлийн толийн гухай тэмдэглэл' 「ツェベルの辞書に関する覚書」 (*Studia Mongolica*, УБ, 1975, pp.401-405) の中で, Я. Цэвэлの辞書に記述されていない語を若干補っており, その中にこの語 хижээлは見られる。

さて, この語に対する文語形は, 現在の所見つかっていないが, 筆者は,

Mo.yeke 大きい > $\begin{cases} \text{yeke-s 高官 (『蒙漢辞典』1976, p.1370)} \\ \text{yeke-čüd 高官, 長老 (同上)} \\ \text{yeke-med 年長者 (Lessing 1960, p.431)} \end{cases}$

等の派生語から, この хижээл に対するモンゴル祖語形に *yeke-jiyel を再構し, その成立過程を次のように説明する。

Proto-Mo.*yeke-jiyel > *ixežeel > xežeel ~ xižeel (Kh.)
(I) (II) (III)

すなわち, (I) の段階で, Mo.k (stop) V-V > Kh.x (fricative) の規則的変化を起こし, -jiyel は -žeel と長母音化した。

そして, (II) の段階では, おそらく第一音節の母音が消失したのであろう。

さらに, (III) の段階に至っては, 語頭母音消失の結果, 第一音節となった母音 e ~ i が交替し¹⁾, 現在の語形 хижээл が成立したと思われる。

また, 現在利用できるすべての現代モンゴル系言語・諸方言の資料の中で, ダグール語で xiγɕə:r²⁾ 《長輩, 年長者》 (< xiγ 大 < Mo.yeke) と現れることも, 筆者の仮説の傍証となろう。

1) 第一音節の母音 e ~ i の交替は, 現代ハルハ方言ではよく見られる現象である。

Mo.neliyed > Kh.нэлээд ~ нилээд かなり

Mo.belčiger > Kh.бэлчээр ~ билчээр 牧草地

Mo.kesig > Kh.хэшиг ~ хишиг 恩恵, 施し

2) 恩和巴图 等編, 『達斡爾語詞彙』1984, p.114.

⑳ {-3}

この接尾辞は、若干の名詞語幹または語根に接続し、《酒の種類》を示した実詞を形成する。

1. арз 'архи'を蒸留して作った酒 (cf. архи 酒)
2. шарз 'арз'を蒸留して作った酒 (< шар 黄色の)
3. хорз 'шарз'を蒸留して作った酒 (< хор 毒)

なお、モンゴル文語では、それぞれ次のような語形を示す。

1. араја (< cf. ara-ki ~ ariki)
2. сираја (< sira)
3. qouraја (< qour(a))

㉑ {-(a)й}

この接尾辞は、若干の語にのみ見られる化石的形態で、《語幹の意に関連した意》を表す。

- улай (Mo.ula-i) 動物の死骸 (cf. улаан (Mo.ula-γan) 赤い)
 хоолой (Mo.qoyula-i) のど, 食道 (< хоол (Mo.qoyula) 食事)
 малгай (Mo.malaya-i) 帽子
 (< 内モ malagā ~ malag (Mo.malaya) 帽子)

さらに、モンゴル語ハルハ方言には、харцага (Mo.qarčaya) 《鷹》(e.g. харцагаар ан хийх 鷹で狩りをする) という語があるが、これは、内モンゴル方言の xartsgai 《鷹》, 中世モンゴル語(秘史)の qarčigai (合児赤孩) 《黄鷹》(ともに Mo.qarčaya-i) に相当し、ともに末尾に -i が見られるのも、この接尾辞の一例である。

㉒ {-лаг}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、原則として《～を豊富にもった、～の性質を十分帯びた》という意味をもつ形容詞を形成する。

- махлаг 肉づきのいい (< мах 肉)
 тослог 油っこい (< тос 油)
 чихэрлэг 甘い (< чихэр 砂糖)
 чулуулаг 石の多い (< чулуу 石)
 модлог 木の多い (< мод 木)
 баялаг 豊かな (< баян 富)
 чинээлэг 裕福な (< чинээ 力)
 хөрөнгөлөг 資本のある (< хөрөнгө 財産, 資本)

сүрлэг 堂々とした (<сүр 威厳)
 хөрслөг 土壤のよい (<хөрс 土壤)
 баатарлаг 英雄的な, 勇敢な (<баатар 英雄)
 царайлаг 器量のよい (<царай 顔)
 өнгөлөг 色つやのよい (<өнгө 色)
 үслэг 毛皮の, 毛皮用の (<үс 毛)

また, 抽象的な意味合いをもつ実詞もいくつか見られるが, これは本来の形容詞が実詞化したものと考えられる.

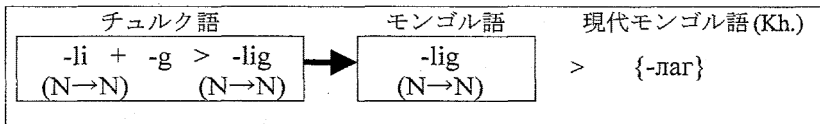
төмөрлөг 金属 (<төмөр 鉄)
 цэцэрлэг 公園 (<цэцэг 花)
 (Mo.čečerlig 公園 <čečeglig <čečeg 花)
 нийгэмлэг 会, 協会 (<нийгэм 社会)
 онцлог 特徴 (<онц 特別の)
 урлаг 芸術 (<ур 技巧)
 өндөрлөг 高地 (<өндөр 高い)
 шорлог 串焼き (<шор 串)

<考察>

なお, この接尾辞は, チュルク・モンゴル両言語に共通するものであり, モンゴル文語 (Mo.) では -liy / -lig, チュルク語 (AT.) では -liy, -luy / -lig, -lüg と翻字される. ただし, モンゴル語内部では, もうこれ以上はさらに形態素に分節できない, いわゆる最終構成要素 (ultimate constituent) であるのに対し, チュルク語内部ではさらに, 次のように,

-li ⁴	<	-li	《~をもった, ~の性質をおびた》	+	-g
(N→N)		(N→N)			

形態素として分節可能であることから, この接尾辞は, チュルク語からモンゴル語へ借用された蓋然性が大きいように思われる. したがって, この接尾辞に関しては, 次のような借用関係を仮定してみてもどうか?



ただし、逆にチュルク語 -lig⁴ は、元来 -li + -g の複合接尾辞ではなく、AT-lig⁴ から末尾 -g が脱落して、通時的に接尾辞 -li (e.g. evli 所帯持ちの<ev 家) が成立したと見る見解もあろう。

また、モンゴル語学者の中には、この接尾辞を、共時的立場から次のような複合接尾辞であると分析する人もいる¹⁾。

{-ла-}	+	{-r}	>	{-лаг}
(N→V)		(V→N)		(N→N)

ただ、ここで注意しなければならないのは、構成要素 {-ла-} を、出名動詞語尾 (N→V) と解釈している点である。この {-ла-} は、通時的には Mo.-li- に遡ることになるが、実際にモンゴル文語のレベルで出名動詞語尾の機能をもつ -li- は存在せず、形態素として認定できないため、この解釈は受け入れ難いように思われる。

1) Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг, нөхцөл хоёр нь.*, УБ, 1968, pp.133-134.

㉓ {-лдай}

この接尾辞は、ごく若干の名詞語幹または語根に接続し、主として《親しみ、愛情をこめた意味》をもつ実詞を形成する。

なお、これは指小接尾辞 (diminutive suffix) の一種と考えられよう。(vide ㉔ {-хан}(N→N))

また、次のように母音調和による三つの交替形をもつ。

-лдай, -лдой	/	/BV/_
-лдэй	/	/FV/_

гургалдай (Mo.γurγuuldai) うぐいす

(<γургуул (Mo.γurγuul) きじ)

хүүхэлдэй 人形 (<хүүхэн 娘)

бооходой (Mo.booqaldai) 狼(чоно)の禁忌語

(<боохой (Mo.booqai) 同左)

авгалдай 幼虫, さなぎ

Боролдой 民話に登場するおじいさんの名前 (<бор 灰色の)

Шаралдай 民話に登場するおじいさんの名前 (<шар 黄色の)

Агсагалдай 民話に登場するおじいさんの名前

(<Tur.ak sakal (lit.白・ひげ)《老人, 長老》+ Mo.-ldai)

②4 {-лж} = /-лж ∞ -лжин/

この接尾辞は、名詞語幹に接続し 1. 《動植物名》, 2. 《物の形》を表す実詞を形成する。

1. шарилж (Mo.siralji, Ord.šaralzi) やまよもぎ
 (< шар (Mo.sira) 黄色の)
 боролж 白樺 (< бор 灰色の)
 цагаалж 1. はねがや草, 2. さけ属 (< цагаан 白色の)
 наймалж かに (< найм 八)
 бөөөөлж ~ өвөөлж やつがしら (cf.бөөөр やつがしらの別名)
 арваалж 毒ぐも
 (Mo.arbayalji <? arbayar (うごうごする) + ayalji(くも))
 шоргоолж あり (< Mo.siryulji ~ siryuyalji
 < siryu-ya (V→N) -lji (N→N)
 < siryu- (шурга-) もぐりこむ)
2. тонолжин 十字形 (< тоно ゲルの天窗)
 гурвалжин 三角(の) (< гурав 三)
 дөрвөлжин 四角(の) (< дөрөв 四)

<考察>

その他, 《動植物名》をあらわす拡張形に, {-лзгана} (Mo.-ljiγana) があるが, これは, ②4 {-лж} と ⑧ {-гана} (どちらも動植物名形成接尾辞) の合った複合接尾辞である. (vide ⑧ {-гана} (N→N))

{-лж}	+	{-гана}	>	{-лзгана}
(N→N)		(N→N)		(N→N)

この例として, 次のようなものがある.

- улаалзгана 赤すぐり (< улаан 赤色の)
 тэмээлзгэнэ とんぼ (< тэмээ らくだ)
 гүзээлзгэнэ いちご (< гүзээ 反芻動物の第一の胃)
 боролзгоно りすの一種 (< бор 灰色の)
 бөөрөлзгөнө 岩いちご (< бөөр¹⁾ 腎臓)

1) モンゴル語では, 語根 *bö- (*бө-) は, 一般に《丸い》という共通の意味をもつ.

- e.g. • bömbüi- (бөмбий-) ふくらむ
 > bömbüge (бөмбөг) ポール
 > bömbülig (бөмбөлөг) 風船
 > bömbüger (бөмбөгөр) 球形の, 丸い
 > bömbür (бөмбөр) 太鼓
 > bömbürčeg (бөмбөрцөг) 地球
- böndüi- (бөндий-) 丸くふくらむ
 > böndüger (бөндгөр) 丸くふくらんだ
- bögere (бөөр) 腎臓
 > bögerengkei (бөөрөнхий) 丸い
 > bögerenčeg (бөөрөнцөг) 砲丸
- bögtüi- (бөгтий-) (腰等が)曲がる
 > bögtür (бөгтөр) 猫背の etc.

㊦ {-M}

この接尾辞は、一般の文法書には普通記述されていないが、ごく若干の名詞語幹に接続し、第二次語幹形成辞 (secondary stem-formative) の機能をもつ。

なお、この接尾辞は、モンゴル語本来の極めて生産的な語幹形成辞 {-H} の形態的に条件づけられた異形態である蓋然性が大きいように思われる。(vide ㊦ {-H} (N→N))

すなわち、筆者は次のように考える。

$\{-H\} = /-H \infty -M/$ (語幹形成辞)

これには、次のような例がある。

инээдэм 笑い (<инээд 笑い)

зүсэм¹ 動物の毛色 (<зүс 動物の毛色, 人の顔)

1) モンゴル語で《動物の色》を尋ねる時には、例えば、

Ямар зүстэй (~ зүсэмтэй) вэ?(あの動物は)何色ですか。

Ямар зүсмийн морь вэ? 何色の馬ですか。

のように、зүс, зүсэм という語が用いられる。

ただし、この代りに、《物の色》を表す өнгө 《色》という語は用いられない。

②6 {-маг}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、《語幹の意に関連した意》をもつ 1. 実詞, 2. 形容詞を形成する。

1. нуурмаг 池, 貯水池 (<нуур 湖)
аймаг アイマグ (モンゴルの最大の行政単位) (< ай 範疇)
ирмэг 隅, 角, 端 (< ир 刃)
цээжмэг¹⁾ モンゴル相撲の上衣 (< цээж 胸)
2. нойрмог 寝ぼけた (< нойр 眠り, 睡眠)
гүжирмэг 断固たる (< гүжир 強い, 耐久力のある)

1) ただし、ハルハ方言では、普通 зодог または далбаа と言う。

②7 {-мад}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、主として《その集合体》を表わす集合名詞 (collective noun) を形成するが、化石的形態で、その環境は極めて限定されている。

- ахмад 年長者 (< ах 兄)
- дүүмэд 後輩 (< дүү 弟, 妹)
- эгчмэд (文語) 年配の女性 (< эгч 姉)
- зочмод (廢語) 客たち (< зочин 客)
- алимад (古語) すべての (= аливаа) (< аль どれ)
- балмад 不良, ごろつき

(cf. балай 盲目の, 無知の, балар 暗い, ぼんやりした)

なお、{-мад} (Mo.-mad) の構成要素である *-d は、通時的立場から見ると、複数接尾辞 -d に遡れる蓋然性が大きいようにも思われる。

②8 {-мсаг}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、主に《ある性質を好んだ、欲した》という意味をもつ形容詞を形成する。

- гоёмсог 着飾った, おしゃれな (< гоё 美しい)
- ихэмсэг 傲慢な, 尊大な (< их 大きい)
- хөнгөмсөг 軽率な, 軽薄な (< хөнгөн 軽い)
- гангамсаг 粋な, だてな (< ганган おしゃれな)
- торгомсог 絹の好きな (< торго 絹)
- хүүхэмсэг (男に対して) 女好きの (< хүүхэн 若い女性)
- өөриймсөг 身内のような (< өөрийн 自分の)

また、この接尾辞は、通時的には次のような形成過程を経て成立したと考えられ、モンゴル祖語において、複合接尾辞であった蓋然性は大きい。

$$\text{Proto-Mo.}^* \text{-m} + ^* \text{-suy} > \text{Mo.} \text{-msuy} > \text{Kh.} \{-\text{mcar}\}$$

(N→N) (N→N)

なお、この -m は、語幹形成辞 (*vide* ㉔ {-m} (N→N)), -suy は、Mo.-say (*vide* ㉔ {-car} (N→N)) の音韻的に条件づけられた異形態であったと考えられる。すなわち、次のような関係を意味する。

Mo.-say	~	-suy	/	[名詞 + {-m}]	__
(N→N)		(N→N)		(語幹形成辞)	

㉔ {-мсан}

この接尾辞は、特に数を表示する若干の名詞語幹または語根に接続し、《それに関連した意 (～の状態からなるもの)》を表す形容詞を形成する。

жирэмсэн¹⁾ (Mo.jirmüsün) 妊娠した (←二重の)

(<*жир (<秘史) jirin) “二”(女性形)を意味する語根)

хоймсон (Mo.*qoyimusun) 二本編みの (←二重の)

(<*хой (<хоёр) “二”を意味する語根)

гурамсан (Mo.γurmusun) 三本編みの (←三重の)

(<*гур (<гурав) “三”を意味する語根)

また、厳密には、名詞ではなく不変化詞(狭義の副詞)に属するが、この接尾辞をもつ例に次のものがある。

нэгмөсөн (Mo.nigemüsün) 一度に、一ぺんに

(<нэг 一)

бүрмөсөн (Mo.bürimüsün) 完全に、徹底的に

(<бүрэн (Mo.bürin) 完全な、全くの)

なお、この接尾辞 {-мсан} は、共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが、通時的には次のような形成過程を経て成立しており、元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

$$\text{Proto-Mo.}^* \text{-mu} + ^* \text{-sun} > \text{Mo.} \text{-musun} > \text{Kh.} \{-\text{мсан}\}$$

(N→N) (N→N) (N→N)

- 1) 《妊娠した》という語が、数字の《二》の派生語として現れるのは、現代モンゴル語諸方言の他、モンゴル系孤立言語の東部裕固語でも同様である。ただし、東部裕固語では、*jir(in)《二(女性形)》ではなく、*qoyar《二》に対応する Gur の派生語として現れることに注意されたい。

東部裕固語 Gur:masən 妊娠した (< Gur 二)

③0 {-H}

これは、いわゆる語幹形成辞 (stem-formative) と呼ばれるもので、《主として語幹を形成する機能を持ち、この言語学的機能以外には、それ自体としての意味がほとんどないような接辞》をいう¹⁾。

現代モンゴル語では、この語幹形成辞は、一次的 (primary) なものと二次的 (secondary) なものの二つに大別される。

1. 一次的なもの

これは、共時的には、語幹に派生接尾辞を接続する際、脱落する -H を指す。例えば、次のような語形成等で見られる -H は、それぞれ共時的に、

баян 富 > баярха- 富を誇る

сайн 良い > сайхан 美しい、きれいな

のように、*бая- + *-H, *сай- + *-H と分節することは不可能であるが(すなわち、баян, сайн は、最終構成要素 (ultimate constituent) である)、派生接尾辞接続の際に限って脱落しようという特徴もっている。したがって、このような -H は、それ自身第一次語幹 (primary stem) を形成しているのだから、これを第一次語幹形成辞 (primary stem-formative)と呼び、今後、便宜上 -H₁ と呼ぶことにする。なお、この -H₁ は、格変化する際、脱落することはない。

2. 二次的なもの

現代モンゴル語には、伝統的に《不安定な H》または《隠れた H》(モンゴル語では、普通 тогтворгүй H または нууц H) と呼ばれる術語があり、このいわゆる《不安定な H》をもつ語は、格変化する際、ハルハ方言では原則として、属格、与位格、奪格の三つの格語尾を付加する際は、語幹にこの H が現われ、それ以外の主格、対格、造格、共同格、方向格においては、この H が現われないのが普通である²⁾。したがって、このような -H は、共時的には、第一次語幹 (primary stem) に接続し、新たな語幹を形成するので、これを第二次語幹形成辞 (secondary stem-formative)と呼び、今後、便宜上、-H₂ と呼び、-H₁ と区別することにする。

例えば、хонь 《羊》という語は、ハルハ方言では、次のように格変化する。

		-H ₂
主格	хонь	
属格	хонины	+
与位格	хонинд	+
対格	хонийг	
奪格	хониноос	+
造格	хониор	
共同格	хоньтой	
方向格	хонь руу	

この表からもわかるように、属格、与位格、奪格の三つの場合は、хонин という語幹を、その他の場合は хонь という語幹をもっている。これには、その他、морь : морин 《馬》, ямаа : ямаан 《山羊》, мод : модон 《木》, ус : усан 《水》等があり、一般に、この -H₂ は、現代モンゴル語では極めて生産的に用いられる。なお、小沢重男は、この二つの語幹をまとめて《0 ~ H交替語幹》と呼んでいる³⁾。

また、ハルハ方言以外の現代モンゴル語諸方言においては、次のような環境で -H₂ が現われることが報告されている⁴⁾。

	Ord., Kh.	Kalm.	Bur.	Dag.
主格		+		
属格	+	+		
与位格	+	+		
対格				
奪格	+	+		
造格				
共同格		+ -lā	+ -tā	
方向格		—		—

注)
 なお、方向格語尾 {-ruu} = / -ruu ~ -luu / は、Ord., Kh., Bur.方言では見られるが、Dag., Kalm.方言では知られていない⁵⁾。

(Bur.ブリヤート語, Dag.ダグール語, Kalm.カルムイク語, Kh.ハルハ方言, Ord.オールドス方言)

この接尾辞 {-H} は、1., 2. で見てきたように、単に語幹形成辞の機能をもつだけでなく、以下のように、3. 派生接尾辞として新しい語を形成したり、4. 限定詞の機能を持ち、複合語を形成することもできる。

3. 派生接尾辞の機能

この接尾辞 {-н} は、若干の名詞語幹に接続し、《その性質をもった》という意味をもつ形容詞を形成することがある。

хурдан 速い (<хурд スピード)

гэгээн 明るい (<гэгээ 光)

тарган 太った (<тарга 太りぐあい)

арвин 豊富な (<арви 豊富)

цэцэн 賢明な (<цэц 物の本質)

ногоон⁶⁾ 緑色の (<ногоо 野菜)

цагаан⁶⁾ 白色の (<цагаа 一度沸かした凝乳)

4. 限定詞の機能

この接尾辞 {-н} は、限定詞の機能をもち⁷⁾、複合語を形成することができる。なお、この合成による語形成は、派生と並んで、特に現代モンゴル語で顕著に見られる方法である。これには、例えば次のような例がある。

модон байшин 木造家屋 (<мод 木)

морин гэрэг 馬車 (<морь 馬)

морин хуур 馬頭琴 (<морь 馬)

усац онгоц 船 (<ус 水)

усац үзэм ぶどう (<ус 水)

хониц жил ひつじ年 (<хонь 羊) etc.

1) H. A. Gleason, (竹林, 横山共訳), 『記述言語学』, 1972, p.68.

2) ШУАХ, *Орчин цагийн монгол хэл зүй*, УБ, 1966, p.101.

3) 小沢重男, 『現代モンゴル語辞典』大学書林, 1983, 序論 p.v.

4) Ш. Лувсанвандан, *Монгол хэл шинжлэлийн асуудлууд*, УБ, 1981, pp.149-150.

5) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.205.

6) この二例は, Ж. Төмөрцэрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үгийн сангийн судлал*, УБ, 1964, p.17 に記されている。

7) 限定詞の機能の詳細に関しては, 次のものを参考にされたい。

G. D. Sanzheyev, *The Modern Mongolian Language*, Moscow, 1973, p.67.

N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.187.

③① {-на}

この接尾辞は、主に方位を示す一部の語根に接続し、《特定の場所》を表す名詞語幹¹⁾を形成する。(特定の場所表示接尾辞)

наана こちら側に (<*наа-, cf.нааш こちらへ)

цаана 向こう側に (<*цаа-, cf.цааш 向こうへ)

хаана どこに (<хаа どこ)

гадна 外に (<*гада-, cf.гадагш 外へ)

дотно 中に (<*дото-, cf.дотогш 中へ)

хойно 北, 後 (<*хой-, cf.хойш 北へ, 後へ)

өмнө 南, 前

дорно 東, 東洋

өрнө 西, 西洋

なお, хаа (どこ) より, хаана (どこに) (ともに Мо. qamıya) が派生された背景には, この《特定の場所表示接尾辞》-на を有する наана (cf.нааш), цаана (cf.цааш), гадна (cf.гадагш) 等に対する類推が働いたものと考えられる。

- 1) これらの語は, 一般に副詞と範疇づけられるが, 名詞類語形変化系列のうち, 奪格語尾を後続されることができるので, 筆者は名詞語幹と解釈する。

{-аас} / [語根 + {-на}] ____ (奪格)

③② {-нгуй} = /-нгуй ∝ -нхуй/

この接尾辞は, 主に若干の色彩語に接続し, 《その性質を弱める》ことを意味する形容詞を形成する。

харангуй 黒っぽい (<хар 黒色の)

шарангуй 黄色がかった (<шар 黄色の)

боронгуй 灰色がかった (<бор 灰色の)

その他, 更に《強調》や《～の状態の》の意で用いられることもある。

дээрэнгуй 高慢な, 尊大な (<дээр 上)

будангуй 薄暗い, ぼんやりした (<будан もや, かすみ)

また, この接尾辞は, 形態的に条件づけられた異形態 -нхуй をもち, 一般に次のような関係が成り立つ。

{-нгуй} = /-нгуй ∞ -нхуй /¹⁾

харанхуй (Mo.qarangui) 暗い (< хар (Mo.qara) 黒色の)

бүрэнхий (Mo.bürüngkii) 薄暗い

(< бүрий (Mo.bürüi) 薄暮, たそがれ)

以上のことから推論すると, おおざっぱに言って, この接尾辞は, 指小辞的性格を持っていると言えよう. (vide ④{-хан} (N→N))

1) なお, モンゴル文語では, -ngyui, -ngqui という形式で現れる.

③ { -нхи } = /-нхи ∞ -нх /

この接尾辞は, ごく若干の形容詞に接続し, 《~のもの, ~の部分》という意味をもつ名詞語幹を形成する.

олонхи 大多数の (< олон 多くの)

цөөнх 少数 (< цөөн 少ない)

ихэнх 大部分 (< их 量の多い)

この接尾辞は, モンゴル文語では -ngki と翻字されるが, 通時的立場から見ると, この構成要素である *-ki は, チュルク語とモンゴル語に共通する接尾辞 -ki (vide ④{-x} (N→N)) と同一形態素である蓋然性が極めて大きいため, 本来この接尾辞は, *-ng + *-ki からなる複合接尾辞であったと思われる. なお, この *-ng はおそらく語幹形成辞 *-n (vide ⑩{-н} (N→N)) が, 後続の軟口蓋音 k によって逆行同化を起こして成立したものであろう.

Proto-Mo.*-n	+	*-ki	>	Mo.-ngki	>	Kh.{-нхи}
↓		↓		(N→N)		
(語幹形成辞) 《~のもの》						

③④ {-нцар}

この接尾辞は, 名詞語幹に接続し, 主として 1. 《世代関係を表す親族名称(~の子)》, 2. 《ある特徴, 形が似通った(もの)(~ごとき(もの), ~に類似した(もの), ~と同類の(もの))》, 3. 《あるものを非常に好んだ(~を好んだ)》等を表した名詞語幹を形成する.

1. үенцэр いとこの子 (< үе (同)世代, cf. үеэл いとこ)
 зээнцэр 甥, 姪の子 (< зээ 甥, 姪)
 жичинцэр ひ孫の子 (< жич ひ孫)
 гучинцэр やしゃごの子 (< гуч やしゃご)
 (cf. хүү 息子 → ач 孫 → жич ひ孫 → гуч やしゃご)
2. хүүхэнцэр 女性らしい (< хүүхэн 若い女性)
 охинцор 少女らしい (< охин 少女)
 уутанцар 小さい袋 (< уут 袋)
 мөөгөнцөр 細菌 (< мөөг きのこ)
 хуванцар プラスチック (< хув こはく)
 зууванцар 楕円形に近い, ほぼ楕円形の

(< зууван 楕円形の, 卵形の)

また、以下の語例は、通常辞書に記載されていないが、事物の出現により、新たに形成されたように思われる。

- тэргэнцэр 車いす (< тэрэг 車)
- хивсэнцэр 小さなじゅうたん (< хивс じゅうたん)
- хөөсөнцэр 泡のような; 発泡スチロール (< хөөс 泡)
- өрмөнцөр ウルムのような; (菓子) ウエハース
 (< өрөм (乳製品) ウルム)
3. хоолонцор 食いしん坊な (< хоол 食事)
- хээнцэр しゃれた, めかした (< хээ 模様)
- аманцар おしゃべり好きの (< ам 口)
- үгэнцэр 口の達者な (< үг 言葉)

<考察>

特に、1., 2.の両方を包括する概念として、接尾辞 {-нцар} を親愛語的意味 (багасгасан, өхөөрдсөн санаа) を表示した一種の指小接尾辞として捉えることも可能である。

1. 《～の子》 -ын ² хүүхэд	2. 《～のごとき(もの)》 шиг, адилхан
-------------------------------------	--------------------------------

《親愛語的意味》表示 → 一種の指小接尾辞

③⑤ {-p}

この接尾辞は、一般の文法書には、通常記述されていないが、ごく若干の名詞語幹に接続し、《ある特徴、形が似通った》ことを表す名詞語幹を形成する。

идэр 若い, 青年の (<ид 力, エネルギー)

мөчир 枝 (<мөч 四肢)

баяр 喜び (<баян 富)

гадар 外側 (<*гада-, cf. гадна 外に, гадагш 外へ)

等、非生産的だが、形態素として十分認定しうるであろう。

③⑥ {-p}

この接尾辞は、主としてごく若干の語根に接続し、《場所》を表す名詞語幹を形成する¹⁾。(主に《場所》を表す名詞語幹に共通して見られる接尾辞である)

дээр 上に (<дээ-, cf. дээш 上へ)

доор 下に (<*доо-, cf. доош 下へ)

дотор 中に (<*дото-, cf. доторш 中へ)

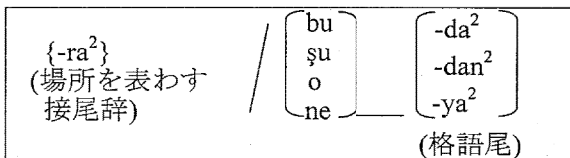
умар 北

(なお、モンゴル文語では、それぞれ *degere*, *doura*, *dotura*, *umara* という語形を示す.)

<考察>

この接尾辞は、モンゴル語 (Mo.), チュルク語 (AT.) の両方に共通するものであり、共に *-ra/-re* と翻字されるが、モンゴル語では、この《場所》を表す接尾辞は、上で述べたように、化石的形態としてその環境は極めて限定されているのに対し、チュルク語では、指示詞や疑問詞とともに体系的に組み込まれている。

例えば、共和国のトルコ語 (Turkish) を例に取ると、この接尾辞 *-ra²* は、次の環境で現れる²⁾。



ただし, *bura-, *şura-, *ora-, *nere- は, 単独では用いられず, 必ず格語尾 -da² (位格), -dan² (奪格), -ya² (与格) のいずれかとともに用いられる. すなわち, 換言すれば, 次の一覧表の如く整理できる.

基本形	語幹	+ 格語尾		
bu これ	*bura- ここ	burada	buradan	buraya
şu それ	*şura- そこ	şurada	şuradan	şuraya
o あれ	*ora- あそこ	orada	oradan	oraya
ne 何	*nere- どこ	nerede	nereden	nereye
		に	から	へ

cf. Jap. 「ら」 -ra … 場所・方向を示す語

e.g. 野ら, ちら, そら, あら, どら

1) 接尾辞 {-na} の項で触れたように, これらの語も一般に, 副詞と範疇づけられるが, 名詞類語形変化系列 (1. 格語尾, 2. 所有語尾の二つの系列を指す) に現れうるので, 筆者はこれらを名詞語幹と見なす. (vide ㉑ {-na} (N→N))

2) G. L. Lewis, *Turkish*, New York, 1976, pp.56-57.

勝田茂, 『トルコ語文法』(昭和 59 年度言語研修テキスト I), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1984, p.20.

㉗ {-pxar} = /-pxar ~ -pxuy /

A) この接尾辞は, 名詞語幹(実詞, 形容詞のどちらにも)に接続し, 主として《その特徴, 性質を誇示した(～ぶった, ～を誇った)》という意味をもつ形容詞を形成する.

なお, この接尾辞は, 出名動詞語尾 (N→V) {-pxa-} と, 出動名詞語尾 (V→N) {-r}, または {-yy} の二つの形態素からなる複合接尾辞であり, 現代モンゴル語では非常に生産的に用いられる¹⁾.

(vide ㉗ {-pxa-} (N→V), ㉘ {-r} (V→N), ㉙ {-yy} (V→N))

сайрхаг ~ сайрхуу 自慢屋の (< сайн 良い)

баярхаг ~ баярхуу 金持ちぶった (< баян 富んだ)

ёсорхог ~ ёсорхуу 儀式ぶった, 形式ぶった (< ёс 礼儀)

томорхог ~ томорхуу 威張った (< том 大きい)

ихэрхэг ~ ихэрхүү 高慢な, 傲慢な (< их 大きい)
 залуурхаг ~ залуурхуу 若者ぶった (< залуу 若い)
 өмчирхэг ~ өмчирхүү 一人占めした (< өмч 財産)
 номчирхог ~ номчирхуу 博識ぶった (< номч 博識な)
 атаархаг ~ атаархуу しつと深い (< атаа しつと, ねたみ)
 үндсэрхэг ~ үндсэрхүү 民族性を誇示した (< үндэс 民族)
 (→ үндсэрхэг үзэл 民族主義)

хүнийрхэг ~ хүнийрхүү よそよそしい (< хүний よその)
 また, この接尾辞 {-рхаг} は, 音韻的に条件づけられた異形態
 -лхагをもつ. すなわち, 名詞語幹が рをもつ時には, 接尾辞
 {-рхаг} は, 異化により -лхаг に変化する.

{-рхаг} → -лхаг / {-р} ____
(N→N) (N)

эрэлхэг ~ эрэлхүү 勇敢な (< эр 男)
 дээрэлхэг ~ дээрэлхүү 横柄な, 傲慢な (< дээр 上)
 нэрэлхэг ~ нэрэлхүү 遠慮がちな (< нэр 名声)
 бяралхаг ~ бяралхуу 力の強い (< бяр 力, 体力) etc.

B) その他, 接尾辞 {-рхаг} = /-рхаг ~ -рхуу / の中には, 共時的に
 次のように {-рха-} + {-г}, または {-рха-} + {-уу} に分節できない
 ものもいくつか見られるが, これは, A) の語構成に対する類推的
 創造 (analogical creation) によって後に造り出されたもので, 実詞
 のみに接続し, 《~が豊富な, ~を豊富にもっている》という意味
 を表わす.

чулуурхаг ~ чулуурхуу 石の多い (< чулуу 石)
 өвсөрхөг ~ өвсөрхүү 草の茂った (< өвс 草)
 усархаг ~ усархуу 水の豊かな (< ус 水)
 уулархаг ~ уулархуу 山の多い (< уул 山)
 үүлэрхэг ~ үүлэрхүү 雲の多い, 曇った (< үүл 雲)
 элсэрхэг ~ элсэрхүү 砂でおおわれた (< элс 砂)
 үсэрхэг ~ үсэрхүү 毛深い (< үс 毛)
 тусархаг ~ тусархуу よく人助けする (< тус 助け)
 хүүхдэрхүү 子供っぽい; 無邪気な (< хүүхэд 子供) etc.

1) なお, 通時的には次のような形成過程を経て成立している.

Mo.-rqa- + -γ / -γu > -rqaγ ~ -rqaγu > Kh. {-рхаг} (~ -рхуу)
 (N→V) (V→N) (N→N)

③⑧ {-c} = /-c ∞ -сан/

この接尾辞は、若干の名詞語幹に接続し、《その属するグループ》や、《語幹の意に関連した意》をもつ実詞を形成する。

адгуус (~ адуус) (Mo. aduγusu) (人間以外の)動物

(< адуу (Mo. aduγu) 馬群)

агуурс (~ уурс) (Mo. aγursu) 所有物, 調度品

(< уур (Mo. uγur < *aγur) すり鉢, 臼; cf. АТ. aγi 貴重品)

гөрөөс かもしか (< гөрөө 狩り)

хүйс へそ (< хүй へその緒)

дайсан (Mo. dayisun) 敵 (< дайн 戦争)

дараас 邪魔 (< дараа 邪魔)

гэрээс (Mo. geriyesü) 遺言, 遺書 (< гэрээ (Mo. ger-e) 条約, 契約)

шүлс (Mo. silüsü) つば, よだれ (lit. 汁状のもの)

(cf. шөл (Mo. silü ~ sölü) 汁, スープ)

③⑨ {-caγ} = /-caγ ~ -суу/

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、《~を欲した、~を好んだ》という意味をもつ形容詞を形成する。

なお、この接尾辞は、出名動詞語尾 (N→V) {-ca-} と出動名詞語尾 (V→N) {-r} の二つの形態素から成る複合接尾辞である¹⁾。

(vide ⑩ {-ca-} (N→V))

これには、例えば次のような例がある。

цайсаг お茶好きなの (< цай 茶)

махсаг 肉を食べたがる (< мах 肉)

ажилсаг 仕事好きなの, 仕事熱心なの (< ажил 仕事)

эмсэг 女好きなの, 女たらしなの (< эм 女)

гэрсэг 出無精なの, 家にいるのが好きなの (< гэр 家)

малсаг 家畜の放牧が上手なの (< мал 家畜)

төрхөмсөг 妻が実家を恋しがると (< төрхөм 妻の実家)

ижилсэг 動物が仲間を求める (< ижил 動物が仲のよい)

нөхөрсөг 友好的なの, 親しい (< нөхөр 親友, 同志)

элэгсэг 親しみのある (< элэг 親類)

найрсаг 友好的なの (< найр 好意) etc.

頻度的には、あまり多くは用いられないが、次の語も見られる。

залуусаг (女性に対して) 男好きなの; (年配の人に対して) 若者のように振舞う (< залуу 若者)

さらに一部、接尾辞 {-cyu} との交替が見られることもある²⁾。

{-car} ~ {-cyu} / {名詞} ____ (N→N)

上の例で言うと、例えば次のようなものがある。

махсаг ~ махсуу
төрхөмсөг ~ төрхөмсүү
ижилсэг ~ ижилсүү
элэгсэг ~ элэгсүү etc.

1) つまり、通時的には次のような形成過程を経て成立している。

Proto-Mo.*-sa- + *-γ > Mo.-say > Kh.{-car}
(N→V) (V→N) (N→N)

2) ちなみに、この接尾辞 {-cyu} も、{-ca-} (N→V) と {-yy} (V→N) から成る複合接尾辞であり、通時的には次のように成立している。

Proto-Mo.*-sa- + *-γū > Mo.-sayu > Kh.{-cyu}
(N→V) (V→N) (N→N)

④ {-т}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、その所属・所有を表し、《～のある、～を持つ》という意味の形容詞を形成する。

ただし、この接尾辞によって形成された語は、現代ハルハ方言では、原則として限定詞に限られており、述語としては全く用いられないという特徴をもつ。 (vide ④) {-тай} (N→N))

1. ачит 恩のある (<ач 恩)
2. алдарт 有名な (<алдар 名声)
3. хайрт 愛する (<хайр 愛情)
4. хүндэт 名誉ある、尊敬すべき (<хүнд 名誉)
5. цасг 雪のある (<цас 雪)
6. галт 火のある (<гал 火)
7. зэвсэгт 武器をもった (<зэвсэг 武器)

例えば、上例は被限定詞を伴い、次のように用いられる。

1. ачит багш 恩師
2. алдарт зохиолч 有名な作家
3. хайрт хүү 愛息
4. хүндэт гишүүн 名誉会員

- 5. цаст уул 雪山
- 6. галт тэрэг 汽車
- 7. зэвсэгт хүчин 軍事力

<考察>

なお、この接尾辞 {-т} は、モンゴル文語では、-tu という形式で表されるが、これと出名動詞語尾 (N→V) の -tu- とは、元来、同一形式が二つの機能を担っていた蓋然性が大きいように思われる。(vide ⑪ {-та-} (N→V))

すなわち、次のように考えられる。

		形式	意味
Proto-Mo.*-tu	(N→N)	Mo.-tu (> Kh. {-т})	《тухайн юм бүхий》 гэсэн утгатай
	(N→V)	Mo.-tu- (> Kh. {-та-})	《тухайн юм бүхий болох》 гэсэн утгатай

④① {-тай}

この接尾辞も、④①の {-т} と同様、所属・所有を表し、《～のある、～を持つ》という意味の形容詞を形成する。

ただ、この接尾辞は、現代ハルハ方言では、限定詞だけではなく、特に述語として非常に生産的に用いられる点で、接尾辞 {-т} とは異なり、文法的に極めて重要な役割を果たしている。

- ашигтай 利益のある、有益な (< ашиг 利益)
- аюултай 危険な (< аюул 危険)
- эрдэмтэй 知識、学識のある (< эрдэм 知識、学識)
- ухантай 賢明な (< ухаан 知性)
- гунигтай 悲しい (< гуниг 悲しみ)
- зоригтой 勇敢な (< зориг 勇氣)
- амттай おいしい (< амт 味)
- хүчтэй 力のある、強力な (< хүч 力)
- хэрэгтэй 必要な (< хэрэг 必要)
- сонирхолтой 面白い (< сонирхол 興味)
- дуртай 好きな (< дур 好み)
- завтай 暇な (< зав 暇)

また、この接尾辞の代わりに、接尾辞 {-гүй} を接続することによって、これとは全く逆の否定の意味を表すことができる。

(vide ⑫ {-гүй} (N→N))

④2 {-тан}

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、基本的には、《～を有するもの(～のあるもの、～をもつもの)》という意味をもつ集合名詞を形成する。

これには、例えば次のような例がある。

- сээргэн 脊椎動物 (<сээр 脊椎)
- арааган 猛獣 (<араа 奥歯)
- туурайтан 有蹄類 (<туурай 蹄)
- жигүүртэн 鳥類 (<жигүүр 翼)
- амьтан 動物 (<амь 生命)
- эрдэмтэн 学者 (<эрдэм 知識, 学識)
- хөрөнгөтөн 資本家 (<хөрөнгө 財産, 資本)
- үзэлтэн ~主義者 (<үзэл 見解)
- мэргэжилтэн 専門家 (<мэргэжил 専門, 職業)
- ажилтан 頭脳労働者 (<ажил 仕事)
- сэхээтэн 知識階級 (<сэхээ 理性)
- оюутан 学生 (<оюун 知性)
- настан 高齢者 (<нас 年齢)
- үетэн 同世代の人 (<үе 世代)
- хөхтөн 哺乳類 (<хөх 乳房) etc.

また、モンゴルの少数民族の中に、若干 {-тан} を有するものが見られるのは非常に興味深い。

цаатан ツァータン族 (lit. トナカイ飼い, トナカイ飼育者)
(<цаа (буга) トナカイ)

なお、この接尾辞は、通時的には次のような形成過程を経て成立しており、元来、Mo.-tai (> Kh. {-тай}) の複数形であったと考えられる。(vide ④1 {-тай} (N→N))

Mo.-tai + -n → -tan > Kh. {-тан}
(N→N) (pl.) (N→N)

④3 {-уур}

この接尾辞は、方位を示す多くの語幹または語根に接続し、一般に《横の空間の広がり》を表し、《どのあたりを、どこを、どこを、どのあたりに》等という意をもつ名詞語幹を形成する。

ただし、語幹または語根が長母音、二重母音で終わる時は、{-уур} は {-гуур} に変化する。

{-уур} → -гуур / { $\begin{matrix} VV\# \\ _ \\ Vй\# \end{matrix} _ }$

хойгуур 北を，後を(通って) (<*хой-, cf.хойно 北，後)

урдуур 南を，前を(通って) (<урд 南の，前の)

өмнүүр ~ өмнөтэйгүүр 南を，前を(通って) (<өмнө 南，前)

зүүнтэйгүүр ~ зүүгээр 東を，左を(通って) (<зүүн 東，左)

баруунтайгуур ~ баруугаар 西を，右を(通って)

(<баруун 西，右)

дээгүүр 上方を，上を (<*дээ-, cf.дээр 上に)

доогуур 下方を，下を (<*доо-, cf.доор 下に)

гадуур 外側の，外に (<*гада-, cf.гадна 外に)

дотуур 内側の，中に (<*дото-, cf.дотор 中に)

наагуур こちら側を(通って)；こちら側に

(<*наа-, cf.наана こちら側に)

цаагуур 向こう側を(通って)；向こう側に

(<*цаа-, cf.цаана 向こう側に)

хаагуур どこを(通って) (<хаа どこに)

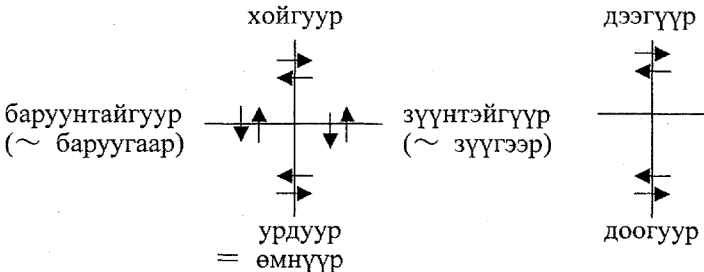
дундуур 真ん中を，間を(通って) (<дунд 間に，中央に)

хоорондуур 真ん中を，間を(通って) (<хооронд 間に)

дэргэдүүр 傍を(通って) (<дэргэд 傍に)

<参考>

この接尾辞 {-уур} を用いて上下および東西南北に対する《横の空間の広がり》を図示すれば，次のようになる。



(この図に関しては

Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*,
УБ, 1978, p.105 参照.)

④④ {-x} = /-x ∞ -хь (-хи) /

この接尾辞は、Mo.-kiに遡るものであり、④⑦の接尾辞 {-хан} (< Mo.-kin < -ki + -n)の構成要素でもある。(vide ④⑦ {-хан} (N→N))
この接尾辞は、その表す意味によって大きく二つに分類できる。

- 1.<属格形>の語幹に接続して、《~のもの、~の》という所属名詞を表示する。
- 2.<場所、方向、空間>等を表す語幹に接続して、《~の、~にある》という意味を表す。

1. a) 人称代名詞の属格形に接続されるが、これを一覧表にして示せば次のようになる

人称		単数	複数	
		I.	минийх	биднийх (包括) бид нарынх
II.		чинийх (普通) таных (丁寧)	та нарынх	танайх あなた方のもの、ところ、家族
III.	近称	үүнийх ~ энэнийх ~ энүүнийх	эднийх ~ эд нарынх (= [ed nerі:ŋx] (口語)) ~ эдгээрийнх	
	遠称	түүнийх ~ тэрнийх ~ тэрүүнийх	тэднийх ~ тэд нарынх (= [ted nerі:ŋx] (口語)) ~ тэдгээрийнх	

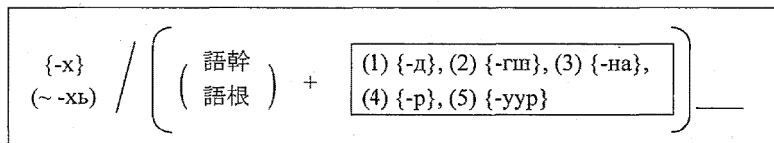
a) 名詞

ахынх 兄のもの (<ax 兄)

дүүгийнх 弟のもの (<дүү 弟)

Баярынх Баяルのもの (<Баяр Баяル) etc.

2. 語構成分析の点から、この接尾辞は、筆者の調査した所では、《場所、方向、空間》等を表す次の五つの接尾辞の後にも接続される。



これには、例えば次のような例がある。

- (1) эндэх 此の, ここにある (<энд ここに)
усандахь 水の, 水中の (<усанд 水に)
 - (2) хойшхи 北の, 後の (<хойш 北へ, 後へ)
 - (3) гаднахь 外側の (<гадна 外に)
 - (4) дээрх 上の (<дээр 上に)
доторх(и) 中の, 中にある (<дотор 中に)
 - (5) дээгүүрх 上方の (<дээгүүр 上方を)
- その他に、若干次のような例も見られる。

дараахь 次の (<дараа 次)

одоохи 今の, 現在の (<одоо 今, 現在) etc.

<考察>

現在、モンゴル国では、キリル文字を採用しているが、それによると、例えば、дараахь《次の》、дундах《中央の》etc. に対して、それぞれ次の三通りの表記法

дараах, дараахь, дараахи,

дундах, дундахь, дундахи

が見られる。このように、一般にこの接尾辞 {-x} は、キリル文字で、a) -x, b) -хь, c) -хи の三通りで記されているが、これは今後、正書法にまつわる諸問題と関連して、何らかの形で体系化されるべきであろう。

④5 {-хай} = /-хай ∞ -гай/

この接尾辞は、名詞語幹に接続し、《～の状態の、～の状態になった》という意味をもつ形容詞を形成する。

なお、この接尾辞は、次のように母音調和による三つの交替形をもつ。

-хай, -хой	/ /BV/	__
-хий	/ /FV/	__

a) /BV/ __

балархай あいまいな, ぼんやりした (<балар 暗い)

муухай きたない (<муу 悪い)

зальхай ずるい (<заль 狡猾)

тусгай¹⁾ 特別な (<тус それぞれ)

нусгай²⁾ 鼻を垂らした (<нус 鼻汁)

хонхорхой へこんだ, くぼんだ (<хонхор へこみ, くぼみ)

b) /FV/___

сүрхий 極端な(に) (< сүр 威厳)

шүлхий よだれを垂らした (< шүлс よだれ)

ただし、以下の例では、{-хай} (Mo.-qai / -kei) は、指小接尾辞 (diminutive suffix) で、《親愛語的意味》を表示する。

(cf. ⑥ {-аахай} (V→N))

шувуухай 小鳥 (< шувуу 鳥)

мануухай かかし (< мануул かかし (lit. 見張る人, 番をする人)
< мана- 見張る, 番をする)

(Mo. манууqai < *мануулqai < мануул < мана-)

овоохой ぼろ小屋, 仮小屋 (< овоо オボー, 石の山)

また、この接尾辞 {-хай} は、共時的には、形態的に条件づけられた異形態 -гайをもつ。すなわち、次の関係が成り立つ。

{-хай} = /-хай ∞ -гай/

この接尾辞 {-гай} は、《語幹の意に関連した意》を示し、{-хай}と同様、母音調和による三つの交替形をもつ。

-гай, -гой / /BV/___
-гий / /FV/___

андгай 誓い (< анд 義兄弟)

амгай くつわ, はみ (< ам 口)

гэргий (敬) 妻, (cf. 家内) (< гэр ゲル, 家)

нууцгай³⁾ 秘密の, 隠れた (< нууц 秘密)

задгай 開いた, あいた (< зад 開放を表す非生産的語根)

онцгой 特別な (< онц 特別の)

その他、若下の動物名の末尾にも共通して見られる。

муужгай (口語) 猫 (< муур 猫)

(муур に比べ親しみを込めた表現)

баавгай 熊 (< баавай (敬称) おじいさん)

また、機能的拡張により、動詞語幹に接続したと思われる例も若干見られる。

наадгай 人形 (< наад- 遊ぶ)

- 1) Mo.tusqai > { Ord.Dusχā
Kalm.tusχā
Bur.tusχae
Kh.tusgae(有声)
- 2) Mo.nisugai > { Ord.nusχā
Kalm.nusχā
Bur. —
Kh.nusgae(有声)

3) この語は、例えば、нууцгай сэтгэл 《秘めたる心》、нууцгай хүүхэд 《隠し子》のように用いられる。

④ {-хан}

これは、いわゆる指小接尾辞 (diminutive suffix) と呼ばれるもので、原則として、あるものの性質を《小さいもの、不十分なもの》として示すことを表す。

モンゴル語では、この接尾辞は、機能的に大きく三つに分類できるように思われる。

1. 実詞に接続し、《親愛語的意味》を伴う新たな実詞を形成する。
хүүхэн 娘, (若い) 女性 (<хүү 息子, 子供)
ноёхон 領主の娘 (<ноён 領主)
2. 数詞及び指示詞に接続し、《たった～、わずか～》という意味を表わす。

ганцхан たった一つの (<ганц 唯一)

хоёрхон たった二つの (<хоёр 二)

хоёулхан たった二人で (<хоёл 二人で)

арваадхан ほんの十くらい (<арваад 十くらい)

энэхэн たったこれだけ (энүүхэн¹⁾(口語)) (<энэ これ)

тэрхэн たったそれだけ、あれだけ

(тэрүүхэн(口語)) (<тэр それ, あれ)

зөвхөн ただ単に、～だけ (<зөв 正しい)

3. 形容詞に接続し、さらに《強調》の意味が加わる。これは日本語の《かなり～、幾分～、やや～、少し～、もっと～》に当たるように思われる。

жижигхэн かなり小さい (<жижиг 小さい)

ойрхон かなり近い (<ойр 近い)

нарийхан かなり細い (<нарийн 細い)

зөөлхөн 少し柔らかい (<зөөлөн 柔らかい)
 бушуухан もっと迅速な (<бушуу 迅速な)
 цэвэрхэн もっと清潔な (<цэвэр 清潔な)
 шинэхэн かなり新しい (<шинэ 新しい)
 тодхон もっとはっきりした (<тод はっきりした)
 сайхан 美しい (<сайн 良い)
 жаахан 小さい ; (ほんの)少し
 (<жаалхан 少しでも <жаал 小さい ; 少し)

1) 例えば、口語では次のように用いられる。

Миний ном энүүхэнд байх ёстой.

私の本は、ほんのこの辺に(このあたりに)あるはずだ。

④7 {-хан}

この接尾辞は、属格形の語幹に接続し、《～に関係ある人たち、～の人たち》という構成員を表示する意をもつ集合名詞 (collective noun) を形成する。すなわち、この接尾辞は、次の環境にのみ現れる。

{-хан} / [名詞 + {属格}]

{属格} = /-ы (-ий) ~ -ын (-ийн) ~ -гийн ~ -н/

1. 人称代名詞からは、次の三つの語(属格、複数)にのみ接続される。

манайхан 私の家族 (<манай 私たちの)

танайхан あなたの家族 (<танай あなたたちの)

тэднийхэн 彼の家族 (<тэдний 彼らの)

2. 名詞

хотынхон 町の人たち (<хот 町)

говийнхон ゴビの人たち (<говь ゴビ)

Хөвсгөлийнхөн フブスグルアイマグ出身者 (<Хөвсгөл Фбсугул)

эндхийнхэн ここの人たち (<энд ここに)

их сургуулийнхан 大学関係者(教師、学生、事務員を含む)

(<их сургууль 大学)

なお、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、チュルク語とモンゴル語に共通する接尾辞 -ki とモンゴル語の伝統的な複数接尾辞 -n から成る複合接尾辞である。

(vide ④④ {-x} (N→N))

Mo.-ki + -n → -kin > Kh. {-хан}

(N→N) (pl.) (N→N)

<参考>

この接尾辞 {-хан} の表わす意味に関して、著者の恩師であるモンゴル語・満州語学者の Л. Мишиг は、例えば манайхан と言え、
1. 私の家族, 2. 私の兄弟, 3. 私の親類, 4. 同居人, 仕事の同僚,
同級生 等々, その状況に応じてかなり広い意味で用いると述べている。

Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*,
УБ, 1978, pp.95-96.

- 1) 基本的には
- | | | | |
|---|------------------|---|-------|
| { | a) ~の家族 | } | 等を示す。 |
| | b) ~の親類縁者 | | |
| | c) ~の関係者全体あるいは一部 | | |

④8 {-ц}

この接尾辞は、若干の名詞語幹に接続し、《語幹の意に関連した意》を表すが、非生産的でその環境は極めて限定されている。

өнгөц 表面的な, うわべの (<өнгө 色, 表面)

өөрцгүй 違わない, 全く同じの

(<*өөрц 違った <өөр 他の, 異なる)

④9 {-цаг} = /-цаг ∞ -нцаг/

この接尾辞は、一般の文法書には、通常記述されていないが、若干の名詞語幹に接続し、《それに類似した形や特徴をもつもの》という意味の実詞を形成する。

довцог 小高い丘 (<дов ならかな丘)

бөмбөрцөг 地球 (<бөмбөр 太鼓)

оронцог 代用品 (<орон 場所, cf.оронд 代わりに)

эрэгцэг (Mo.ergiĉeg) 絶壁 (<эрэг (Mo.ergi) 岸)

бөөрөнцөг (スポーツ) 砲丸 (<бөөр 腎臓)

зээрэнцэг (スポーツ) 円盤 (<зээр かもしか)

янгирцаг 荷鞍 (cf.янгиа 荷鞍)

бэлхэнцэг (Mo.belkenĉeg) 腰部

(<*бэлхэ-, cf.бэлхүүс (Mo. belkegüsü) 腰)

сархинцаг スポンジ

(cf.сархиа, сархиаг デコボコの, 多くの穴のある)

⑤ {-ч} = /-ч ∞ -чин/

A) この接尾辞は、名詞語幹に接続し、基本的には《～にたずさわる人(行為者)》という意味を表わす実詞を形成する。(特に職分を表わす行為者名詞形成)

なお、この接尾辞は、モンゴル語・チュルク語の両方に共通するものであり、現代モンゴル語では、非常に生産的に用いられる。また、この形態素を構成要素としてもつ接尾辞には、その他、出動名詞語尾 (V→N) {-аач}, {-гч} の二つがある。

(vide ⑦ {-аач} (V→N), ⑮ {-гч} (V→N))

эмч 医者 (<эм 葉)
тогооч 料理人 (<тогоо なべ)
жолооч 運転手 (<жолоо 手綱)
зохиолч 作家 (<зохиол 著作, 作品)
сэтгүүлч ジャーナリスト (<сэтгүүл 雑誌)
хаалгач 門番 (<хаалга 門, 扉)
манаач 見張り (<манаа 見張り)
худалч うそつき (<худал うそ)
хулгайч 泥棒 (<хулгай 盗み) etc.

さらに、特殊な例として、動詞語幹にまず -мар (∞ -вар) (V→N) を接続し、その後に行為者名詞形成接尾辞 -ч (N→N) を接続して形成された語に次のものがある。(vide ⑨ {-вар} (V→N))

хэлмэрч (Mo.kelemürči) 通訳 (<хэлэ- 言う)
үзмэрч (Mo.үjemürіči) 透視(能力)者 (<үзэ- 見る)

また、この接尾辞は、形態的に条件づけられた異形態 -чин をもつ。すなわち、一般に次の関係が成り立つ。

{-ч} = /-ч ∞ -чин/
(N→N)

малчин 牧民 (<мал 家畜)
хоньчин 羊飼い (<хонь 羊)
адуучин 馬飼い (<адуу 馬)
үхэрчин 牛飼い (<үхэр 牛)
тэмээчин らくだ飼い (<тэмээ らくだ)
саальчин 搾乳する人 (<сааль 乳, 乳製品)
анчин 狩人 (<ан 狩り, 獣)
загасчин 漁師 (<загас 魚)

тарвагачин タルバガンの狩人 (< тарвага タルバガン)
 тариачин 農民 (< тариа 穀物)
 ажилчин 労働者 (< ажил 仕事)
 зурагчин 写真屋 (< зураг 写真)
 үсчин 散髪屋 (< үс 毛, 毛髪)
 худалдаачин 商人 (< худалдаа 商売, 貿易)
 төмөрчин 鍛冶屋 (< төмөр 鉄)
 гуталчин 靴屋 (< гутал 靴)
 модчин 大工 (< мод 大)
 дуучин 歌手 (< дуу 歌)
 илбэчин 手品師 (< илбэ 手品)
 оёдолчин 裁縫師 (< оёдол 裁縫) etc.

なお、この接尾辞 {-чин} (Mo.-чин) は、形態的には、元来 Mo.-či の複数形であったと考えられるが¹⁾、現代モンゴル語では、その複数性は、全く失われている。

Mo.-či + -n → -чин > Kh. {-чин}
 (N→N) (pl.) (N→N)

B) また、この接尾辞 {-ч} は、名詞語幹に接続し、《～にたけた、～に熟達した、～が得意な、～が好きなの》という習性の意味を表す形容詞を形成することもある²⁾。

ажилч 仕事好きなの、仕事熱心なの (< ажил 仕事)
 хөдөлмөрч 勤労好きなの (< хөдөлмөр 労働)
 цэвэрч きれい好きなの (< цэвэр きれいな)
 үнэрч 嗅覚が鋭い (< үнэр におい)
 аминч 利己的な (< амь (> амин) 生命)
 үнэнч 正直な、忠実な (< үнэн 眞実, 眞理)
 малч 家畜を放牧するのに慣れた (< мал 家畜)
 хоньч 羊を放牧するのが上手なの (< хонь 羊)
 үхэрч 牛を放牧するのが上手なの (< үхэр 牛)
 анч 狩りの好きなの、狩りのうまい (< ан 狩り)
 дууч 歌の好きなの、歌のうまい (< дуу 歌) etc.

C) 従来の文法書には、ほとんど記述されていないが、この接尾辞 {-ч} は、A), B) の他に、さらに若干の時間的前後表示語に接続して、《関係形容詞(～の)》の意を表すことがあるので、ここに付記しておく。

сүүлч 終わり(の) (> сүүлчийн 終わりの) (< сүүл 終わり, 最後)
 дараач 後(の), 次(の) (> дараачийн 後の, 次の)

(< дараа 後, 次)

түрүүч 最初(の), 以前(の) (> түрүүчийн 最初の, 以前の)

(< түрүү 最初, 以前)

ただし、この C) の用法は、先の A), B) の表示する意味とは明らかに異なるため、共時的には別の形態素 {-ч} を認定することも可能であろうが、通時的には、やはり同一形態素の別の発展形式と見るべきであろう。

1) N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954, p.72, 270.

2) 《гүхайн юманд дуртай, чадамгай》 гэсэн утгатай

⑤ 複数接尾辞

現代モンゴル語ハルハ方言の主な複数接尾辞は、共時的立場から、次の五つに分類できる。

	形態素	異形態
(1)	{-ууд}	-нууд
(2)	{-д}	
(3)	{-с}	
(4)	{-чууд}	~ -чуул
(5)	{-нар}	

(1) {-ууд} = /-ууд ~ -нууд/

この複数接尾辞 {-ууд} は、音韻的に条件づけられた異形態 -нууд をもち、一般に次のような相補的分布をなしている。

ア)-ууд	/	{_C#}_
イ)-нууд	/	{ Vй# }_
(N→N)		(名詞語幹)

(C…子音, VV…長母音, Vй…二重母音)

ア) {-ууд} は、主として子音で終わる名詞語幹に接続される。

a) {__v#}

төлөвүүд 状態 (複数の) (< төлөв 形, 状態)

сэдэвүүд テーマ (複数の) (< сэдэв 主題, テーマ) etc.

b) {__г#}

үсгүүд 文字 (複数の) (< үсэг 文字)

бичгүүд 書類 (複数の) (< бичиг 書類)

цэргүүд 兵士たち (< цэрэг 兵隊)

цэцгүүд 花 (複数の) (< цэцэг 花)

зургууд 絵 (複数の) (< зураг 絵) etc.

c) {__р#}

дэвтрүүд ノート (複数の) (< дэвтэр ノート)

гэрүүд Гел (複数の) (< гэр Гел, 家)

үхрүүд 牛 (複数の) (< үхэр 牛) etc.

d) {__с#}

улсууд 人々 (< улс 人々)

оросууд ロシア人たち (< орос ロシア)

солонгосууд 韓国, 朝鮮人たち (< солонгос 韓国, 朝鮮)

хосууд カップルたち (< хос 対, カップル) etc.

e) {__д#}

хятадууд 中国人たち (< хятад 中国)

ардууд 人民たち (< ард 人民) etc.

f) {__н#} (ただし, {-н} = -н₁)

орнууд 国々, 諸国 (< орон 国)

оюутнууд 学生たち (< оюутан 学生)

хүүхнүүд 若い女性たち (< хүүхэн 若い女性)

ажилтнууд 頭脳労働者たち (< ажилтан 頭脳労働者)

хүнүүд 人々 (< хүн 人) etc.

g) {__м#}

номууд 本 (複数の) (< ном 本) etc.

h) {__л#}

жилүүд 年 (複数の) (< жил 年)

зохиолууд 作品 (複数の) (< зохиол 作品)

тугалууд 子牛 (複数の) (< тугал 子牛) etc.

i) {__н(г)#}

байшингууд 建物 (複数の) (< байшин(г) 建物)

сангууд 倉 (複数の) (< сан(г) 倉)

ангууд 狩りの獣たち (< ан(г) 狩り, 獣)

дугуйлангууд サークル (複数の) (< дугуйлан(г) サークル)

хүрээлэнгүүд 研究所 (複数の) (< хүрээлэн(г) 研究所) etc.

イ) 複数接尾辞 {-нууд} は、主に最終音節が長母音または二重母音で終わる名詞語幹に接続され、共時的には、ア) {-ууд} の音韻的に条件づけられた異形態と考えることができる。

шувуунууд 鳥 (複数の) (< шувуу 鳥)
тэмээнүүд ラクダ (複数の) (< тэмээ ラクダ)
адуунууд 馬群 (複数の) (< адуу 馬群)
хэрээнүүд カラス (複数の) (< хэрээ カラス)
чулуунууд 石 (複数の) (< чулуу 石)
ширээнүүд 机 (複数の) (< ширээ 机)
өрөөнүүд 部屋 (複数の) (< өрөө 部屋)
авианууд 音声 (複数の) (< авиа 音声)
далайнууд 海 (複数の) (< далай 海)
туулайнууд ウサギ (複数の) (< туулай ウサギ)
могойнууд 蛇 (複数の) (< могой 蛇) etc.

また、さらにモンゴル語ハルハ方言では、この複数接尾辞 -нууд は、

a) 《不安定な n》(すなわち -n₂)をもつ名詞語幹
b) 《不安定な n》はもたないが、短母音で終わる名詞語幹に接続することもあり、ア) の接尾辞 -ууд との揺れが見られる場合もある。

a) моднууд ~ модууд 木 (複数の) (< мод(он) 木)
b) барилганууд ~ барилгууд 建築物 (複数の)
(< барилга 建築物) etc.

(2) {-д} … この複数接尾辞は、一般に、次の三つの名詞語幹に接続される。

1. 語幹形成辞の {-н} (-n₁, -n₂)をもつ名詞語幹
(vide ㉑ {-н} (N→N))
2. 接尾辞 {-ч(ин)}, {-аач}, {-гч} 及び若干の {-тан}をもつ名詞語幹
(vide ㉒ {-ч(ин)} (N→N), ㉓ {-тан} (N→N), ㉔ {-аач} (V→N), ㉕ {-гч} (V→N))
3. その他、慣用的に用いられる若干の名詞語幹

1. a) 名詞語幹が、{-n₁#}で終わる場合 ({-n₁#}→{-д})
өвгөд 老人たち (< өвгөн 老人)
хөгшид 老人たち (< хөгшин 年取った)

эээд 主人たち (<эзэн 主人)
ноёд 領主たち (<ноён 領主)
хагад 貴婦人たち (<хаган 貴婦人)
охид 娘たち (<охин 娘) etc.

b) 名詞語幹が、《不安定な н》をもつ場合 ({-н₂#} → {-д})

хурууд 指 (複数の) (<хуруу(н) 指)
шувууд 鳥 (複数の) (<шувуу(н) 鳥)
морьд 馬 (複数の) (<морь (морин) 馬)
хоньд 羊 (複数の) (<хонь (хонин) 羊) etc.

2. 名詞語幹が、接尾辞 {-ч(ин)}, {-аач}, {-гч} 及び若干の {-тан} をもつ時

a) {-ч(ин)#} → {-чид}

зохиолчид 作家たち (<зохиолч 作家)
малчид 牧民たち (<малчин 牧民)
ажилчид 労働者たち (<ажилчин 労働者)
тамирчид スポーツ選手たち (<тамирчин スポーツ選手)
жүжигчид 俳優たち (<жүжигчин 俳優) etc.

b) {-аач#} → {-аачид}

бичээчид 書記たち (<бичээч 書記)
зураачид 画家たち (<зураач 画家) etc.

c) {-гч#} → {-гчид}

уншигчид 読者たち (<уншигч 読者)
сурагчид 生徒たち (<сурагч 生徒)
зорчигчид 乗客たち (<зорчигч 乗客) etc.

d) {-тан#} → {-тад}

амьтад 動物たち (<амьтан 動物)
эрдэмтэд 学者たち (<эрдэмтэн 学者)

3. 慣用的に用いられる若干の名詞語幹

нөхөд 同志たち, 友人たち (<нөхөр 同志, 友人)
түшмэд 官吏たち, 役人たち (<түшмэл 官吏, 役人)
ноход 犬 (複数の) (<нохой 犬)

また、モンゴル民族の種族名の中には、形態的に複数接尾辞 {-д} を有するものがいくつか見られるのは、非常に興味深いことである。

дөрвөд ドルブド族 (<дөрвөн 四)
мянгад Мянгад族 (<мянган 千)
баяд Баяд族 (<баян 富)
дархад Дархад族 (<дархан 神聖な) etc.

(3) {-c} … この複数接尾辞は、現代モンゴル語では、あまり生産的には用いられなくなり¹⁾、その主なものは、下に掲げるいくつかの名詞語幹に限定されている。

1. 《人間表示》

залуус 若者たち (< залуу 若い)
ядуус 貧乏人たち (< ядуу 貧しい)
хүмүүс (Mo.kümüs) 人々 (< хүн (Mo.kümün) 人)
нялхас 赤ん坊たち (< нялх 赤ん坊)
өтгөс (Mo.ötegüs) 老人たち
(<— (Mo.ötegü) 老いた, 老人 ; cf. өгөл- (Mo.ötel- 老いる))
үрс 子供たち (< үр 子供)
ихэс 偉い人たち, 高官 (< их 大きい)
дээдэс 先祖 (< дээд 上の)
эрс 男たち (< эр 男)
эмс 女たち (< эм 女)
ахас 年長者 (< ах 兄)
эхэс 母たち (< эх 母) etc.

2. その他

үгс 単語 (複数) (< үг 単語)
нэрс 名前 (複数) (< нэр 名前)
үйлс 行為 (複数) (< үйл 行為)
уулс 山 (複数) (< уул 山)
үүлс 雲 (複数) (< үүл 雲)
нохос 犬 (複数) (< нохой 犬) etc.

1) Ц. Жанчивдорж, Б. Рагчаа, *Монгол хэлний үг зүй*, УБ, 1970, p.26.

(4) {-чууд} = /-чууд ~ -чуул/

この複数接尾辞は、名詞語幹(若干の形容詞を含む)に接続し、《人間表示》の名詞語幹を形成する。

монголчууд ~ монголчуул モンゴル人たち (< монгол Монゴル)
баатарчууд ~ баатарчуул 英雄たち (< баатар 英雄)
эрэгтэйчүүд ~ эрэгтэйчүүл 男性たち (< эрэгтэй 男性)
эмэгтэйчүүд ~ эмэгтэйчүүл 女性たち (< эмэгтэй 女性)
баячууд ~ баячуул 金持ちたち (< баян 金持ち)

бөхчүүд ~ бөхчүүл 力士たち (< бөх 力士)
багачууд ~ багачуул 子供たち (< бага 小さい)
залуучууд ~ залуучуул 青年たち (< залуу 若い)
настайчууд ~ настайчуул 老人たち (< настай 年老いた)
хөгшчүүд ~ хөгшчүүл 老人たち (< хөгшин 年取った)
ядуучууд ~ ядуучуул 貧乏人たち (< ядуу 貧しい) etc.

- (5) {-нар} … この複数接尾辞は、《人間表示》の名詞語幹にのみ接続されるが、その中でも特に、1. 人称代名詞、2. 親族名称、3. その他、若干の職業名詞等に接続される。

なお、この複数接尾辞 {-нар} は、現行のキリル文字表記による正書法では、名詞語幹から分離させ、常に分かち書きで表記されるが、実際のハルハ方言の口語では、以下のかっこ内で示したように、母音調和して発音されることがある。

1. 人称代名詞

бид нар (~ [bidn̄r]) 《一人称複数，包括形》 (< бид 同左)
та нар 《二人称複数》 (< та 二人称単数)
эд нар (~ [edn̄r]) 《三人称複数，近称》 (< эд 同左)
тэд нар (~ [tedn̄r]) 《三人称複数，遠称》 (< тэд 同左)

2. 親族呼称

ах нар 兄たち (< ах 兄)
дүү нар (~ [du:n̄r]) 弟たち (< дүү 弟)
эгч нар (~ [egʃn̄r]) 姉たち (< эгч 姉)
ач нар 孫たち (< ач 孫)
зээ нар (~ [zɛ:n̄r]) 甥，姪たち (< зээ 甥，姪) etc.

3. その他若干の職業名詞等

багш нар 先生たち (< багш 先生)
шавь нар 弟子たち (< шавь 弟子)
эмч нар (~ [emʃn̄r]) 医者たち (< эмч 医者)
тогооч нар (~ [tɔgɔ:ʃn̄r]) 料理人たち (< тогооч 料理人)
жолооч нар (~ [dʒɔlɔ:ʃn̄r]) 運転手たち (< жолооч 運転手) etc.

⑤ 数詞接尾辞

(1) a) {-дугаар} = /-дугаар ∞ -тгаар/

b) {-дахь}

これらの接尾辞は、いずれも基数詞に接続して、《～番目の、第～の》という意味を表す序数詞 (дэс тоо) を形成する。

a) {-дугаар}

これは、次のように母音調和による二つの交替形をもち、主に <～月 (сар), ～階 (давхар)> 等の順序に用いられる。

-дугаар	/ /BV/ __
-дүгээр	/ /FV/ __

хэддүгээр сар ?	何月
нэгдүгээр сар	1 月 (< нэг 1)
хоёрдугаар сар	2 月 (< хоёр 2)
гуравдугаар сар	3 月 (< гурав 3)
дөрөвдүгээр сар	4 月 (< дөрөв 4)
тавдугаар сар	5 月 (< тав 5)
зургадугаар сар	6 月 (< зургаа 6)
долдугаар сар	7 月 (< долоо 7)
наймдугаар сар	8 月 (< найм 8)
есдүгээр сар	9 月 (< ес 9)
аравдугаар сар	10 月 (< арав 10)
арван нэгдүгээр сар	11 月 (< арван нэг 11)
арван хоёрдугаар сар	12 月 (< арван хоёр 12)

この接尾辞 {-дугаар} (Mo.-duyar) は、形態的に条件づけられた異形態 -тгаар (Mo.-tuyar) をもつが、これは現代ハルハ方言では、専ら基数詞 гурав 《3》, дөрөв 《4》 の語根 *гу-, *де- にのみ接続され、極めて非生産的であり、しかも文語的である。

{-дугаар} = /-дугаар ∞ -тгаар/

гутгаар 第3の (<*гу- (< гурав) “3”を意味する語根)
 дөлтөөр 第4の (<*дө- (< дөрөв) “4”を意味する語根)
 これらは、例えば次のように用いられる。

гутгаар дэвтэр 第3巻
 дөлтөөр дэвтэр 第4巻

<考察>

この序数詞接尾辞 {-дугаар} は、起源的には、与位格語尾 *-tu / *-du と造格語尾 *-γār (<*-bār) からなる複合接尾辞であり、《～において、～における》が原義であったものと推定される。

Proto-Mo.*-tu / *-du + *-γār > Mo.-туγар, -дугар
 (与位格) (造格) (N→N)

> Kh.{-дугаар} (∞ -траар)

なお、中世モンゴル語の対応する諸形式が、以下のように現れることは、この考えにとって有利である。

(秘),(華) -tu'ār (-du'ār) / -tü'ēr

(ム) -tār (-dār) / -dēr

/ (秘) Gutu'ār (～ Guta'ār) 第3, jirGodu'ār 第6

(華) qoyadu'ār 第2, dötü'ēr 第4

(ム) tabutār 第5, jiryudār 第6, yisüdēr 第9

((秘):『元朝秘史』, (ム):『ムカディマツト・アル・アダブ』, (華):『華夷訳語』)

また、モンゴル系土族語では、序数詞接尾辞として Mo.-дугар / -düger に対応する縮約形 -dar が用いられることは、この接尾辞の変化発展の歴史を考える上で興味深い。

nigedar 第1 (<nige 1)
 Gu:rdar 第2 (<Gu:r 2)
 Gura:ndar 第3 (<Gura:n 3)
 de:rendar 第4 (<de:ren 4)
 ta:wundar 第5 (<ta:wun 5)
 dzirGu:ndar 第6 (<dzirGu:n 6)
 dolo:ndar 第7 (<dolo:n 7)
 naimandar 第8 (<naiman 8)
 şdzindar 第9 (<şdzin 9)
 xarwandar 第10 (<xarwan 10)

ちなみに、現代モンゴル語の名詞 дугаар 《番号》という語は、序数詞接尾辞 {-дугаар} をもつ語に対する類推によって、後に接尾辞から語へと逆形成されたものであろう。

b) {-дахь}

これは、次のように母音調和による二つの交替形をもち、主に
<～曜日 (гариг), ～度目 (удаа)>等の順序に用いられる。

-дахь	/ /BV/	__
-дэх	/ /FV/	__

хэддэх өдөр ?	何曜日
.....	
нэгдэх өдөр	月曜日 (< нэг 1)
хоёрдахь өдөр	火曜日 (< хоёр 2)
гуравдахь өдөр	水曜日 (< гурав 3)
дөрөвдэхь өдөр	木曜日 (< дөрөв 4)
тагдахь өдөр	金曜日 (< тав 5)

cf. хагас сайн өдөр 土曜日
бүтэн сайн өдөр 日曜日

<考察>

この序数詞接尾辞 {-дахь} は、起源的には、与位格語尾 *-da と出名名詞接尾辞 *-ki からなる複合接尾辞であり、《～にある(ところの)》が原義であったものと推定される。

Proto-Mo.*-da + *-ki > Mo.-daki > Kh.{-дахь}
(与位格) (N→N) (N→N)

(2) {-уул(аа)}

この接尾辞は、基数詞に接続して、《～人で、～一緒に》という意味を表す集合数詞 (хам тоо) を形成し、主に総人数、合計数の表示に用いられる。

これは、次のように母音調和による二つの交替形をもつ。

-уул(аа)	/ /BV/	__
-үүл(ээ)	/ /FV/	__

хэдүүл(ээ) ?	何人で、いくつ一緒に
.....	
хоёул(аа)	2人で、2つ一緒に (< хоёр 2)
гурвуул(аа)	3人で、3つ一緒に (< гурав 3)
дөрвүүл(ээ)	4人で、4つ一緒に (< дөрөв 4)

тавуул(аа)	5人で、5つ一緒に (<тав 5)
зургуул(аа)	6人で、6つ一緒に (<зургаа 6)
долуул(аа)	7人で、7つ一緒に (<долоо 7)
наймуул(аа)	8人で、8つ一緒に (<найм 8)
есүүл(ээ)	9人で、9つ一緒に (<ес 9)
арвуул(аа)	10人で、10と一緒に (<арав 10)
cf. олуул(аа)	大人数で (<олон 多い)
цөөхүүл(ээ)	少人数で (<цөөхөн 少ない)

<考察>

この集合数詞接尾辞 {-уул(аа)} は, Mo.-γula / -güle で現れるが, 中世モンゴル語 (MMo.) の『元朝秘史』で, -'ūla / -'üle の形で見えることから, かなり古い時代から存在していた接尾辞であることがわかる.

Proto-Mo.*-γūla > MMo.-'ūla / -'üle > Kh. {-уул(аа)}
 (N→N) (N→N)

cf. MMo.(秘)	qoya'ūla	2人で (<qoyar 2)
	gurba'ūla	3人で (<gurban 3)
	dörbe'üle	4人で (<dörben 4)
	tabu'ūla	5人で (<tabun 5)

また, モンゴル系土族語では, 集合数詞接尾辞として Mo.-γula / -güle に対応する縮約形 -la が用いられることは, この接尾辞の变化発展の歴史を考える上で興味深い.

gu:rla	2人で (<gu:r 2)
gura:nla	3人で (<gura:n 3)
de:renla	4人で (<de:ren 4)
ta:wunla	5人で (<ta:wun 5)
dzirgu:nla	6人で (<dzirgu:n 6)
dolo:nla	7人で (<dolo:n 7)
naimanla	8人で (<naiman 8)
şdzinla	9人で (<şdzin 9)
xarwanla	10人で (<xarwan 10)

(3) {-аад}

この接尾辞は、十単位ごとの基数詞にのみ接続し、《およそ、約～；～ぐらい、ほど》という意味を表す概数詞 (тойм тоо) を形成し、主におおよその数の表示に用いられる。

хэд орчим? どれくらい

арваад	およそ 10, 10 ぐらい (< арав 10)
хориод	およそ 20, 20 ぐらい (< хорь 20)
гучаад	およそ 30, 30 ぐらい (< гуч 30)
дөчөөд	およそ 40, 40 ぐらい (< дөч 40)
тавиад	およそ 50, 50 ぐらい (< тавь 50)
жараад	およそ 60, 60 ぐらい (< жар 60)
далаад	およそ 70, 70 ぐらい (< дал 70)
наяад	およそ 80, 80 ぐらい (< ная 80)
ерээд	およそ 90, 90 ぐらい (< ер 90)
зуугаад	およそ 100, 100 ぐらい (< зуу 100)
мянгаад	およそ 1000, 1000 ぐらい (< мянга 1000)

(4) {-(-н)гаа}

この接尾辞は、-н をもつ基数詞に接続して、《～回、度》という意味を表す回数詞 (дахих тоо) を形成し、主に一桁の数の回数の表示に用いられる。

ただし、回数詞接尾辞 {-(-н)гаа} は、現代ハルハ方言では、文語的であり、あまり頻繁には用いられず、通常、名詞 удаа 《回、度》を用いる方がより自然である。

хэдэн удаа? 何回、何度

хоёронгоо	二回、二度 (< хоёрон 2)
гурвангаа	三回、三度 (< гурван 3)
дөрвөнтөө	四回、四度 (< дөрвөн 4)
тавангаа	五回、五度 (< таван 5)
зургаантаа	六回、六度 (< зургаан 6)
долоонтоо	七回、七度 (< долоон 7)

cf. олонтаа (～ олонтоо) 何回も、何度も (< олон 多い)

<考察>

この回数詞接尾辞 {-(-н)гаа} は、Mo.-ta / -te で現れるが、中世モンゴル語 (MMo.) の『ムカディマツト・アル・アダブ』でも、同

様に -ta/-te の形で見えることから、かなり古い時代から存在していた接尾辞であることがわかる。

Proto-Mo.*-ta > MMo.-ta/-te > Kh.{-(h)raa}
(N→N) (N→N)

cf. MMo.(△) nikete 一度, 一回 (< niken 1)
qoyarta 二回 (< qoyar 2)

また、モンゴル系土族語では、uda: 《回, 度》(Mo.udaya) の接辞形 -da: が用いられることは、この回数詞接尾辞の変化発展の歴史を考える上で興味深い。

gu:rda: 第2回 (< gu:r 2)
gura:nda: 第3回 (< gura:n 3)
de:renda: 第4回 (< de:ren 4)
ta:wunda: 第5回 (< ta:wun 5)
dzirgu:nda: 第6回 (< dzirgu:n 6)
dolo:nda: 第7回 (< dolo:n 7)
naimanda: 第8回 (< naiman 8)
şdzinda: 第9回 (< şdzin 9)
xarwanda: 第10回 (< xarwan 10)

2. 出動名詞接尾辞

(Deverbal nominal suffixes / V→N)

① {-aa} = /-aa ∞ -aan/

この接尾辞は、その動詞語幹にかかわる抽象名詞を形成する。

なお、これは、出動名詞語尾の中では最も生産的に用いられる接尾辞の一つであり、ごく基本的な名詞語幹によく見られる。

мэдээ ニュース (<мэдэ- 知る)

алдаа 失敗 (<алда- 失う)

хараа 視力 (<хара- 見る)

утаа 煙 (<ута- いぶす)

идээ 食物 (<идэ- 食べる)

унаа 乗り物 (<уна- 乗る)

даваа 峠 (<дава- 越える)

ялгаа 違い (<ялга- 区別する)

санаа 考え, 気持ち (<сана- 思う, 考える)

түлээ 薪 (<түлэ- 燃やす)

таглаа ふた (<тагла- ふたをする)

бөглөө 栓 (<бөглө- ふさぐ, 栓をする)

худалдаа 貿易, 商売 (<худалда- 売る)

холбоо 結合, 関係 (<холбо- 結び付ける)

манаа 見張り (<мана- 見張る)

харилцаа 関係 (<харилца- 関係をもつ)

тэгнээ 家畜の背に積んだ荷の一方

(<тэгнэ- (家畜の背に)振り分けて積む)

гараа スタート (<гар- 出る)

бариа ゴール (<бари- (手で)握る)

хүрхрээ (Mo.kürkire ← *kürkirege) 滝

(<хүрхрэ- (Mo.kürkire-) うなる) etc.

また、動詞語幹が {_C + i#} の例として、次のようなものがある。

хашаа 柵, 囲い (<хаши- 囲む)

хоршоо 協同組合 (<хорши- 協同する)

жишээ 例 (<жиши- 比較する)

яриа 会話 (<яри- 話す)

гариа 穀物; 注射 (<тари- 植える; 注射する)

дохио 合図 (< дохи- 合図する)
 захи 手紙 (< захи- (物を)頼む, 願ひする)
 ачаа 荷物 (< ачи- 荷を積む)
 чалчаа おしゃべり (< чалчи- ぺちやくちやしやべる)
 хэмжээ 寸法, 量 (< хэмжи- 測定, 測量する)
 хаваржаа 春営地 (< хаваржи- 春を過ごす)
 намаржаа 秋営地 (< намаржи- 秋を過ごす)
 өвөлжөө 冬営地 (< өвөлжи- 冬を過ごす) etc.

なお, モンゴル文語のレベルでは, この接尾辞 {-aa} は, 次のような相補的分布をなしている.

Mo.-ya, -ge / {__CV#}__ (V= a, e, u, ü)
Mo.-ya, -ye / {__CV#}__ (V= i)

この接尾辞 {-aa} は, 形態的に条件づけられた異形態 -aan をもつ. すなわち, 一般に次の関係が成り立つ.

{-aa} = /-aa ∞ -aan/

удаан ゆっくり, 長い間 (< уда- 時間がかかる)
 цуглаан 集会 (< цугла- 集まる)
 тэмцээн 試合 (< тэмцэ- 闘う)
 байлдаан 戦争 (< байлда- 戦う)
 уралдаан 競争 (< уралда- 競争する)
 хуралдаан 会議 (< хуралда- 集まる)
 шуугиан 騒音 (< шууги- 騒ぐ)
 хөдөлгөөн (Mo.ködelge-gen) 運動; 交通 (< хөдөлгө- 動かす)
 тоглоом おもちゃ (< *тоглоон < тогло- 遊ぶ)
 (これは, н [+ 歯音, + 鼻音] が л [+ 歯音, + 流音]
 の後で異化を起し, м [- 歯音, + 鼻音] に変化したた
 めであろう. (cf. オルドス方言 togloон おもちゃ))

この接尾辞 {-aan} は, 共時的には, これ以上はさらに分節できないが, 元来は複合接尾辞で, 通時的には, 次のような形成過程を経て成立している.

Proto-Mo.*-γā + *-n > Mo.-γan > Kh.{-aan}
 (V→N) (N→N) (V→N)

② {-ааж}

この接尾辞は、これまでいかなる学者によっても言及されたことのないもので、記述されるのは、これがはじめてである。これが、これまでに現代ハルハ方言の接尾辞として抽出されなかった理由の一つに、下に掲げる a) 以外の例が、どの辞書にも記述されていないことがあげられよう。

筆者は、二年間のモンゴル人民共和国滞在中 (1980 ~ 82 年)、次のような平行例 b), c) を観察する機会を得たので、ここに記しておきたい。

a) мэдээж わかり切った事 (<мэдэ- 知る)

e.g. мэдээжийн хэрэг 周知の事実

b) харааж 一目瞭然な事 (<хара- 見る)

e.g. хараажийн өөдгүй амьтан 一目瞭然なるくでなし

хараажийн муу хүн 一目瞭然な悪人

c) өгөөж 恵み, 施し (lit. 常に与えること, よく施すこと)

(<өг- 与える) (> өгөөжтэй (物が)豊富な, 豊かな)

e.g. өгөөжтэй хангай (土地が)豊かなハンガイ地帯

өгөөжтэй сайн ном (内容が)豊富な本

なお、b) は、ハルハ方言の話し言葉で、c) は、党機関紙である『ウネン紙』(үнэн сонин)の政治経済面で観察したものである。

したがって、筆者は、接尾辞 {-ааж} を現代ハルハ方言における形態素として十分認定しうるとここに提唱したい。

③ {-аал}

この接尾辞は、若干の動詞語幹に接続し、《常に～すること》という意味を表す実詞を形成する。(継続抽象名詞形成)

магтаал 賛歌, 賛詞 (<магта- 賞賛する)

тагаал 運河, 水路 (<тага- 引く)

なお、この接尾辞は、通時的には次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性は大きい。

Proto-Mo.*-γā + *-l > Mo.-γal > Kh. {-аал}

(V→N) (N→N) (V→N)

④ {-aap}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《道具名称》を表す実詞を形成する。

хавчаар はさむ道具 (e.g.ヘア留め, せんたくばさみ)

(< хавчи- はさむ, 締める)

үдээр 細い革紐 (<үдэ- ひもでとじる, ひもを通す)

хазаар 馬勒 (<хаза- かむ) etc.

また、この接尾辞は、共時的には、同じ道具名称を表す接尾辞 {-уур} (V→N) の形態的に条件づけられた異形態と考えることも可能であろう。(vide ④ {-уур} (V→N))

すなわち、共時的には、次のような関係も、一応想定可能であろう。

{-уур} = /-уур ∞ -aap/

ちなみに、この接尾辞 {-aap} は、モンゴル文語では、次のような相補的分布をなしていることを付記しておく。

Mo.-yari → -yari / {__C+i#}__

⑤ {-aac}

この接尾辞は、主として《その行為の結果できあがったもの》という意を表す実詞を形成する。(行為の結果名詞)

нөхөөс つぎ (<нөхө- 補う)

оёос 縫い目 (<оё- 縫う)

зураас 線 (<зура- 描く)

нэхээс 織物 (<нэхэ- 織る)

шивээс 入れ墨 (<шивэ- 細いもので刺す)

бичээс 碑文 (<бичи- 書く)

бүрээс 覆い (<бүрэ- 覆う)

хэрчээс 切れ目, 刻み目 (<хэрчи- 切り刻む)

хуниас 服のひだ (<хуни- 服にひだを作る)

бөглөөс ふさいだもの (<бөглө- ふさぐ, 栓をする)

また、一部、《～するのに使われるもの》という意味を表すこともある。

хадаас 釘 (< хада- (釘を)打ち込む)

үдээс ひも (< үдэ- ひもを通す, ひもでとじる)

шаваас しっくい (< шава- 塗る) etc.

なお、この接尾辞 {-aac} は、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性は十分あり、若干の語においては、この痕跡が依然見られる¹⁾。

Proto-Mo.*-γā + *-su > Mo.-γasu > Kh.{-aac}
(V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

現代ハルハ方言で、《物の静止状態》を表す構文の一つに次のものがある。

{動詞} + {-аастай} (< {-aac} + {-тай})
(V→N) (N→N)

→ 《～している状態》 + 《の/にある》

例えば、次のように生産的に用いられる。

Хананд зарлал өлгөөстэй байна. (< өлгө- 掛ける)

壁に掲示が掛けてある

Хананд зарлал хадаастай байна. (< хада- 打ち込む)

壁に掲示が止めてある。

Ширээн дээр тавиастай байгаа номоос нэгийг ав. (< тави- 置く)

机の上に置いてある本の中から1冊取れ。

なお、この構文は次の環境において、{-aac} と {-aa} の自由交替が見られ、例えば上例では、それぞれ өлгөөгэй, хадаагай, тавиатай と交換可能である。

{-aac} ~ {-aa} / {動詞} ___ {-тай}

このことは、接尾辞 {-aac} がいわゆる複合接尾辞であり、{-aa} + {-c} に分節可能であることを立証する具体例の一つと言えよう。

1) この代表的な例として、次のものがある。

оёос ~ оёо 縫い目 (< оё- 縫う)

хуниас ~ хуниа 服のひだ (< хуни- ひだを作る)

⑥ {-аахай}

この接尾辞は、若干の動詞語幹または語根に接続して、主に《親愛語的意味》をもつ小動物名を形成する。

ангаахай ひな鳥 (生まれて間もない、羽の生えていない)

(lit.口をぱくぱく開けているもの) (cf.(амаа) ангай-(口を)開ける)

дэгдээхэй ひな鳥 (羽の生えかけている)

(lit.ぴよんぴよん飛び跳ねているもの)(<дэгдэ-飛び跳ねる)

эрвээхэй 蝶 (← ひらひら飛んでいるもの)

(cf.эрвий- ひらひら飛び舞うように見える)

хавчаахай ザリガニ (<хавчи- はさむ, 締める)

ойн унтаахай モリヤマネ (夜行性齧歯動物)

(lit.森の中でいつも眠っているもの)(<унта- 眠る)

унтаахай 寝坊, 眠たがり屋 (<унта- 眠る)

なお、共時的には、この接尾辞 {-аахай} は、これ以上はさらに分節できないが、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性は大きい。

Proto-Mo.*-yā + *-qai > Mo.-yaqai > Kh.{-аахай}

(V→N) (N→N) (V→N)

《継続》 《指小辞》

また、この接尾辞の構成要素である {-хай}¹⁾ (Mo.-qai) は、歴史的立場から指小接尾辞 {-хан} (Mo.-qan) の単数形であったと推定される。(vide ④ {-хан} (N→N))

1) 例えば、次のような例がある。

шувуухай 小鳥 < шувуу 鳥

овоохой ぼろ小屋 < овоо 石の山

2) 例えば、次のような例がある。

хүүхэн 娘, 若い女性 < хүү 息子, 子供

ноёхон 領主の娘 < ноён 領主

⑦ {-аач}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《～にたずさわる人》という意味を表す実詞を形成する。(行為者名詞形成)

харваач 射手 (< харва- (弓で)射る)

зураач 画家 (< зура- 描く)

бичээч 書記 (< бичи- 書く)

удирдаач 指揮者 (< удирда- 指導する)

бариаач 接骨医, 整骨師 (< бари- 握る)

судлаач (専門家としての)研究者 (< судла- 研究する)

хэл шинжээч 言語学者 (< хэл 言語, шинжи- 研究する)

талийгаач 故人 (< талий- 死ぬ)

уран нугараач 曲芸師 (< уран 巧みな, нугара- 体を曲げる)

なお、この接尾辞は、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、この接尾辞の表す意味は、元來 Mo.-či (> Kh. {-ч}) に起因するものである。(vide ⑤ {-ч} (N→N))

Proto-Mo.*-γā + *-či > Mo.-γāči > Kh. {-аач}
(V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

— {-гч}, {-аач}との比較 —

形式	{-гч} (Mo.-γči) (< *-γ + *-či)	{-аач} (Mo.-γāči) (< *-γā + *-či)
相	単発性・一回性	継続性・持続性
意味	《一時的に～する人》 түр тэгдэг хүн	《継続的に～する人》 (→ ～にたずさわる人) үргэлж тэгдэг хүн

<例>

бичигч 書く人 баригч 握る人 (эх ~ 産婆) судлагч (広義で研究する人としての) 研究者 буудагч 射撃手 (мэргэн ~ 射撃の名手) (*харвагч)	бичээч 書記 бариаач 整骨師 судлаач (専門家としての) 研究者 (*буудаач) харваач 射手 (сур ~) 弓の射手
---	--

⑧ {-В}

この接尾辞は、若干の動詞語幹にのみ接続し、実詞を形成するが、極めて非生産的である。

сэдэв 主題, テーマ (<сэдэ- 企てる, 考え出す)

төсөв 予算, 見積もり (<төсө- 予想する, 見積もる)

⑨ {-вар} = /-вар (~ -бар) ∞ -мар /

この接尾辞は、その動詞語幹にかかわる抽象名詞を形成し、モンゴル語では、かなり生産的に用いられる。

тайлбар 説明 (<тайл- 解く)

үүсвэр 発生 (<үүс- 生ずる)

тэтгэвэр 年金, 援助金 (<тэтгэ- 援助する)

тээвэр 輸送 (<тээ- 輸送する)

тэнцвэр つり合い, 均衡 (<тэнцэ- つり合う)

ялгавар 区別 (<ялга- 区別する)

халдвар 伝染 (<халда- 感染する)

салбар 分野 (<сал- 別れる, 離れる)

олбор 獲得物 (<ол- 手に入れる, 見つける)

төлбөр 支払い(金) (<төлө- 支払う)

татвар 税金 (<тата- 徴収する)

чадвар 能力, 才能 (<чада- できる)

олдвор 発見 (<олдо- 見つかる)

даалгавар 課題 (<даалга- 課する)

засвар 修理 (<заса- 直す, 修理する)

сийлбэр 彫刻 (<сийл- 彫る)

найдвар 信頼 (<найда- 期待する)

その他、若干、形容詞を形成する場合も見られる。

хийсвэр 抽象的な (<хийс- (風で)吹き飛ば)

また、名詞語幹 ажил《仕事》に直接接続したと思われる ажилбар《作業(過程)》という例も見られるが、これは、実は動詞語幹 ажилла-《働く, 仕事をする》に、接尾辞 -вар を接続した ажиллавар が、特に口語で、重音脱落 (haplology) の現象によって一方の л が脱落したものを、そのまま書き言葉に踏襲し表記したものであり、新語である。

ажилбар 作業(過程) (e.g. мэс ажилбар 手術)

< ажиллавар (Мо.ажилла-buri)

< ажилла- 働く, 仕事をする

さらに、この接尾辞 {-вар} は、形態的に条件づけられた異形態 -мар をもち、次のような関係が成り立つ¹⁾。

$$\{-вар\} = /-вар (\sim -бар) \propto -мар /$$

үзмэр 展示品, 陳列品 (< үзэ- 見る)

хөдөлмөр 労働 (< хөдөл- 動く)

この接尾辞 {-вар} は、接尾辞 {-уурь} (V→N) とモンゴル祖語において同一語源に遡る蓋然性がある。(vide ㊦ {-уурь} (V→N))

- 1) モンゴル語では、歴史的に唇音 б/в ~ м (b ~ m) の子音交替がしばしば見られる。例えば、その典型的な例としてモンゴル文語では、次のものがある。

Mo.nilbu- ~ nilmu- (> nulmu-) (Kh.нулима-) つばを吐く

Mo.nilbusu ~ nilmusu (Kh.нулимс) 涙

Mo.sirbüsü ~ sirmüsü (Kh.шөрмөс) 臍

Mo.qabar ~ qamar (Kh.хамар) 鼻

Mo.sabarda- ~ samarda- (Kh.саварда- ~ самарда-) 爪でひっかく
(< sabar (Kh.савар) (鳥, 獣の) 爪)

(なお、下線を施した語は、現在内モンゴルで使用されるモンゴル文語の標準的な正書法を示す。)

<考察>

出勤名詞接尾辞 {-вар} は、通常 Mo.-buri に対応するが、わずかであるが、次の例のように Mo.-bur に対応するものが見られる。

ээвэр (Mo.egege-bür) 日当たりのよい(所)

(< ээ- (Mo.egege-) 暖まる)

хөөвөр (Mo.köge-bür) (家畜の) 抜けた柔毛

(< хөө- (Mo.kögege-) 膨らむ)

これは、おそらく Mo.-buri の変種であり、形態的に条件づけられた異形態と解することができよう。

$$\text{Mo.}\{-buri\} = /-buri \propto -bur /$$

ただし、次の例に見られる Mo.-bur は、これらとは異なり、道具名称形成接辞 Mo.-γur との交替形と考えられる。

шилээвэр (Mo.silege-bür) 火かき棒
 (~ шилээгүүр (Mo.silege-gür))
 (<шилээ- (Mo.silege-) (火を)かき立てる)

⑩ {-r}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主に、その動詞語幹によって表される実詞(行為の結果名詞)を、一部、形容詞を形成する。
 なお、これは出勤名詞接尾辞の中では、かなり生産的に用いられる接尾辞である。

хоног 一昼夜 (<хоно- 夜を過ごす, 泊まる)
 засаг 政府 (<заса- 治める)
 будаг 染料, 絵の具 (<буда- 色を塗る, 染める)
 зураг 絵 (<зура- 描く)
 бичиг 文字; 書類 (<бичи- 書く)
 бүжиг 踊り, ダンス (<бүжи- 踊る)
 сураг 便り (<сура- (人)を尋ねる)
 хориг 禁止 (<хори- 禁ずる)
 түшиг ささえ, 頼り (<түши- よりかかる, 頼る)
 зориг 意志, 勇気 (<зори- 目指す, 志す)
 гуниг 悲しみ (<гуни- 悲しむ) etc.

また、一部、形容詞を形成することも若干見られる。

цэлмэг 晴れた (<цэлмэ- 晴れる)
 бүрхэг 曇った (<бүрхэ- 曇る)
 хамаг すべての (<хама- かき集める)
 бээрэг 寒がりな (<бээрэ- (寒さで)かじかむ) etc.

<参考>

この接尾辞 {-r} を構成要素としてもつ複合接尾辞に、{-pxar}, {-car} の二つがあり、これはいずれも出名名詞接尾辞 (N→N) である。なお、前者は《~を豊富に持っている》、後者は《~を欲した》という意味をもつ。(vide ⑦ {-pxar}(N→N), ⑨ {-car}(N→N))

⑪ {-ra} = /-ra ~ -raa/

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として 1. 《その行為の結果, 生じるもの》, 2. 《~する(のに使う)もの》等の意味をもつ実詞を形成する。

また、これまで明らかにされてこなかったこととして、この接

尾辞 {-ra} は、特に動詞語幹末が流音 л, р (/l/, /r/) で終わる語に接続される場合が多く、とりわけ動詞語幹が /FV/ の時には, лrV → лVr, prV → pVr の如く規則的に音位転換 (metathesis) を起こしている。

すなわち、この接尾辞 {-ra} は、その接続する動詞語幹に、一般に次のような音韻的制限があると言える。

{-ra} / {_C#}_ (C = л, р)

この典型的な例として、次のようなものがある。

(1) 動詞語幹が л で終わる時

сануулга 警告 (<сануул- 警告する, 思い出させる)

орчуулга 翻訳 (<орчуул- 翻訳する)

шургуулга 引き出し

(<шургуул- 入り込ませる, 押し込ませる)

танилцуулга 紹介, 案内 (<танилцуул- 紹介する)

таниулга 解説, 説明 (<таниул- 知らせる, 説明する)

ухуулга 扇動 (<ухуул- 扇動する)

цуглуулга 収集 (<цуглуул- 集める)

найруулга 文体 (<найруул- 編集する)

захиалга 注文, 予約 (<захиала- 注文する)

санаачлага 主導権 (<санаачла- 主導権を握る)

залруулга 訂正 (<залруул- 訂正する, 直す)

балруулга 消しゴム (<балруул- 消す)

тулга 五徳 (<тул- 支える)

агуулга 内容 (<агуул- 入れる; 含む)

оршуулга 埋葬 (<оршуул- 埋葬する)

сэрүүлэг (<*сэрүүлэг) 目覚まし, アラーム

(<*сэрүүл- ~ сэрээ- 目覚めさせる, 起こす)

(2) 動詞語幹が р で終わる時

хуурга いため料理 (<хуур- いためる)

шуурга 嵐, 吹雪 (<шуур- (嵐, 吹雪が) 吹き荒れる)

нударга こぶし (<нудар- 軽く突く)

шамарга (шуурга ~) 湿雪の吹雪 (<шамар- 雪が渦巻く, 吹雪く)

хавирга (Мо. qabirγa) 肋骨 (<хавира- (Мо. qabira-) こする, 研ぐ)

дарга (Mo.daruga) 長, 頭 (<дара- (daru-) 押える)

(← 常に上から押えつけることから)

хурга (Mo.quraya) (1歳未満の) 子羊 (<хура- (Mo.qura-) 集まる)

(← 互いにすぐに寄り集まることから)

また, 特に動詞語幹が /FV/ の時には, 規則的に音位転換の現象が見られる.

үүрэг (← *үүргэ) 荷; 義務 (<үүр- 背負う)

дэвхэрэг (← *дэвхэргэ) ばった (<дэвхэр- 跳ぶ)

нөмрөг (← *нөмөргө) マント (<нөмөр- 身をおおう)

ただし, 一部, 例外的に次のような語にも見られる.

унага (Mo.unaya) (1才未満の)子馬 (<уна- (Mo.una-) 落ちる)

(← 馬は立ったまま子を産み落とすことから)

бөмбөг (Mo.bömbüge) ボール

(← бөмбий- (Mo.bömbüi-) ふくらむ)

өндөг (Mo.öndege) 卵

(← өндий- (Mo.öndei-) 少し上がる, 体を起こす)

<考察>

この接尾辞 {-ra} は, モンゴル文語の Мо.-ya (モンゴル祖語では, 短母音の /*-ga¹⁾) に対応するが, 現代ハルハ方言では, 次の環境において, 通時的に長母音化が起こったと考えられる.

{-ra}	→	{-raa}	/	a) /__CVл/p#/__
		(現代ハルハ方言)		b) /N+{-ла-}#/__

a)-1) 動詞語幹が /__CVл#/ の場合

動詞語幹が /__CVл#/ の時に, その直後の接尾辞 {-ra} は, ハルハ方言では長母音化が起こっている²⁾.

/__CVл#/ + /-rV/ → (Kh.) /CVлrVV#/

тасалгаа 部屋 (<тасал- 切る)

довтолгоо 攻撃 (<довтол- 襲いかかる)

донсолгоо 揺れ (<донсол- 揺れる)

хагалгаа 切開, 手術 (<хагал- 割る, こわす)

ただし, 動詞語幹が /__CVVл#/ の時には, この現象は起こっていない.

/__CVVл#/ + /-rV/ → (Kh.) /__CVVлrV#/

агуулга 内容 (<агуул- 入れる; 含む)

орчуулга 翻訳 (<орчуул- 翻訳する)

(上例 (1) のその他多数の例参照)

また、単音節語の場合も、この長母音化は起こらなかったようである。

тулга 五徳 (<тул- 支える)

a)-2) 動詞語幹が /__CVp# / の場合

a)-1) と同様、動詞語幹が /__CVp# / の時に、その直後の接尾辞 {-ra} は、ハルハ方言では長母音化が起こっている。

захиргаа 行政, 管理 (<захир- 支配する, 管理する)

амьжиргаа (人間の)生活, 暮らし (<амьжир- <амьжра- 生存する)

халтиргаа 滑りやすい所 (<халтир- <халтира- 滑る)

ядаргаа³⁾ 疲れ, 疲労 (<ядар- <ядра- 疲れる)

зүдэргээ³⁾ 疲労困憊 (<зүдэр- <зүдрэ- 疲れ果てる)

b) 出名動詞接尾辞 {-ла-} の直後の接尾辞 {-ra} も、ハルハ方言では長母音化が起こっている⁴⁾。

/N + {-лV-}# / + /-rV/ → (Kh.) /N-л(V)rVV# /

(N→V)

төлөвлөгөө 計画 (<төлөвлө- 計画する)

ажиллагаа 作業 (<ажилла- 仕事をする)

эмчилгээ 治療 (<эмчлэ- 治療する)

шинжилгээ 調査, 検査 (<шинжлэ- 調査する)

цэвэрлэгээ 掃除 (<цэвэрлэ- 掃除する)

багалгаа 保証, 確認 (<батла- 保証する, 確認する)

үйлчилгээ サービス (<үйлчлэ- 仕える)

эдэлгээ 使用 (<эдлэ- 使用する)

биелгээ (Mo.beyelege) モンゴル民族舞踊

(<биелэ- (Mo.beyele-) モンゴルの民族舞踊をする)

c) その他、若干ではあるが、出名動詞接尾辞 {-ла-} の直後の接尾辞 {-лга} も、ハルハ方言で長母音化を起こしているものがある。

зөвлөлгөө (Mo.jöble-lge) 忠告, 助言

~ зөвлөгөө (特に口語で、重音脱落によって)

(<зөвлө- (Mo.jöble-) 忠告する, 助言する)

以上のように、現代ハルハ方言におけるこの接尾辞 {-ra} の長母音化現象は、非常に興味を引くものであるが、これまでいかなる学者によっても何ら考察は行われていない。

なお、筆者の調査した所では、この長母音化現象は、特にハルハ方言で顕著に見られ、その他のモンゴル語諸方言では、内モンゴル方言のごく若干の例⁵⁾を除いては、あまり見られない。例えば、ブリヤート語では、この接尾辞 {-ra} は、従来の短母音をよく保存しており、ハルハ方言のような長母音化現象は見られないし、また、カルムイク語及びダグール語に至っては、現在の所、利用できる資料の範囲内では、特に a), b) の環境において、接尾辞 {-ra} (V→N) を用いるという語構成が非生産的であるように思われる。

いずれにしても、今後、現代モンゴル語諸方言における派生による語構成の詳細な記述的研究が強く望まれる次第である。

- 1) ㊸ の接尾辞 {-ra} と、㊶ の接尾辞 {-aa} のいずれも、モンゴル文語では、-ya で翻字されるが、モンゴル祖語において、前者が短母音の / * -ga /、後者が長母音の / * -gaa / という音韻的対立をなしていたと考えられる。

モンゴル祖語	現代モンゴル語
/ * -ga /	→ -ra (㊸ (V→N))
/ * -gaa /	→ -aa (㊶ (V→N))

なお、この考えは、服部四郎「蒙古祖語の母音の長さ」(『言語研究』36号, 1959, pp.40-54) によるものである。

- 2) ハルハ方言以外の内モンゴル方言、ブリヤート語で、この長母音化があまり見られないことは、次の諸例より明らかである。

Mo.	ハルハ方言	内モンゴル方言	ブリヤート語	意味
tasul-ya	тасалгаа	/ taslag /	таһалга	部屋
dobtul-ya	довтолгоо	/ dobtlog /	довтолго	攻撃
dongsul-ya	донсолгоо	/ donsllog /	—	揺れ
qayal-ya	хагалгаа	—	хахалга	切開, 手術

3) ただし、ハルハ方言と内モンゴル方言で異なる現れ方をするものもある。

Mo.	ハルハ方言	内モンゴル方言	意味
yadara-γa (<yadara-)	ядаргаа	/yadra:/	疲れ, 疲労
ǰüdere-ge (<ǰüdere-)	зүдэргээ	/ǰüdrə:/	

これに関しては、結局の所、両方言において、同一動詞語幹に対し、起源的に異なる二つの接尾辞(/*-ga/と/*-gaa/)を接続したと考えざるをえない。

ハルハ方言 {-raa} (長母音化) ← /*-ga/ (短)

内モンゴル方言 {-aa} ← /*-gaa/ (長)

4) 2)と同様、内モンゴル方言、ブリヤート語では、長母音化現象はあまり見られないようである。

Mo.	ハルハ方言	内モンゴル方言	ブリヤート語	意味
tölüble-ge	төлөвлөгөө	/tölöblög/	—	計画
aǰilla-γa	ажиллагаа	/aǰillag/	—	作業
emčile-ge	эмчилгээ	/emčileg/	эмшэлгэ	治療
sinǰile-ge	шинжилгээ	/šinǰileg/	(шэнжэлгэ)	調査
čeberle-ge	цэвэрлэгээ	/čeberleg/	(сэбэрлэлгэ)	掃除
batula-γa	баталгаа	/batlag/	баталга	保証
üilečile-ge	үйлчилгээ	/üilčileg/	—	サービス
edle-ge	эдэлгээ	/edleg/	(эдлэлгэ)	使用

5) 例えば、その若干例として次のものがある。

Mo.	ハルハ方言	内モンゴル方言	意味
sudul-γa	судалгаа	/sudalgaa/	研究
dabal-γa	давалгаа	/dabalgaa/	波

⑫ {-галан}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主に《動作の抽象概念やその状態》を示す実詞や形容詞を形成する。

- баясгалан 喜び, 楽しみ (< баяс- 喜ぶ)
 өлсгөлөн 空腹(な) (< өлс- 飢える)
 исгэлэн 酸っぱい (< ис- 発酵する)
 гэсгэлэн 溶けた (< гэс- (肉等が) 溶ける)
 үзэсгэлэн 美, 展覧会 (< *үзэс- < үзэ- 見る)
 цаггалан 満腹(な) (< цад- 満腹する)
 амгалан 平和(な), 平穩(な) (< *ама-¹⁾ 休む, 安らぐ)
 гэмшиглэн 後悔 (< гэмши- 後悔する)
 өсгөлөн 成長した (< өс- 成長する)
 ундаасгалан のどの渇き (< ундаас- のどが渴く)

なお、共時的には、この接尾辞は、さらにこれ以上は分節できないが、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-qu + *-la- + *-ng > Mo.-qulang > Kh. {-галан}
 (V→N) (N→V) (V→N) (V→N)

<考察>

モンゴル文語では、この接尾辞 {-галан} は、次のような相補的分布をなしており、この -qulang : -γulang = / 無声 / : / 有声 / の音韻的対立は、オルドス方言をはじめ若干の方言において、なおその痕跡が見られる²⁾。

-qulang, -kūleng / {__C#}__ (C = /s/, /d/)
-γulang, -gūleng / {__V#}__

1) なお、*ама- (Mo.amu-) は、現代ハルハ方言では廢語となり、用いられなくなり、その代わりに ама- (Mo.amara-) が用いられるようになった。

2) 例えば、オルドス方言では、次のようである。

Mo.-qulang / 無声 / : Mo.-γulang / 有声 /
 Bajasχulan amugūlan
 es^Kχuuleŋ
 Ges^Kχuuleŋ
 Džadχulan
 uɪdžis^Kχuuleŋ

(A. Mostaert, *Dictionnaire Ordos*, New York/London, 1968 (rpt.) より)

⑬ {-гар} = /-гар ∞ -гай/

この接尾辞は、主に形状動詞の語根に接続し、《人・物の形状（動作の結果の状態）》を表す形容詞を形成する。

なお、この接尾辞は、接続される動詞語幹に次のような音韻的制限があるのは注目すべきことである。

$$\{-\text{гар}\} / \left\{ \begin{array}{l} \text{Vй\#} \\ _ \text{VV\#} \end{array} \right\} _ \left[\begin{array}{l} \text{Vй} \dots \text{ай, ой} \\ \text{VV} \dots \text{ий} \end{array} \right]$$

また、これは現代モンゴル語の動詞語幹から形容詞を派生する接尾辞としては、最も生産的な接尾辞の一つである。

- гялгар 光っている、光沢のある (<гялай- 輝く、光る)
- шовгор 先のとがった (<шовой- 先がとがる)
- далбагар 幅の広く平らな (<далбай- 広く平らになる)
- бүлтгэр 出目の (<бүлтий- 出目になる)
- чөрдгэр やせこけた (<чөрдий- やせこける)
- цүзгэр 太鼓腹の (<цүзий- ふくれる、突き出る)
- цүндгэр (腹の)突き出た (<цүндий- (腹が)突き出る)
- гозгор 突き立った (<гозой- そびえる)
- хожгор はげた (<хожий- はげになる)
- дорсгор 出っ歯の (<дорсой- (歯が)突き出る)
- хазгар びっこの (<хазай- 傾く)
- пагдгар ずんぐりむっくりな (<пагдай- 短く(低く)なる)
- бандгар ずんどうの (<бандай- ぼてっとしてている)
- бавгар 毛でもじゃもじゃの (<бавай- 毛でもじゃもじゃになる)
- баргар 黒ずんだ (<барай- 薄暗くなる)
- цонхигор (顔が)青白い (<цонхий- 青白くなる)
- мөлгөр 滑らかな (<мөлий- 滑らかになる)
- гөлгөр すべすべな (<гөлий- すべすべしている)
- барзгар デコボコな (<барзай- デコボコである)
- толигор なめらか (すべすべ)な
(<толий- なめらか(すべすべ)になる)
- бөмбөгөр 丸い、球形の (<бөмбий- ふくらむ、ふっくらする)
- арзгар ザラザラした、(毛が)ぼさぼさの (<арзай- 不均一である)

буржгар (髪が)縮れた (< буржий- (髪が)縮れる)
 сартгар 鼻の穴の大きい (< саргай- (鼻の穴を)ふくらませる)
 сарвагар (細長いものが)四方八方にはり出た

(< сарвай- (手足を)伸ばす)

арвагар 同上 (< арвай- 同上)

навтгар 低い (< навтай- 低くなる)

годгор 細くて短い (< годой- 細くて短くなる)

хотгор へこんだ, くぼんだ (< хотой- へこんでいる)

горзгор 細長い, ひよろ長い (< горзой- 細長くなる)

унжгар やせ気味の, 弱々しい (< унжий- やせる, 弱る)

арчгар しわの寄った (< арчий- しわが寄る)

тормогор 目が輝いてきれいな (< тормой- 目が輝いている) etc.

また, この接尾辞 {-гар} は, 形態的に条件づけられた異形態 {-гай} をもち, 次のように, 母音調和による三つの交替形をもっている。

$\{-гар\} = /-гар \text{ } \infty \text{ } -гай / \quad / \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{Vй\#} \\ \text{_VV\#} \end{array} \right\} \quad _ \quad \left(\begin{array}{l} \text{Vй} \dots \text{ ай, ой} \\ \text{VV} \dots \text{ ий} \end{array} \right)$

$\begin{array}{l} -гай, \text{ } -гой \quad / \quad /BV/ _ \\ -гий \quad \quad \quad / \quad /FV/ _ \end{array}$
--

これには, 次のようなものがある

хазгай 傾いた (< хазай- 傾く)

хэлтгий 斜めの(に) (< хэлтий- 傾く)

нялцай ねばねばした (< нялцай- ねばねばする)

гонзгой 細長い, 馬づらの (< гонзой- 細長くなる) etc.

⑭ {-гсад}

この接尾辞は, 若干の動詞語幹に接続し, 《1. ～した者たち (тэгсэн хүмүүс), 2. ～する者たち (тэгдэг хүмүүс)》といった意味を表示する行為者名詞を形成する。

A) 語のレベルで見られる -гсад の例

суралцагсад 学ぶ者たち, 就学者たち (оюутан (大学生)も含む)
 (< суралца- (共に)勉強する)

хэлмэгдэгсэд 犠牲者たち, 被害者たち
 (< хэлмэгдэ- 損害を受ける)

нас барагсад 死者, 亡くなった人たち (<нас бара- 亡くなる)
 ажиллагсад 働く者たち
 (<ажилла- 働く)
 дэмжигсэд 支持者たち
 (<дэмжи- 支持する)

B) 文のレベルで見られる -гсад の例

Хиргисүүр гэдэг нь эрт дээр цагт үхэгсдийн хүүр оршуулсан
 (= үхсэн хүмүүс (1. の意で))

булшийг хэлнэ.

хиргисүүр (古代人の塚)というのは, 古代に死者たちのなきがらを埋葬した墓を言う。

Тус клубийнхэн Япон талын хамтран ажиллагсадтай цаашид
 (= ажилладаг хүмүүс (2. の意で))

өөр хэлбэрийн ажил зохиохоор төлөвлөж байгаа бөгөөд ...

当クラブ員は, 日本側の協力者たち(パートナーたち)とともに今後, 他の形の活動を行おうと計画しており, ...

この接尾辞は, 形態的には, 過去の連体語尾 Mo.-γsan に, 名詞複数接尾辞 -d が接続された結果, 形成されたものである。

Proto-Mo.*-γsan + *-d > Mo.-γsad > Kh.{-гсад}

(V→N) (pl.N→N)

また, 意味的には, 特に語のレベルにおいて過去時制の意を消失したものが多く, そのため, {-гчид} (Mo.-γčid < -γči (行為者・連体語尾) + -d (複数接尾辞)) と極めて類似している点が注目される。

<考察>

—<-гсад と -гчид (ともに V→N) との比較>—

a) 形態的分析

		現代モンゴル語
Mo.-γsan	→	-γsad
過去・連体語尾		(-сан) → -гсад
		↑
		意味的類似
		↓
cf. Mo.-γči	→	-γčid
行為者・連体語尾		-гч → -гчид

b) 意味的分析

複数		総数		
-гсад	-гчид	-гч	-аач	
(単発性) —	(単発性) —	(単発性) —	(継続性) +	үргэлжилсэн санаа → (мэргэжилтэн)
1. 主に過去時制 (голдуу өнгөрсөн цаг) ↓ 転意 (?) 2. 時制の概念消失 (цаггүй)	時制無表示 (цаггүй)	時制表示 (цагтай)		

c) 定式化

-гсад ⁴ (V→N)	1. тэгсэн хүмүүс 《～した者たち》 2. тэгдэг хүмүүс 《～する者たち》
-----------------------------	--

⑮ {-гч}

この接尾辞は、元来は動詞の連体語尾だが、動詞語幹に接続し、《動作の行為者(～する(者/物))》を表す実詞を形成する。(行為者名詞形成)

A) 《～する者》(行為者表示) の意で用いられるもの

- уншигч 読者 (< унши- 読む)
- сонсогч 聞き手 (< сонс- 聞く)
- сурагч 生徒 (< сур- 学ぶ)
- орчуулагч 翻訳者, 通訳 (< орчуул- 翻訳する)
- худалдагч 売り子, 店員 (< худалда- 売る)
- зорчигч 旅行者, 乗客 (< зорчи- 旅行する, 行く)
- шүүгч 裁判官, 審判 (< шүү- 裁判する, 裁く)
- ухуулагч 扇動者, 宣伝者 (< ухуул- 扇動する, 宣伝する)
- шүүмжлэгч 評論家 (< шүүмжлэ- 批評する)
- эрхлэгч 管理人, 主任 (< эрхлэ- 管理する)
- буудагч 射撃手 (< бууда- 射撃する)

B) 《～する物》(道具表示) の意で用いられるもの

B)-1) 派生語の場合

хөргөгч 冷蔵庫 (< хөргө- 冷やす, 冷ます)
 хөлдөөгч 冷凍室 (< хөлдөө- 凍らせる)
 дулаацуулагч 暖房, ヒーター (< дулаацуул- 暖める)
 сэрүүцүүлэгч 冷房, クーラー (< сэрүүцүүл- 涼しくする)
 агааржуулагч 換気(装置) (< агааржуул- 換気する)

B) -2) 複合語の場合

<定式化> N + V(vt.)-гч

тоос сорогч 掃除機 (< тоос ほこり, соро- 吸う)
 дуу хураагч テープレコーダー (< дуу 音, хураа- 集める)
 пянз тоглуулагч レコードプレーヤー
 (< пянз レコード, тоглуул- 演奏させる)
 үс хатаагч сэнс ヘアドライヤー
 (< үс 毛, хатаа- 乾かす, сэнс 扇風機)
 консерв онгойлгогч かん切り
 (< консерв かん詰め, онгойлго- 開ける)
 бөглөө онгойлгогч 栓抜き (< бөглөө 栓, онгойлго- 開ける)
 аянга зайлуулагч 避雷針 (< аянга 雷, зайлуул- 避けさせる)
 харандаа үзүүрлэгч 鉛筆けずり
 (< харандаа 鉛筆, үзүүрлэ- とがらす)
 талх шарагч トースター (< талх パン, шара- 焼く)
 ус буцалгагч 湯沸し(ポット) (< ус 水, буцалга- 沸騰させる)
 цэцэг услагч じょうろ (< цэцэг 花, усла- 水をやる)
 агаар чийгшүүлэгч 加湿器
 (< агаар 空気, чийгшүүл- 湿気を与える)

なお、この接尾辞は、元来、行為者形動詞 (Nomen actoris) を表す連体語尾であり、《～するところの》という意味をもつが、現代モンゴル語では、上例のように出動名詞接尾辞 (V→N) の機能をもつものが少なくない¹⁾。また、通時的には、この接尾辞は、次のような形成過程²⁾ を経て成立しており、この接尾辞の表す意味は、Mo.-či (> Kh. {-ч}) に起因するものである。(vide ⑥ {-ч} (N→N))

Proto-Mo.*-γ + *-či > Mo.-γči > Kh. {-гч}
 (V→N) (N→N) (V→N)

1) ШУАХ, Орчин цагийн монгол хэл зүй, УБ, 1966, p.84.

2) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.274.

<考察>

— зурагчин 《写真家, 写真屋》の語構成について—

зурагчин 《写真家, 写真屋》は, 次の表で示したように, あくまでも名詞 зураг 《絵, 写真》の派生語であって, 動詞 зура- 《描く》から直接派生したものではないことに注意したい。

зура- 描く	> зураг (V→N)	> зурагчин (N→N)
	《1. 絵 $\xrightarrow{\text{転意}}$ 2. 写真》	$\xrightarrow{\text{派生}}$ 《写真家, 写真屋》
	(уран ~) (гэрэл / фото ~)	
	> зураач (V→N)	
	《画家 (Lit. 常に描く人)》	

<根拠>

仮に動詞 зура- から直接派生したものだったら, 形態的には, 専ら зурагч (この -гч は, Мо.-үсi (V→N) に相当) となるはずであって (でも, 実際には*зурагч とは言わない), -н を伴った зурагчин とはならないし (cf. унши- 読む > уншигч 読者 (*уншигчин とは言わない)), また, 意味的にも, 動詞 《描く》より直接派生したなら, 《画家》となるはずであって, 《写真屋》とはならないからである。

したがって, 現代語のレベルで, -н のついた形が存在するか否かが一種の指標となり得るのではなからうか。

-ч / -чин	⑤ (N→N)
-гч (/ *-гчин)	⑬ (V→N)

⑬ {-д}

この接尾辞は, 若干の動詞語幹にのみ接続し, 《その行為の結果》を表す実詞を形成する。(結果名詞形成)

ханиад 咳, 風邪 (< ханиа- 咳をする)

инээд 笑い (< инээ- 笑う)

⑰ {-даг}

この接尾辞は, 元来は 《習慣相 (常に~する)》を表示する動詞の連体語尾だが, 一部, 出動名詞接尾辞として用いられるようになったものも若干見られる。

- шуудаг 相撲用のパンツ (← 短パン ← 裾を常にまくり上げたズボン) (< шуу- (裾を)まくり上げる)
- боодог Бードグ料理 (焼けた石を家畜の腹に詰め、密閉後、さらに丸焼きにするモンゴルの伝統的料理法) (< боо- 包む)

⑱ {-дал} = /-дал ~ -тал/

この接尾辞は、主として動詞語幹から抽象名詞を形成する。

- байдал 状態 (< бай- ある)
- нүүдэл 遊牧 (< нүү- 移動する)
- явдал 行為 (< ява- 行く)
- оёдол 裁縫 (< оё- 縫う)
- гүйдэл 循環, 流れ (< гүй- 走る)
- зардал 費用 (< зара- 使う, 費やす)
- боодол 包み (< боо- 包む)
- захидал 手紙 (< захи- (物を)頼む, お願いする)
- өргөдөл 願書 (< өргө- (願書を)出す)

その他, 一部《その行為の及ぶ場所》を表すこともある。

- суудал 席, 座席 (< суу- 座る)
- буудал バス停, 駅, 空港; ホテル
(< буу- (乗り物を)降りる; 泊まる)

また, この接尾辞 {-дал} は, 音韻的に条件づけられた異形態 -тал をもち, 次のような例が若干見られる。

{-дал} → -тал / {__p#}__ (動詞語幹)

суртал 教義, 主義 (< сур- 勉強する, 学ぶ)

⑲ {-дас}

この接尾辞は、主として《その行為の結果, 生じたもの》という意味をもつ実詞を形成する。(行為の結果名詞)

- угаадас (物を洗った後の)汚水 (< угаа- 洗う)
- тайрдас (木立から切断した)切り株 (< тайра- (長いものを)切る)
- ялгадас 排泄物 (< ялга- 区別する)
- өөдөс (裁断の)切れ端
(< *өөлдөс < өөлө- 出っ張りを切り取る < өө でこぼこ)
- айдас 恐怖 (< ай- 恐れる)

また、一部《～するのに使われるもの》という意味を表すこともある。

ородос 巻くもの (<орoo- 包む, 巻く)

зардас 使用人 (<зара- (人)を使用する)

なお、この接尾辞は、通時的には、次のような形成過程を経て成立したと推定される。

Proto-Mo.*-da + *-su > Mo.-dasu > Kh.{-дас}
 (V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

この接尾辞 {-дас} は、接尾辞 {-aac} (V→N)

Proto-Mo.*-γā + *-su > Mo.-γasu > Kh.{-aac}
 (V→N) (N→N) (V→N)

と表す意味及び形式の点でかなりの類似性を示しており、ごく若干の動詞語幹 {__CV#} において、-aac ~ -дас の交替が見られることから、共時的には、接尾辞 {-дас} を接尾辞 {-aac} の形態的に条件づけられた異形態と考えることも可能であろう¹⁾。

(vide ⑤ {-aac} (V→N))

зураас ~ зурдас 線 (<зура- 描く)

бичээс ~ бичидэс 碑文 (<бичи- 書く)

- 1) ただし、音韻的には、完全な相補的分布をなすものではないが、動詞語幹が長母音、二重母音で終わる時には、接尾辞 {-aac} は全く分布せず、{-дас} だけであるのは、非常に興味深いことである。

	{-CV#}__	{-VV#} {-Vй#}__
{-aac}	+	-
{-дас}	+	+

⑳ {-3}

この接尾辞は、ごく限られた動詞語幹に接続し、《行為の結果》を表す実詞を形成する。(行為の結果名詞)

олз 獲物 (<ол- 得る)

гарз 損害, 損失 (<гар- 出る)

②1 {-л}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《動作の抽象概念》や《行為の結果》を表す実詞を形成する。(抽象概念・結果名詞形成)

なお、これは現代モンゴル語の出動名詞接尾辞(V→N)の中では、最も基本的な語形成に用いられる、最も生産的な接尾辞である。

- санал 意見, 考え (< сана- 思う, 考える)
- бодол 考え (< бодо- 考える)
- үзэл 見解, 主義 (< үзэ- 見る)
- мэдэл 支配, 権力 (мэдэ- 制する, 支配する)
- мэдрэл 神経 (< мэдрэ- 感じる)
- үхэл 死 (< үхэ- 死ぬ)
- хөгжил 発達, 発展 (< хөгжи- 発達する, 発展する)
- зохиол 作品 (< зохио- 創作する)
- төрөл 親戚 (< төрө- 生まれる)
- жаргал 幸福, 楽しみ (< жарга- 楽しむ)
- чадал 力 (< чада- できる)
- хувьсгал 革命 (< хувьсга- 変化させる)
- сэтгэл 心 (< сэтгэ- 考える)
- өгүүлэл 記事, 論文 (< өгүүлэ- 述べる)
- гарал 起源, 発生 (< гар- 出る)
- гэмшил 後悔 (< гэмши- 後悔する)
- дурсгал 記念 (< дурсга- 記念に贈る)
- бүтээл 創造, 作品 (< бүтээ- 創造する)
- дусал しずく (< дуса- したたる)
- анхаарал 注意 (< анхаар- 注意する)
- оршил 序文 (< орши- 存する, ある) etc.

②2 {-лан(г)}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、1.《動作の抽象概念やその状態》、2.《その動作の行われる場所》等を表す実詞を形成する。

- зовлон 苦しみ (< зово- 苦しむ)
- жаргалан 楽しみ, 幸福 (< жарга- 楽しむ)
- хүслэн 希望 (< хүсэ- 望む)
- сэргэлэн 賢い, 聡明な (< сэргэ- 目覚める)
- хадлан 草刈り(場) (< хада- (草を)刈る)
- зуслан 夏の保養地 (< зуса- 夏を過ごす)
- цутгалан 川の合流点 (< цутга- (川が)注ぐ)
- орчлон 宇宙, 世界 (< орчи- 回る, 回転する)

②③ {-лга}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《行為の過程、結果》、または《その行為に用いられるもの》等を表す実詞を形成する。

現代ハルハ方言では、母音調和及び正書法上の規則により、次のような6つの交替形を示す¹⁾。

(1) /BV/___
a) -лага, -лого / {__C#}___
b) -лга, -лго / {__VV#}___
{__Vй#}___
{__и#}___
(2) /FV/___
-лэг, -лөг

なお、この接尾辞は、モンゴル文語の -lya / -lge にさかのぼるものであり、これが現代ハルハ方言では、特に /FV/___ の環境において規則的な音位転換 (metathesis) を起こして現われるのは興味深い。

a) -лага, -лого の例

- сурлага 勉強, 成績 (< сур- 学ぶ)
- дуудлага 発音 (< дууд- < дууда- 発音する)
- давтлага 繰り返し, 復習 (< давт- < давта- 繰り返す)
- оролдлого 努力, 勤勉 (< оролд- < оролдо- 努力する)
- бодлого 政策 (< бод- < бодо- 考える)
- орлого 収入 (< ор- < оро- 入る)
- тооллого たな卸し (< тоол- < тооло- 数える)
- туршлага 経験 (< турш- < турши- 試す)
- уншлага 読書 (< унш- < унши- 読む) etc.

b) -лга, -лго

- хаалга 扉, ドア (< хаа- 閉める)
- гуйлга 物乞い (< гуй- 乞う)
- барилга 建築 (< бари- 建てる)
- урилга 招待状 (< ури- 招待する)
- зорилго 目的 (< зори- 目指す) etc.

(2) /FV/ _ の場合

- мэдлэг 知識 (< мэд- < мэдэ- 知る)
- үзлэг 検査 (< үз- < үзэ- 見る)
- бичлэг 録音 (< бич- < бичи- 書く)
- мөрдлэг 追求, 調査 (< мөрд- < мөрдө- 跡を追う)
- эмнэлэг 病院 (< эмнэ- 治療する)
- бүтээлэг カバー, 覆い (< бүтээ- 覆う)
- шүүлэг (学生の)小試験 (< шүү- 審査する)
- өдөөлөг 挑発, 扇動 (< өдөө- 挑発する) etc.

また、この接尾辞 {-лга} を構成要素としてもつ語構造のうち、次の環境において、ハルハ方言の特に口語で、重音脱落 (haplology) の現象が見られるのが観察された。

口語形	使役形
{-лга} → /-га/ / (V→N)	{動词语幹} + {-уул-} _ (V→V)

これには、例えば次のような例がある。

ハルハ標準方言 (正書法)	口語形
байгууллага	~ /байгууллага/ 組織, 機関 (< байгуул- 組織する, 建設する)
явууллага	~ /явууллага/ 行動, 策略 (< явуул- 行う, 実行する)

<考察>

この接尾辞 {-лга} (Mo.-lyа) は、モンゴル文語で、例えば
Mo.bodul 考え : bodu-lyа 政策 (< bodu- 考える)

Mo.üje-l 見解 : üje-lge 検査 (< üje- 見る)

等の平行例から、次のような形成過程を経て成立した蓋然性があり、歴史的には -l を構成要素としてもつ複合接尾辞であったとも考えられる。(vide ㉑) {-л} (V→N)

Proto-Mo.*-l + *-γа > Mo.-lyа > Kh.{-лга}
(V→N) (N→N) (V→N)

1) ただし、内モンゴルでは、ハルハ方言よりもさらに規則的な交替を示している。

{-lag} = /-lag/, /-log/ / /BV/_ / -leg/, /-lög/ / /FV/_
--

(Bürintegüs, *Mongyul kelen-ü jöb dayudaly-a jöb bičilge-yin toli*, 内蒙古教育出版社, 1977, p.750.

内蒙古大学蒙古語文研究室編, 『蒙漢辞典』, 呼和浩特, 1976, p.1470.)

②4 {-лт}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《行為の過程、結果》、または一部、《その行為に用いられるもの》等を表す実詞を形成する。

- хөгжилт 発展 (< хөгжи- 発展する)
- өсөлт 成長 (< өс- 成長する)
- өрнөлт 発達, 発展 (< өрнө- 発達する)
- давшилт 前進, 攻撃 (< давши- 前進する, 攻撃する)
- дэвшилт 進歩 (< дэвши- 進歩する, 上昇する)
- хүсэлт 要求, 願い (< хүсэ- 望む)
- асуулт 質問 (< асуу- 尋ねる)
- амжилт 成功 (< амжи- 間に合う)
- ололт 成果 (< ол- 見つける)
- ялалт 勝利 (< яла- 勝つ)
- дүгнэлт 結論 (< дүгнэ- 結論を出す)
- үнэлэлт 評価 (< үнэлэ- 評価する)
- байгуулалт 組織, 建設 (< байгуул- 組織する, 建設する)
- даралт (物質的)圧力 (< дара- 押える)
- нэмэлт 追加 (< нэмэ- 付け加える)
- зорилт 目的 (< зори- 目指す)
- цохилт 打撃 (< цохи- 打つ)
- эргэлт 回転 (< эргэ- 回転する)

また、後者の意味で用いられる若干例として、次のようなものがある。

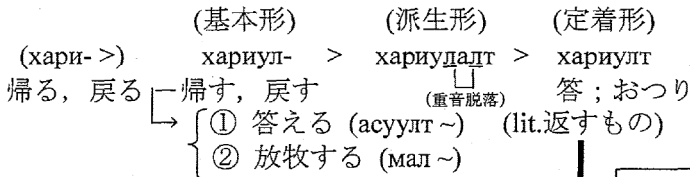
- илгээлт 小包 (< илгээ- 送る)
- ороолт マフラー, 巻くもの (< ороо- 包む, 巻く)
- боолт 包帯, ヘアバンド (< боо- 包む)

<考察1>

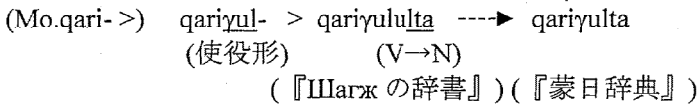
— хариулт 《答；おつり》の語構成について—

名詞 хариулт は、元來動詞 хариул-《帰す(返す), 戻す》(< хари- 帰る, 戻る) より派生した хариулалт の、動詞語幹末子音 -л- と出動名詞接尾辞 -лт の -л- とが、口語のレベルで重音脱落により一方が脱落した結果、形成されたものと推定される。さらに、この口語形式 хариулт が、後にモンゴル文語に取り入れられ、その結果、文語のレベルで Mo.xariyulta が成立したのであろう。以上の考えを概略図示すれば次のようである。

<口語のレベル>



<文語のレベル>



口語形式
より形成

<考察2>

現代モンゴル語で、《~しなくてよい、~する必要はない》という意を表す慣用的表現に次のものがある。

A)

{-cань} ~ {-x} / 動詞語幹 + __ хэрэггүй (過去・連体+属格) (未来・連体)

例えば、次のように用いられる。

Өнөөдөр явсны хэрэггүй.

~ Өнөөдөр явах хэрэггүй. 今日行く必要はない。

また、これと同様の表現で、一般の文法書には通常記述されていないものとして、次のような構文が、ハルハ方言で生産的に用いられていることが、モンゴル人民共和国滞在中、観察できた。

B) {-лт}
(V→N) / 動詞語幹 + __ гүй

なお、この環境で現われる -лт は、形式的には、まさに ㉔ の接尾辞 {-лт} に相当するものである。

- (1) 単語のレベルで (→ ~することのない, ~する必要のない)

тасралтгүй 絶えることのない, 継続的な

(< тасра- 切れる)

буцалтгүй 返却しない, 見返りのない

(lit. 戻ることのない, 戻らなければならない)

(< буца- 戻る, 帰る)

e.g. буцалтгүй тусламж 無償援助

- (2) 文のレベルで (→ ~することはない, ~する必要はない)

Айлтгүй こわがらなくてよい (< ай- 恐れる)

Яаралтгүй 急ぐことはない (< яара- 急ぐ)

Санаа зоволтгүй 心配しなくてよい

(< санаа зово- 苦しむ, 心配する)

Та маргааш ирэлтгүй болсон шүү.

あなたは明日、こなくてもよくなりましたよ。(< ирэ- 来る)

Унаад суултгүй юү? — Суултгүй

乗り物に乗らなくていいの。乗らなくていい。(< суу- 乗る)

ここで前者 A) の表現は、主として翻訳的なニュアンスを伴うのに対し、後者 B) の表現は、ごくくだけた話し言葉で頻繁に用いられることが観察された。

<問題点>

出勤名詞接尾辞 {-л} と {-лт} の間に、何らかの明確な意味の相違が見られるかどうかという点は、概して言えば、{-л} の方が {-лт} に比べ、より抽象的な意味合いを表しているようにも思えるが、詳細に関しては、今後に残された問題である。

e.g. хүсэл 希望: хүсэлт 要求, 願い (< хүсэ- 望む)

хөгжил 発展: хөгжилт 発展 (< хөгжи- 発展する)

㉔ {-ль} = /-ль ∞ -л/

この接尾辞は、ごく若干の動詞語幹に接続し、《その行為の結果生じたもの》、《~するのに使われるもの》という意味をもつ実詞を形成する。

салай 乳, 搾乳 (<саа- 搾乳する)
 ааль¹⁾ (= аам) 性質, 氣質 (<*аа-<а- 存在する)
 цацал 乳を大地に捧げる(цацал өргөх) ために用いる木製へら
 (<цаца- ふりまく)
 аюулхай (Мо.аюулиqай < аюу-ли (V→N) -qай (N→N)) みぞおち
 (← 急所 ← 危険な所) (<аюу- ~ ай- 恐れる, こわがる)

1) この例は, Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг, нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968, p.137.

②6 {-м}

この接尾辞は, 動詞語幹に接続し, 1. 《その行為の結果生ずるもの》, 2. 《~するのに使われるもの》という意味をもつ実詞を形成する.

зүсэм 一切れ (<зүсэ- (パン・チーズを)切る)
 хэрчим 一切れ (<хэрчи- (肉を)切る)
 алхам 一步 (<алха- 歩く)
 хусам¹⁾ 乳を沸かした後残るかす (<хуса- 削る)
 тохом 鞍褥 (<тохо- (鞍を)置く)
 хөгжим 音楽, 楽器 (<хөгжи- 楽しむ)
 наадам スポーツ祭典(ナーダム) (<наад- 遊ぶ)

また, 現在, 後置詞, 副詞と呼ばれるものの中には, 通時的立場から, 接尾辞 {-м} を構成要素としてもつものもある.

орчим ~くらい, 約~ (<орчи- 回転する)
 шахам ~近く (<шаха- 近づく)
 аажим (~ аажуу) おそく, ゆっくりと (<*аажи-)
 уужим (~ уужуу) 広々とした, ゆっくりと (<*уужи-)

1) хусам とは, 《乳を沸かした後, 鍋底に残るかすの部分》を指す.
 なお, これにまつわる有名な оньсого 《なぞなぞ》に, 次のものがある.

Дээрээ дэн шарга 上は淡黄色
 Дундаа дун цагаан 真ん中は純白色
 Доороо азай буурал 下は銀白色

(答. 順に өрөм 《熱した乳の上にてできる薄膜》, сүү 《乳》, хусам)

②7 {-M}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、行為の可能性を表し、《～すべき、～する程の、～するに値する》という意味をもつ形容詞を形成する。

гайхам 驚くべきほどの (<гайха- 驚く)

өрөвдөм 同情すべき、哀れな (<өрөвдө-¹⁾ 同情する、哀れむ)

дур булаам (～ татам) 魅力的な、魅惑的な

(<дур 好み, булаа- 奪う, тата- 引く)

аагим (～ ээм, шарам) халуун 酷暑の、炎暑の

(<ааги- すごく暑い, ээ- 暖める, шара- 焼く)

нохой гаслам халуун

(lit.犬がきゃんきゃん鳴くほど暑い) 焼けつくように暑い

нүд алдам уудам хээр тал

(lit.目がくらむほど)見渡す限りの広大な草原

<考察>

この接尾辞は、チュルク諸語に共通する形動詞 (Verbal noun) 語尾 -ma / -me として生産的に用いられているため、むしろアルタイ諸語の見地から、今後検討すべきであろう。(cf.モンゴル文語 -ma / -me)

例えば、共和国のトルコ語 (Turkish) を例にとると、-ma / -me は形動詞語尾として用いられる以外に、派生接尾辞化してしまっただけの例もいくつか見られる²⁾。

okuma 読書 (<oku- 読む)

dondurma アイスクリーム (<dondur- 凍らす)

uçurtma 凧 (<uçurt- 飛ばす)

kazma つるはし (<kaz- 掘る)

saçma 無意味 (<saç- ばらまく) etc.

なお、トルコ語では、原則としてアクセントは最終音節にあるため、現代ハルハ方言のような母音の弱化に伴う閉音節化現象は見られない。

1) この語は、通時的には Mo.örü 《みぞおちの下の所》 (= төв, гол) と ebed-《痛む》の合成により形成された、いわゆる compound word 《複合語》である。(Mo.örü ebed- > Kh.өрөвдө-)

したがって、өрөвдө- は、《みぞおちの下の所に痛みを感じる》が原義である。なお、モンゴル語 örü に対応する語として、チュ

ルク語 *öz* 《自身》があり、両者の間には、モンゴル語 -r : チュルク語 -z の音法則が成り立っており、アルタイ論者 (Altaicist) の立場からは、同源と考えられる。

2) Orhan Türeli, *Türkçe Gramer ve Konuşma*, Tokyo, 1968, pp.95-96.

㊸ {-mag}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《その行為の結果生じた状態》を表す形容詞を形成する。(行為の結果状態)

хуурмаг¹⁾ 偽りの, にせの (<хуур- だます)

цочмог 突然の, 不意の (<цочи- びっくりする)

ахимаг 初老の (<ахи- 年をとる)

дугмаг 不足した, 足りない (<дуга- 足りない)

холимог 混ざった, 混合物 (<холи- 混ぜる)

зуурмаг こねられた, 練られた (<зуура- こねる, 練る)

さらに、《あるものに具備された性質》を表す形容詞を形成することもある。

чадмаг 熟練した, 巧みな (<чада- できる)

сурмаг 慣れた, 訓練された (<сур- 学ぶ, 慣れる)

зоримог 勇敢な, 大胆な (<зори- 目指す, 志す)

また、中には《その行為の結果生じたもの》という意味をもち、形容詞から実詞化したものも見られる。(行為の結果名詞)

хайлмаг ウルム, 小麦粉にエーズギー, 乳, 砂糖, 干しブドウを混ぜて作った乳製品 (<хйл- (雪, 氷, バター等)が)融ける)

ээдмэг 発酵させて酸っぱくした凝乳(凝固乳)

(<ээдэ- 凝乳状に固まる)

жигнэмэг ビスケット (<жигнэ- 蒸す)

үйрмэг かけら, くず (<үйрэ- 粉々になる)

ороомог 巻いたもの, コイル (<ороо- 巻く)

царцмаг ゼラチン (<царца- 凝固する, 固まる)

шуумаг (өмдний ~) ズボンの裾の部分

(<шуу- (裾等を)まくり上げる)

1) хуурмаг と хуурамч 《偽りの, にせの, 虚偽の》との形態及び意味関係について、以下簡単に述べる。

<頻度>

хуурмаг (Mo.qaγur-maγ)	(△)
> хуурмагч (Mo.qaγur-maγ-či)	(-)
> хуурамч (Mo.qaγur-mači)	(+)

- ・形態的には，хуурамч は，хуурмаг から хуурмагч を経て形成された可能性が大きい。
- ・意味的には，хуурамч と хуурмаг の両者は，接尾辞 -ч (Mo.-či) の有無により，意味を微妙に異にし，ひとことで言うと，хуурамчの方が хуурмаг よりもより具体的なものに用いられ，しかも生産的である。

хуурамч	хуурмаг
бодит юманд 具体的なものに (хүнを含む)	хийсвэр юманд 抽象的なものに
~ хүн 偽善者 ~ зан 偽善 ~ мөнгө (~ зоос) 偽造貨幣，にせ金 ~ инээд うそ笑い	~ явдал 偽善行為

②9 {-мал}

この接尾辞は，動詞語幹に接続し，主として《その行為の結果生じた状態 (～されたところの)》を表す形容詞を形成する。(行為の結果状態)

- хиймэл 人工の (<хий- 作る)
- зохиомол 人工的な (<зохио- 創る)
- бичмэл 書かれた，手書きの (<бичи- 書く)
- дармал 押えられた，印刷された，活字体の (<дара- 押える)
- зурмал 描かれた (<зура- 描く)
- сонгомол 選ばれた (<сонго- 選ぶ)
- шилмэл 精選された (<шилэ- (より好んで)選ぶ)
- өлгөмөл ぶら下がった (<өлгө- 掛ける)
- сийлмэл 彫刻された (<сийл- 彫刻する)

таримал 植えられた (<тари- 植える)
 оргомол 養子にされた (<орго- 持ち上げる ; 養う)
 тогтмол 一定の, 定まった (<тогто- 定まる, 決まる)
 хайлмал 融けた (<хайл- 融ける)
 оёмол 縫いつけられた (<оё- 縫う) etc.

また, 中には《その行為の結果生じたもの(～されたもの)》という意味をもち, 形容詞から実詞化したものや, その中間段階のもの (形容詞～実詞) も見られるが, このことは, 接尾辞 {-мал} のもつ機能的変化の一端を反映していると言えよう¹⁾.

нэхмэл 織られた, 織物 (<нэхэ- 織る, 編む)
 хатгамал 刺繡を施した, 刺繡 (<хатга- 刺繡する)
 чанамал 煮られた, 煮たもの (<чана- 煮る)

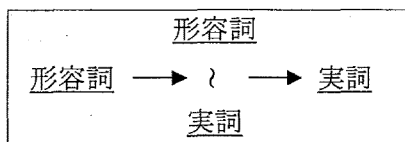
(e.g. жимсний ~ ジャム)

баримал 塑像 (<бари- 握る)
 түшмэл 官吏, 役人 (<түши- よりかかる, たよる)
 ургамал 植物 (<урга- 育つ, 伸びる)
 хатаамал (植物, 昆虫の)標本 (lit.乾かしたもの)

(<хатаа- 乾かす)

чихмэл (大型動物の)剥製 (lit.詰め込んだもの)
 (<чихэ- 詰め込む)

1) 接尾辞 {-мал} の機能的変化



③0 {-мж}

この接尾辞は, 動詞語幹に接続し, 主として抽象的な意味をもつ実詞を形成する. (抽象名詞形成)

боломж 可能性 (<бол- ありうる)
 сэрэмж 用心, 警戒 (<сэрэ- 目覚める)
 ялгамж 区別 (<ялга- 区別する)
 ухамж 理解力 (<уха- 理解する)
 үзэмж 外見, 外観 (<үзэ- 見る)

залгамж 継続, 継承 (< залга- つなぐ)
 сургамж 教訓 (< сурга- 教える)
 итгэмж 信用, 信賴 (< итгэ- 信じる)
 шүүмж 批評, 評論 (< шүү- 裁く, 審査する)
 санамж 警告, 勸告 (< сана- 思う, 考える)
 бүтэмж 成功, 実現 (< бүтэ- 成功する, 実現する)
 басамж 輕蔑, 蔑視 (< баса- 輕蔑する)
 давтамж 頻度 (< давта- 繰り返す) etc.

その他, ごくまれに битүүмж 《封印, 密封》 (> битүүмжлэ- 封印する, 密封する) も見られるが, これは機能的拡張により, 名詞語幹 битүү 《閉じた》 から派生したものである.

③) {-мсар}

この接尾辞は, 若干の動詞語幹に接続し, 抽象的な意味をもつ実詞を形成するが, その環境は極めて限定されており, 非生産的である.

санамсар 思考 (< сана- 思う, 考える)
 (> санамсарла- 思考する)
 тоомсор 注意, 関心 (< тоо- 考慮する, 相手にする)
 (> тоомсорло- 注意を向ける, 関心をよせる)
 ухамсар 理解力, 意識 (< уха- 理解する)
 (> ухамсарла- 理解する)

さらに, この接尾辞 {-мсар} は, 現代モンゴル語では, 一般に次の環境で用いられることが多い.

{-мсар} (V→N)	/ 動詞語幹 + ___гүй
------------------	-----------------

主な例は, 次のようなものである.

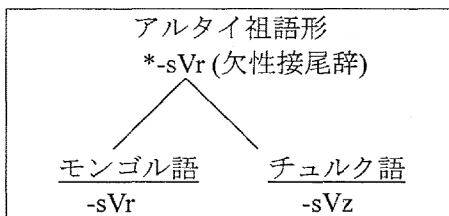
санамсаргүй 思いがけずに, 偶然
 тоомсоргүй 不注意な, 無関心な
 ухамсаргүй 良識のない, 分別のない
 (↔ ухамсартай 良識のある, 分別のある)

<考察>

この接尾辞 {-mcap} は、現代モンゴル語では、欠性接尾辞 (privative suffix) の意味はないが、中世モンゴル語の資料である『元朝秘史』や、『華夷訳語』(1389) では、非生産的ではあるものの、欠性接尾辞の意味を持っていたことが、橋本勝により立証されている¹⁾。また、Mo.-msar は、-m + -sar に分析でき、-m が ㊦ の出動名詞接尾辞 (V→N) であるのに対し、-sar は出名名詞接尾辞 (N→N) であり、非生産的ではあるが、欠性接尾辞として認めうる²⁾。したがって、通時的にはこの接尾辞は、次のような形成過程を経て成立したと推定され、モンゴル祖語において、複合接尾辞であった蓋然性はきわめて大きい。

Proto-Mo.*-m + *-sar > Mo.-msar > Kh.{-mcap}
 (V→N) (N→N) (V→N)

また、アルタイ論者 (Altaicist) の立場からすれば、モンゴル語の化石的形態である -sVr (V = a, e) は、チュルク語の欠性接尾辞 -sVz³⁾ (V = i, i, u, ü) との間に、音法則、すなわちモンゴル語 -r : チュルク語 -z が成立し、両方の接尾辞は同源と考えられる。



なお、橋本勝は、注1)の論文で、「中世蒙古語で -msar の形式がまれに起こる理由は、-sar とほとんど同じ機能をもつ否定の ügei が、-sar よりも一般的となり、その結果、-sar が次第に消失していったからだ」と結論づけているのは非常に興味深い。

1) Masaru Hashimoto, 'Some remarks on the Language of the Secret History of the Mongols with reference to the deverbal suffixes -müser, -msar', *Fourth International Congress of Mongolists* Vol.2, Ulan-Bator, 1985, pp.421-426.

なお、この論文は、1982年8月末、モンゴル人民共和国のウランバートルで開かれた第4回国際モンゴル学者会議で、橋本勝がモンゴル語で口頭発表した原稿の英語訳である。

- 2) モンゴル語では、わずかにその痕跡として次のものが見られる。
Mo.kegüser ~ ketüser (хүүсэр) 不妊の <keü (хүү) 子供
が見られる。
- 3) これは、チュルク語に共通した非常に生産的な欠性接尾辞である。
e.g.共和国のトルコ語 (Turkish)
anlamsız 無意味な (< anlam 意味)
bilgisiz 無知な (< bilgi 知識)
sonsuz 無限の (< son 終わり)
görgüsüz 無作法な (< görgü 行儀) etc.

③② {-MT}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、抽象的な意味をもつ実詞を形成するが、これは、同じ出動名詞接尾辞 {-ЛТ} に比べて極めて非生産的である。

баримт 証拠, 根拠 (< бари- 握る)
дарамт (精神的) 压力, 重荷 (< дара- 押える)
боомт 関門, 港 (< боо- 阻む, 遮る)

③③ {-мхай} = /-мхай (~ -мтгай) ∞ -мгай /

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《人間の習慣となった性格 (すぐに~する, ~しやすい)》や《熟達した性質 (~に巧みな, 優れた)》という意味をもつ形容詞を形成する。

なお、この接尾辞は、形態的には、モンゴル祖語において *-ma (～すべき) + *-qai (～の状態の) の複合接尾辞であった蓋然性が極めて大きく、したがって、意味的には《～すべき性格/性質の》が原義であったと考えられる。

Proto-Mo.*-ma + *-qai > Mo.-maqai > Kh. {-мхай}
(V→N) (N→N) (V→N)

(1) {-мхай}

この接尾辞は、次のように母音調和による三つの交替形をもち、さらに、接尾辞 {-мтгай} との交替が見られる場合が多い。

-мхай, -мхай	/ /BV/ _
-мхий	/ /FV/ _

-мхай ~ -мтгай	/ 動詞語幹+ _
----------------	-----------

a) -мтгай と交換可能な場合

- аймхай (~ айтгай) 臆病な (<ай- 恐れる)
 маргамхай (~ маргамтгай) 忘れっぽい (<марга- 忘れる)
 уйламхай (~ уйлаамтгай) 泣き虫の, 涙もろい (<уйла- 泣く)
 дасамхай (~ дасамтгай) 慣れやすい, よく慣れた
 (<дас- (自然と)慣れる)
 яарамхай (~ яарамтгай) せっかちな (<яара- 急ぐ)
 почимхой (~ почимтгой) おびえやすい, びくびくした
 (<почи- びっくりする)
 ичимхий (~ ичимтгий) 恥ずかしがり屋の
 (<ичи- 恥じる) etc.

b) -мтгай と交換不可能な場合

- унтамхай 寝坊の (<унта- 眠る)
 идэмхий 食いしん坊な (<идэ- 食べる)
 мэдэмхий (~ мэдэмгий) 知ったかぶりの (<мэдэ- 知る) etc.

(2) {-мгай}

この接尾辞も, (1)と同様, 次の三つの交替形をもつが, (1)の場合とは異なり, 接尾辞 {-мтгай} と交替する例はあまり見られない。

-мгай, -мгой	/ /BV/ _
-мгий	/ /FV/ _

- чадамгай 巧みな, 有能な (<чада- できる)
 сурамгай 訓練された, 慣れた (<сур- 学ぶ, 慣れる)
 дадамгай 熟練した, 慣れた (<дад- (経験を積んで)慣れる)
 давамгай 横柄な, 高慢な (<дава- 越える)
 гарамгай 卓越した, とび抜けた (<гар- 出る)
 суумгай 座ったままの, 車いすの (<суу- 座る)
 түрэмгий 侵略的な (<түрэ- 後ろから押す)
 хэлэмгий 雄弁な, 口上手な (<хэлэ- 言う)
 шийдэмгий 意志の堅い, 断固とした (<шийд- 決心する) etc.

また、若干ではあるが、機能的拡張により、名詞語幹に接続される例も見られる。

нүүрэмгий (Mo.niγurmayai) 恥知らずな、面の皮が厚い
 (< нүүр 顔 (Mo.niγur)>)

(3) {-мтгай}

この接尾辞は、次の三つの交替形をもち、(1)で述べたように、大概の場合、接尾辞 {-мхай} と交替して用いられることが多いようである。

-мтгай, -мтгой	/ /BV/ _
-мтгий	/ /FV/ _

аймтгай (~ аймхай) 臆病な (< ай- 恐れる)

почимтгой (~ почимхой) おびえやすい、びくびくした
 (< почи- びっくりする)

ичимтгий (~ ичимхий) 恥ずかしがり屋の
 (< ичи- 恥じる) etc.

ただ、専ら接尾辞 {-мтгай} を接続する例もまれに見られる。

зочломтгой 客をよくもてなす、客好きな
 (< зочло- 客をもてなす)

<考察>

なお、これらの接尾辞 {-мхай}, {-мгай} 及び {-мтгай} は、通時的には次のような形成過程を経て成立したと推定される。

Proto-Mo.		Mo.	現代モンゴル語(Kh.)
*ma (V→N)	+ *-qai	----->	-maqai > {-мхай}
	(N→N)	----->	-mayai > {-мгай}
	+ *-ta + *-qai	----->	-mataγai > {-мтгай}
	(N→N) (N→N)	(V→N)	

ただし、Proto-Mo.*-ma + *-ta + *-qai における *-ta は、《～のある、～をもつ》という意味をもつ出名名詞接尾辞 (N→N) -tai (~-tu) の異形態の変種と推定される。

III. Лувсанвандан は、この接尾辞を次のように分析し、出名名詞接尾辞 (N→N) の項に記述している¹⁾。

$\frac{\begin{matrix} \{-хай\} \\ \{-гай\} \\ (N \rightarrow N) \end{matrix}}{\quad} / \text{動詞語幹} + \begin{matrix} \{-м\} \\ (V \rightarrow N) \end{matrix} \underline{\quad}$

1) Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг, нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968, p.131.

③4 {-мшиг}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《その行為に関する感情》を表す抽象名詞を形成するが、非生産的であり、その環境は極めて限定されている。

гайхамшиг 驚くべきこと (<гайха- 驚く)

аймшиг 恐怖, 恐れ (<ай- 恐れる)

гутаамшиг 恥辱, 不名誉 (<гута- がっかりする)

なお、通時的には、次のような形成過程を経て成立したと考えられ、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性は大きい。

Proto-Mo.*-m + *-siγ > Mo.-msiγ > Kh.{-мшиг}
 (V→N) (N→N) (V→N)

Ш. Лувсанвандан は、この接尾辞を次のように分析し、出名名詞接尾辞 {-шиг} (N→N) の項に記述している¹⁾ ことを付記しておく。

$\frac{\{-шиг\}}{(N \rightarrow N)} / \text{動詞語幹} + \begin{matrix} \{-м\} \\ (V \rightarrow N) \end{matrix} \underline{\quad}$
--

1) Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг, нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968, p.132.

③5 {-мь} = /-мь ∞ -м/

この接尾辞は、若干の動詞語幹に接続し、《その行為を実現する道具》を表す実詞を形成するが、極めて非生産的である。

амь¹⁾ (Mo.ami) 生命 (<a- 存在する)

боомь (Mo.boɣumi) 輪なわ (lit.縛るのに用いる縄)

(<боо- くくる, 縛る)

ухам (Mo.uqumi) 中をくり抜く道具 (lit.掘る道具)

(<уха- 掘る)

<考察>

なお、出動名詞接尾辞 {-ль} の表示する意味は、一部が《～するのに使われるもの(道具)》であり、当該 {-мь} の表示する意味と部分的に一致するのは、非常に興味深い。(vide ㉔ {-ль} (V→N))

- 1) この語は、Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг, нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968, p.137 に記載されている。

㉔ {-н}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《その行為の結果生じた性質》を表す形容詞を形成する。

бүтэн すべての, 完全な (<бүтэ- 実現する, 成就する)

шингэн 液体の, (濃度, 密度が)薄い

(<шингэ- しみ込む, 消化する)

хатагн 極めて固く柔軟性のない (<хата- 乾く)

また、《その行為の結果生じた場所, 期間》を表す実詞(または副詞)を形成することもある。

эргэн 周囲, 回り (<эргэ- 回る)

орчин 周囲, 回り (<орчи- 回転する)

тойрон 周囲, 周囲に (<тойро- 囲む, 回る)

ただし、この三語は、эргэн тойрон, орчин тойрон 《周囲, 回り》のように、hendiadys 《二詞一意》¹⁾ として使われることが多い。

また、《期間》を表す例として、次のようなものがある²⁾。

хаваржин 春の間, 春じゅう

(<хаваржи- 春を過ごす <хавар 春)

зунжин 夏の間, 夏じゅう

(<зунжи- 夏を過ごす <зун 夏)

намаржин 秋の間, 秋じゅう

(<намаржи- 秋を過ごす <намар 秋)

өвөлжин 冬の間, 冬じゅう (<өвөлжи- 冬を過ごす <өвөл 冬)

なお、хаваржин をはじめ、四例に現われる -н を副動詞 (Converb) 語尾 (=連用語尾) として解釈することも可能であろうが、副動詞語尾は、起源的に形動詞 (Verbal noun) 語尾 (=連体語尾) にさかのぼる蓋然性があるため、このことを考慮すれば、先の四例は、出動名詞接尾辞 (V→N) として十分認めうるであろう。なお、この

出勤名詞接尾辞 Mo.-n は、アルタイ祖語 (Proto-Altaic) に共通する接尾辞であったと、N. Poppe は述べている³⁾。

- 1) hendiadys というギリシア語起源の言語学用語は、伝統的に、モンゴル語では хоршоо үг (lit.結合させる言葉)、トルコ語では ikileme (lit.二つにすること) として知られている。
- 2) これら四つの語に対する類推的創造 (analogical creation) によって、さらに次の語が形成されたと考えられる。
 - өдөржин 一日中 (< өдөр 日)
 - шөнөжин 一晚中 (< шөнө 夜)
- 3) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.262.

< 考察 1 >

ただし、以下の諸例に見える {-н} は、その直後に格語尾を接続できないことから、出勤名詞接尾辞 (V→N) ではなく、連用語尾 (= 副動詞語尾) として機能し、広義の不変化詞 (particle) (または、狭義の副詞や接続詞) を形成していると解することができよう。

- ихэвчлэн ほとんど、大部分 (< ихэвчлэ- 大部分やり終える)
- харилцан 互いに (< харилца- 関係をもつ)
- харин しかし、却って (< хари- 帰る)
- болон ~と、~で、及び (< бол- ~になる)

< 考察 2 >

先に引用したモンゴル語 Mo.bütүн (> Kh.бүтэн) は、通時的研究によって、チュルク語 bütün 《完全な》からの借用語であることが証明されている。

例えば、次のような音声的、形態的類似を伴う語が、モンゴル語、チュルク語内で見られる。

	モンゴル語 (Mo.)	チュルク語 (AT.)
(1)	ḡimis 果物	yämiš 果物
(2)	bilig 知恵, 才能	bilgi 知識
(3)	keseg 部分	käsik 切られた
(4)	ḡarim 一部(の)	yarım 半分の

これらの例は、一見したところモンゴル語 *j-*: チュルク語 *y-* をはじめ、その他の音法則が成立しており、同源であるように思える。しかし、両者間の語構成分析の点を考慮すれば、これらは、モンゴル語内部では、分節不可能であるのに対して、チュルク語内部では、さらに、

(1) *yāmiš* < *yä-* 《食べる》, (2) *bilgi* < *bil-* 《知る》

(3) *kāsik* < *käs-* 《切る》, (4) *yarım* < *yar-* 《裂く》

の如く、形態素として分節可能である¹⁾。また、これらの動詞語幹に対応する語は、モンゴル語では、それぞれ *ide-* 《食べる》, *mede-* 《知る》, *jüsü-* 《切る》, *ura-* 《裂く》であり、両者間に音法則が成立しないため、同源であることはありえない。したがって、これらは、チュルク語からモンゴル語へ借用されたと考えざるをえない。

このように、一般に、モンゴル語内のチュルク語からの借用の認定、または、その逆の場合、さらには、アルタイ諸語全体の相互借用という問題を考える場合、従来の音法則に加えて、今後さらに、語構成分析の点からの詳細な研究に、この大きな問題を解く鍵があるように思われる。

1) 上述した接尾辞 (1) *-miš*, (2) *-gi*, (3) *-ik*, (4) *-im* に関する若干の平行例を、共和国のトルコ語 (Turkish) から抽出してみると、次のようである。

- | | |
|------------------------------------|--|
| (1) <i>-miš</i> ⁴ (V→N) | <i>geçmiş</i> 過去 < <i>geç-</i> 過ぎる
<i>okumuş</i> 教養のある < <i>oku-</i> 読む |
| (2) <i>-gi</i> ⁴ (V→N) | <i>sevgi</i> 愛情 < <i>sev-</i> 愛する
<i>silgi</i> 消しゴム < <i>sil-</i> 消す |
| (3) <i>-ik</i> ⁴ (V→N) | <i>açık</i> 開いた < <i>aç-</i> 開く
<i>bozuk</i> こわれた < <i>boz-</i> こわれる |
| (4) <i>-im</i> ⁴ (V→N) | <i>yapım</i> 構造, つくり < <i>yap-</i> する, 作る
<i>ölüm</i> 死 < <i>öl-</i> 死ぬ |

③7 {-H(Г)}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《行為の結果》を示す実詞を形成する。

гаслан 悲しみ (< *гасал-* 悲しむ)

тариалан 農地, 耕作 (< *тариала-* 耕作する < *тариа* 穀物)

дугуйлан サークル, グループ

(< дугуйла- 円をつくる < дугуй 円, 円い)

хүрээлэн 研究所 (< хүрээлэ- 取り囲む < хүрээ 囲い, 柵)

шүдлэн (馬・牛が)三歳の, (羊・山羊が)二歳の

(< шүдлэ- 歯がはえる < шүд 歯)

соёолон (馬・牛が)五歳の, (羊・山羊が)四歳の

(< соёоло- 歯がはえる < соёо 牙, 犬歯)

また、一部《行為の結果生じた状態》を示す形容詞を形成する。

догolon びつこの (< догол- びつこを引く)

дүүрэн 一杯の, 満ちた (< дүүр- 一杯になる, 満ちる)

③ {-нга}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《動作の結果生じた状態やもの》を示し、《～した状態の(もの)》という意味をもつ形容詞または実詞を形成する。

аянга 雷 (lit.恐れるもの, 恐ろしいもの)

(< аюу- ~ ай- 恐れる, こわがる)

(Mo. ayu-ngya (< *ayu-ngyu) < ayu-)

байнга (Mo. bayi-ngyu) 常(の) (< бай- ある, いる)

ороонго (Mo. oriya-ngyu) (植)つる, つた (< ороо- 巻きつける)

хайнга 不注意な, いいかげんな (lit.捨てっぱちな)

(< хая- 捨てる)

(Mo. qayi-ngyu (< *qayi-) < qaya-)

なお、この接尾辞 {-нга} は、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性は大きい。

Proto-Mo. *-n + *-γu > Mo.-ngyu (∞ -ngya) > Kh. {-нга}

(V→N) (N→N)

<考察>

共時的には、この接尾辞 {-нга} を、④, (2) {-нги} (V→N) の形態的に条件付けられた異形態として捉えることも可能であろう。

{-нги} = /-нги ∞ -нга/

(1) {-нхай}

この接尾辞は、次のように母音調和による三つの交替形をもつ。

-нхай, -нхой	/ /BV/ _
-нхий	/ /FV/ _

туранхай やせた (< тура- やせる)

уранхай 破れた, ぼろぼろの (< ура- 破る, 裂く)

уйланхай 泣き虫の, 涙もろい (< уйла- 泣く)

татанхай (手足が)ひきつった (< тата- 引く)

халанхай やけどの傷跡 (< хала- やけどする; 熱くなる)

түлэнхий 焼けた (< түлэ- 燃やす)

эцэнхий やせ衰えた (< эцэ- やせ衰える)

その他, 類推による機能的拡張によって, まれに名詞語幹に接続される例も見られる。

бөөрөнхий 丸い, 球形の (< бөөр 腎臓)

ерөнхий 一般的な (< ер 一般, 通常)

(2) {-нги}

この接尾辞も, (1) の {-нхай}と同様, 次の三つの交替形をもつ。

-нги	/ /BV/ _
-нгэ, -нгө	/ /FV/ _

саланги 分かれた, 別々の (< сал- 別れる)

согтонги 酔った (< согто- 酔う)

зогсонги 停滞した (< зогсо- 止まる)

наалданги 粘着性のある, ねばねばする (< наалда- くつつく)

хатанги 干上がった, やせ衰えた (< хата- 乾く)

ядаңги 貧乏な, 弱い (< яда- 力がない)

сөөнгө 声のかすれた (< сөө- 声がかすれる)

эцэнгэ やせ衰えた (< эцэ- やせ衰える)

дүйрэнгэ (~ дүйнгэ) 白痴の, 馬鹿な

(< дүйрэ- 頭がボーツとなる)

бэртэнгэ けが(をした) (< бэртэ- けがをする)

идэнгэ 食べられる(もの) (< идэ- 食べる)

ширэнгэ (Mo.siri-nggi) 密林

(<ширэ- (Mo.siri-) 縫い合わす, 刺し縫いする)

(cf.ширэг (Mo.sirigi) (зүлэг ~) 芝生, ширэлдэ- (Mo.sirildü-) (毛が)からまる, も ширэнгэ と同源であろう)

また, 若干の語においては, 接尾辞 {-нги} の代わりに, さらに接尾辞 {-нгир} を接続する場合も見られる。

{-нги} → {-нгир} / 動詞語幹 + __

наалдангир (← наалданги) 粘着性の (<наалда- くつつく)

хатангир (← хатанги) 干上がった, やせ衰えた

(<хата- 乾く)

ядангир (← яданги) 貧乏な, 弱い (<яда- 力がない)

эцэнгэр (← эцэнгэ) やせ衰えた (<эцэ- やせ衰える)

なお, この接尾辞は, 次のように明らかに複合接尾辞である。

Mo.-nggi + -г → -nggir > Kh.{-нгир}

(V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

この接尾辞 {-нги} (Mo.-nggi) は, アルタイ系満洲・ツングース諸語に属する満洲文語に見られる, 《～した状態の》の意を表す出動名詞接尾辞 Ma.-nggi, -ngga, -ngge (-nggi ∞ -ngga²) と比較することができよう。

Ma.etenggi 強い (<ete- 勝つ)

saišangga 賞賛の (<saiša- 賞賛する)

falingga 結んだ (<fali- 結ぶ)

④ { -p }

この接尾辞は, 動詞語幹に接続し, 主として 1. 《動作の結果》, 2. 《動作の行われる場所》, 3. 《動作に使われる道具》等の意味をもつ名詞 (形容詞または実詞) を形成する。また, 若干の形状動詞語根に接続し, 4. 《動作の形状》¹⁾ を表示する場合もある。

1. амар 平和な, 平穏な (<*ама-²⁾ 休む, 安らぐ)

дэлгэр 広い, 広大な (<дэлгэ- 広げる)

почир 突然の (<почи- びっくりする)

хавдар 腫れ物 (<хавд- 腫れる)

уйтгар 悲しみ, 憂うつ (<уйтга- <уйд- 飽きる)

2. бэлчээр 牧草地 (< бэлчээ- 草を食ませる < бэлчи- 草を食む)
уулзар 接合点, 交差点 (< уулза- 会う)
3. шавар 泥, 粘土 (< шава-(べたべたしたものを)塗る)
шүүр ふるい, フィルター; ほうき (< шүү- ろ過する, 濾す)
дэвсгэр 敷物 (< *дэвсгэ- (→ дэвсүүл-) 敷かせる < дэвс- 敷く)
4. хонхор へこんだ; へこみ, くぼみ (< хонхой- へこむ)
бөгтөр 腰の曲がった, 猫背の (< бөгтий-(腰が)曲がる)
また, この接尾辞 {-p} は, 動詞語幹が p をもつ場合, 異化により -л- に変化する。

{-p} → -л / {-p}_ (動詞語幹)

ерөөл³⁾ (Mo.irügel ~ irüger) 祈り, 祝福; 祝詞
(< ерөө- (Mo.irüge-) 祈る, 祝福する)

- 1) ただし, 形状動詞語根に接続し, 《～した状態の》の意を表示する構詞法は, 主に接尾辞 {-rap} (∞ -рай) (⑬ {-rap} (V→N)) で極めて生産的に用いられ, 当該接尾辞 {-p} が用いられるのは数的に少ない。
- 2) *ама- (Mo.amu-) は, 現代ハルハ方言では廃語となり, 現在では用いられない。
- 3) すなわち, 通時的には次のように変化した。
Mo.irüge- > irüger > irügel > Kh.ерөөл
(V→N)

④ {ран(г)} = /-ран(г) ∞ -раг/

この接尾辞は, 生理現象を示す若干の動詞語幹に接続し, 《動作の習性, 傾向 (よく～する)》を表す形容詞を形成する。

бааран 糞たれの (< баа- 大便をする)

шээрэн 小便たれの (< шээ- 小便をする)

унгараг ~ унгаран よく屁をする (< унга- 屁をする)

なお, この接尾辞 {-ран(г)} は, 共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが, 通時的には, 出動動詞接尾辞 (自動詞形成) *-ra- と出動名詞接尾辞 (行為の結果表示) *-γ ~ *-ng¹⁾ からなる複合接尾辞であり, しかも《ある動作を自然とそのうちに何度も行うようになった》が原義であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-ra- + *-γ/*-ng > Mo.-ray ~ -rang
 (V→V) (V→N) (V→N)
 > Kh.{-pan(r)} (∞ -par)

1) 語末にしばしば見られる /g/ ~ /ŋ/ (Mo.-γ / -g ~ -ng) の交替例に次のものがある。

Mo.dabusay ~ dabusang 膀胱

/ ハルハ方言 давсаг, 内モンゴル方言 dabsāŋ

Mo.toyiy 膝頭

/ ハルハ方言 тойг, カルムイク語 tōŋ (төң)

Mo.debseg 台地, 高原

/ ハルハ方言 дэвсэг, カルムイク語 dewseŋ (девсн)

④③ {-pь} = /-pь ∞ -p/

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、1. 《動作の行われる場所》、2. 《動作の結果》を表す実詞を形成する。なお、この接尾辞 {-pь} と {-p} は、共時的には形態的に条件づけられた異形態であり、ともに Mo.-ri に遡るものである。

1. буурь ゲルを建てる場所 (<буу- 宿営する)
 суурь 基礎, 土台 (<суу- 座る)
 байр¹⁾ 場所, 住居 (<бай- 存在する)
 хэвтэр²⁾ 寝床, (動物の)寝ぐら (<хэвтэ- 横になる)
2. хуваарь 分配, 区分 (<хуваа- 分ける)
 нэмэр³⁾ 付加, 貢献 (<нэмэ- 加える)

1) Mo.bayiri; ブリヤート語では, байра 《場所》である。

2) Mo.kebteri; ブリヤート語では, хэбтэри 《寝床》である。

3) Mo.nemeri; ブリヤート語では, нэмэри 《付加》である。

④④ {-с}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《動作の結果生じたもの》という意味をもつ実詞を形成する。(行為の結果名詞)

- нулимс 涙 (<нулима- つばを吐く)
 хөөс 泡 (<хөө- ふくらむ)
 баас 大便, 糞 (<баа- 大便をする)
 шээс 小便, 尿 (<шээ- 小便をする)
 шүүс (しぼり)汁 (<шүү- ろ過する, 濾す)

なお、この接尾辞 {-c} は、通時的立場から、出動名詞接尾辞 {-aac}, {-дас} の構成要素である {-c} と同一形態素である蓋然性が極めて大きい。(vide ⑤ {-aac} (V→N), ⑩ {-дас} (V→N))

④⑤ {-c}

この接尾辞は、若干の動詞語幹にのみ接続し、その行為にかかわる抽象名詞を形成する。(抽象名詞形成)

алдас (古語) 過ち, 過失 (<алда- 誤る)

зохис 適当, 適切 (<зохи- 適する)

なお、④⑨の出動名詞接尾辞 {-c} は、Mo.-su(n) に遡るのに対し、当該接尾辞 {-c} は、Mo.-s に遡り、形式のみならず表示する意味も異なるため、両者は全く別の形態素と言える。

④⑥ {-уу} = /-уу ∞ -уун/

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《動作の結果生じた状態》¹⁾を表す形容詞を形成する。

なお、これは、現代モンゴル語の動詞語幹から形容詞を派生する接尾辞としては、最も基本的かつ生産的な接尾辞である。

яаруу せっかちな, あわてた (<яара- 急ぐ)

сандруу あわてた, 当惑した (<сандар- あわてる, 当惑する)

тэвдүү あわてた, 困惑した (<тэвдэ- あわてる, 困惑する)

ядуу 貧しい (<яда- 力がない)

зүдүү 貧困な (<зүдэ- 貧乏になる)

согтуу 酔った (<согто- 酔う)

халамцуу かなり酔った (<халамца- かなり酔う)

дутуу 不足の (<дута- 足りない)

эргүү ばかな, 愚かな (<эргэ- 回る)

гажуу 曲がった, ゆがんだ (<гажи- 曲がる, ゆがむ)

хагуу 堅い (<хага- 乾く)

даруу 慎しみ深い, おとなしい (<дара- 押える)

тавиу (場所が)広い, (心が)寛大な (<тави- 放つ)

давуу 優れた, より良い (<дава- 越える)

нэмүү 付加の, 余分な (<нэмэ- 加える)

тэнцүү 等しい (<тэнцэ- つり合う)

хөлдүү 凍った (<хөлдө- 凍る)

тойруу 回り道の (<тойро- ぐるりと回る)

бөглүү 人里離れた, 辺ぴな (<бөглө- ふさぐ) etc.

また、ごくわずかだが、実詞を形成する例も見られる。

хариу 返事 (< хари- 帰る)
халуу 熱気, 暖かさ (< хала- 熱くなる)
сэрүү 冷氣, 涼しさ (< сэрэ- 目覚める)

この接尾辞 {-уу} は、一般に形態的に条件づけられた異形態 -уун をもつ。すなわち、次の関係が成り立つ。

{-уу} = /-уу ∞ -уун/

халуун 熱い, 暑い (< хала- 熱くなる)
сэрүүн 目覚めた, 日のさえた; 涼しい (< сэрэ- 目覚める)
өрнүүн 発展的な (< өрнө- 発展する)
торниун よく成長した, 体の大きい

(< торни- 成長する, 大きくなる)

тогтуун 落ち着いた, 静かな (< тогто- 定まる, 決まる)
хөгжүүн 楽しい, 愉快的 (< хөгжи- 楽しむ) etc.

なお、この接尾辞 {-уун} は、元来は複合接尾辞であり²⁾、通時的には次のような形成過程を経て成立している。

Proto-Mo.*-γū + *-n → Mo.-γун > Kh.{-уун}
(V→N) (N→N) (V→N)

-
- 1) ШУАХ, *Орчин цагийн монгол хэл зүй*, УБ, 1966, p.114 で、この接尾辞に関して、「接尾辞 -уу / -үү を接続し形成された形容詞の大部分は、弱くて劣った (дорой муу) 状態を示す」と記述されているが、一概にそのように規定するにはかなり問題があるように思われる。
- 2) その他、出名名詞接尾辞 (N→N)

I) {-pxуу} (∼ {-pxар}); 《∼を誇示した》という意味。

II) {-суу} (∼ {-сар}); 《∼を欲した》という意味。

の二つの接尾辞も、当該出動名詞接尾辞 {-уу} を構成要素としてもつ複合接尾辞である。

(vide ②7 {-pxар}(N→N), ②9 {-сар}(N→N))

<考察>

— 現代ハルハ方言の илүү に関して —

現代ハルハ方言の илүү 《余分な, ~以上》は, モンゴル文語の ilegü(ü) に対応するが, これは, これ以上はさらに形態素として分節不可能であるのに対し, もう一つの文語形 ülegü(ü) は, さらに üle- 《残る》 + -gü(ü) (これは, ㊦ の接尾辞 {-yy} (V→N) の文語形 -yu / -gü に相当する) の如く分節できることから, 少なくとも, 文語のレベルでは, 次のように分析できる.

<文語のレベル>

<基本形>	<派生形>	<変種>
Mo.üle-	残る > üle-gü(ü)	余分な ~ ilegü(ü)
		(V→N)

さらに, 口語のレベルで, これに対応する中世モンゴル語及び, 現代モンゴル語諸方言の語形を抽出すれば, 次のようになる.

<口語のレベル>

モンゴル祖語	中世モンゴル語	現代モンゴル語
*pülegüü	> hüle'ü(SH.)	> huluu (Dag.)
	hüle'ü(Mu.)	ülüü (Kalm., Bur., Ord.)
→	ilüü (Kh, Ord.)

(SH. … 『元朝秘史』, Mu. … 『ムカディマツト・アル・アダブ』)

したがって, 以上の結果, 特に語構成分析のおかげで, モンゴル文語の ilegü(ü) (> Kh. илүү) は, ülegü(ü) の単なる地域的変種にすぎず, 少なくともモンゴル語史上, かなり新しい時代になってモンゴル文語の正書法に取り入れられたものであろうと推定できる.

<参考文献>

- Igor de Rachewiltz, *Index to the Secret History of the Mongols*, Indiana University, 1972.
- Н. Н. Поппе, *Монгольский словарь Мукаддимат ал-Адаб*, England, 1971 (rpt.), p.190.
- 『達漢小詞典』, 内蒙古人民出版社, 1983, p.94.
- G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.), p.457.
- К. М. Черемисов, *Бурят-Монгольско-Русский словарь*, Москва, 1951, p.505.
- Bürintegüs, *Mongyul kelen-ü jöb dayudaly-a jöb bičilge-yin toli*, 内蒙古教育出版社, 1977, p.53, p.107.

④7 {-уул}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として《ある動作を継続的に(～持続的に)行う人》¹⁾ という意味をもつ実詞を形成する。(行為者名詞形成)

тагнуул スパイ (< тагна- 探る)

туршуул スパイ (< турши- 試す)

харуул 見張り (< хара- 見る)

эргүүл パトロール, 見回り (< эргэ- 回る)

дагуул 従者, 連れ(子) (< дага- 従う)

засуул (相撲の)介添人 (< заса- 直す, 正す)

явуул 通行, 通りがかり (< ява- 行く)

тоншуул きつつき (< тонши- つつく)

この接尾辞 {-уул} の直後に、さらに出名名詞接尾辞 {-ч} (行為者名詞形成) を接続した例もわずかに見られる。

хайгуулч (地質)探査員 (< хай- 探す)

тэнүүлч 放浪者, 浮浪者 (< тэнэ- ぶらつく, 放浪する)

(e.g. тэнүүлч хүүхэд ストリート・チルドレン)

なお、この接尾辞 {-уул} は、共時的にはこれ以上はさらに分節できないが、通時的には次のような形成過程を経て成立しており、モンゴル祖語において複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-γū + *-l → Mo.-γul > Kh.{-уул}

(V→N) (N→N) (V→N)

また、ここで見られる Proto-Mo.*-γū (Mo.-γu) (> Kh.{-yy}) という接尾辞は、元来は《動作の継続性, 持続性 (lit.常に～するところの)》の意を示す出動名詞接尾辞であったものと推定される。

(vide ④8, ④9 {-уур} (V→N), ⑤0 {-уурь} (V→N))

<考察>

— эрүүл 《健康(な), 正常(な)》の語構成について—

эрүүл 《健康(な), 正常(な)》は、動詞語幹 эрэ- 《捜す; 尋ねる》(e.g. амрыг эрэх 《あいさつする》(lit.平穩無事を尋ねる)) に、当該接尾辞 -үүл を直接接続して形成された可能性があり、仮にそうだとすれば、元来は《常に(人が)尋ねること(→ 健康(な))》が原義であったものと推定される。

Mo.(+) eri- ~ (Δ) ere- (эрэ-) 《捜す(→ 尋ねる)》

> eregül (эрүүл) 《健康(な)(→ 正常(な))》

1) ただし、N. Poppe は、この接尾辞の意味を、names of occupations と、また、Ш. Лувсанвандан も同様に、эрхэлсэн ажлын нэр (従事した職業名) と定義づけている。

N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954, p.46.

Ш. Лувсанвандан, *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968, p.136.

④8 {-уур} = /-уур (~ -уул) ∞ -уурга/

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《その行為を行う道具》を表す実詞を形成する。(道具名称形成)

なお、これは現代モンゴル語では、かなり生産的に用いられる接尾辞である。

- алчуур¹⁾ 拭く物 (<арчи- 拭く)
- хадуур 鎌 (<хада- (草を)刈る)
- баллуур 消しゴム (<балла- 消す)
- гулсуур 滑り台 (<гулс- 滑る)
- гөвүүр ハタキ, モップ (<гөвө- (ほこりを)はたく)
- тоолуур (電気)メーター (<тооло- 数える)
- чагнуур 聴診器 (<чагна- こっそり聞く)
- хасуур のみ (<хаса- 減ずる)
- харилцуур 受話器 (<харилца- 関係をもつ)
- хануур 放血針 (<хана- 放血させる)
- хусуур 馬の汗取りへら (<хуса- 削る)
- гагнуур はんだ (<гагна- はんだ付けをする)
- малтуур 掘削機 (<малга- 掘る)
- залуур (船の)舵 (<зала- 直す, まっすぐにする)
- дэвүүр うちわ, 扇子 (<дэвэ- (扇で)あおぐ)
- өлгүүр 洋服かけ, ハンガー (<өлгө- 掛ける)
- түлхүүр 鍵 (<түлхэ- 押す, 錠をあける)
- сэлүүр 櫂, オール (<сэлэ- こぐ, 泳ぐ)
- жигнүүр 蒸し器 (<жигнэ- 蒸す)
- гишгүүр 踏み台 (<гишгэ- 踏む)
- бүлүүр (馬乳酒の)攪拌棒 (<бүлэ- 攪拌する)
- нүдүүр 杵 (<нүдэ- 砕く, 粉々にする)
- хэмжүүр 計測器 (<хэмжи- 測る)

なお、この接尾辞 {-yyp} は、共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが、通時的には、《継続性、持続性 (lit. 常に～するところの)》の意を表す出動名詞接尾辞 -γū と出名名詞接尾辞 *r からなる複合接尾辞であり、しかも《常に～するところの物 (→道具表示)》が原義であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-γū + *r > Mo.-γur > Kh. {-yyp}
 (V→N) (N→N) (V→N)

1) алчуур は、《拭く物全般》を指し、次のように広い意味で用いられる。

нусны алчуур ハンカチ, нүүр гарын алчуур タオル, ванны алчуур バスタオル, тоосны алчуур 雑巾, амны алчуур ナプキン, самбарын алчуур 黒板消し, хүзүүний алчуур スカーフ etc.

また、この接尾辞 {-yyp} は、音韻的に条件づけられた異形態 -уул をもつ。すなわち、一般に動詞語幹が p をもつ場合、接尾辞 {-yyp} は、異化によって -уул に変化する。

{-yyp} → -уул / {-p-} _ (動詞語幹)

A) бариул 取っ手 (< бари- 握る)
 харуул かんな (< хара- 削り取る)
 соруул (キセルの) 吸い口 (< соро- 吸う)
 тэмтрүүл (動物の) 触角 (< тэмтрэ- 手探りする)
 ただし、次のような場合、異化を起こしていない。

B) гармуур 熊手 (< гарма- かき集める)
 хөргүүр 冷却器, ラジエーター (< хөргө- 冷やす, 冷ます)
 すなわち、A) の場合、次のように規則的に異化を起こしている。
 #CV(C)pV- + Vp# → #CV(C)pV'л#
 (CV(C)-pVл)

これに対し、B) の場合、次のように必ずしも異化が起こるとは限らないようである。(vide ⑤ {-yypь}(V→N))

#CVpCV- + Vp#
 → I) #CVpCV'p# ~ II) #CVpCV'л#
 (CVp-CVp) (CVp-CVл)

I) の例 : тар-муур 熊手, хөр-гүүр 冷却器

II) の例 : сур-гууль 学校, тор-гууль 罰金

(ただし, ハイフン(-) は音節の切れ目を表す.)

つまり, A) の場合, 単語内の一音節中に p が連続するため, 異化を起こしやすい環境にあるのに対して, B) の場合, 単語内の各音節に p は存在するが, 一音節には共起しないため, A) に比べると異化を起こしにくい環境にあるように思われる。

<考察>

— алчуур 《拭く物》の語構成について—

現代モンゴル語 (Modern Mongolian) では, 語幹に派生接尾辞を接続する場合, 形態音素的变化は, 一般に接尾辞に及ぶという特徴があり, алчуур の例のように, 語幹内部に及ぶのはむしろまれである。

Mo. arči- (арчи-) > arči-γur > Kh. алчуур
(V→N) (←)

すなわち, 通時的にハルハ方言では, 逆行異化を起こし, 接尾辞 -уур はそのままだが, 動詞語幹 *алчи- は, 元来の形式 арчи- をすでに失っている。

ちなみに, カルムイク語, ブリヤート語では次のようである。

カルムイク語 альчур (~ 一部 арчур) 《ハンカチ, 雑巾》

(←) (→) (<арч- 拭く)

ブリヤート語 аршууд (~ 西方言 аршуур) 《手拭い, タオル》

(→) (<арша- 拭く)

この接尾辞 {-уур} は, さらに形態的に条件づけられた異形態 -уурга をもち, 次のような母音調和による二つの交替形を示す。

{-уур} = /-уур (~ -уул) ∞ -уурга /

-уурга / /BV/_

-үүрэг / /FV/_

дамнуурга (~ дамнуур) 天秤棒 ; (医) 担架

(<дамна- 棒でかつぐ)

дамжуурга 段ばしご (<дамжи- (物)を伝う)

тагуурга 引き出し(の引き手) (<тата- 引く)

шахуурга ポンプ (<шаха- 圧搾する)
 хавчуурга (本の)しおり (<хавчи- はさむ)
 хөшгүүрэг てこ, ジャッキ (<хөши- てこで上げる)
 なお, この接尾辞は, 次のように明らかに複合接尾辞である。
 Мо.-γur + -γa → -γурγa > Kh.{-уурга}
 (V→N) (N→N) (V→N)

④9 {-уур}

この接尾辞は, 若干の動詞語幹に接続し, 《ある動作を継続的に
 行う状態の》とか《ある動作を行う習慣のある》といった意味を
 もつ形容詞を形成する。(人間の習慣的性格表示)

хянуур 慎重な, 用心深い (<хяна- 監視する)

долигонуур こびる, おべっか使いの

(<долигоно- こびる, へつらう)

ангалзуур 口が開いたままの, おしゃべりな

(<ангалза- 口をパクパクする)

(e.g.ангалзуур хүүхэн おしゃべりな女性)

гялалзуур 素早い, 機敏な (<гялалза- キラキラ輝く)

өнгөлзүүр 何度ものぞき込む性格の

(<өнгөлзө- 何度ものぞき込む)

なお, この接尾辞 {-уур} は, 共時的にはこれ以上はさらに形態
 素として分節できないが, 通時的には, 《継続性, 持続性 (lit.常に
 ~するところの)》の意を表す出動名詞接尾辞 *-γū と出名名詞接
 尾辞 *-r からなる複合接尾辞であり, しかも《常に~するところ
 の性格(の者) (→人間の習慣的性格表示)》が原義であった蓋然性が
 大きい。

Proto-Мо.*-γū + *-r > Мо.-γur > Kh.{-уур}

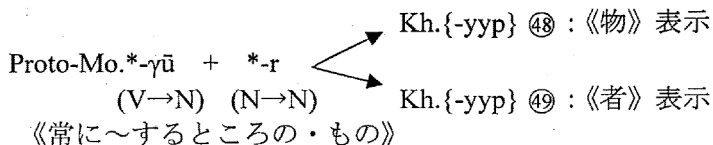
(V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

道具名称形成接尾辞 {-уур} と, 当該, 人間の習慣的性格表示接
 尾辞 {-уур} とは, 全く同一形式であるが, 表示する意味が異なる
 ため, 共時的立場からは, 両者は二つの異なる形態素であると見
 なすのが妥当であろう。

しかしながら, 通時的立場からすれば, 前者が専ら《物》に対
 して, また後者が専ら《者(すなわち人)》に対して用いられ,
 実質的には《常に~するところの・もの》という共通概念の下,

同類の意を表示していることから、両者は、起源的には同一形態素に遡ると判断すべきであろう。



⑤⑩ {-уурь} = /-уурь (~ -ууль) ∞ -уур /

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、《常に～するところのもの》という共通の意味を有し、a)感情、b)抽象概念、c)場所等を表す実詞を形成する。

また、この接尾辞 {-уурь} は、形態的に条件づけられた異形態 -уур¹⁾ をもち、一般に次のような関係が成り立つ。

{-уурь} = /-уурь ∞ -уур /

- a) зовуурь 苦しみ, 苦痛 (<зово- 苦しむ)
- жигшүүр 嫌悪 (<жигши- 嫌う)
- ичгүүр²⁾ (~ ичүүр) 恥 (<ичи- 恥じる)
- b) тогтуур 安定 (<тогто- 定まる)
- зүдгүүр (~ зүдүүр) 疲労, 困苦 (<зүдэ- 疲れる)
- тэнцүүр つり合い, バランス (<тэнцэ- つり合う)
- түгшүүр 警報 (<түгши- (心臓が)鼓動する)
- c) агнуурь 狩猟場 (<агна- 狩りをする)

さらに、この接尾辞 {-уурь} は、音韻的に条件づけられた異形態 -ууль をもつ。すなわち、一般に動詞語幹が p をもつ場合、接尾辞 {-уурь} は、異化によって -ууль に変化する。

{-уурь} → -ууль / {-p}_
(動詞語幹)

- сургууль 学校 (<сурга- 教える)
- торгууль 罰金 (<торго- 罰金を科する)

ちなみに、意味の点で、前者が c) 場所を、後者が b) 抽象概念を表す。

また、次のように一見した所、不規則的な変化を示す例もある。

сонгууль 選挙 (< сонго- 選ぶ)

この語に関しては、時代的にそれほど古い派生語とは考えにくい(例えば、20世紀前半、モンゴル人民革命以後に生じた新語か?)ことから、元来は *сонгуурь と規則的に現れるべきだったが、сургууль 学校 (< сурга- 教える)等の類推(analogy)によって、動詞語幹 сонго- に直接 -ууль を接続して生じたものと推定される。

なお、この接尾辞 {-уурь} は、共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが、通時的には、《継続性、持続性 (lit. 常に～するところの)》の意を表す出動名詞接尾辞 *-γū と出名名詞接尾辞 *-ri からなる複合接尾辞であり、しかも《常に～するところのもの》が原義であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-γū + *-ri > Mo.-γuri > Kh. {-уурь}
(V→N) (N→N) (V→N)

<考察>

通時的立場からすれば、当該接尾辞 {-уурь} と⑨の出動名詞接尾辞 {-вар} は、起源的に同一接尾辞に遡るか、あるいはモンゴル祖語において、母音の長短の対立をなす接尾辞であった蓋然性がある。

まず形式の点からみると、出動名詞接尾辞 {-вар}, {-уурь} に対応するモンゴル文語形は、それぞれ -buri, -γuri であり、これはモンゴル文語及び現代モンゴル語諸方言にしばしば見られる / b / ~ / g / (Mo. b ~ γ / g) の子音交替³⁾を連想させるものであり、実際の所、若干の語において -buri ~ -γuri の交替⁴⁾も見られる。

また、意味の点からも、両者は共に動詞語幹に接続し、主として《抽象概念》を表示する実詞を形成するという類似性を示すことから、両者は起源的に同一接尾辞に遡りうる可能性が十分ある。

さらに、この二つの接尾辞に対し、モンゴル文語及び現代モンゴル語ハルハ方言の形態素の諸形式より、モンゴル祖語形を再構すれば、次のようになる。

Proto-Mo.	Mo.	Kh.
*-buri	-buri	{-вар}
*-buuri > *-guuri	-γuri	{-уурь}

この結果、接尾辞 {-вар}, {-уурь} は、モンゴル祖語において、*-buri, *-buuri という母音の長短の対立をなす接尾辞であった蓋然性がある。

- 1) 当該接尾辞 {-уурь} の異形態 -уур は、④⑧ の接尾辞 {-уур} とは全く異なる形態素であり、次のような関係にあることに注意されたい。

形式	意味
④⑧ {-уур} = /-уур (~ -уул) ∞ -уурга / (Mo.-γur)	《道具名称》 形成
⑤⑩ {-уурь} = /-уурь (~ -ууль) ∞ -уур / (Mo.-γuri)	《抽象名詞》 形成

- 2) これに対応するモンゴル文語形は、Mo.ičigüri (<iči-) であり、現代モンゴル語諸方言では、次のように現れる。

ブリヤート語 эшэгүүри (~ эшүүри)
 ハルハ方言 ичгүүр (~ ичүүр)
 オルドス方言 itsüüri
 カルムイク語 itsür ~ itswɿ

- 3) 代表的な /b/ ~ /g/ の子音交替に次のものがある。

- a) モンゴル文語に見られる例

Mo.debel ~ degel (дээл) モンゴル服
 Mo.öbere ~ ögere (өөр) 異なる, 別の
 (なお, 下線を施した語は, 現在内モンゴルで使用されるモンゴル文語の標準的な正書法を示す。)
 Mo.silege-bür ~ silege-gür 火かき棒
 (шилээвэр ~ шилээгүүр)

Mo.jiber (живэр) (魚の)ひれ : jigür (жигүүр) (鳥の)翼
 ・造格語尾 Mo.-bar² (分離形) ~ -γar² (連結形) の交替
 Mo.γaγča-bar ~ γaγčaγar (ганцаар) 一人で, 単独で
 Mo.bügüde-ber ~ бүгүде-ger (бүгдээр) みんなで

- b) 現代モンゴル語諸方言間に見られる例

Mo.debel (дээл) モンゴル服
 / カルムイク語 девл, ブリヤート語 дэгэл

- 4) 出勤名詞接尾辞 -buri ~ -γuri の交替例に次のようなものがある。

Mo.toyta-buri ~ toyta-γuri 安定 (<toyta- 定まる)
 (Kh.тогтвор ~ тогтуур)
 Mo.tengče-büri ~ tengče-güri つり合い (<tengče- つり合う)
 (Kh.тэнцвэр ~ тэнцүүр)
 Mo.iči-güri ~ *iči-büri 恥 (<iči- 恥じる)
 (カルムイク語 itsür ~ itswɿ)

⑤1 {-хай}

この接尾辞は、動詞語幹に接続して、《動作の結果の状態》を表し、《～した状態の(に)ある》という意味をもつ形容詞を形成する。

なお、この接尾辞は、その接続する動詞語幹に、次のような音韻的制限があり、また、次のように母音調和による三つの交替形をもっている。

{-хай}	/	{_pa#}_
--------	---	---------

-хай, -хой	/	/BV/_
-хий	/	/FV/_

筆者は、動詞語幹 {_pa#} を、語構造の観点から、次の三つに分類する。

なお、この形態素 {-pa-} は、自動詞語幹 (intransitive stem) を形成する接尾辞である。

- (1) {_pa#} が、非生産的可変語根 (unproductive variable root)¹⁾ + {-pa-} の場合 (vide ③ {-pa-} (P→V))

хагархай 割れた (< хагара- 割れる ← хага)

хугархай 折れた (< хугара- 折れる ← хуга)

тасархай 切れた (< тасра- 切れる ← тас)

задархай 開いた, ほどけた (< задра- 開く, ほどける ← зад)

цоорхой 穴のあいた (< цооро- 穴があく ← цоо)

эмтэрхий ふちのかけた (< эмтрэ- ものの端がかかる ← эмт)

хэмхэрхий 粉々になった (< хэмхрэ- 粉々になる ← хэмх)

бугархай 散り散りになった

(< бутра- 散り散りになる ← бут)

нэвтэрхий 一貫した, 完全な

(< нэвтрэ- 貫く, しみ通る ← нэвт) etc.

- (2) {_pa#} が、名詞語幹 + {-pa-} の場合 (vide ⑥ {-pa-} (N→V))

илэрхий 明らかな

(< илрэ- 明らかになる < ил 明らかな)

тодорхой 明らかな, 具体的な

(< тодро- 明らかになる < тод はっきりした)

хэтэрхий 過度の, 極端な

(< хэтрэ- 度を越す < хэт 過度な, 極端な) etc.

(3) {__pa#} が、動詞語幹(他動詞) + {-pa-} の場合

(vide ⑬ {-pa-} (V→V))

эвдэрхий こわれた (<эвдрэ- こわれる <эвдэ- こわす)

その他、動詞語幹末が pa# ~ p# の場合にも、わずかながら見られる。

тархай 散らばった, ばらばらの (<тара- 散る)

шуурхай (Mo.siyurqai) すばやい, 敏速な (lit.吹き荒れた状態の)
(<шуур- (Mo.siyur-) 吹き荒れる)

また、例外的に次のような例も見られる。

бүсэлхий (Mo.büselekei) 腰, ウエスト (lit.帯をしめるところ)
(<бүслэ- (Mo.büsele-) 帯をしめる)

<参考>

その他, ангархай 《あいた》, онгорхой 《あいた, 開いた》という例も見られるが, これはいわゆる類推的創造 (analogical creation) によって造り出されたものであり, 異分析 (metanalysis) の結果生じた形式 {-рхай} が, 直接語幹となる анга 《割れ目, 穴, ひび》, онго (цонго) 《穴だらけの》に接続されたのであろう。もし仮に, これに対応する動詞語幹 ангай- 《(口を)あける》, онгой- 《あく, ひらく》から派生したとしても, この動詞語幹は, どちらも {__Vй#} であるため, 接尾辞 {-rap} (∞ -рай) を用いたはずであり, ангархай, онгорхой のような語形成は, 決して考えられないからである。(vide ⑬ {-rap} (V→N)). なお, この両者の間に, 語根形態素における母音交替 (vowel alternation in root morpheme) が見られるのは興味深い。

ただし, 類推的創造によって形成された {-рхай} が, 直接動詞語幹に接続したと思われる例も, 若干見られる。

ухархай ^{ганга}眼窩 (<уха- 掘る)

-
- 1) この術語は, これまで歴史的に, сул үг 《小詞》 → дайвар үг 《副詞》 → нөхцөлгүй үгс 《無語尾語》等と呼ばれてきたものである。また, 一部, 学者によっては, preverb 《動詞前接辞》, үйл үг үүсгэдэг язгуур 《動詞形成語根》と呼ぶこともある。(Ш. Лувсанвандан, *Монгол хэл шинжлэлийн асуудлууд*, УБ, 1981, pp.225-275)

⑤2 {-хуй}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として抽象的な意味をもつ実詞を形成する。(抽象概念表示)

- сэтгэхүй 思考 (<сэтгэ- 考える)
- мэдрэхүй 感覚 (<мэдрэ- 感じる)
- сэрэхүй 知覚 (<сэрэ- 目覚める)
- хүртэхүй 触覚 (<хүртэ- 触れる)
- ахуй 存在, 生活 (<a- 存在する)

また、形容詞を形成する例もわずかに見られる。

- үнэмлэхүй 絶対的な (<үнэмлэ- 証明する)

なお、この接尾辞は、元来、未来形動詞 (Nomen futuri)を表す連体語尾 Mo.-qui であったが (Mo.-qui > Kh. {-хуй}), 現代ハルハ方言では、その機能がほとんど衰え、化石的形態として上に掲げた若干の語にその痕跡が認められるに過ぎない¹⁾。

- 1) ただし、文語調で書かれた現代文の中には、この接尾辞 {-хуй} が、未来形動詞の元来の機能として観察されることがある。例えば、一つ例を挙げると、次のようである。

Урга гэдэг хот, одоо байдал маш өвөр, үнэхээр танихуяа бэрх болжээ.

ウルガという市は、現在では様子が全く異なり、本当に見分けるのが困難となった。

(Б. Ринчен, 'Мангаа доогийн эцсийн зүүд', *Шог хошин зохиолын дээж*, УБ, 1981, p.201.)

ここで問題となるのは、танихуяа であり、これは、次のように分析でき、ここに当該形態素 {-хуй} が抽出される。

танихуяа ← танихуйаа

(<тани-(見分ける) -хуй (未来形動詞語尾) -аа (与位格))

⑤3 {-хуун}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、1. 《その行為の結果生ずるもの》, 2. 《～するのに使われるもの》という意味をもつ実詞を形成する。

筆者は、接続する動詞語幹を、語構造の観点から次の二つに分類する。

(1) 能動形 (active form) + {-хуун}

бүрэлдэхүүн 構成 (< бүрэлдэ- 構成される)

үйлдэхүүн 生産品 (< үйлд- する, 行う)

шатахуун 燃料 (< шата- 燃える)

эдлэхүүн 所有物 (< эдлэ- 利用する)

өгүүлэхүүн 述語 (< өгүүлэ- 言う, 述べる)

(2) 受動形 (passive form) + {-хуун}

ухагдахуун 概念 (< ухагда- < уха- 理解する)

мэдэгдэхүүн 知識 (< мэдэгдэ- < мэдэ- 知る)

суртахуун 道德 (< сурга- < сур- 学ぶ)

үржигдэхүүн 被乗数 (< үржигдэ- < үржи- 掛ける)

өгүүлэгдэхүүн 主語 (< өгүүлэгдэ- < өгүүлэ- 言う, 述べる)

тусагдахуун 目的語 (< тусагда- < тус- 当たる)

бүтээгдэхүүн 生産品, 製品 (< бүтээгдэ- < бүтээ- 生産する)

судлагдахуун 研究対象(物) (< судлагда- < судла- 研究する)

хэрэглэгдэхүүн 材料, 資料 (< хэрэглэгдэ- < хэрэглэ- 使う)

なお、この接尾辞も、㊟ {-хуй} と同様、元来は未来形動詞を表す連体語尾 Mo.-qun であったが (Mo.-qun > Kh. {-хуун}), 現代ハルハ方言では、その機能がほとんど衰え、化石的形態として上に掲げた若干の実詞に、その痕跡が認められるにすぎない¹⁾。

- 1) ただし、現代ハルハ方言の話し言葉では、未来形動詞としての痕跡が若干見られる。例えば、次のような例が、筆者がモンゴル人民共和国滞在中、観察された。

Нэг мэдэхнээ цаг зөндөө явчихсан байлаа.

ふと気がつくと、時間が随分たってしまっていた。

ここで見られる мэдэхнээ は、мэдэхэд とほぼ同義であり、ここに当該形態素 {-хун} が抽出される。

мэдэхнээ (< мэдэ- (知る) -хүн (未来形動詞語尾) -ээ (与位格))

なお、この -хүн は、形態的には、モンゴル文語の -kün をそのまま踏襲しつつ、しかも接尾辞としての機能が確立される以前の、未来形動詞語尾という元来の機能が、そのまま現在もなお民衆の話し言葉の中に定着して残っているのは興味深い事実である。

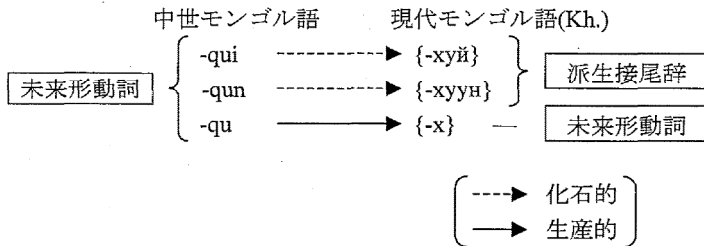
<参考>

形動詞語尾のうち、未来形動詞語尾は、「元朝秘史」で代表される中世モンゴル語(Middle Mongolian)では、次の三形式¹⁾

- I) -qui / 単数
- II) -qun / 複数
- III) -qu / 超数

を有していたが、現代ハルハ方言においては、なお未来形動詞として生産的にその文法的機能を保存し続けているのは、III) -qu > Kh.{-x} の一形式だけであり²⁾、その他の I) , II) の形式は、㉔、㉕の項で指摘したように、その機能をほとんど失い、単に化石的形態として残存しているに過ぎない。したがって、現代ハルハ方言という共時的立場からすれば、かかる観点より I) , II) の形式は、形動詞語尾 (つまり、連体語尾) というより、むしろ派生接尾辞の機能を果していると言えよう。

すなわち、中世モンゴル語から現代ハルハ方言に至る未来形動詞の文法的機能の変化の過程を図示すれば、次のようになる。



1) なお、中世モンゴル語における未来形動詞 -qui, -qun, -qu の三語尾間の弁別性に関しては、次のものを参照されたい。

橋本 勝, 「中世モンゴル語の未来形動詞語尾について」『アジア・アフリカ文法研究』2号, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1973, pp.119-134.

2) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.275.

㉔ {-II}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として 1. 《その行為の過程, 結果》, 2. 《その行為の行われる場所》等を表す実詞を形成する。

1. явц 過程 (<ява- 行く)
 зарц 召使い, 使用人 (<зара- (人を)使う)
 хоноц 泊まり客 (<хоно- 泊まる)
 түлхэц 刺激 (<түлхэ- 押す)
 мэдэц 知識 (<мэдэ- 知る)
 харц まなざし (<хара- 見る)
 нууц 秘密 (<нуу- 隠す)
 бүтэц 構造 (<бүтэ- 構成される)
 нөөц 貯え (<нөө- 貯える)
 хийц できばえ (<хий- 作る) etc.
2. сууц 住居 (<суу- 住む)
 бууц 宿营地 (<буу- 宿営する)
 гарц 横断歩道 (<гар- 出る, 渡る) etc.

⑤ { -ш }

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、主として 1. 《その行為の材料》, また一部 2. 《その行為の行われる場所》を表す実詞を形成する。

1. идэш 食物 (<идэ- 食べる)
 ууш 飲料 (<уу- 飲む)
 зууш 前菜, 酒の肴 (<зуу- 咬む)
 түлш 燃料 (<түлэ- 燃やす)
 тээш 貨物, 荷物 (<тээ- 輸送する)
 дарш 飼料類 (<дара- 押える, 圧する)
2. булш 墓 (<була- 埋める)
 хэвтэш (動物の)寝ぐら (<хэвтэ- 横になる)

<考察>

なお、この接尾辞 { -ш } は、次の環境において、《行為の不可能》を表し、《決して～することのない、～することのできない》という強い否定の意味をもつ形容詞を形成する。

{ -ш } / 動詞語幹 + __ { -гүй } (V→N) (否定)

なお、現代モンゴル語では、この環境は、幾分生産的に用いられている。

さて、筆者は、接続される動詞語幹を、語構造の観点から、次の二つに分類する。

(1) 能動形 (active form) + {-шгүй}

хэмжээлшгүй 測り得ない、無限の (< хэмжээлэ- 測る)
хязгаарлашгүй 限りない、無限の (< хязгаарла- 限る)
дуусашгүй 無限の、永遠の (< дуус- 終わる)
тоолшгүй 数え切れない、無数の (< тооло- 数える)
үнэлшгүй 評価しがたい、貴重な (< үнэлэ- 評価する)
салшгүй 別れがたい、分離できない (< сал- 別れる、離れる)
баршгүй 尽きない、果てしない (< бара- 終わる、尽きる)
халдашгүй 侵すことのできない (< халда- 侵略する)
эдгэршгүй 不治の (< эдгэрэ- 回復する、なおる)
эвдэршгүй こわれえない (< эвдрэ- こわれる)
үзэшгүй 見苦しい、醜い (< үзэ- 見る) etc.

(2) 受動形 (passive form) + {-шгүй}

мартагдашгүй¹⁾ 忘れられない
(< мартагда- 忘れられる < марта- 忘れる)
барагдашгүй 尽きない、無限の
(< барагда- 尽きる < бара- 終える)
ойлгогдошгүй 理解されない
(< ойлгогдо- 理解される < ойлго- 理解する)
олдошгүй 二度と手に入らない、貴重な
(< оло- 手に入る < ол- 手に入れる)
танигдашгүй 認識できない
(< танигда- 認識される < тани- 認識する)
ялагдашгүй 負けることのない、不敗の
(< яагда- 負ける < яа- 勝つ) etc.

1) Оюутны анхны намар, мартагдашгүй намар боллоо.

学生の最初の秋は、決して忘れられない秋となった。

(Мартагдашгүй намар というモンゴル映画のラスト・シーンより)

3. 出名動詞接尾辞 (Denominal verbal suffixes / N→V)

① {-вчла-}

この接尾辞は、主に形容詞語幹に接続して、《～をする、～の状態にする》といった意味をもつ他動詞を形成する。(他動詞形成)

нарийвчла- 詳細にする(見る)(<нарийн 細かい)

бүдүүвчлэ- 大まかにする(行う)(<бүдүүн 粗雑な, 太い)

ихэвчлэ- 大部分をやり終える (<их 大きい)

хурдавчла- 加速する, 速める (<хурдан 速い)

хөнгөвчлө- 軽減する, 軽くする (<хөнгөн 軽い) etc.

なお、この接尾辞 {-вчла-} は、共時的にはこれ以上は形態素として分節できないが、通時的には、次のように出名名詞接尾辞 {-вч} (《物の覆い》を表示し、専ら実詞に接続) と出名動詞接尾辞 {-ла-} (主に他動詞形成で、《～をする》の対象関連動詞を作る) が、類推的創造 (analogical creation) によって、複合接尾辞 {-вчла-} として成立した後に、主に形容詞に接続するという新形式を生み出すに至ったものと考えられる。

Proto-Mo.*-bči + *-la- > Mo.-bčila- > Kh.{-вчла-}

(N→N) (N→V) (N→V)

(vide ⑤ {-вч} (N→N), ④ {-ла-} (N→V))

② {-да-}

A) この接尾辞は、かなり生産的に用いられ、実詞に接続して、次のような意味を表す動詞語幹を形成する。

以下の a), b) の二つの意味が、この接尾辞 {-да-} の主たる用法である。

a) 《～を用いて動作を行う》¹⁾の意を表示する。(手段動詞)

この意味の用法が最も多く、そのほとんどが名詞の造格語尾 (-аар) と他動詞 (тусгах үйл үг) の二つの形態素が融合した、いわゆるかばん形態 (portmanteau morph) をなしている。

接尾辞 {-да-} = {-аар} + {тусгах үйл үг}
(N→V) (造格) (他動詞)

すなわち、その一部を示せば次のようである。

дуранда- 双眼鏡で見る (< дуран 双眼鏡)

(= дурангаар хара-)

сэлэмдэ- 刀で切る (< сэлэм 刀)

(= сэлмээр цавчи-)

шохойдо- 石灰で塗る (< шохой 石灰)

(= шохойгоор буда-)

хөрөөдө- 鋸で切る (< хөрөө 鋸)

(= хөрөөгөөр огтол-)

その他, 次のようなものがある.

алгада- 平手で打つ (< алга 掌)

аргада- なだめる, なぐさめる (< арга 方法, 手段)

халбагада- さじですくう (< халбага さじ)

ташуурда- 鞭で打つ (< ташуур 鞭)

гарда- 手で何かをする (< гар 手)

машинда- タイプで打つ (< машин 機械)

бууда- 撃つ, 射撃する (< буу 銃)

дууда- 呼ぶ (< дуу 声)

чулууда- (石を)投げる (< чулуу 石)

утасда- 電話をかける (< утас 電話)

гурилда- 小麦粉を塗る (< гурил 小麦粉)

шаварда- 粘土で塗る (< шавар 粘土)

цавууда- 糊で付ける (< цавуу 糊)

жолоодо- 手綱をさばく, 運転する (< жолоо 手綱)

хөгжимдө- 楽器で演奏する (< хөгжим 楽器) etc.

b) 《(全体)の一部をつかむ》¹⁾の意を表示する。(身体部分対象動詞)

これは, 元来は家畜に対して用いられたものが, 後に人間にも用いられるようになったものと考えられる.

багалзуурда- 喉を絞める (< багалзуур 咽喉, 喉)

үсдэ- 髪の毛をつかむ (< үс 毛, 髪)

чихдэ- 耳をつかむ (< чих 耳)

хүзүүдэ- 首をつかむ (< хүзүү 首)

дэлдэ- たてがみをつかむ (< дэл たてがみ)

сүүлдэ- 尾をつかむ (< сүүл 尾)

дэлэндэ- 乳房をつかむ (< дэлэн (家畜の)乳房) etc.

また, わずかではあるが, c)のような特殊用法も見られる.

c) 《~を弱める》の意を表示する。(減少動詞)

тамирда- 体力を失う, 体が弱る (< тамир 体力)

В) この接尾辞は、**形容詞**に接続して、《物事の性質が度を越している (～すぎる)》²⁾ という意味をもつ自動詞語幹を形成する。特にこの場合、先の A) とは異なり、常に気持ちにそぐわない感じを表すことに注意されたい。

- уртда- 長すぎる (<урт 長い)
- богинодо- 短すぎる (<богино 短い)
- ихдэ- 大きすぎる, 多すぎる (<их 大きい, 多量の)
- багада-³⁾ 小さすぎる, 少なすぎる (<бага 小さい, 少量の)
- томдо- 大きすぎる (<том 大きい)
- жигигдэ- 小さすぎる (<жигиг 小さい)
- өндөрдө- 高すぎる (<өндөр 高い)
- намда- 低すぎる (<нам 低い)
- олдо-⁴⁾ 多すぎる (<олон 多い)
- цөөдө-⁴⁾ 少なすぎる (<цөөн 少ない)
- залууда- 若すぎる (<залуу 若い)
- хөгшидө- 年をとりすぎる (<хөгшин 年とった)

1), 2) すなわち、次のようである。

形式	意味
{-да-} (N→V)	A)
	a) 《тухайн юмаар үйлдэх (～ хэрэглэх)》 гэсэн утгатай
	b) 《тухайн юмнаас барих》 гэсэн утгатай
	B)
	《хэтгэрхий (дэндүү) тийм болох (～ хэтрэх)》 гэсэн утгатай

3) 例えば、次のように用いられる。

Энэ дээл (гутал, өмд) над **багадаж** байна.

このデール (靴, ズボン) は、私には**小さすぎる**。

4) これらの語を用いたモンゴル語のことわざに次のものがある。

Цэцэнд хоёр чих **цөөдөх**

Тэнэгт ганц хэл **олдох**

賢い者に二つの耳は**少なすぎる**

愚か者に一つの舌は**多すぎる**

③ {-жи-} = / -жи- ∞ -жира- /

この接尾辞 {-жи-} は、名詞語幹に接続して、《a) I. (実詞に対して) ~が増大する (増える), II. (形容詞に対して) 性質の度合いが増す (~になる), b) (期間を表す語に対して) ~が継続する (続く), c) (新しい概念に対して) ~化される, ~化する》¹⁾ 等といった意味を表す自動詞語幹を形成する。(増大継続動詞)

- a) I. үржи- 繁殖する (<үр 子)
 төлжи- 家畜の子が増える (<төл 家畜の子)
 малжи- 家畜が増える (<мал 家畜)
 хоньжи- 羊が増える (<хонь 羊)
 мөнгөжи- 金持ちになる (<мөнгө お金)
 хөрөнгөжи- 財産が増える (<хөрөнгө 財産)
 зоригжи- 勇気がわく (<зориг 勇気)
 насжи- 老いる, ふける (<нас 年齢)
- II. баяжи- 豊かになる, 富む (<баян 豊かな, 富んだ)
 залуужи- 若くなる (<залуу 若い)
 арвижи- 増える, 多くなる (<арвин たくさんの, 多量の)
 мөнхжи- 永遠になる (<мөнх 永遠の, 永久の)
 амаржи- 楽になる; 出産する (<амар 平和な, 容易な)
 хөнгөжи- 軽くなる; 出産する (<хөнгөн 軽い)
 хагуужи- 耐える (<хагуу 厳しい)
 намжи- 静まる (<нам 静かな)
 өргөжи- 広くなる, 広がる (<өргөн 広い)
- b) хаваржи- 春を過ごす (<хавар 春)
 зунжи- 夏を過ごす (<зун 夏)
 намаржи- 秋を過ごす (<намар 秋)
 өвөлжи- 冬を過ごす (<өвөл 冬)
- c) цахилгаанжи- 電化される (<цахилгаан 電気)
 үйлдвэржи- 工業化される (<үйлдвэр 工業)
 цэрэгжи- 軍隊化される (<цэрэг 軍隊)
 усжи- 灌漑化される (<ус 水)
 чулуужи- 化石化する (<чулуу 石)

この接尾辞 {-жи-} は、さらに形態的に条件づけられた異形態 -жира- をもち、名詞語幹に接続して、《~になる》といった意味をもつ自動詞語幹を形成する。(自動詞形成)

{-жи-} = /-жи- ∞ -жира-/

сайжира- (= сайра-) 良くなる (< сайн 良い)
 муужира- (= муура-) 失神する, 気絶する (< муу 悪い)
 ангижира- 脱する, 脱却する
 (< анги クラス, 階級; 他の, 別の cf. ангид ~の他に)
 уужира- (Mo. аҮүjira-) 安心する, ほっとする
 (< *уу²) < агуу (Mo. агуу) 大きい, 広大な)
 дугжира- 熟睡する, ぐっすり眠る (< дуг 熟睡, ぐっすり)
 амьжира- 生存する (< амь 生命)

なお, この接尾辞 {-жира-} は, 当該接尾辞 {-жи-} と出動動詞接尾辞 {-ра-} (自動詞形成) からなる複合接尾辞であり, 次のような形成過程を経て成立している.

Proto-Mo. *jī- + *ra- > Mo. -jira- > Kh. {-жира-}
 (N→V) (V→V) (N→V)

1) すなわち, 次のようである.

形式	意味
{-жи-} (N→V)	《тухайн юм, байдал үргэлжлэх санаа, арвидах (их болох)》 гэсэн утгатай

2) *уу (< Mo. агуу 大きい, 広大な) を共通語根とする派生語に次のものがある.

уудам (< Mo. агуу-da-m)
 уужим (< Mo. агуу-ji-m)
 уужуу (< Mo. агуу-ji-yu) } 広い, 広大な

④ {-ла-} = /-ла- ~ -на- (語末が м, н(г) の場合) /

この接尾辞は, 名詞語幹に接続して, 主に, А) 他動詞語幹を, 一部, В) 自動詞語幹を形成し, 以下のようにいくつかの意味¹⁾を表示する.

A) 他動詞形成

a) 《~をする》の意を表示する. (対象関連動詞)

… 他動詞形成の意では, このパターンが数的に一番多い.

b) (主に道具に対して)《～を用いて動作を行う》の意を表示する。
(手段動詞)

… この意味では、出名動詞接尾辞 {-ла-} を使う場合が一番多く、それに比べると当該接尾辞 {-ла-} の出現頻度は一般に少ない。

c) (主に形容詞、一部実詞に対して)《～の状態にする》の意を表示する。

… 主に形容詞に接続する場合には、この他動詞形成のパターンの方が、自動詞形成 B)-e) のパターンよりも、数的にはるかに多い。

B) 自動詞形成

d) (主に実詞に対して)《～が生ずる》の意を表示する。(発生動詞)

e) (主に形容詞、一部実詞に対して)《～の状態になる》の意を表示する。

なお、この接尾辞 {-ла-} は、現代モンゴル語の出名動詞接尾辞のうち最も生産的なものであり、広くアルタイ諸語²⁾にも共通して見られるものである。

A) 他動詞形成

a) хайрла- 愛する (<хайр 愛)

ажилла- 仕事をする (<ажил 仕事)

бүжиглэ- ダンスをする (<бүжиг ダンス, 踊り)

багшла- 教師をする (<багш 教師)

аяла- 旅をする (<аян 旅)

мэдээлэ- 報道する (<мэдээ 報道, ニュース)

нөлөөлө- 影響する (<нөлөө 影響)

бэлэглэ- 贈り物をする (<бэлэг 贈り物)

хоригло- 禁止する (<хориг 禁止)

агтла- 去勢する (<агт 去勢馬)

тайлбарла- 説明する (<тайлбар 説明)

мэргэлэ- 占う (<мэргэ 占い)

дуула- 歌う (<дуу 歌, 声)

эхлэ- 始める (<эх 始め, 源)

тусла- 助ける (<тус 助け, 援助)

тооло- 数える (<тоо 数)

хэрэглэ- 使用する (<хэрэг 必要, 使用)

зүүдлэ- 夢を見る (<зүүд 夢)

- b) хайчла- はさみで切る (<хайч はさみ)
 бүслэ- 帯をする (<бүс 帯)
 тэлээлэ- ベルトをしめる (<тэлээ ベルト)
 товчло- ボタンをかける (<товч ボタン)
 ирлэ- 刃を研ぐ (<ир 刃)
 ишлэ- 柄をつける (<иш 柄)
 мөнгөлө- 銀メッキする (<мөнгө 銀)
 тосло- 油をつける (<тос 油)
 усла- 水をやる (<ус 水)
 хутгала- ナイフで刺す (<хутга ナイフ)
 жадла- 槍で突く (<жад 槍)
 гавла- 手錠をかける (<гав 手錠)
 хорло- 害する, 殺する (<хор 毒)
 давсла- 塩漬けにする (<давс 塩)
 сүлэ- (Mo.süle-) 乳を入れる (<сүү (Mo.sün) 乳)
- c) батла- 確実にする (<бат 確実な)
 бузарла- 汚す (<бузар 汚れた)
 лавла- 確かめる (<лав 確かな)
 гангала- 着飾る (<ганган おしゃれな)
 тодорхойло- 明らかにする (<тодорхой 明らかな)
 хоосло- 空にする (<хоосон 空の)
 шингэлэ- 薄める (<шингэн 薄い)
 тэгшлэ- 平らにする (<тэгш 平らな)
 жижиглэ- 小さくする (<жижиг 小さい)
 цэвэрлэ- きれいにする (<цэвэр きれいな)
 муула- 悪口を言う (<муу 悪い)
 хүндлэ- 尊敬する (<хүнд 重い)
 зөвлө- 助言する, 忠告する (<зөв 正しい)
 нууцла- 秘密にする (<нууц 秘密(の))
 нунтагла- 粉にする (<нунтаг 粉(の))
 овооло- 山積みにする (<овоо 山頂や峠に積み上げた石の山)
- B) 自動詞形成
- d) салхла- 風が吹く (<салхи 風)
 цэцэглэ- 花が咲く (<цэцэг 花)
 дэлбээлэ- 花が咲く (<дэлбээ 花びら)
 шүдлэ- 歯が生える (<шүд 歯)

- е) таргала- 太る (<тарган 太った)
 хурдла- 急ぐ (<хурдан 速い)
 түргэлэ- 急ぐ (<түргэн 速い)
 бушуула- 急ぐ (<бушуу 速い)
 жирэмслэ- 妊娠する (<жирэмсэн 妊娠した)
 нарийла- けちけちする (<нарийн 細かい)
 зөрүүдлэ- 頑固である (<зөрүүд 頑固な)
 / махла- 太る (<мах 肉)
 түрүүлэ- 先駆ける, 一位になる (<түрүү 頭)
 найзла- 友達になる (<найз 友達)
 уурла- 怒る (<уур 怒り)
 баярла- 喜ぶ (<баяр 喜び)

この接尾辞 {-ла-} は、さらに音韻的に条件づけられた異形態 -на- をもつ。すなわち、名詞語幹が鼻音 м, н(г)で終わる場合、当該接尾辞 {-ла-} は、鼻音同化によって -на- に変化する。

$\{-ла-\} \rightarrow -на-$ / $\left\{ \begin{array}{c} м \# \\ _ н(г)\# \end{array} \right\} _$ (N→V) (名詞語幹)
--

(1) 名詞語幹が両唇鼻音 м で終わる場合

- самна- 髪をとかす (<сам くし)
 агсамна- 酒に酔って暴れる (<агсам 狂暴な)
 гамна- 節約する, 養生する (<гам 節約, 養生)
 дамна- 棒で担ぐ (<Old Ch.擔 tam)
 хомно- ラクダの背にフェルトを敷く
 (<хом ラクダの背に敷くフェルト)
 эмнэ- 治療する (<эм 薬)
 хэмнэ- 節約する (<хэм 尺度, 寸法)
 дэмнэ- 援助する (<дэм 援助, 助け)

(2) 名詞語幹が軟口蓋鼻音 н(г) で終わる場合

ここで、注意すべきことは、軟口蓋鼻音 н(г) (/ŋ/) で終わる語幹に、歯鼻音 н (/n/) で始まる接尾辞を接続する際、現代ハルハ方言

では、異化により -гн- (/ -gn-/) という子音群 (consonant clusters) をなすという特徴をもつ³⁾。

次に挙げるものがその代表例である⁴⁾。

агна- 狩りをする (<ан(г)на- < ан(г) 狩り)

ваадагна- ふろしきに包む

(<ваадан(г)на- <ваадан(г) ふろしき)

загна- 叱る (lit.性格づける) (<зан(г)на- < зан(г) 性格)

шагна- 賞を与える (<шан(г)на- < шан(г)賞 < Ch.賞 shang)

тагна- 探る, スパイする (<Мо.тан(г)на- < Ch.探 tan)

гагна- はんだ付けする (<Мо.ган(г)на- < Ch.釘 han)

чагна- こっそり聞く, 盗み聞きする

(Mo.čingna- < *čingla- < (AT.tiŋla-) *tingla- < Ch.聽 ting)

дүгнэ- 結論を出す (<дүн(г)нэ- < дүн(г) 結果)

тэгнэ- 荷を家畜の背に振り分けて積む

(<тэн(г)нэ- <тэн(г) 振り分け荷物の一方)

жигнэ- 蒸す (<Мо.жин(г)нэ- < Ch.蒸 zheng)

хошигно- 冗談を言う, ふざける

(<хошин(г)но- <хошин(г) 冗談の, おどけた)

марзагна- ふざける, おどける

(<марзан(г)на- < марзан(г) ふざけた, おどけた)

зөгнө- 予知する, 予感する (<зөн(г)нө- < зөн(г) 予知, 予感)

さらに、名詞語幹が厳密には、軟口蓋鼻音 н(г) (/ ɲ /) ではなく、齒鼻音 н (/ n /) で終わる場合にも、接尾辞 -на- の直前で異化により、同様の變化を被った例も若干見られる⁵⁾。

нандигна- 神聖視する (<нандин(г)на- < нандин 神聖な)

арсагна-⁶⁾ 酒に酔って暴れる (<арсан(г)на- < арсан 狂暴な)

1) すなわち、次のようである。

形式	意味
{-ла-} (N→V)	《тухайн юм хийх, тухайн юмаар үйлдэх, тухайн юмыг бий болгох ; тухайн юм бий болох》 гэсэн утгатай

2) 現代トルコ語 (Modern Turkish) でも、同様にこの出名動詞接尾辞 -la- / -le- は生産的に用いられる。

- avla- 狩りをする (<av 狩り)
- taşla- 石を投げる (<taş 石)
- sula- 水をやる (<su 水)
- tuzla- 塩漬けにする (<tuz 塩)
- işle- 働く (<iş 仕事)
- dişle- かじる (<diş 歯)
- temizle- きれいにする (<temiz きれいな)

また、満洲文語 (Written Manchu) でも、この接尾辞 -la- / -le- / -lo- は、出名動詞接尾辞のうち最も生産的なものである。

- hûdula- 急ぐ (<hûdun 速い)
- sarila- 宴会を開く (<sarin 酒宴)
- ucule- 歌う (<ucun 歌)
- sebjele- 楽しむ (<sebjen 楽しみ)
- oktolo- 薬を用いる (<okto 薬)
- hontoholo- 半分にする (<hontoho 半分)

3) すなわち、変化の過程は次のようである。

-g·n-	<	-ŋ·n-	<	-ŋ·l-
(ハルハ方言)	異化	(Mo.)	鼻音同化	

特に、-g·n- (< -ŋ·n-) の異化の現象は、言語学的には次のように説明できる。

ŋ	→	g	/	__	n
(+ 軟口蓋音)		(+ 軟口蓋音)		(+ 歯音)	
(+ 鼻音)		(- 鼻音)		(+ 鼻音)	

4) ちなみに、モンゴル文語 (Mo.) では、これらの語は、次のように現れる。

- агна- (Mo.angna-), ваадагна- (Mo.wadangna-)
- загна- (Mo.jangna-), шагна- (Mo.šangna-)
- тагна- (Mo.tangna-), гагна- (Mo.γangna-)
- чагна- (Mo.čingna-), дүгнэ- (Mo.düngne-)
- тэгнэ- (Mo.tengne-), жигнэ- (Mo.jingne-)
- хошигно- (Mo.qošungna-), марзагна- (Mo.marjangna-)
- зөгнэ- (Mo.jöngne-)

5) これらに対するモンゴル文語形は次のようである。

нандингна- (Mo.nandingna-) (< нандин (Mo.nandin))

арсагна- (Mo.aysungna-) (< арсан (Mo.aysun))

6) ハルハ方言では, арсам ~ арсан (Mo.aysum ~ aysun) 《狂暴な》の両形が見られることから, 結果的にそれぞれ арсамна- ~ арсагна- 《酒に酔って暴れる》という二つの動詞が形成された. ちなみに, 古代チュルク語にも аχsum (> аχsumla-) ~ аχsun (aqsun) ~ аχsun 《(酔っ払いが)暴れる》等の形が見られる.

⑤ {-лда-}

この接尾辞は, 従来いかなるモンゴル語学者からも報告がなされていないが, いくつかの名詞語幹(主に実詞)に接続して, 一般に《相互に/共同して~する》の意を表す自動詞を形成する.(相互・共同動詞)

нүүрэлдэ- 面と向き合う (< нүүр 顔)

сүлбээлдэ- 共謀する, 結託する (< сүлбээ きずな, 結びつき)

бүрэлдэ- (二つ以上から)成る, 構成される (< бүр 各々)

заргалда- 訴訟を起こす, 裁判で争う

(< зарга 訴訟, (裁判の)訴え)

また, 《身体の一部が(ある面と)接する》という意を表す場合もあるが, これも《互いに接する》という相互動詞として捉えることが可能である.

тохойлдо- 肘をつく (< тохой 肘)

хажуулда- 横になる (< хажуу わき, 横)

сүүжилдэ- 横になる (< сүүж 腰の骨)

なお, この出名動詞接尾辞 {-лда-} (N→V) は, 共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが, 通時的には, 次の例, すなわち

нүүр 顔 > нүүрдэ- > *нүүрлэлдэ- > нүүрэлдэ- 面と向き合う
(N→V) (V→V) (N→V)

хажуу 横 > хажуулда- 横になる > *хажуулалда- > хажуулда-
(N→V) (V→V) (N→V)

сүлбээ きずна > сүлбээлдэ- 共謀する > сүлбээлэлдэ- > сүлбээлдэ-
(N→V) (V→V) (N→V)

зарга 訴訟 > заргалда- > *заргалалда- > заргалда- 訴訟を起こす
(N→V) (V→V) (N→V)

等で代表されるように、元来は出名動詞接尾辞 {-ла-} (N→V) は、出動動詞接尾辞 {-лда-} (V→V) (相互態形成) の二つの接尾辞が、-л- の重音脱落 (haplology) によって縮約された結果、形成されたものであり、起源的には複合接尾辞であった蓋然性が極めて大きい。

Proto-Mo.*-la- + *-ldu- > Mo.-lda- (-ldu-) > Kh.{-лда-}
 (N→V) (V→V) /-ldü-
 (N→V)

⑥ {-pa-} = /-pa- ~ -ла-/
 /

この接尾辞は、名詞語幹 (主に形容詞、一部実詞) に接続して、《～の状態になる、～が生ずる》といった意味を表す自動詞語幹を形成する。(自動詞形成)

当該接尾辞 {-pa-} は、④ の出名動詞接尾辞 {-ла-} と同様、現代モンゴル語では非常に生産的に用いられるが、両者の違いは、{-ла-} が主に他動詞語幹を (一部、自動詞語幹も) 形成するのに対し、{-pa-} は、専ら自動詞語幹を形成する点にある。

(vide ④ {-ла-} (N→V))

a) 形容詞に対して接続される場合 (これは数的に非常に多い)

- хөхрө- 青くなる (<хөх 青い)
- ногооро- 緑色になる (<ногоон 緑色の)
- улаара- 赤くなる (<улаан 赤い)
- цагаара- 白くなる (<цагаан 白い)
- хүйтрэ- 寒くなる (<хүйгэн 寒い)
- дулаара- 暖かくなる (<дулаан 暖かい)
- хуучра- 古くなる (<хуучин 古い)
- хөгшрө- 年をとる (<хөгшин 年とった)
- хямдра- 安くなる (<хямд 安い)
- цөөрө- 少なくなる (<цөөн 少ない)
- үгүйрэ- 貧乏になる (<үгүй ない)
- сулра- (体が)弱くなる (<сул (体が)弱い)
- хагуура- 固くなる (<хагуу 固い)
- зөөлрө- 柔らかくなる (<зөөлөн 柔らかい)
- хэтрэ- 度を越す (<хэт 極端な)
- илрэ- 明らかになる (<ил 明らかな)
- тодро- 明らかになる (<тод 明らかな)
- гэгээрэ- 明るくなる (<гэгээн 明るい)
- галзуура- 気が狂う (<галзуу 気が狂った)

догшир- 荒々しくなる (<догшин 荒々しい)
 дэмийрэ- 無駄口をたたく (<дэмий 無駄な)
 сайра- (= сайжира-) 良くなる (<сайн 良い)
 муура- (= муужира-) 失神する, 気絶する (<муу 悪い)
 амьдра- 生活する, 生きる (<амьд 生きている)
 боловсро- 熟する, 実る

(< боловсон 教養のある, 文化的な (←熟した, 実った))

бэлбэсрэ- やもめになる (<бэлбэсэн やもめの)

b) 実詞に対して接続される場合 (これは数的に非常に少ない)

манара- (霧で)かすむ (<манан 霧)

ухаара- 理解する, わかる (<ухаан 知恵)

хөгцрө- かびが生える (<хөгц かび)

зэврэ- さびる (<зэв さび)

当該接尾辞 {-ра-} が接続される際, 一般に名詞語幹末子音 -н は脱落するが (上述の хуучра- 古くなる <хуучин 古い, хүйтрэ- 寒くなる <хүйтэн 寒い, 等多数), -н 以外の子音 -р, -г 等が脱落する場合も若干ある。

сохро- 盲目になる (<сохор 盲目の)

хашра- 苦い経験をする (<хашир 経験を積んだ, 老練な)

балра- ぼんやりする, あいまいになる

(<балар 暗い, ぼんやりした)

мунхра- (= мунхагра-) 馬鹿になる (<мунхаг 馬鹿な)

この接尾辞 {-ра-} は, さらに音韻的に条件づけられた異形態 -ла- をもつ. すなわち, 名詞語幹が p をもつ場合, 接尾辞 {-ра-} は異化により -ла- に変化する。

{-ра-} → -ла- / {-р-}__ (名詞語幹)

харла- 黒くなる (<хар 黒い)

шарла- 黄色くなる (<шар 黄色い)

борло-¹⁾ 灰色になる, (色が)浅黒くなる

(<бор 灰色の, (顔が)浅黒い)

1) この語は, 例えば次のように用いられる。

Миний царай наранд түлэгдэж борлосон.

私の顔は日焼けして黒くなった。

⑦ {-рха-} = /-рха- ~ -лха- /

この接尾辞は、名詞語幹(形容詞、実詞の両方とも)に接続し、《~を誇張して示す(~ぶる、~を誇る、~ぶって振舞う)》といった意味をもつ動詞語幹を形成する。(誇大動詞)

a) 形容詞に対して接続される場合

баярха- 金持ちぶる、富を誇る (<баян 豊かな、富んだ)

дэгжирхэ- おしやれぶる (<дэгжин おしやれな)

залуурха- 若者ぶる (<залуу 若い)

цэцэрхэ- 見識ぶる、賢ぶる (<цэцэн 賢い)

номчирхэ- 博識ぶる (<номч 博識な)

хэгжүүрхэ- 高慢ぶる (<хэгжүүн 高慢な)

сайрха- 自慢ぶる、良く見せようとする (<сайн 良い)

ихэрхэ- 尊大ぶる (<их 大きい)

томорхо- 威張る (<том 大きい)

сонирхо- 珍しがる、興味を示す (<сонин 珍しい、変わった)

b) 実詞に対して接続される場合

ахарха- 兄貴ぶる (<ах 兄)

ёсорхо- 儀式ばる (<ёс 慣習)

идэрхэ- 大胆に振舞う (<ид 力, エネルギー)

өмчирхэ- わが物とする、一人占めする (<өмч 財産)

эээрхэ- わが物ぶる (<эзэн 主)

ноёрхо- 領主ぶる、支配する (<ноён 領主)

хүчирхэ- 力づくで暴行する (<хүч 力)

найзарха- 友達のように振舞う (<найз 友達)

үндсэрхэ- 民族性を誇示する (<үндэс 民族)

үнэрхэ- 不当な値をつける (<үнэ 値段)

бахарха- 誇りに思う (<бах 満足)

атаарха- しっとする、ねたむ (<атаа しっと、ねたみ)

жөтөөрхэ- しっとする (<жөтөө しっと)

өшөөрхэ- 復讐する、恨む (<өшөө 復讐、恨み)

баатарха-¹⁾ 英雄ぶる

(< *баатарха- <баатар 英雄)

гадуурха-²⁾ よそ者扱にする、差別する

(< *гадуурха- <гадуур 外)

この接尾辞 {-рха-} は、音韻的に条件づけられた異形態 -лха- をもつ。すなわち、名詞語幹が p をもつ場合、接尾辞 {-рха-} は、異化によって -лха- に変化する。

{-pxa-} → -лха- / {-p-}__ (動詞語幹)

эрэлхэ- 威張る (<эр 男)

дээрэлхэ- 高圧的に振舞う, いじめる (<дээр 上)

бяралха- 力を誇る (<бяр 力, 体力)

нэрэлхэ- (飲食を)遠慮する, 見えを張る (<нэр 名声)

шаралха- 負けん気になる, しつと心が湧く

(<шар 負けん気, しつと)

なお, この接尾辞 {-pxa-} は, 共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが, 起源的には, 次のようにモンゴル祖語のレベルで, 複合接尾辞であった蓋然性がある。

Proto-Mo.*-r- + *-qa- > Mo.-rqa- > Kh. {-pxa-}
 (N→V) (V→V) (N→V)

<考察>

この接尾辞 {-pxa-} を構成要素としてもつ出名名詞複合接尾辞に, {-pxar} (~ -pxуу) があり, これは《~を誇示した; ~を豊富にもっている》という意味を表し, 次のような形成過程を経て成立している。

Mo.-rqa- + -γ / -γu > -rqaγ ~ -rqaγu > Kh. {-pxar} (~ -pxуу)
 (N→V) (V→N) (N→N)
 (vide ⑦ {-pxar} (N→N))

1), 2) これは, 元来 баатар + *-ха-, гадуур + *-ха- のように, 名詞語幹に出名動詞接尾辞 *-ха- (これは実在しないが) を接続したのではなく, 実際には, баатар + -pxa-, гадуур + -pxa- という深層構造からなり, 結合の際, p の重複を避けるため, 重音脱落 (haplology) の現象によって, それぞれ現在の語形 баатарха-, гадуурха- が成立している。

⑧ {-c-} = /-c- (~ 一部, -д-)/

この接尾辞は, 名詞語幹に接続して, 《自然に(ひとりで)~になる》という意味をもつ自動詞語幹を形成する。(自動詞形成)

現代モンゴル語ハルハ方言では, この自動詞形成接尾辞の意味では, 一般に -д- よりも -c- を用いる傾向があることが観察された。

- уртас-(～ уртад-) 長くなる (<урт 長い)
 богинос-(～ богинод-) 短くなる (<богино 短い)
 ихэс-(～ ихэд-) 大きくなる, 多くなる (<их 大きい, 多量の)
 багас-(～ багад-) 小さくなる, 少なくなる
 (<бага 小さい, 少量の)
 томос-(～ тоمود-) 大きくなる (<том 大きい)
 нарийс-(～ нарийд-) 細くなる (<нарийн 細い)
 өндөрс-(～ өндөрд-) 高くなる (<өндөр 高い)
 намс-(～ намд-) 低くなる (<нам 低い)

なお、この出名動詞接尾辞 {-c-} は、通時的には、元来は *-d- であったものが、音節末で *-s- に変化し、後に形成されたものであり、さらに現代モンゴル語に至っては、-д- に取って代わり、-c-の方が主流を占め発展したものと考えられる。

Proto-Mo.*-d- (→*-s-) > Mo.-d- ~ -s- > Kh. {-c-} (～ 一部, -д-)
 (N→V) (N→V)

<考察>

ここで注意すべきことは、現代モンゴル語における出名動詞接尾辞 {-c-} の台頭の背景には、別の出名動詞接尾辞 {-да-} の存在が大きく関与しているものと考えられる。

現代モンゴル語には、《物事の性質が度を越している (～すぎる)》という意味を表す出名動詞接尾辞 {-да-} があるが、これは先の出名動詞接尾辞 {-д-} とは全く異なる形態素であり、この意味では、接尾辞 {-c-} とは交替しない。

すなわち、両者の関係は次のようである。

形式	意味
① {-c-} (～ 一部, -д-)	自動詞形成《～になる》の意表示
② {-да-}	度を越し、《～すぎる》の意表示

例えば、上述した語を例にとれば、次のようである。

- уртда- 長すぎる, богинодо- 短すぎる
 ихэдэ- 大きすぎる, 多すぎる, багада- 小さすぎる, 少なすぎる
 томдо- 大きすぎる, нарийда- 細すぎる
 өндөрдө- 高すぎる, намда- 低すぎる

つまり、動詞語幹 + {-д-} のタイプ (《～になる》の意表示) と動詞語幹 + {-да-} のタイプ (《～すぎる》の意表示) の両者は、母音の有無の違いのみで、双方の意を区別しており、現代モンゴル

語では、一般に第二音節以後の短母音は、曖昧化し脱落する傾向にあるため、両者が同音衝突 (homonymic collision) を起こし、それを避けるために、動詞語幹 + {-d-} のタイプに取って代わって、音節末子音 -d- ~ -c- の交替¹⁾により、動詞語幹 + {-c-} のタイプが一般に多く用いられるようになったものと推定される。

- 1) 音節末子音 (дэвсгэр үсэг) の d が s に変化する現象は、例えば、現代ハルハ方言のうち、とりわけ「ハルハ東部方言」(1.ヘンティ一の東部及び南部、ドルノド、スフバートルのハルハ方言、2.ダリガンガ方言)で顕著に見られる。

Mo.-d# (音節構造 (C)VC における音節末子音)
 > ハルハ中央方言 /d/ ~ /t/ (/t/ = [d]) を表す
 ハルハ東部方言 /s/

例えば、この例として次のものがある。

Mo.	ハルハ中央方言	ハルハ東部方言
ebed- 《痛む》	öbdöx	öwsöx
örübed- 《同情する》	öröbdöx	öröwsöx
qabud- 《腫れる》	xawdāx	xawsāx
sigid- 《はまる》	šigdēx	šigsēx
uyid- 《飽きる》	uidāx	uisāx
qadqu- 《刺す》	xatgāx	xasgāx
udqu- 《汲む》	utgāx	usgāx

(「ハルハ東部方言」の方言分類に関しては、次のものを参照した。

Э. Вандуй, 'Халхын аялгууг ангилах асуудал', *Халхын аялгуу*, УБ, 1970, pp.19-24.

また、「ハルハ中央方言」及び「ハルハ東部方言」の語例に関しては、次のものを参照し、一部加筆した。

Ж. Цолоо, *Орчин үеийн монгол хэлний авиа зүй*, УБ, 1976, p.131.)

⑨ {-c-}

この接尾辞は、若干の名詞語幹に接続して自動詞語幹を形成するが、非生産的である。(自動詞形成)

ундаас- のどが渴く (<ундаа 飲み物)

өлөс- 腹がへる、飢える (<өлөн 空腹の cf.өл 食料; 飢え)

амьс- 息をする (<амь 生命)
 хийс- (風で)吹き飛ば (<хий 空気)
 хорос- 憎む, 嫌う (<хор 負けん気, しつと)
 баяс- 喜ぶ (<баяр 喜び)

⑩ {-ca-}

この接尾辞は, 名詞語幹 (特に実詞) に接続して, 《~を欲する, 望む》¹⁾ という意味をもつ動詞語幹を形成する. (欲望動詞)

махса- 肉を食べたがる (<мах 肉)
 хужирса- (家畜が)ソーダをほしがる (<хужир 天然のソーダ)
 төрхөмсө- (妻が)実家を恋しがる (<төрхөм 妻の実家)
 эмсэ- (動物が)雌を求める (<эм 雌, 女)
 бухса- (雌牛が)雄牛を求める (<бух 種牛)
 үрсэ- (動物が)自分の子供を熱愛する (<үр 子供)
 урагса- 親戚関係をもとうと努める (<ураг 親戚)
 элэгсэ- 仲よくする, 親しくする (<элэг 肉親; 肝臓)
 ханьса- 友達になる (<хань 友)
 амса- 味見する (<ам 口)
 харамса- 残念に思う (<харам 物惜しみした)
 нойрсо- (敬)おやすみになる (<нойр 睡眠)
 уурса- (文語)怒る (= уурла- (口語)怒る) (<уур 怒り)

<参考>

この接尾辞 {-ca-} を構成要素としてもつ出名名詞複合接尾辞に {-car} (~ -суу) があり, これは 《~を欲した, ~を好んだ》 という意味を表し, 次のような形成過程を経て成立している.

Proto-Mo.*-sa- + *-γ/-γū > Mo.-saγ ~ -saγu
 (N→V) (V→N) (N→N)
 > Kh. {-car} (~ -суу)
 (vide ③⑨ {-car} (N→N))

1) この接尾辞 {-ca-} は, 通時的に動詞語幹 хүсэ- (Mo.küse-) 《望む, 欲する》が接尾辞化して成立したとする説が, 一部のモンゴル人学者たちの間にあるが, これには一種の民間語源 (folk etymology) が働いているものと考えられる.

хүсэ- (望む) …→ {-ca-} (欲望動詞)
民間語源 (N→V)

e.g. мах хүсэ- (肉を望む) > махса- (肉を食べたがる)

⑪ {-га-}

この接尾辞は、名詞語幹 (主に実詞、一部形容詞) に接続して、《a) ~が生ずる、起こる、できる、b) ~の状態になる》¹⁾ といった意味をもつ自動詞語幹を形成する。(生起動詞)

a) (主に実詞に対して) 《~が生ずる、起こる、できる》の意を表示する。

- мананта- 霧がかかる (< манан 霧)
- буданта- もやがかかる (< будан もや)
- цанта- 霜がつく、霜でくもる (< цан 霜)
- мөстө- 氷になる、凍る (< мөс 氷)
- хорхойто- 虫がわく (< хорхой 虫)
- бөөстө- しらみがつく (< бөөс しらみ)
- хусамта- (鍋底に)乳のかすがたまる
(< хусам (乳を沸かした後に、鍋底に残る)乳のかす)
- хагта- ふけがでる (< хаг ふけ)
- нуухта- 目やにがでる (< нуух 目やに)
- эвэртэ- まめ(たこ)ができる (< эвэр まめ, たこ)
- сайрта- ひびができる (< сайр ひび)
- сэвхтэ- そばかすができる (< сэвх そばかす)
- үрчлээтэ- しわができる (< үрчлээ しわ)
- цэврүүтэ- 水ぶくれができる (< цэврүү 水ぶくれ)
- шивэртэ- 足がにおう (< шивэр 足のおい)
- хулмаста- わきががにおう (< хулмас わきが)
- үнэртэ- においがする (< үнэр におい)
- гэрэлтэ- 光を放つ、輝く (< гэрэл 光)
- хиртэ- 汚れる (< хир 汚れ)
- сэвтэ- (物に)きずができる (< сэв きず)
- шарта- 二日酔いになる (< шар 胃酸, 胸やけ)
- шархта- 負傷する (主に皮膚の外傷に対して) (< шарх 傷)
- бэртэ- けがをする (主に骨折、脱臼に対して)
(< бэр 腫物のかさぶた)
- гэмтэ- けがをする (бэртэ-, шархта- のいずれの意でも)
(< гэм 過ち)

- b) (一部、形容詞に対して) 《～の状態になる》の意を表示する。
 ойрто- 近づく (<ойр 近い)
 оройто- 遅れる (<орой (時間が)遅い)
 балиарта- 汚くなる (<балиар 汚い)
 баларта- (意識が)もうろうとなる (<балар ぼんやりした)
 мангарта- 馬鹿になる, 馬鹿なまねをする (<мангар 馬鹿な)
 цэнхэртэ- 青みがかかる, 水色に見える (<цэнхэр 水色の)

1) すなわち, 次のようである.

形式	意味
{-та-} (N→V)	a) 《тухайн юм бий болох, тухайн юмтай болох》 гэсэн утгатай b) 《тийм болох》 гэсэн утгатай

⑫ {-ца-}

この接尾辞は, 名詞語幹に接続して, 以下のように二つの意味を表示し, 主に自動詞語幹を形成する.

- a) (主に実詞に対して) 《相互に/共同して～する》の意を表示する¹⁾. (相互・共同動詞)
 b) (主に形容詞に対して) 《～を感じる, ～の状態になる》の意を表示する. (自動詞形成)
 … 特に, 不快感を表す名詞語幹に接続される場合が多い.

a) I. 相互動詞 (双方の者が互いに動作を行う) の場合

… これは, 出名動詞接尾辞 {-ца-} の中心的意味を占め, 大部分の例がこれに相当する.

- хайнца- 引き分ける (<хайн 引き分け)
 талца- 二組に分かれる (<тал 半分)
 хагаца- 別れる (<хага 破壊, 打撃表示 (バキッ, バリッ))
 мөрийцэ- かけをする (<мөрий かけ)
 булхайца- ペテンにかける (<булхай ペテン)
 давхаца- 重なる (<давхар 二重の)
 тэнцэ- つり合う (<тэн 振り分け荷物の一方)
 хариуца- 責任をとる (<хариу 返事)
 зэрэгцэ- 横に並ぶ (<зэрэг 一緒に)

II. 共同動詞 (大勢の者が共に動作を行う) の場合

… これは、I. に比べると数的に少ない。

зугааца- (何人かで) 気晴らしする (< зугаа 気晴らし, 娯楽)

さらに、遊びの名前に当該接尾辞 {-ца-} をもつものがあるが、これは、この接尾辞の表示する相互・共同動詞の意を一層明確にしてくれるものである。

тарвагаца- (= чоно тарвага болж тоглох)

タルバガごっこをする (一人が狼, 他の者がタルバガになる遊び) (< тарвага ТАРБАГА (草原のマーモット))

шагайца- ~ шагааца- (~ шагалца-)

くるぶしの骨で遊ぶ (< шагай ~ шагаа くるぶしの骨)

шатарца- (= шатарда-) チェスをして遊ぶ (< шатар チェス)

現在、ハルハ方言ではあまり使われないようであるが、次のような語が辞書に記載されている。

дугуйца- 輪になって遊ぶ (< дугуй 円, 輪)

данхайца- ダンハイをして遊ぶ

(< данхай ДАНХАЙ (小骨遊び))

なお、この出名動詞接尾辞 {-ца-} は、出動動詞接尾辞 {-лца-} (共同態形成) と表示する意味が合致するところが多く、通時的には、{-лца-} の構成要素である*{-ца-} と同一形態素である蓋然性が極めて大きい。

Proto-Mo.*-ča- > Mo.-ča- > Kh.{-ца-}
(N→V) (N→V)

Proto-Mo.*-l + *-ča- > Mo.-lča- > Kh.{-лца-}
(V→N) (N→V) (V→V)

(vide ④ {-лца-} (V→V))

b) халууца- 暑く感じる (< халуун 暑い)

дулааца- 暖かく感じる, 暖まる (< дулаан 暖かい)

сэрүүцэ- 涼しく感じる, 涼む (< сэрүүн 涼しい)

жихүүцэ- 寒さでぞくっと震える

(< жихүүн ぞくっとするほど寒い)

зэвүүцэ- 嫌気がさす (< зэвүү 嫌悪)

эгдүүцэ- 憤慨する (< эгдүү 憤慨)

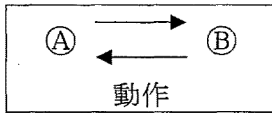
унтууца- 腹を立てる (< унтуу 怒り)

дургүйцэ- 嫌いになる (< дургүй 嫌いな)

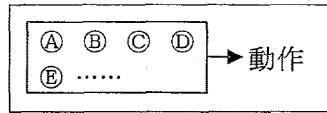
аягүйцэ- (= аягүйдэ-) 不愉快になる (< аягүй 不愉快な)

тавгүйцэ- (= тавгүйдэ-) 不機嫌になる (< тавгүй 不機嫌な)

1) この意味を図示すれば、概略次のようになる。



I. 相互動詞



II. 共同動詞

⑬ {-чи-}

この接尾辞は、ごく限られた名詞語幹に接続し、《何度も～する》という反復の意味をもつ他動詞を形成する。(反復動詞)

тоочи- 列挙する、数え上げる (<тоо 数)

эрээчи- 落書きする、走り書きする (<эрээн まだら)

сараачи- 落書きする、走り書きする (cf.сараалж 格子網)

例えば、тоочи- は、《何度も数える (→列挙する、逐一話す)》、эрээчи-《何度もまだらにする (→走り書きする)》が原義であろう。

なお、この出名動詞接尾辞 {-чи-} は、起源的には、хугачи- 《何度も折る》 (<хуга 《分離、破壊表示 (ポキッ、パチッ)》)、гасчи- 《何度も切る》 (<гас 《切断表示 (パチン)》) 等に見える出小動詞接尾辞 ① {-чи-} (P→V) と同一形態素と考えてよからう。

⑭ {-чла-}

この接尾辞は、名詞語幹に接続して、主に A) 他動詞語幹を、一部 B) 自動詞語幹を形成し、以下のようにいくつかの意味を表示する。

A) 他動詞形成

a) 《～とみなす、～と見る》の意を表示する。

b) 《～をする、～の状態にする (～化する)》の意を表示する。

B) 自動詞形成

(若干の動植物名に対して) 《～をとりに行く》の意を表示する。

A)

a) ахчла- 年長者とみなす (<ах 兄)

дүүчлэ- 年下の者として年長者に仕える (<дүү 弟)

алагчла- 不公平に見る (<алаг 不公平な)

чухалчла- 重要視する (<чухал 重要な)

дээдчлэ- 尊敬する (<дээд 上の)

- b) үрчлэ- 養子にする (<үр 子)
 үгчлэ- 逐語的にする (<үг 単語)
 санаачла- 発案する (<санаа 思い, 考え)
 сурталчла- 宣伝する (<суртал 教義)
 ёсчло- 慣習通りにする (<ёс 慣習)
 боолчло- 奴隷化する (<боол 奴隷)
 ардчла- 民主化する (<ард 人民)
 / хялбарчла- 簡単にする (<хялбар 簡単な)
 дотночло- 親しくする (<отно 親しい)
 шинэчлэ- 新しくする (<шинэ 新しい)
 өөрчлө- 変える (<өөр 異なる)
 илчлэ- 明らかにする (<ил 明らかな)
 урьдчла- 前もってする (<урьд 以前)
 хямдчла- 安い方にする (安い方を選ぶ) (<хямд 安い)

この意味 A), b) に属するが、例外的に自動詞を形成するものに次のものがある。ただし、数的には非常に少ない。

- мэндчлэ- あいさつする (<мэнд あいさつ)
 үйлчлэ- サービスする (<үйл 行為)

さらに、この接尾辞 {-чла-} は、以下のように若干の特殊表現の一部を構成しているが、これも意味的には、b) の発展形と考えてよからう。

гэхчилэн (Mo.gekü-çile-n) ~等 (lit. ~と言うように)
(N→V)(V→N) (<гэх 言う)

мэтчилэн (Mo.metü-çile-n) ~等 (lit. ~等のように)
(N→V)(V→N) (<мэт ~のような)

e.g. энэ мэтчилэн このように

гэх мэтчилэн ~等

V-санчилян (Mo.-γsan-çila-n) ~したように (<V-сан ~した)
(N→V)(V→N)

(e.g. бичсэнчилэн 書いたように)

- B) тарвагачла- タルバガ狩りに行く
 (<тарвага Тарбага (草原のマーモット))
 үнэгчлэ- キツネ狩りに行く (<үнэг キツネ)
 чацарганачла- チャツアルガンをとりに行く
 (<чацаргана ЧАЦАЛГАН (くろうめもどき))
 жимсчлэ- 果物とりに行く (<жимс 果物)

なお、この接尾辞 {-чла-} は、共時的にはこれ以上は形態素として分節できないが、通時的には、次のように出名名詞接尾辞 {-ч} (行為者表示で、専ら実詞に接続) と出名動詞接尾辞 {-ла-} (主に他動詞形成で、《～をする》の対象関連動詞を作る) が類推的創造 (analogical creation) によって、複合接尾辞 {-чла-} として成立した後に、一部実詞のみならず、形容詞にも接続されるという新形式を生み出すに至ったものと考えられる。

Proto-Mo.*-či + *-la- > Mo.-čila- > Kh.{-чла-}

(N→N) (N→V) (N→V)

(vide ⑤⑩ {-ч} (N→N), ④ {-ла-} (N→V))

⑮ {-шаа-}

この接尾辞は、名詞語幹に接続して、一般に《～だとみなす、認める》という共通の意味をもった、主に他動詞語幹を形成する。(容認動詞)

сайшаа- 賞賛する (< сайн 良い)

муушаа- 非難する (< муу 悪い)

буруушаа- 誤りとみなす、非難する (< буруу 間違った)

бэлэгшээ- 吉兆とみなす (< бэлэг 吉兆)

бэрхшээ- 困難とみなす、避ける (< бэрх 困難な)

төвөгшөө- 面倒くさがる (< төвөг 面倒, 厄介)

тээршаа- (~ тээршээ-) 重荷に感じる (< тээр 重荷)

ханьшаа- 友になろうとする (< хань 友, 仲間)

элэгшээ- 身内のように感じる (< элэг 血族, 肉親; 肝臓)

өршөө- 容赦する (← 慈悲深く感じる)

(< өр みぞおちの下の所)

次にみられる若干の語には、この接尾辞の形成過程の痕跡が見られる点で重要である。

адилшаа- 同じとみなす、同一視する

(< адилши- 同じになる < адил 同じの)

зөвшөө- 正しいとみなす、是とする

(> зөвшөөр- 許可する、認める)

(< зөвши- 協議する (← 正しくなる) < зөв 正しい)

この接尾辞 {-шаа-} は、共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節することが不可能な場合がほとんどだが、先に掲げた адилшаа-, зөвшөө- 等のように若干の語で、その形成過程の痕跡

が見られることから、通時的には、やはり出名動詞接尾辞 {-ши-} と出動動詞接尾辞 {-aa-} (使役・他動詞形成) からなる複合接尾辞であった蓋然性が極めて大きい。

Proto-Mo.*-si- + *-γā- > Mo.-siya- > Kh.{-шаа-}
 (N→V) (V→V) (N→V)
 (vide ⑩ {-ши-} (N→V), ① {-aa-} (V→V))

⑩ {-ши-}

この接尾辞は、名詞語幹 (実詞、形容詞の両方) に接続し、《a) ~をわがものとする、b) ~の状態になる》といった意味をもつ動詞語幹を形成する。(領有動詞)

a) 《~をわがものとする》の意を表示する。

- амтши-¹⁾ 味をしめる (<амт 味)
- гэмши- 後悔する (<гэм 罪)
- алдарши- 名声を得る (<алдар 名声)
- завши- 機会をとらえる (<зав 暇)
- мэргэши- 資格を得る (<мэргэн 賢明な)
- эзэмши-²⁾ わが物とする、所有する (<эзэн 主人)
- үнэмши-³⁾ 信用する (<үнэн 真実)
- урамши- 元気づく (<урам 意気込み)
- удамши- 遺伝する (<удам 血統)
- хоногши- 心に残る (<хоног 一昼夜)
- нутагши- 住み慣れる (<нутаг 居住地)
- идээши- 慣れ親しむ (<идээ 食物)
- суурьши- 定着する (<суурь 基礎)
- байрши- 定住する (<байр 場所)
- орши- 存在する (<орон 場所)
- хэвши- 習慣になる (<хэв 習慣)
- занши- 習慣になる (<зан 性格)

b) 《~の状態になる》の意を表示する。

- хаварши- 春になる (<хавар 春)
- зунши- 夏になる (<зун 夏)
- намарши- 秋になる (<намар 秋)
- элбэгши- (量が)多くなる (<элбэг たくさんの)
- омогши- 傲慢になる (<омог 傲慢)
- идэрши- 成人になる (<идэр 若い)
- зөвши- 協議する (←正しくなる) (<зөв 正しい)
- ижилши- (言語学)同化する (<ижил 全く同じの)
- ондооши- (言語学)異化する (<ондоо 他の, 異なった)

- 1) амтши-には、当該接尾辞 {-ши-} の表示する領有動詞の意がかなり明確に現れていることは、同じ派生語 амтла- との比較より、一層明らかである。

амтши- 味をしめる (← 味をわがものとする)

/ амтла- 味付けする；味見する (< амт 味)

なお、この単語を用いたモンゴル語のことわざに次のものがある。

Амташсан хэрээ 味をしめたカラスは

Арван гурав эргэнэ 13 回やって来る

これは、<一度味をしめた者は、何度でも同じ事を繰り返すものだ> という意を示す。

- 2), 3) モンゴル語 (モンゴル文語及び現代モンゴル語) では、н (/n/) で終わる語幹に、с (/s/) または м (/ʃ/) で始まる接尾辞を接続する際、異化により -мс- (/ -ms-/) または -мш- (/ -mʃ-/) という新たな子音群をなすという特徴がある。

これは、言語学的には、次のように説明できる。

/n/	→	/m/	/ /s/	~	/ʃ/
(+ 歯音)		(- 歯音)	(+ 歯音)		(+ 歯茎音)
(+ 鼻音)		(+ 鼻音)	(+ 摩擦音)		(+ 摩擦音)

この典型的な例に、次のものがある。

- a) ㊸ {-саг} (N→N), ㊹ {-мсаг} (N→N) (Мо.-say, -sur)
хөнгөмсөг 軽率な (< хөнгөн 軽い)
хүүхэмсэг (男に対して)女好きの (< хүүхэн (若い)女性)
гангамсаг 粹な、だてな (< ганган おしゃれな)
- b) ㊺ {-ши-} (N→V) (Мо.-si-)
эзэмши- わが物とする、所有する (< эзэн 主人)
үнэмши- 信用する (< үнэн 真実)
- c) ㊻ {-сра-} (N→V) (Мо.-sura-)
саймсра- おべっかを使う (< сайн 良い)

㊼ {-шира-}

この複合接尾辞は、接尾辞 {-ра-} のもつ自動詞性の意により、名詞語幹に接続して、《自然に(ひとりで)~になる》という意味をもつ自動詞語幹を形成する。(自動詞形成)

тайвшира- 落ち着く, (心が)静まる (<тайван 平和(な))
олширо- ふえる, 多くなる (<олон たくさんの, 多くの)
удашира- 長引く, ぐずぐずする (<удаан ゆっくり)
лавшира- 確実となる (<лав 確かに)
халшира- 避ける, 気が進まない (<хал 困難)
зүгширэ- 慣れる (<зүг 方向)
бодлогоширо- 考えにふける, 熟考する
(<бодлого 考え, 思考)

санаашира- 気遣う, 心配する (<санаа 思い)
саймшира-¹⁾(~ саймсра-) おべっかを使う, 取り入る
(<сайн 良い)

この接尾辞 {-шира-} は, 共時的にはこれ以上はさらに形態素として分節できないが, 通時的には, 明らかに出名動詞接尾辞 {-ши-} と出動動詞接尾辞 {-ра-} (自動詞形成) からなる複合接尾辞であり, 次のような形成過程を経て成立している.

Proto-Mo.*-si- + *-ra- > Mo.-sira- > Kh.{-шира-}
(N→V) (V→V) (N→V)
(vide ⑯ {-ши-} (N→V), ⑬ {-ра-} (V→V))

1) 元の形式は, саймсра- (Mo.sayi-m-sura-) だが, 出名動詞接尾辞 {-шира-} をもつ多数の語の類推により, саймсра-から саймшира-へと形を変えて, 後に成立したものである.

ただし, 出名動詞接尾辞 -сра- (Mo.-sura-) は, あくまでも -шира- (Mo.-sira-) の変種と見なすべきであろう.

4. 出動動詞接尾辞

(Deverbal verbal suffixes / V→V)

A) 態接尾辞 (voice suffixes)

現代モンゴル語では、次の四つの態接尾辞を認めることができる。

① 使役態 (causative voice)

… {-үүл-} = /-aa- ~ -га- ~ -үүл- ~ -лга-/

② 受動態 (passive voice) … {-гда-} = /-гда- ~ -да- ~ -га-/

③ 相互態 (reciprocal voice) … {-лда-} → {-цалда-} (拡張形)

④ 協同態 (co-operative voice) … {-лца-} → {-ца-} (縮約形)

⑤ 多数態 (collective voice) … {-цгаа-}

また、これら態接尾辞の接続する動詞語幹及び、その結果形成された動詞語幹の環境を、自動詞、他動詞の観点から見ると、モンゴル語には次のような法則がある¹⁾。

① 使役態接尾辞は、自動詞語幹、他動詞語幹のいずれにも接続するが、その結果、他動詞語幹のみ形成する。

② 受動態接尾辞は、他動詞語幹にのみ接続し、自動詞語幹を形成する。

③ 相互態接尾辞は、自動詞語幹、他動詞語幹のいずれにも接続するが、その結果、自動詞語幹のみ形成する。

④ 協同態接尾辞は、自動詞語幹、他動詞語幹のいずれにも接続し、それぞれ自動詞語幹、他動詞語幹を形成する。

⑤ 多数態接尾辞は、自動詞語幹、他動詞語幹のいずれにも接続し、それぞれ自動詞語幹、他動詞語幹を形成する。

1) これを図示すれば、次のようになる。(vi = 自動詞語幹 / vt = 他動詞語幹)

①	{-үүл-}	/	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$	→	[vt]
②	{-гда-}	/	[vt]	→	[vi]
③	{-лда-}	/	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$	→	[vi]
④	{-лца-}	/	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$	→	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$
⑤	{-цгаа-}	/	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$	→	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$

Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаарын найруулгын үүрэг*, УБ, 1982, pp.14-15.

- ① 使役態接尾辞 {-аа-} = /-аа- ~ -га- ~ -уул- ~ -лга-/
 これは、主に《a)使役・授与(～させる, ～してもらう), b)迷惑・被害(～られる)》の二つの意味を表示する。
- I) {-аа-} … この接尾辞は、短母音で終わる自動詞語幹に接続し、他動詞語幹を形成する。

{-аа-} : [vi] → [vt] / {__V#}__ (V→V) (短母音)
--

халаа- 熱する, 暖める (<хала- 熱くなる, 暖かくなる)
 хатаа- 乾かす (<хата- 乾く)
 унтраа- 消す (<унтра- 消える)
 үлдээ- 残す (<үлдэ- 残る)
 хураа- 集める (<хура- 集まる)
 шатаа- 燃やす (<шата- 燃える)
 зогсоо- 止める (<зогсо- 止まる)
 тогтоо- 定める, 決める (<тогто- 定まる, 決まる)
 асаа- 火をつける (<аса- 火がつく)
 удаа- 長引かせる, 引き延ばす (<уда- 時がたつ)
 бүтээ- 創造する, 完成する (<бүтэ- 実現される, うまくいく)
 сөнөө- 滅ぼす (<сөнө- 滅びる)
 түгээ- 広げる (<түгэ- 広がる)
 хороо- 減らす (<хоро- 減る)
 оноо- 命中させる, 割り当てる (<оно- 命中する)
 хөлдөө- 凍らせる (<хөлдө- 凍る)
 согтоо- 酔わせる (<согто- 酔う)
 дусаа- 滴らせる (<дуса- 滴る)
 сэрээ- 目覚めさせる, 起こす (<сэрэ- 目覚める) etc.

<考察>

1. 形態上は接尾辞 {-аа-} (V→V) を有するが、その本来の意味を失い、対応する無標項と同一の機能をもつ語もまれに見られる。
- зугтаа- (Мо.јиγутаа-) 逃げる (<зугта- (Мо.јиγута-) 逃げる)
 e.g. Дорж зугтаагаад (~ зугтаад) явжээ.
 ドルジは、逃げて行ってしまった。(аад: 動詞連用語尾 (分離))

2. 若干の {__V#} (自動詞語幹) に対しては、接尾辞 {-aa-}, {-уул-} のいずれも接続することがある。

例えば、現在ハルハ方言では、次のような例が観察される¹⁾。

動詞語幹	+ {-aa-}	+ {-уул-}	表示する意味
амра- 休む	амраа-	амруул-	休ませる
өнгөрө- 過ぎる	өнгөрөө-	өнгөрүүл-	過ごす
уяра- 感動する	уяраа-	уяруул-	感動させる
хиргэ- 汚れる	хиргээ-	хиргүүл-	汚す

すなわち、若干の語において、次のような交替が見られることがある。

{-aa-} ~ {-уул-} / {__V#}__ (V→V) (自動詞語幹)
--

なお、これは短母音で終わる自動詞語幹に接続しようという、両接尾辞の機能の類似性から生じたものであろうが、この現象は、モンゴル文語のレベルでも見られ、歴史的に遡らないと結論は出せないが、両方の接尾辞の弁別性があまり明確でなかった蓋然性もありうる。

- 1) この例に関して、筆者がウランバートル滞在中観察した所では、{-aa-} 形のほうが、{-уул-} 形よりも高い頻度で用いられていることが観察できた。

II) {-ra-} … この接尾辞は、次の環境で現れる¹⁾。

{-ra-} : [v ⁱ vt] → [vt] / {__C#}__ (C = д, с, л, рの子音) (V→V)

(1) {__д#} の時

овтгө- 痛める (<овд- 痛む)

цагга- 満腹させる (<цад- 満腹する)

устга- 絶滅させる, なくす (<усад- 絶滅する)
 дуртга- 思い出させる (<дурл- 言及する, 述べる)
 нэгтгэ- 統一する, 一つにする (<нэгд- 統一される, 一つになる)
 上の例から, ハルハ方言では, 次のような変化が起こっている
 のがわかる.

$д \rightarrow г / _ г$
$\left(\begin{array}{l} + \text{ 歯音} \\ + \text{ 有声} \end{array} \right) \quad \left(\begin{array}{l} + \text{ 歯音} \\ - \text{ 有声} \end{array} \right) \quad \left(\begin{array}{l} + \text{ 軟口蓋音} \\ + \text{ 有声} \end{array} \right)$

すなわち, д (/d/) で終わる語幹に г (/g/) で始まる接尾辞を接続
 する際, ハルハ方言では, 異化により前者が無声化し, -тг- (/tg/)
 という子音群をなすという特徴がある²⁾.

(2) {__c#} の時

- босго- 起こす, 立てる (<бос- 起きる, 立つ)
- дуусга- 終わる (<дуус- 終わる)
- төгсгө- 終わる, 卒業する (<төгс- 終わる, 終了する)
- өсгө- 育てる, 繁殖させる (<өс- 成長する, 育つ)
- урсга- 流す (<урс- 流れる)
- дурсга- 記念とする (<дурс- 思い出す)
- баясга- うれしくさせる, 喜ばせる (<баяс- 喜ぶ)
- хувьсга- 変化させる (<хувьс- 変化する)
- исгэ- 酸っぱくする, 発酵させる
 (<ис- 酸っぱくなる, 発酵する)
- хийсгэ- 吹き飛ばす (<хийс- (風で)吹き飛ばす)
- нисгэ- 飛ばせる (<нис- 飛ばす)
- дасга- 慣らす (<дас- 慣れる)
- сонсго- 聞かせる (<сонс- 聞く) etc.

(3) {__л#} の時

- болго- ~にする (<бол- ~になる)
- салга- 離す (<сал- 別れる)
- хөдөлгө- 動かす (<хөдөл- 動く)
- буцалга- 沸騰させる (<буцал- 沸騰する)
- хувилга- 変える (<хувил- 変わる)
- арилга- (汚れを)落とす (<арил- (汚れが)落ちる)
- олго- 与える (<ол- 見つける, 手に入れる)
- тулга- 合わせる; 押しつける (<тул- 支える; 届く, 達する) etc.

(4) {_p#} の時

- гарга- 出す (< гар- 出る)
сурга- 教える (< сур- 学ぶ)
хүргэ- 届ける, 伝える (< хүр- 至る, 着く)
норго- ぬらす (< нор- ぬれる)
хөөргө- うぬぼれさす (< хөөр- 自慢する)
сандарга- あわてさせる (< сандар- あわてる)
торго- 留める, つける (< тор- 留まる, 引っかかる)
дүүргэ- 一杯にする, 満たす (< дүүр- 一杯になる, 満ちる) etc.

<考察>

1. この使役態接尾辞 {-ra-} が, 長母音化する例が, ハルハ方言で若干見られる。

гэсгээ- ~ гэсгэ- 溶かす (< гэс- (凍った肉, 土等が)溶ける)
унагаа- ~ унага- 倒す, 落とす (< уна- 倒れる, 落ちる)

これらは, 二重使役 (-гэ- + -ээ-, -га- + -аа-) によるものではなく, 話し言葉で長母音化したのを直接書き言葉に踏襲したものであり, これに関しては, 文体上, 短母音で統一表記すべきであるという説もある³⁾。

たとえば, 後者の例を一つ挙げてみると, 次のようである。

Чи цагаа унагаачихаа юу?

Үгүй, унагаагүй (~ унагаагагүй).

お前は時計を落としてしまったのか。

いいえ, 落としてはいない。

(-аагүй: 継続連体語尾の否定 (~しなかった; ~していない))

なお, унага- (< уна-) は, /_V#/ (短母音終わり) の語に対して使役態接尾辞 {-ra-} が接続しており, 一種の例外と考えられるが, これにはもう一例次のものがある。

анагаа- (Mo. anaγa-) 治す, 治療する

(< ана- (Mo. ana-) (病気が)治る, 良くなる)

2. 形態上は接尾辞 {-ra-} (V→V) を有するが, 対応する無標項とほぼ同じ意味を表示する語がまれに見られる。

бэлтгэ- (Mo. beledke-), бэлд- (Mo. beled-) 準備する, 用意する

e.g. Та нар хичээлдээ сайн бэлтгээд (~ бэлдээд) ирэв үү?

みなさん, しっかり予習をしてきましたか。

3. сандар- (Mo. sandur-) 《あわてる》の使役態は, 本来 сандарга- (Mo. sandurya-) 《あわてさせる》が正しい形であるが, 話し言葉では, *сандра- のように短母音終わりの自動詞語として意識され,

そのため、сандраа- ~ сандруул-のような形も生じ、結果的には、ハルハ方言では現在 сандарга- ~ сандраа- ~ сандруул-のように三つの形が共存している。

сандар- > сандарга- (本来の形式)
 ↳ *сандраа- > сандраа- ~ сандруул- (新形式)

- 1) ただし、モンゴル文語のレベルでは、この接尾辞 {-га-} は、次のような相補的分布をなしている。

Mo.-qa-, -ke-	/	{__C#}__	(C = d, s)
Mo.-ya-, -ge-	/	{__C#}__	(C = l, r)

- 2) 特に、出名名詞接尾辞 {-д-} (N→V) の後に、この使役態接尾辞 {-га-} (V→V) を接続するときには、規則的に異化による無声化がハルハ方言で見られる。

{-д-} → {-т-}	/	{名詞}__{-га-}
(N→V)		(V→V)

この例として、たとえば、次のような例を挙げることができる。

名詞語幹	+ {-д-} (~ -с-) (N→V)	+ {-га-} (V→V)
урт 長い	уртад- (~ уртас-) 長くなる	уртага- (~ уртасга-) 長くする
богино 短い	богинод- (~ богинос-) 短くなる	богиногто- (~ богиносго-) 短くする
их 大きい	ихэд- (~ ихэс-) 大きくなる	ихэтгэ- (~ ихэсгэ-) 大きくする
бага 小さい	багад- (~ багас-) 小さくなる	багагга- (~ багасга-) 小さくする

- 3) Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УВ, 1982, р.41.

III) {-уул-} … この接尾辞は、次の環境で現れる。

{-уул-} :	$\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$	→	[vt]	/	{_V#}_
(V→V)					(短母音)

оруул- 入れる (<оро- 入る)
 явуул- 行かせる, 送る (<ява- 行く)
 ирүүл- 来させる (<ирэ- 来る)
 баяжуул- 豊かにする (<баяжи- 豊かになる)
 цуглуул- 集める, 収集する (<цугла- 集まる)
 харьцуул- 比較する (<харьца- 関係する)
 өрнүүл- 広げる, 発展させる (<өрнө- 広がる, 発展する)
 ургуул- 育てる, 伸ばす (<урга- 育つ, 伸びる)
 дамжуул- 伝える (<дамжи- 伝わる)
 гайхуул- 自慢する (<гайха- 驚く)
 хөгжүүл- 発展させる, 進歩させる
 (<хөгжи- 発展する, 進歩する)
 төрүүл- 生む (<төрө- 生まれる)
 дээшлүүл- 改善する, 高める (<дээшлө- 良くなる, 向上する)
 тэнцүүл- つり合わせる (<тэнцэ- つり合う)
 тааруул- 合わせる, 一致させる (<таара- 合う, 一致する)
 үзүүл- 見せる, 示す (<үзэ- 見る)
 уншуул- 読ませる (<унши- 読む)

<例文>

Би урд шөнө унтаж байхдаа бясанд хазуулсан.

私は昨夜眠っている時に南京虫にかまれた。(<хаза- かむ)

<考察>

1. ав-《取る》の使役態は、例外的に авахуул-《取らせる》となるが、これは、通時的には авахуул- <Мо.abqayul- (← ab-qa-yul-) の三つの形態素に分節でき、形態的には二重使役であったと筆者は解釈している。

すなわち、この語形成に関して、次の二つの形成段階を設定することができる。

Мо.ab-	→	I) *abqa-	→	II) abqayul-
		(-qa- / {_C#}_)		(-yul- / {_V#}_)

その他、モンゴル文語では、Mo.abqul- という語形も見られるが、これは次のように説明できよう。まず、この語は、次のように音韻変化を被ったと考えられる。

1. [abqɑqɑ:ɮ-] → 2. [abqɑɣu:ɮ-] → 3. [abqɑ'u:ɮ-] → 4. [abq'u:ɮ-] → 5. [abχu:ɮ-]
(口蓋垂破裂音) (口蓋垂摩擦音)

すなわち、abqayul- と翻字されるモンゴル文語形は、おそらくこの第二段階を文字に写したものであろうし、『元朝秘史』の abqɑ'uul- は、まさに第三段階に該当するものである。そして、もう一つの文語形 abqul- は、この第四段階を翻字したものと思われる。

ちなみに現代ハルハ方言では、この авахуул- 《取らせる》という語は、次のように用いられる。

Би чамаар зургаа авахуулах гэсэн юм.

私は君に写真を撮ってもらいたい。GO.(写真, 君, 私)

Би чамтай зургаа авахуулах гэсэн юм.

私は君と一緒に写真を撮りたい。GO.(写真, 第三者, 君と私)

2. /_C#/ (子音) の語に対して、使役態接尾辞 {-уул-} ({_V#}_) が接続される最も典型的な例に、өг- 《与える》 > өгүүл- 《持ってもらおう》があり、これは、явуул- と類義語 (synonym) である。たとえばハルハ方言では、次のように用いられる。

Би чамаар багшдаа захиа өгүүлье.

私は君に先生のところへ手紙を持って行ってもらいたい。

GO.(手紙, 私, 私の先生)

Нансалмаа надаар чамд ном өгүүлсэн.

ナンサルマーは私に君にと本をよこしました。

GO.(本, ナンサルマー, 君)

IV) {-лга-} … この接尾辞は、次の環境で現れる。

<p style="text-align: center;">{-лга-} : $\begin{bmatrix} v_i \\ vt \end{bmatrix} \rightarrow [vt]$ / $\left\{ \begin{array}{c} VV\# \\ _ V\# \end{array} \right\} _$ (V→V) (長母音, 二重母音)</p>
--

(1) {__VV#} の時

- хийлгэ- させる, 作らせる (<хий- する, 作る)
заалга- 教わる, 教えてもらう (<заа- 教える)
буулга- 下ろす (<буу- 下りる)
даалга- 責任を負わせる, 委ねる (<даа- 責任を負う)
суулга- 坐らせる (<суу- 座る)
уулга- 飲ませる (<уу- 飲む)
гаалга- 予想させる, 当てさせる (<гаа- 予想する, 当てる)
шатаалга- 燃やさせる (<шагаа- 燃やす) etc.

(2) {__Vй#} の時

- онгойлго- あける (<онгой- あく)
байлга- いさせる, そのままにしておく (<бай- ある, いる)
айлга- こわがらせる (<ай- 恐れる, こわがる)
улайлга- 赤くする (<улай- 赤くなる)
харайлга- 跳ばせる (<харай- 跳ぶ)
гүйлгэ- 走らせる (<гүй- 走る) etc.

<例文>

Би Японд байхдаа Монхор багшаар монгол хэл заалгаж байсан.
私は日本にいる時, モンホル先生にモンゴル語を教わっていた。
Баяр зуныхаа амралтаар Дулмаагаар дээл хийлгэсэн.
バヤルは, 夏休み中に, ドルマーにデールを作ってもらった。

② 受動態接尾辞 {-гда-} = /-гда- ~ -да- ~ -га- /

これは, 主に《a) 受身(～られる), b) 迷惑・被害(～られる)》
の二つの意味を表示する。

I) {-гда-}

- (1) この接尾辞は, 原則として {__V#} (母音終わり) の他動詞語
幹に接続し, 自動詞語幹を形成する。
(2) また一部, {__C#} (子音終わり) の語に接続することがあるが,
その際は必ず母音 /a⁴/ が介入される。 (/a⁴/ = /a, e, o, ö /)
すなわち, 次のような語構造をなす。

{-гда-} : [vt] → [vi]	/	{__V#}__
(V→V)		{__C#} + /a ⁴ / +__

なお、この受動態接尾辞 {-гда-} の音韻的に条件づけられた異形態 II. {-да-} (~ -та-) は、非生産的でその環境は極めて限定されているのに対し、この形態素 {-гда-} は、かなり生産的に用いられている。

(1) {__V#} の時

- нуугда- 隠れる (< нуу- 隠す)
- урагда- 破れる (< ура- 破る)
- нээгдэ- 開かれる (< нээ- 開く)
- хаагда- 閉められる (< хаа- 閉める)
- мэдэгдэ- 感じられる, わかる (< мэдэ- 知る)
- үзэгдэ- 見える, 姿を見せる (< үзэ- 見る)
- харагда- 見える (< хара- 見る)
- санагда- 思われる, 感じられる (< сана- 思う, 考える)
- бодогдо- 考えられる (< бодо- 考える)
- ялагда- 負ける (< яла- 勝つ)
- сонгогдо- 選ばれる (< сонго- 選ぶ)
- гологдо- 嫌われる (< голо- 嫌う)
- нэмэгдэ- 増える, 上がる (< нэмэ- 付け加える)
- гээгдэ- なくなる (< гээ- なくす)
- солигдо- 交換される (< соли- 交換する) etc.

<例文>

Ойрдоо ажилдаа дарагдаад даанч завгүй байна.

最近、仕事に追われて非常に忙しい. (< дара- 押える)

(2) {__C#} の時

- өгөгдө- 与えられる (< өг- 与える)
- хуурагда- だまされる (< хуур- だます)
- сонсогдо- 聞こえる (< сонс- 聞く)
- дийлэгдэ- 負ける (< дийл- 勝つ, 負かす)

<例文>

Энэ даалгавар өмнө нь өгөгдсөн үү?

この宿題は、以前出されたか.

<考察>

ただし、通時的には元来、これらの例に対して、接尾辞 {-гда-} の異形態 {-да-} (~ -та-) が接続されるため、これら四例は、比較的新しい語形成方法によって生じたものと考えられる。すなわち、

上の四例は、モンゴル文語から現代ハルハ方言に至るまで、次のように変化した。(→は変化、～は共存を意味する)

モンゴル文語	現代ハルハ方言
ög- > ögte-	→ өгтө- (廃語) → өгөгдө-
qayur- > qayurta-	→ хуурта- ~ хуурагда-
sonus- > sonusta-	→ сонсдо- ~ сонсогдо-
deyil- > deyilde-	→ дийлдэ- ~ дийлэгдэ-

現代ハルハ方言のこの変化は、いわゆる類推によって、数的に劣勢な形式 {-да-} が、優勢な形式 {-гда-} に引きつけられ、一部次のような変化が生じたために起こったと考えられる。

{-да-} → {-Vгда-} / {__C#}__ (V→V)

II) {-да-} (～ -та-)

この受動態接尾辞は、原則として次の環境で現れ、また次のような相補的分布をなしている。

{-да-} : [vt] → [vi] / {__C#}__ (V→V)
--

- | |
|--|
| (1) {-та-} / {__C#}__ (C = в, г, р, с の子音) |
| (2) {-да-} / {__C#}__ (C = л の子音) |

しかしながら、実際には上に掲げた子音で終わるすべての動詞語幹に対して、この接尾辞 {-да-} (～ -та-) が接続できるというわけではなく、化石的形態として現代ハルハ方言では、次に掲げる数語に限定されている。

(1) {__C#} (C = в, г, р, с) の時

авта- (～ автагда-)¹⁾ 取られる (<ав- 取る)

өгтө-²⁾ (廃語) 与えられる (<өг- 与える)

хуурта- だまされる (<хуур- だます)

сонсдо-³⁾ 聞こえる (<сонс- 聞く)

хүртэ- 受ける, いただく, 頂だいする (<хүр- 到る, 着く)

(идэх, авах, олдох の敬語として)

гарта- やられる, 負ける (<гар- 出る)

(2) {__C#} (C = л) の時

олдо- 見つかる, 手に入る (<ол- 見つける, 手に入れる)

дуулда- 聞こえる (<дуул- 聞く)

дийлдэ- 負ける (<дийл- 勝つ, 負かす)

- 1) ハルハ方言の話し言葉では, авга- よりも авгагда- の方がよく用いられるようである。

この авгагда- は, 形態的には二重受身であり, 次の二つの形成段階を経て成立している。

Mo.ab-	→	I. abta-	→	II. abtayda-
		(-ta- / {__C#}__)		(-γda- / {__V#}__)

また, 機能的には, [vt] → I. [vi] → II. [vi] へと変化しており, 特に I. → II. の段階において, 自動詞語幹に受動態接尾辞が接続されている点は注目すべきであろう。なお, このような特殊な例は, 次のように, 他に少数の語に見られるだけである。

ява- 起こる, 進行する → явагда- 行なわれる (болох, хийх の意)

хоро- 減る → хорогдо- 少なくなる (цөөрөх の意)

элэ- (廢語) すりへる → элэгдэ- すりへる

<例文>

Кино долоо хоног явагдаж байна.

映画が一週間上映されている。

また, кино《映画》以外に, хурал《会議》, үдэшлэг《夜のパーティー》等に対しても, この語 явагда- は用いられる。

- 2) 現代ハルハ方言では, өгтө- は廢語となり, その代りに өгөгдө- が用いられている。(vide ②, I){-гда-}, (2) {__C#})

なお, この事実は, モンゴル滞在中, ハルハ人のインフォーマントより直接観察できたが, П. Бямбасан 氏も論文 ‘Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдал’, Хэл зохиол судлал, УБ, 1970, p.259 でこの点に触れている。

- 3) この語は, モンゴル文語の正書法で sonusta- と翻字され, また, ハルハ方言以外のモンゴル語諸方言で, 次のように現れる。

соносто- (ブリヤート語)

sonəsta- (カルムイク語)

以上のことを考慮すると, ハルハ方言では, 異化によって有声化 (sonjsto- → sonjsdo-) して成立したものと考えられる。

Mo.sonusta- > sonjsto- > sonjsdo- (Kh.сонсдо-)

③ 相互態接尾辞 {-лда-}

これは、主に《a) 相互 (互いに~する), b) 共同 (共に~する)》の二つの意味を表示する。

{-лда-}: $\begin{bmatrix} vi \\ vt \end{bmatrix}$ → [vi] / {動詞} ____
(V→V)

- a) この接尾辞 {-лда-} は、原則として《双方の動作主が互いに行為を及ぼし合う》ことを表す¹⁾。(基本的概念 I)
- зодолдо- なぐり合う (<зодо- なぐる)
ноцолдо- 取っ組み合う, つかみ合う
(<ноцо- つかむ, かみつく)
алалда- 殺し合う (<ала- 殺す)
барилда- 相撲をとる (<бари- つかむ, 握る)
байлда- 戦う, 戦争する (lit. 双方立ち合う)
(<бай- 存在する (原義は“立つ”))
тулалда- 戦闘する, 交戦する (<тул- 戦う, 争う)
маргалда- 議論する, 口論する (<марга- 議論する)
наалда- くつつく (<наа- 貼る)
булаалда- 奪い合う (<булаа- 奪う)
мергөлдө- 角で突き合う, 衝突する
(<мергө- 角で突く, ぶつける)
дайралда- 偶然出会う (<дайра- ぶつける, 攻撃する)
тэврэлдэ- 抱き合う (<тэврэ- 抱く) etc.
- b) 接尾辞 {-лда-} を有するすべての動詞語幹が a) の意味を示すわけではなく、一部《大勢の動作主が共に行なう》という意味をもつこともある²⁾。(基本的概念 II)
- шуугилда- 大勢で騒ぐ (<шууги- 騒ぐ)
хашгиралда- 大勢で叫ぶ (<хашгир- 叫ぶ)
бархиралда- 大勢でわめく (<бархира- わめく)
гүйлдэ- 大勢の人が走る (<гүй- 走る)
дагалда- 大勢がついて行く (<дага- ついて行く) etc.
- c) その他、一般に複数の動作主 (双方または大勢) の概念を失ってしまったものに次のものがある。
- оролдо- 努力する, 努める (<оро- 入る)

<考察1>

共時的立場からは、動詞語幹と接尾辞 {-лда-} を分節できなくなってしまう語もいくつかみられるが、これは平行例を見出したがり、あるいは通時的立場から分析することで、動詞語根または語幹を抽出できる可能性がある。

уралда- (Mo.uru-ldu-) 競う、競争する

(<*ура- (*uru-) > урагш (Mo.uru-γsi) 前へ)

хэрэлдэ- (Mo.kere-ldü-) 口論する、けんかする

(<*хэрэ- (*kere-) > хэрүүл (Mo.kere-gül) 口論、けんか)

/ (秘史) kere- 争う、kereldü- 争い合う、kerel 争い

<考察2>

—動詞 сундла-, сундалда- 《相乗りする》について—

ハルハ方言では、сундла-, сундалда- 《相乗りする》という二つの形が見られるが、後者は、前者に相互態接尾辞 {-лда-} を接続する際、動詞語幹末子音 -л- との重音脱落の結果、形成されたものと考えられる。

сундла- (Mo.sundala-)

> *сундлалда- > сундалда- (Mo.sundaldu-)
(V→V)

なお、この二つの動詞が用いられる例を以下に掲げる。

(Н. Надмид, 'Чухаг', Шог хошин зохиолын дээж, УБ, 1981, pp.175-177.)

• сундалда- の例 (p.175, 下から l.4)

Харин өнөөх нь бүүр ард нь сундалдчихаад чихэнд нь « Чухаг, Чухаг » гэж шивнэж байх шиг, ...

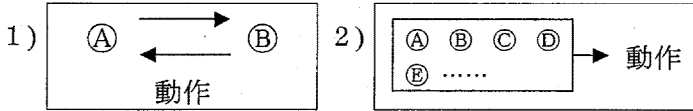
…ところが、それが完全に後に乗っかってきて耳元で《チョハック, チョハック》とささやいているようで、...

• сундла- の例 (p.176, 下から l.15)

... нээрэн намайг дуудсан, тэр байтугай ард сундлаад татаад байх шиг болсон гэж ...

「本当に僕を呼んだんだ。それだけでなく、後に乗って引っぱっているようだった」と...

1), 2) これをそれぞれ図示すれば、次のようになる。



なお、この a), b) の分類に関しては、次のものを参考にした。
 Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*,
 УБ, 1978, pp.156-157.

また、П. Бямбасан は、論文 ‘Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдал’, *Хэл зохиол судлал*, УБ, 1970, p.266 で、харилцан үйлдэх хэв (相互態) は、үйл гүйцэтгэх эзэн (動作主) が二人以上で、それは次の

- ① үйлийг харилцан гүйцэтгэх хоёр этгээд (行為を互いに実行する双方)
- ② хамтран гүйцэтгэх нэг төрлийн олон эзэд (共に実行する同種の大勢)

のいずれかであると述べているが、この分類も Л. Мишиг の分類と基本的には同じである。

③ の拡張形 {-цалда-}

この複合接尾辞は、通常一般の文法書には、ほとんど記述されることがないが、以下のようにいくつかの動詞語幹に接続して、主に相互態接尾辞 {-лда-} (相互 (互いに~する)) と同様の意を表示する。

булаацалда- (~ булаалда-) (物を奪い合う (<булаа- 奪う))

орооцолдо- (~ ороолдо-) もつれ合う, (舌が)もつれる
 (<ороо- 巻く)

шахцалда- (~ шахалда-) 押し合う (<шаха- 押す)

чихцэлдэ- (~ чихэлдэ-) 混雑して押し合う
 (<чихэ- 詰め込む, 押し込む)

зохицолдо- (~ зохилдо-) 互いに合う (<зохи- 合う)

хөөцөлдө- 互いに追いかけ合う, 一生懸命になる
 (<хөө- 追いかける)

авцалда- 互いに合う, つながる (<ав- 取る)

барьцалда- つかみ合う, くつつく (<бари- つかむ)

шөргөөцөлдө- 互いに摩擦が生じる
 (<шөргөө- (身体を)こすりつける)

<例文>

・ барьцалда- の例

Хөргөгчинд байгаа мах барьцалдаад хөлдчихжээ.

冷蔵庫にある肉がくつつき合って凍ってしまった。

Ноцолдож байгаад үхсэн хоёр гүрвэлийн барьцалдсан яс.

取っ組み合っていて死んだ二匹の恐竜のからみ合った骨

(Т. Намжим, *Монголын эрт ба эдүгээ*, УБ, 1996 の写真の解説より)

<考察>

当該接尾辞 {-цалда-} に見られる {-ца-} は、モンゴル語学者の間では、協同態接尾辞 {-лца-} に遡る蓋然性が大きいと考えられている¹⁾。

つまり、協同態接尾辞 {-лца-} と相互態接尾辞 {-лда-} の二つの形態素が連続する際、重音脱落 (haplology) によって、前者 {-лца-} の -л- が脱落した結果、複合接尾辞 {-цалда-} が成立したとする考えである。

Proto-Mo.*-lča- + *-ldu- > Mo.-čaldu- > Kh.{-цалда-}
(V→V) (V→V) (V→V)

また、中世モンゴル語でも、この複合接尾辞は、実証されることに注意されたい。

(△) qučalar mörgüčeldübe. (240)

種羊たちが互いに角で突き合った。

一般に、一つの動詞語幹に、このように二つの異なる態接尾辞 (voice suffix, хэвийн дагавар) が連続して接続する場合を、「複合態」(compound voice, нийлмэл хэв) というが、ここで一つ問題となるのは、モンゴル祖語において、「動詞語幹 + 協同態接尾辞 + 相互態接尾辞」の「複合態」を仮定したものの、実際には、この結合がモンゴル言語学史上、いまだ報告されておらず、なお若干の問題が残るように思われる²⁾。

1) П. Бямбасан, 'Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдал', *Хэл зохиол судлал*, УБ, 1970, p.265.

Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УБ, 1982, p.41.

2)「複合態」の通時的・共時的考察に関しては、小沢重男, N. Poppe, Г. Д. Санжеев, П. Бямбасанらの優れた研究論文があるが、これらの中にも「協同態接尾辞」+「相互態接尾辞」の「複合態」は報告されていない。

Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УВ, 1982, pp.87-92 参照。

④ 協同態接尾辞 {-лца-}

これは、主に《a) 共同(共に～する), b) 相互(互いに～する)》の二つの意味を表示する。

{-лца-} : [vi] → [vi] / {動詞}__ (V→V) [vt] → [vt]

例えば、次のような語がある。

- танилца- 知り合う (<тани- 知る)
- суралца- (共に)勉強する (<сур- 学ぶ)
- ярилца- 話し合う (<яри- 話す)
- хэлэлцэ- 話し合う (<хэлэ- 言う)
- оролцо- 参加する (<оро- 入る)
- харилца- 関係をもつ (<хари- 帰る)
- солилцо- 交換する (<соли- 換える)
- итгэлцэ- 信じ合う (<итгэ- 信じる)
- сугадалца- (互いに)腕を組む (<сугада- 腕をかかえる)

しかしながら、最近の研究書¹⁾によると、この協同態接尾辞 {-лца-} は、次の三つの異なる意味を表示すると報告されている²⁾。

- a) 《大勢の動作主が、一つの行為を共に行なう》(基本的概念 I)
- b) 《二つの動作主(または二つのグループ)が、一つの行為をそれぞれ互いに同程度に行なう》(基本的概念 II)
- c) 《動作主の一人(二人以上も含む)が、他の動作主の行なっている行為に参加する》(基本的概念 III)

また、Д. Отгонсүрэнの調査した所によれば、この三つの意味表示は、現代ハルハ方言では、文脈により、それぞれ次のような割合を占めているという興味深い考察もなされている³⁾。

{-лца-}の表示する意味 →	a)	b)	c)
	33.3%	31.7%	35%

例えば、彼の著書からその一例を引用すれば、次のようである。

- a) Түүнээс болсон бололтой гэж хүмүүс битүүхэн хэлэлцдэг.
「そのせいかもしれない」と人々は陰で言う。
- b) Буджав, Цээмаа хоёул халуун янагаар үнсэлцэн тарав.
ボドジャヴ, ツェーマーの二人は熱く接吻し別れた。
- c) Би ахтай дэлгүүрээр явалцаад ирье.
僕は兄さんと店へ行ってこよう。

なお、a), b) の意味は、③ 相互態接尾辞 {-лда-} と重複しうるため、この点で c) の意味は、両者 ({-лда-}, {-лца-}) を弁別できる唯一の概念と言えよう。ただ、c) の意味、すなわち《動作主の一人(二人以上も含む)が、他の動作主の行なっている行為に参加する》の場合、主語となる動作主は、その行為を行なう中心人物ではなく、ただ単に参加したことを表すことに注意しなければならない。例えば、先に挙げた c) の例文では、『行く』という行為を『兄』が中心となって行ない、『僕』はただそれに参加したことを表わしている。また、Л. Мишиг も彼の著書⁴⁾の中で、この点に触れ、例えば、

Би Цэрмаагийн дээлээс оёлцов.

私はツェルマーのデール(の一部)を(他の人と)縫い合った。と言えば、デールを縫った中心人物は、『私』ではなく、『ツェルマー』もしくは『誰か他の人』がその中心動作主となる、と例証している。

このように、協同態接尾辞を有する述語が奪格語尾 {-аас} を支配することがあるが、これは協同態が、逆に c) の意味を表示することを立証するものであり、このことは、モンゴル語では、奪格語尾が部分格《全体のうちの一部分を示す》の意味を有していることに起因している。

この例として、若干 Д. Отгонсүрэн の著書から引用すれば、次のようである⁵⁾。

Би айлын гэрээс барилцаад ирлээ.

私は隣のゲル(の一部)を(他の人と)建ててきた。

Түлээнээс нь хагалцаад ир.

その薪(の一部)を(他の人と)割ってこい。

Мориноос барилцаад аль.

馬(の一部)を(他の人と)つかまえて下さい。

<考察>

なお、この協同態接尾辞 {-лца-} (V→V) は、出名動詞接尾辞 {-ца-} (a), N→V) と表示する意味が合致するところが多く、通時的には、次のように出動名詞接尾辞 {-л} (V→N) と出名動詞接尾辞 {-ца-} (N→V) からなる複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-l- + *-ца- > Mo.-lца- > Kh.{-лца-}
(V→N) (N→V) (V→V)

(vide ⑫ {-ца-}, a) (N→V))

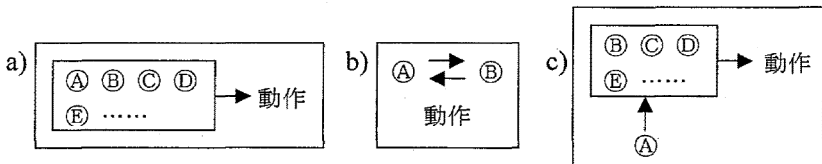
例えば、танилца- 《知り合う》, итгэлцэ- 《信じ合う》は、共時的には、動詞語幹 тани- 《知る》, итгэ- 《信じる》から直接派生したものであるが、同時に次のような形成過程を経て成立したと解することも全く不可能でないことが、その根拠の一つに挙げられよう。

тани- 知る > танил 知人 > танилца- 知り合う
(V→N) (N→V)

итгэ- 信じる > итгэл 信用 > итгэлцэ- 信じ合う
(V→N) (N→V)

1) Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УВ, 1982, pp.70-72 参照.

2) これをそれぞれ図示すれば、次のようになる。



3) Д. Отгонсүрэн, 上掲書, p.73.

4) Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*, УБ, 1978, p.150.

5) Д. Отгонсүрэн, 上掲書, pp.74-75.

④ の縮約形 {-ца-}

この接尾辞は、通常一般の文法書には、ほとんど記述されることがないが、以下のように、特に流音 л, р をもつ動詞語幹に接続し、協同態接尾辞 {-лца-} とほぼ同じ意味を表示する。

- харьца- (~ харилца-) (互いに)関係する (< хари- 帰る)
 барьца- (互いに)張り合う (< бари- つかむ)
 сольцо- (~ солилцо-) (互いに)交換する (< соли- 換える)
 солбицо- (~ солбилцо-) (互いに)交差する
 (< солби- 交差する)
 хөтөлцө- (~ хөтөллөцө-) (互いに)手をつなぐ
 (< хөтөл- (手で)引いて行く)

<考察>

通時的立場からすれば、当該接尾辞 {-ца-} は、一般に流音 л, р をもつ動詞語幹に、協同態接尾辞 {-лца-} を接続する際、重音脱落 (haplology) によって、後者 {-лца-} の -л- が脱落した結果、成立したものと考えられる。

*{-лца-} → {-ца-}	/	{ -л- }	—
(V→V)		{ -р- }	—
		(動詞語幹)	

⑤ 多数態接尾辞 {-цгаа-}

{-цгаа-} :	[vi] → [vi]	/	{動詞}—
(V→V)	[vt] → [vt]		

この多数態接尾辞は、動詞語幹(自動詞, 他動詞の両方)に接続して、《大勢の動作主(二人以上)が、みんなで一斉にある行為を行う》という意を表示する動詞語幹を形成する。換言すれば、当該接尾辞 {-цгаа-} を有する動詞の動作主は、必ず複数であるという特徴をもつ。

- хийцгээ- 大勢で一斉にする (< хий- する)
 орцгоо- 大勢で一斉に入る (< оро- 入る)
 үзэцгээ- 大勢で一斉に見る (< үзэ- 見る)
 ууцгаа- 大勢で一斉に飲む (< уу- 飲む)
 босцгоо- 大勢で一斉に起きる (< бос- 起きる)

<例文>

Сайн байцгаана уу ?

(大勢の人に対して) 今日。

Та нар маргааш эрт босцроогоорой.

皆さん、明日は早く起きて下さい。

B) アスペクト接尾辞 (aspect suffixes)

⑥ {-ла-}

この接尾辞は、動詞語幹(自動詞、他動詞の両方)に接続し、反復アスペクト(《何度も～する》)の意を表示する動詞語幹を形成する。

Д. Отгонсүрэн (1982) の調査によると、この接尾辞は、現代ハルハ方言では、およそ50あまりの動詞語幹に接続しうるといふ¹⁾。

цохило- 何度もたたく (<цохи- たたく)

гишгэлэ- 何度も踏む (<гишгэ- 踏む)

дусла- 何度も滴る、ぼたぼた落ちる

(<дуса- 滴る、ぼたっと落ちる)

цахила- 稲妻がぴかぴか光る (<цахи- 稲妻がぴかっと光る)

барила- 何度もつかむ (<бари- つかむ)

хаяла- 何度も両手を振る (<хая- 手を振る)

<考察>

なお、この反復アスペクト接尾辞 {-ла-} (Mo.-la- / -le-) は、中世モンゴル語でも次のような例が多数見られ、中世、現代を通じてかなり生産的な接尾辞であると言える。

(秘史) tatala- (塔塔刺-) 何度も引く

mürgüle- (木⁵児古列-) 何度も突く

1) Д. Отгонсүрэн, *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УБ, 1982, p.148.

⑦ {-лза-} = /-лза- ∞ -валза- ∞ -галза- /

これらの接尾辞は、動詞語幹に接続して、反復アスペクト(《何度も～する》)の意を表示する動詞語幹を形成する。

また、接尾辞 {-лза-} は、形態的に条件づけられた異形態 -валза-, -галза- をもつが、前者 -лза- に比べると、後者 -валза-, -галза- の接続しうる動詞語幹は極めて限定されており、非生産的である。

ただし、両者は、{-валза-}が身体の一部等、より具体的事象を表示するのに対し、{-галза-}が心理的な動き等、より抽象的事象を表示するという違いが内在しているように思われる。

- ангалза- (口を)ぱくぱくする (<ангай- (口を)開ける)
- гялалза- きらきら光る (<гялай- 光る)
- улалза- 赤くきらめく (<улай- 赤くなる)
- өнгөлзө- 何度ものぞき込む (<өнгий- のぞき込む)
- найгалза- ゆらゆら揺れる (<найга- 揺れる)
- сэвэлзэ- 風がそよ吹く (<сэвэ- (風で)あおぐ)
- гуйвалза- よろよろする (<гуйва- よろめく)
- / анивалза- (目を)ぱちぱちする (<ани- (目を)閉じる)
- татвалза- (顔, 目, 口等が)びくびくする (<тата- 引く)
- / харгалза- 考慮する; 面倒を見る (<хара- 見る)
- санагалза- よくよく考える (<сана- 考える)
- татгалза- 断る, ためらう (<тата- 引く)
- түдгэлзэ- ちゅうちよする (<түдэ- 長引く, 延びる)

⑧ {-гана-}

この接尾辞は、動詞語幹(特に、人・物の形状を表す「形状動詞」)に接続し、反復アスペクト(《何度も～する》)の意を表示する動詞語幹を形成する。

- сарвагана- 手足をばたばたする (<сарвай- 手足を伸ばす)
- гуйвгана- ふらふらする (<гуйва- ふらつく, よろめく)
- гялтгана- きらきら光る (<гялтай- きらっと光る)
- бүлтэгнэ- (～ бүлтгэнэ) 目がぐりぐりする
(<бүлтий- 目がぐりっとする)
- бөндөгнө- (～ бөндгөнө-) (丸いものが)ころころ動く
(<бөндий- ころころする)

⑨ {-чих-} (～ 簡略形 -ч-)

この接尾辞は、動詞語幹(自動詞, 他動詞の両方)に接続し、動作が完遂されるアスペクト, すなわち完成アスペクト(《～してしまう》)の意を表示する動詞語幹を形成する。

なお、このアスペクト接尾辞は、現代ハルハ方言では、極めて生産的であり、特に話し言葉で多用される。

- авчих- 取ってしまう (<ав- 取る)
- хэлчих- 言ってしまう (<хэлэ- 言う)
- сонсчих- 聞いてしまう (<сонс- 聞く)
- өгчих- 与えてしまう (<өг- 与える)

<例文>

Даян одоо явчихсан бол уу ?
 — Арай үгүй байхаа.
 ダヤンはもう行ってしまったかな。
 まだ行ってないでしょう。

<考察>

この完成アスペクト {-чих-} は、中世モンゴル語のいかなる文献にも実証されず、モンゴル語学者たちの間では、動詞の結合連用語尾 -ж (~-ч) 《~して》と補助動詞 орхи- 《~しまう (←置いておく)》の二つの形態素が結合し、縮約した結果、当該接尾辞 {-чих-} が成立したと考えられている¹⁾。

また、モンゴル文語形 Мо.-*čiqɑ-* / -*čike-* は、口語形式 -чих- [-*tʃix-*] に基づいて、しかもモンゴル文語の母音調和の規則に従って、後に新しく造られたものである。

<口語のレベル>

-ж (~-ч) орхи- > *-жих- > -чих-
 [-*ʧ* orxi-] [-*tʃix-*] [-*tʃix-*]

<文語のレベル>

↓ 口語より形成
 Мо.-*čiqɑ-* / -*čike-*

1) Б. Ринчен, *Монгол бичгийн хэлний зүй*, гутгаар дэвтэр, УБ, 1966, р.66.

Л. Мишиг, *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй*, УБ, 1978, р.159.

⑩ {-аадах-}

この接尾辞は、動詞語幹に接続し、動作が早急に完遂されるアスペクト、すなわち即時アスペクト(《今すぐ~する》)の意を表示する動詞語幹を形成する。

なお、この接尾辞は、最近の文法書には時折見られることがあるが、従来の文法書にはほとんど記述されていない。

<例文>

Дорж оо! Наран өрөөндөө байна уу?

— За, би үзээдэхье.

おいドルジ。ナランは部屋にいますか。

はい、僕が今見てみます。

Та үүнийг орчуулж чадахгүй байна уу?

Аль вэ, би орчуулаадахья.

— За, тэг. Ямар сайн юм бэ.

あなたはこれを訳すことができないんですか。

どれ、私が今訳してみましよう。

— はい、お願いします。ああ、よかった。

<考察>

この即時アスペクト接尾辞 {-аадах-} は、一般に、動詞の分離連用語尾-аад 《～して(から)》と補助動詞 орхи- 《～しまう (←置いておく)》の二つの形態素が結合し、縮約した結果、当該接尾辞 {-аадах-} が成立したと考えられる。

また、モンゴル文語形 Мо.-γadaqa- / -gedeke- は、口語形式 -аадах- [-a:dax-] に基づいて、しかもモンゴル文語の母音調和の規則に従って、後に新しく造られたものである。

<口語のレベル>

-аад орхи-	>	-аадах-
[-a:d ɔrxi-]		[-a:dax-]

↓ 口語より形成

<文語のレベル>

Мо.-γadaqa- / -gedeke-

⑪ {-схий-}

この接尾辞は、動詞語幹に接続して、暫時アスペクト (《少ししばらく～する》) の意を表示する動詞語幹を形成する。

улайсхий- 少し赤くなる (<улай- 赤くなる)

ойргосхий- 少し近づく (<ойрто- 近づく)

<例文>

Та архи их уусан мөртлөө огт согтсон янзгүй, царай чинь улайсхийсэн төдийхөн л байх юмаа。

あなたは酒をたくさん飲んだのに、全く酔った様子もなく、顔が少し赤くなっただけですね。

Зурагчин : Одоо та нар ойргосхий.

За, авлаа шүү. ... Боллоо.

カメラマン : 皆さん, 少し近づいて下さい.

さあ, となりますよ. …はい, 結構です.

<考察>

この暫時アスペクト接尾辞 {-схий-} の起源¹⁾ は, 古くは中世モンゴル語, とりわけ『秘史』の言語に見られる「-s + 動詞」表現に遡る.

1. 「-s + 動詞」表現

中世の文献『元朝秘史』の言語では, 《動作の瞬間性》を表示する「-s + 動詞」表現 (この -s は, 《瞬時アスペクト》表示副詞形成接尾辞と考えられる) が, 計 27 回見られるが, この場合, 動詞 ki- 《する》の他, od- 《行く》, ire- 《来る》, kele- 《話す》, alda- 《失う》, oro- 《入る》, sa'ū- 《座る》, čabči- 《切る》等, 様々の動詞と結合しており, 形態的にいまだ一つの接尾辞として形成されるに至っていなかったことは明らかである.

2. 動詞 ki- の一般化

その後, 『秘史』の「-s + 動詞」表現に見られる多くの動詞の中から, ki- 《する》が最も優勢となり, 一般化されるにつれ, 徐々に「-s + ki-」が結合力を深めていったものと推定される.

3. 現代モンゴル語の瞬間動詞

その結果, 現代モンゴル語では, ухас, тонгос, гялс 等の《瞬時アスペクト》表示副詞から, ухасхий-, тонгосхий-, гялсхий- 等のいわゆる瞬間動詞が形成され, しかも, これは, それぞれ ухас ухас хий-, тонгос тонгос хий-, гялс гялс хий- 等の「-с -с хий-」表現と交換可能であり, 形態的には, 極めて分析的な形として発展を遂げた.

4. 暫時アスペクト接尾辞 {-схий-} の成立

上述した極めて分析的な《瞬時アスペクト》表示動詞「-с хий-」に対する類推的創造 (analogical creation) によって, 新たな《暫時アスペクト》表示 (この場合は, 元来の《瞬時アスペクト》でないことに注意) として接尾辞 {-схий-} が形成され, これは完全に非分析的な形として定着した.

以上の考えを通時的に図示すれば, 概略次のようになる.

中世モンゴル語 (『秘史』の言語)	現代モンゴル語	表示する意味
「-s + 動詞」表現 → -s + ki- 《瞬時アスペクト》表示 副詞形成接尾辞	→ Kh. {-схий-} (一般化) (～ -с -схий-) <分析的>	《瞬時アスペクト》
	接尾辞化 → -ski- → Kh. {-схий-} <非分析的> 《暫時アスペクト》表示	主に《暫時アスペクト》

- 1) 暫時アスペクト接尾辞 {-схий-} の起源に関しては、
塩谷茂樹, 『蒙古秘史』の動詞対 üderi-/üderid- に見える末尾の -d-
の解釈をめぐる, 『言語学研究』第10号, 京都, 1991, pp.23-61.
のうち, 特に pp.52-54 を参照.

⑫ {-зна-}

この接尾辞は, 若干の動詞語幹に接続して, 暫時アスペクト (《少ししばらく～する》) の意を表示する動詞語幹を形成する。これは, 接尾辞 {-схий-} とほぼ同じ意味を表示するが, {-схий-} に比べると, 接続される動詞に制限があり, 非生産的である。

байзна- 少しいる, 少し待つ (<бай- いる)

хүлээзнэ- 少し待つ (<хүлээ- 待つ)

<例文>

Гадаа байзнаж байгаад ирье.

外に少しいてから来よう。

Орж болох уу?

— Чи түр байзнаж бай даа.

入ってもいいですか。— 少し待って下さい。

Бат гуай хүлээзнэж байгаад унтчихлаа.

バトさんは, 少し待っていてから寝てしまった。

<考察>

この暫時アスペクト接尾辞 {-зна-} は, 元来は話し言葉から発展した形式であり, 後に書き言葉に新たに Мо.-jana- / -jene- として導入されたものである。

<口語のレベル>

-зна-

<文語のレベル>

→ Мо.-jana- / -jene-

C) その他

⑬ {-pa-}

この接尾辞は、動詞語幹(主に他動詞、一部自動詞)に接続し、《自然と(ひとりで)～になる》という意を表示する自動詞語幹を形成する。これは、かなり生産的に用いられる出動動詞接尾辞である。(自動詞形成)

a) 他動詞語幹に対して

- эвдрэ- こわれる (<эвдэ- こわす)
- асгара- こぼれる (<асга- こぼす)
- ялгара- 区別される (<ялга- 区別する)
- дэлгэрэ- 広がる, 広まる (<дэлгэ- 広げる)
- алдра- 失われる, 弱まる (<алда- 失う)
- мэдрэ- 感じる (<мэдэ- 知る)
- бөглөрө- ふさがる, 詰まる (<бөглө- ふさぐ, 栓をする)
- цацра- 散らばる, 散る (<цаца- 撒く)
- давра- 度を越える (<дава- 越える)
- залра- 直る, 改まる (<зала- 直す, 正す)

b) 自動詞語幹に対して

- буура- 下がる (<буу- 下りる)
- эдгэрэ- 回復しつつある, 全快に向かう
(<эдгэ- すっきりなおる, 全快する)
- ядра- 疲れる (<яда- 力がない)
- зүдрэ- 疲れ果てる (<зүдэ- 貧乏になる)
- гутра- がっかりする (<гута- 悲しむ)

⑭ {-ни-} = /-ни- ∞ -но- /

この接尾辞は、若干の動詞語幹にのみ接続し、《自ら(自分で)～する》という動作の再帰性を表示する自動詞語幹を形成するが、極めて化石的である¹⁾。(自動詞形成)

- зовни- (Мо.ʃоба-ни-) 自ら苦しむ, 悲しむ
(<зово- 苦しむ, 心配する)
- тогтно- (~ тогтни-) (Мо.тоута-ни-) 自ら定まる, 安定する
(<тогт- 定まる)

1) これに対して、チュルク諸語では、この出動動詞再帰接尾辞(《自分に(を)～する》)は、-(V)n-の形で、かなり生産的に見られる。例えば、トルコ語より例示すれば、次のようである。

yıkan- 身体を洗う (<yıka- 洗う)

söylen- ひとりごとを言う (<söyle- 言う)

soyun- 服を脱ぐ (<soy- 脱がせる)

övün- 自慢する (<öv- ほめる)

5. 出小動詞接尾辞

(Departicle verbal suffixes / P→V)

第5章は、一般の文法書では軽視されがちで、これまでの所、詳細な記述的研究がほとんど行きとどいていない分野である。したがって、ここでは、一連の現代モンゴル語ハルハ方言の派生接尾辞に関する記述的研究の締めくくりとして、語構成分析、特に派生接尾辞の観点からこの分野の問題に分け入ってみることにする。

A) 非生産的可変語根から動詞語幹を形成する接尾辞

хага, хуга, бут, хэмх, бяц, няц, зад …… 等の一連の語は、従来、歴史的に сул үг 《小詞》 → дайвар үг 《副詞》 → нөхцөлгүй үгс 《無語尾語》と呼ばれてきたが¹⁾、筆者は現代モンゴル語の語形式の内部構造の観点から、これらを unproductive variable root 《非生産的可変語根》と呼び、《さらに派生接尾辞を接続しうる非生産的語根》²⁾と定義付けしたい。

1) また、一部の学者によつては、preverb 《動詞前接辞》, үйл үг үүсгэдэг язгуур 《動詞形成語根》と呼ぶこともある。

Ш. Лувсанвандан, *Монгол хэл шинжлэлийн асуудлууд*, УБ, 1981, pp.225-275.

2) モンゴル語で、Цаашид үг бүтээх дагавар залгаж болдог идэвхгүй язгуур とでも表現できようか？

また、「名詞、動詞のどちらの語形変化系列にも現れない語形式のうち、派生接尾辞を接続しうる語根」ということもできる。

さて、非生産的可変語根(以下、UVRと略することがある)から動詞語幹を形成する接尾辞には、次の三つがある。(UVR→V)

① {-чи-}

② {-л-}

③ {-ра-}

① {-чи-}

この接尾辞は、非生産的可変語根に接続し、《何度も(めっちゃくちゃに)～する》という意味をもつ反復動詞を形成する。

② {-л-}

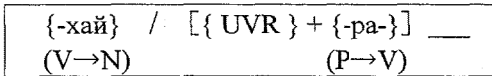
この接尾辞は、非生産的可変語根に接続し、原則として《一度だけ～する》という意味をもつ他動詞を形成する。ただし、文脈により一部、①の意味も表しうる。(他動詞形成)

③ {-pa-}

この接尾辞は、非生産的可変語根に接続し、《自然と(ひとりで)～になる》という意味をもつ自動詞を形成する。(自動詞形成)

<考察>

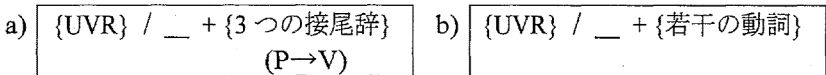
なお、非生産的可変語根に③の接尾辞{-pa-}を接続してできた動詞語幹に、出動名詞接尾辞{-хай}(V→N)を接続することによって、《～した状態の、～した状態にある》という意味をもつ形容詞を形成することができる。すなわち、この語形成を図示すれば、次のようになる。(vide ⑤) {-хай}(V→N))



さて、筆者の調査した所では、非生産的可変語根の特徴は、大きく次の二つに要約できる。

- a) 非生産的可変語根が動詞語幹を形成するためには、少なくとも次の三つの異なる接尾辞{-чи-}, {-л-}, {-pa-}のいずれかを接続しなければならない。
- b) 非生産的可変語根が強意(хүч нэмэгдүүлэх утга)の意で動詞語幹に前置することがあるが、この場合、すべての動詞語幹と結合するわけでなく、その動詞語幹の環境は極めて限定されている。

すなわち、非生産的可変語根の二つの特徴を図示すれば、次のようになる。



さて、これでいよいよ本論に入り得る段階に達したので、その中でも、特によく用いられる非生産的可変語根を十七例選び、以下のように示した。

(1) хага 破壊・打撃表示 ; cf. ぱりん, ぱりん, ばきつ

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
塊状のもの 1. ガラス類 (窓, コップ, 陶器等) 2. 薪	① хагачи- 何度もこわす ② хагал- こわす, 割る ③ хагара- こわれる, 割れる > хагархай こわれた, 割れた	(= хагаргал) ~ цохи- たたく тата- 引く зүсэ- 切る шидэ- 投げる база- 握りしめる өшигл- ける дэвсэ- 踏みつける

(2) хуга 分離・破壊表示 ; cf. ばきつ, ぼきつ, ぼきつ, ばちつ

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
細長いもの (木の枝, 鉛筆, 骨等)	① хугачи- 何度も折る ② хугал- 折る, こわす ③ хугара- 折れる, こわれる > хугархай 折れた, こわれた	(= хугаргал) ~ цохи- たたく тата- 引く дара- 押す мушги- ねじる өшигл- ける дэвсэ- 踏みつける

(3) бут 粉碎・散乱表示 ; cf. ばらばら, ちりぢり

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
堅いもの (ガラス類, 石 炭, 石等)	① бутчи- 何度も粉碎する ② бутал- 散り散りにする ③ бутра- 散り散りになる > бутархай 散り散りになった	(= бутаргал) ~ цохи- たたく дэвсэ- 踏みつける ниргэ- 落雷する

(4) хэмх ~ хамх 粉碎・破壊表示 ; cf. こなごな

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
堅いもの (木, 石炭, 骨等)	① хэмхчи- 何度も粉碎する ② хэмхэл- 粉々する ③ хэмхрэ- 粉々になる > хэмхэрхий 粉々になった	(= хэмхэртэл) ~ цохи- たたく тата- 引く уна- 落ちる дэвсэ- 踏みつける

(5) бяц 粉碎表示 ; cf. ぐしゃつ, ぐちやつ, がしゃつ, がしゃん

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
堅くて小さいもの (卵, 米等の穀類, 骨等)	① бяцчи- 何度も砕く ② бяцал- 粉々に砕く ③ бяцра- 粉々に砕ける > бяцархай 粉々に砕けた	(= бяцартал) ~ цохи- たたく база- 握りしめる атга- 握る дара- 押す гишгэ- 踏む дэвсэ- 踏みつける

(6) няц 粉碎表示 ((5)とほぼ同じ)

; cf. ぐしゃつ, ぐちやつ, がしゃつ, がしゃん

用法	a) /__+{3つの接尾辞}	b) /__+{若干の動詞}
(5)とほぼ同じ	① няцчи- 何度も砕く ② няцал- 粉々に砕く ③ няцра- 粉々に砕ける > няцархай 粉々に砕けた	(= няцартал) ~ цохи- たたく база- 握りしめる атга- 握る дара- 押す гишгэ- 踏む дэвсэ- 踏みつける

(7) зад 開放表示 ; cf. ばかつ, ばかつ

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
箱状のもの (紙の箱, かご, 袋, 木のたる等)	① задчи- めちやくちやに開ける ② задал- 開ける, 分解する ③ задра- 開く, ほどける > задархай 開いた, ほどけた	(= задаргал) ~ цохи- たたく тата- 引く чихэ- 詰める өшигл- ける гишгэ- 踏む

(8) дэлбэ 爆発・破裂表示 ; cf. ばーん, ばーん, ぼーん

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
爆弾, 地雷, 火 山, 橋等	① дэлбэчи- 何度も爆発させる ② дэлбэл- 爆発, 破裂させる ③ дэлбэрэ- 爆発, 破裂する > дэлбэрхий 爆発, 破裂した	(= дэлбэртэл) ~ цохи- たたく тата- 引く чихэ- 詰める үсэр- とび散る

(9) эмт 破損表示 ; cf. ぽろっ, ぽろり

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
コップ, ナイフ の刃, 歯等	① эмтчи- 何度も端を割る ② эмтэл- ものの端を砕く ③ эмтрэ- ものの端が割れる > эмтэрхий ふちの欠けた	(= эмтэртэл) ~ цохи- たたく тата- 引く

(10) нуга 屈曲・屈折表示

; cf. ぐにゃつ, ぐにやり, くにゃ, くにやり, ぎくつ

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
紙, 本, 首, 膝 等	① нугачи- 何度も折り曲げる ② нугал- 折り曲げる ③ нугара- 折れ曲がる > нугархай 折れ曲がった	(= нугаргал) ~ дара- 押す тата- 引く мушги- ねじる гишгэ- 踏む

(11) суга 瞬間的に引き抜く動作表示

; cf. ぐいつ, さつ, すつ, ひゅつ

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
長目のもの (釘, 刀, 羽毛, 富くじ等)	① сугачи- 何度も引き抜く ② сугал- 引き抜く ③ сугара- 抜ける, 抜け落ちる > сугархай 抜けた	(= сугаргал) ~ тата- 引く өргө- 持ち上げる үсэр- とび散る

(12) тас 切断・寸断表示 → 転じて, 停止・中止・中断表示

; cf. すばつ, ずばつ, ぶつつ, ぶつん

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
糸, ボタン等 → 転じて, 授 業, 仕事, 計画, 関係等	① тасчи- 何度も切る ② тасал- 切る, 切断する ③ тасра- 切れる > тасархай 切れた	(= тасаргал) ~ цохи- たたく тата- 引く хярга- 刈る огтол- 切る цавчи- 切る хөрөөдө- 鋸でひく хаза- かむ

(13) ховх 剥離表示 ; cf. ぱりっ, ぱりぱり

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
貼ってある (くっついている) もの (壁に貼ってあるポスター等)	① ховхчи- 何度もはがす ② ховхол- はがす ③ ховхро- はがれる > ховхорхой はがれた	(= ховхортол) ~ цохи- たたく тата- 引く соро- 吸う

(14) мулт 離脱・分離表示
; cf. すぽっ, すっぽり, すぼん, ごぼっ

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
関節, ホック, くつわ, ひもで結んだもの等	① мултчи- 何度もはずす ② мултал- はずす, ほどく ③ мултра- はずれる, ほどける > мултархай はずれた, ほどけた	(= мултаргал) ~ цохи- たたく тата- 引く гишгэ- 踏む оё- 縫う

(15) цоо 貫通表示 ; cf. ぐさっ, ぐさり, ずぶっ, ずぶり

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
的, 木の板, 紙等	① цоочи- 何度も穴をあける ② цоол- 穴をあける ③ цооро- 穴があく > цоорхой 穴のあいた	(= цоортол) ~ цохи- たたく бууда- 撃つ хагга- 刺す хаза- かむ мэрэ- かじる

(16) цуу 分割・亀裂表示 ; cf. ぱりっ, ぱりっ

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
布類, 丸太, コンクリートの壁, 窓ガラス等	① цуучи- 何度も裂く ② цуул- 裂く, 断ち割る ③ цуура- 裂ける, 亀裂が入る > цуурхай 裂けた, 亀裂が入った	(= цуургал) ~ цохи- たたく тага- 引く

(17) нэвт 貫通・浸透表示

; cf. ぐさっ, ぐさり, ずぶっ, ずぶり / びっしより, ぐっしより

用法	a) / __ + {3つの接尾辞}	b) / __ + {若干の動詞}
1. 矢, 弾, 針, 釘等 2. 雨, 水, 油等の液体	① нэвтчи- 何度も貫通させる ② нэвтэл- 貫通させる, しみ通す ③ нэвтрэ- 貫通する, しみ通る > нэвтэрхий 貫いた, 一貫した	(= нэвтэртэл) ~ харва- 射る бууда- 撃つ хатга- 刺す зүсэ- 切る хада- 打つ цохи- たたく хара- 見通す гар- 通り抜ける / ~ нор- ぬれる

B) オノマトペから動詞語幹を形成する接尾辞

аа, уу, ээ, бав, бүв, жин, дүн, хан, шар, шор, пор … 等の一連のオノマトペの詳細な記述的研究は、第5章の始めでも触れたように、これまでに非常に乏しく、内外ともにほとんどなされていないのが現状である。この点に関して小沢重男は、著書『モンゴル語の話』（大学書林、1968, p.99）の中で、「モンゴル語は、日本語ほど擬態語、擬声語の類が多くはないが、それでも、最近のモンゴル語の書物を読んでいると時々見うけられる。現在では、未だこの種の語まで研究が行きとどいていないので、くわしいことは言えない。」（原文をそのまま引用）と述べている。

そこで筆者は、今後の研究への第一歩として、オノマトペから動詞語幹を形成する接尾辞を、語構成分析の観点よりすべて抽出し、整理した結果、次の一覧表に示したような結論を得るに至ったので、以下、個々の接尾辞について順に見てみることにする。

<オノマトペ → 動詞語幹形成接尾辞>

単一接尾辞	複合接尾辞
④ {-ги-}	
⑤ {-ла-}	⑥ {-хила-}
⑦ {-на-}	⑧ {-тна-}
	⑨ {-хина-} (~ -гина-)
	⑩ {-чигна-} (~ -жигна-)
⑪ {-ра-}	⑫ {-хира-}
⑬ {-ши-}	⑭ {-шира-}

④ {-ги-}

この接尾辞は、オノマトペが次の環境の時に現れることが多い。

{-ги-}	/	a) {#CVV#} ___
(P→V)		b) {#CVp#} ___

また、母音調和による次の交替形をもつ。

-ги-	/	/BV/ ___
-гэ-	/	/FV/ ___

- a) オノマトペが {#CVV#} (語幹末が長母音) の時
 шааги- (雨が) ざーざー降る (< шаа)
 шууги- (人が) ざわざわ, がやがや騒ぐ;
 (風が) ひゅーひゅー, びゅーびゅー吹く (< шуу)
 ааги- (あーとうなるほど) ものすごく暑い (< аа)
- b) オノマトペが {#CVp#} (語幹末が p) の時
 царги- (声が) がらがらする (< цар)
 барги- 太くて低い声を出す (< бар)
 дорги- (上下に) がたがた振動する (< дор)
 турги- (馬, 羊, 山羊が) ぶるるーと鼻を鳴らす;
 (水を) ぷっと吹き出す (< тур)
 / жиргэ- (小鳥が) ぴーちくさえずる (< жир)
 ниргэ- (雷が) ごろごろ鳴る (< нир)

⑤ {-ла-}

これには、次のような例がある。

- уйла- (おいおい) 泣く (< уй¹⁾)
 майла- (羊, 山羊が) めーめーと鳴く (< май)
 буйла- ラクダが鳴く (< буй)
 гаагала- (雁が) がーがー鳴く (< гаага)
 гуагла- (カラスが) かーかー鳴く (< гуаг)
 ваагла- (カエルが) くわっくわっ鳴く (< вааг)
 чарла- ぎゃーっと叫ぶ (< чар)

- 1) このオノマトペ уй は、意味の一般化により、現在では《悲しみ、悲哀、喪》の意で用いられる。

⑥ {-хила-}

これには、次のような例がある。

- аахила- はーはー一息が切れる (< аа)
 уухила- ふーふー一息が切れる (< уу)

<考察>

この接尾辞 {-хила-} は、通時的には、次のような形成過程を経て成立したものと考えられ、元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-ki- + *-la- > Mo.-kila- > Kh.{-хила-}
 (N→V?) (?V→V) (P→V)

⑦ {-на-}

この接尾辞は、オノマトペから動詞語幹を形成する接尾辞の中でも、出名動詞接尾辞 {-на-} (N→V) とは性質を異にする、オノマトペ特有の接尾辞である。(vide ④ {-на-} = /-ла- ~ -на-/(N→V))

бавна- (= бавтна-) ぺちやくちやしやべる (<бав)

бүвнэ- (= бүвтнэ-) ぶつぶつ言う (<бүв)

хяхна- (= хяхтна-)

(金属が)きーきー音をたてる, きしむ (<хях)

дүднэ- (口の中で)もぐもぐ言う (<дүд)

шивнэ- ひそひそ話す, ささやく (<шивэр)

⑧ {-тна-}

この接尾辞は、一般に⑦ {-на-} と交替することが多く、これまたオノマトペから動詞語幹を形成する特有の接尾辞である。

бавтна- (= бавна-) ぺちやくちやしやべる (<бав)

бүвтнэ- (= бүвнэ-) ぶつぶつ言う (<бүв)

хяхтна- (= хяхна-)

(金属が)きーきー音をたてる, きしむ (<хях)

хүхтнэ- ふっふつと口をつぼめて笑う (<хүх)

<考察>

この接尾辞 {-тна-} は、共時的に {-на-} と交替することが多いことから、通時的には、元来 {-на-} を有する複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-tu- + *-na- > Mo.-tuna- > Kh. {-тна-}
(P→V?) (?V→V) (P→V)

⑨ {-хина-} = /-хина- ~ -гина- /

この接尾辞は、一般にオノマトペが次の環境の時に現れることが多い。

a) {-хина-}	/	{#CV#}	~	{#CVV#}	___
b) {-гина-}	/	{#CV _n (r)#}	___		

- a) オノマトペが {#CV#}, {#CVV#} (語幹末が短母音, 長母音) の時
 хахина- (金属が)きーと音をたてる, きしむ (< хар)
 шуухина- (= шуухитна-) (息が)ぜーぜーする (< шуу)
- b) オノマトペが {#CVн(г)#} (語幹末が н(г)) の時
 この環境で, かなり生産的に用いられ, 数的に非常に多い。また, 次のように母音調和による三つの交替形をもつ。

-гина-, -гино-	/ /BV/	___
-гэнэ-	/ /FV/	___

- хангина- (金属が)かーんと鳴る (< хан(г))
 янгина- (金属が)きーんと鳴る; (骨が)きんきんうずく (< ян(г))
 гангина- (雁が)がーがー鳴く (< ган(г))
 дангина- (堅い物がぶつかって)がたんと音がする (< дан(г))
 цангина- (金属が)ちゃりんと音がする, きーきー音をたてる
 (< цан(г))
- /хонгино- (鐘が)ごーんと鳴る (< хон(г))
 гонгина- ぶつぶつ言う (< гон(г))
- /жингэнэ- (ベルが)りんりん鳴る; (蚊が)ぶーんと鳴る (< жин(г))
 чингэнэ- (金属が)ちーんと音がする (< чин(г))
 енгэнэ- えんえん泣く (< ен(г))
 гингэнэ- (人が)しくしく泣く; (犬が)くんくん鳴く (< гин(г))
 гүнгэнэ- ぶつぶつ言う, ぼそぼそ言う (< гүн(г))
 дүнгэнэ- (蠅, ぶよ, 蜂, 飛行機, 耳等が)ぶーんと鳴る (< дүн(г))
 хүнгэнэ- (風, モーター等が)びゅーんと音がする (< хүн(г))
 хэнгэнэ- あーあとため息をつく (あくびをする); あーんと泣く
 (< хэн(г))

<考察>

この接尾辞 {-хина-} (～ -гина-) は, 通時的には, 次のような形成過程を経て成立したものと考えられ, 元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-ki- ～ *-gi- + *-na- > Mo.-kina- ～ -gina-
 (P→V?) (?V→V) (P→V)
 > Kh. {-хина-} (～ -гина-)

⑩ {-чигна-} = /-чигна- ~ -жигна- /

この接尾辞は、オノマトペから動詞語幹を形成する特有の接尾辞であり、オノマトペが次の環境の時に現れることが多い。

- | |
|--------------------------------------|
| a) {-чигна-} (～ -жигна-) / {#CVp#}__ |
| b) {-жигна-} / {#CV#}__ |

a) オノマトペが {#CVp#} (語幹末が p) の時

この場合、接尾辞 -чигна- と -жигна- は自由交替する場合が多い。ただし、両者には意味の大差はないが、一般に -чигна- の方が、-жигна- に比べより強い意味を表示するようである。

шарчигна- (～ шаржигна-)

(木の葉、紙が)かさかさ音がする (< шар)

сэрчигнэ- (～ сэржигнэ-) (木の葉が)さらさら音がする (< сэр)

хүрчигнэ- (～ хүржигнэ-) (雷が)ごろごろ鳴る (< хүр)

хорчигно- (～ хоржигно-) (小川の水が)さらさら音がする (< хор)

шорчигно- (～ шоржигно-) (水が)ちよろちよろ音がする (< шор)

хэрчигнэ- (～ хэржигнэ-) (猫が)ごろごろのどを鳴らす;

(風邪を引いた人が)ぜーぜー息をする (< хэр)

хурчигна- (腹が)ごろごろ鳴る (< хур)

порчигно- (液体が沸騰して)ぶくぶく音がする (< пор)

пурчигна- (煙、ほこりが)もくもく出る (< пур)

тарчигна- (荷車が)ごとごと音がする (< тар)

түрчигнэ- (台車を引く時)がたがた音がする (< түр)

торчигно- (ネズミが)がさごそ音がする (< тор)

なお、若干 {#CV#} (短母音終わり) に対して、接続されるものもある。

тачигна- (馬蹄が)ばかばか音がする (< тар)

b) オノマトペが {#CV#} (語幹末が短母音) の時

хужигна- (= хурчигна-) (腹が)ごろごろ鳴る (< хур)

тожигно- (= торчигно-) (ネズミが)がさごそ音がする (< тор)

шожигно- (= шорчигно-) (水が)ちよろちよろ音がする (< шор)

нижигнэ- (拍手が)ぱちぱち音がする;

(太鼓が)どんどん音がする (< нир)

пажигна- (トラクターが)ぶるぶる音をたてる (< пар)

нужигна- (関節が)ぽきぽき鳴る (< нуд)

пижигнэ- (走る時)ばたばた音がする (< пир)

шажигна- (焼肉が)じゅーと音がする (< шар)

なお、若干 {#CVp#} (p 終わり) に対して、接続されるものも見られる。

харжигна- (茶碗, 陶器が) ちゃちゃ音がする (< хар)

пиржигнэ- (風邪でたんが詰まり) 胸がぜーぜーいう (< пир)

< 考察 >

この接尾辞 {-чигна-} (～ -жигна-) は、通時的には、次のような形成過程を経て成立したものであり、元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-čigi ~ *-jigi + *-na- > Mo.-čigina- ~ -jigina-
(P→N?) (N→V) (P→V)

> Kh.{-чигна-} (～ -жигна-)

なお、この接尾辞の構成要素である *-čigi ~ *-jigi (*-чиг ~ *-жиг) は、《動作の連続性・反復性》を表示する接尾辞であったと推定される。

⑪ {-pa-}

これには、次のような例がある。

аара- けんかがひどくなる (< аа)

ээрэ- (子供が) えーんと泣く ; どもる (< ээ)

хэхрэ- げっぷをする (< хэх)

мөөрө- (牛が) もーもーと鳴く (< мөө)

хөхрө- げらげら笑う (< хөх)

чахра- (ガラスを拭く時, 硬い雪の上を踏む時)

きゅっきゅつと音がする (< чях)

шиврэ- (雨が) しとしと降る (< шивэр)

⑫ {-хира-}

この接尾辞は、オノマトペが次のような環境の時に現れることが多い。

{-хира-}	/	a) {#CVp#} ___
	(P→V)	b) {#CVш#} ___
		c) {#CVV#} ___

- a) オノマトペが {#CVp#} (語幹末が p) の時
 архира- (猛獣が) うおーっと吠える (<ap)
 урхира- (猛獣が) うーっとうなる (<ур)
 хүрхэрэ-¹⁾ (猛獣が) うーっとうなる (<хүр)
 хурхира- ぐーぐーいびきをかく (<хур)
 бархира- (= бахира-) (人が) 大声でわめく (<бар)
 цорхира- おいおい泣く, 号泣する (<цор)
 цурхира- おいおい泣く, 号泣する (<цур)
- b) オノマトペが {#CVш#} (語幹末が ш) の時
 хашгир-²⁾ 叫ぶ, わめく (<хаш)
 хошгиро- タルバガが鳴く (<хош)
- c) オノマトペが {#CVV#} (語幹末が長母音) の時
 хуухира- (馬等の家畜が驚いて) 鼻を鳴らす (<хуу)
 шуухира- (息が) ぜーぜーする (<шуу)

<考察>

この接尾辞 {-хира-} は, 通時的には, 次のような形成過程を経て成立したものと考えられ, 元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい.

Proto-Mo.*-ki- + *-ra- > Mo.-kira- > Kh.{-хира-}
 (P→V?) (?V→V) (P→V)

1) хүрхэрэ- (ごーっとうなる) の派生語に хүрхэрээ (滝) がある.

хүрхэрээ (Mo.kürkire < *kürkire-ge) < хүрхэрэ- (Mo.kür-kire-)
 (V→N) (P→V)

2) ハルハ方言では, хашгир- ~ хашгар- 等, -ш の後は, -r- となり有声音だが, Mo.qaskir- (<qas), ブリヤート語 хашхар-, カルムイク語 хашкр- 等は, 無声音のままである.

⑬ {-ши-}

この接尾辞は, オノマトペが次の環境の時に現れることが多い.

{-ши-}	/	a) {#CVr#}__
(P→V)		b) {#CVш(r)#}__

- a) オノマトペが {#CVr#} (語幹末が r) の時
 тогши- (扉を)とんとんノックする (<тог)
 лугши- (脈が)どくどく打つ (<луг)
 түгши- (心臓が)どきどきする (<түг)
 бүгши- ごほんごほんせきをする (<бүг)
 тагши- (わしが)かん高く鳴く (<таг)
- b) オノマトペが {#CVn(r)#} (語幹末が n(r)) の時
 гунши- 鼻声で話す (<гун(r))
 янши- ベちやくちやしやべる (<ян(r))
 танши- 舌打ちする(口蓋を舌で弾く)(<тан(r))
 тонши- とんとんたたく (<тон(r))
 その他、次のような例も若干見られる。
 таши- 拍手する (<та)

⑭ {-шира-}

この接尾辞は、オノマトペが次の環境の時に現れるようである。

{-шира-} / {#CVr#}__ (P→V)

これには、次のような例がある。

шагшира- (賞賛・非難等を示し)舌打ちする (<шаг)

шоғширо- (同情・遺憾等を示し)舌打ちする (<шоғ)

<考察>

この接尾辞 {-шира-} は、通時的には、次のような形成過程を経て成立しており、元来は複合接尾辞であった蓋然性が大きい。

Proto-Mo.*-si- + *-ra- > Mo.-sira- > Kh.{-шира-}

(P→V) (V→V) (P→V)

接尾辞総索引

А

- аа (V→N) 60
- аа- (V→V) 156
- аад (N→N) 58
- аадах- (V→V) 177
- ааж (V→N) 62
- аал (N→N) 4
- аал (V→N) 62
- ааль (N→N) 4
- аан (V→N) 60
- аар (V→N) 63
- аас (V→N) 63
- аахай (V→N) 65
- аач (V→N) 66

Б

- бар (N→N) 4
- бар (V→N) 67

В

- в (V→N) 67
- валза- (V→V) 175
- вар (N→N) 4
- вар (V→N) 67
- втар (N→N) 5
- вх (N→N) 6
- вхи (N→N) 6
- вч (N→N) 6
- вчла- (N→V) 128

Г

- г (V→N) 69
- га (N→N) 7
- га (V→N) 69

- га- (V→V) 157 (156)
- гаа (V→N) 69
- гай (N→N) 41
- гай (V→N) 76
- галан (V→N) 75
- галза- (V→V) 175
- ган (N→N) 7
- гана (N→N) 8
- гана- (V→V) 176
- гар (V→N) 76
- гда- (V→V) 163
- ги- (P→V) 191
- гина- (P→V) 193
- гсад (V→N) 77
- гтай (N→N) 8
- гүй (N→N) 11
- гч (N→N) 9
- гч (V→N) 79
- гш (N→N) 10

Д

- д (N→N) 12
- д (N→N) 50 (48)
- д (V→N) 81
- д- (N→V) 142
- да- (N→V) 128
- да- (V→V) 165 (163)
- даг (V→N) 81
- дай (N→N) 14
- дал (V→N) 82
- дар (N→N) 14
- дас (V→N) 82
- дахь (N→N) 56
- дугаар (N→N) 54

-дуу (N→N) 15

Ж

-ж (N→N) 16

-жи- (N→V) 131

-жигна- (P→V) 195

-жин (N→N) 17

-жира- (N→V) 131

-жээл (N→N) 17

-жээр (N→N) 17

З

-з (N→N) 19

-з (V→N) 83

-зна- (V→V) 182

Й

-(а)й (N→N) 19

Л

-л (V→N) 84

-л (V→N) 89

-л- (P→V) 184

-ла- (N→V) 132

-ла- (N→V) 139

-ла- (V→V) 175

-ла- (P→V) 192

-лаг (N→N) 19

-лан(г) (V→N) 84

-лга (V→N) 85

-лга- (V→V) 162 (156)

-лда- (N→V) 138

-лда- (V→V) 167

-лдай (N→N) 21

-лж (N→N) 22

-лжин (N→N) 22

-лза- (V→V) 175

-лт (V→N) 87

-лха- (N→V) 141

-лца- (V→V) 171

-ль (V→N) 89

М

-м (N→N) 23

-м (V→N) 90

-м (V→N) 91

-м (V→N) 100

-маг (N→N) 24

-маг (V→N) 92

-мад (N→N) 24

-мал (V→N) 93

-мар (V→N) 67

-мгай (V→N) 98 (97)

-мж (V→N) 94

-мсаг (N→N) 24

-мсан (N→N) 25

-мсар (V→N) 95

-мт (V→N) 97

-мтгай (V→N) 99 (97)

-мхай (V→N) 97

-мшиг (V→N) 100

-мь (V→N) 100

Н

-н (N→N) 26

-н (V→N) 101

-н(г) (V→N) 103

-на (N→N) 29

-на- (N→V) 132

-на- (P→V) 193

-нар (N→N) 53 (48)

-нга (V→N) 104

-нги (V→N) 106 (105)
-нгир (V→N) 105
-нгуй (N→N) 29
-нгуй (V→N) 105
-ндай (N→N) 14
-ни- (V→V) 181
-но- (V→V) 181
-нууд (N→N) 48
-нх (N→N) 30
-нхай (V→N) 106 (105)
-нхи (N→N) 30
-нхуй (N→N) 29
-нцаг (N→N) 45
-нцар (N→N) 30

Р

-р (N→N) 32
-р (N→N) 32
-р (V→N) 107
-р (V→N) 109
-ра- (N→V) 139
-ра- (V→V) 181
-ра- (P→V) 184
-ра- (P→V) 196
-раг (V→N) 108
-ран(г) (V→N) 108
-рха- (N→V) 141
-рхаг (N→N) 33
-рхуу (N→N) 33
-рь (V→N) 109

С

-с (N→N) 35
-с (N→N) 52 (48)
-с (V→N) 109
-с (V→N) 110

-с- (N→V) 142
-с- (N→V) 145
-са- (N→V) 145
-саг (N→N) 35
-сан (N→N) 35
-суу (N→N) 35
-схий- (V→V) 178

Т

-т (N→N) 36
-та- (N→V) 146
-та- (V→V) 165 (163)
-(н)таа (N→N) 58
-тай (N→N) 37
-тал (V→N) 82
-тан (N→N) 38
-тгаар (N→N) 54
-тна- (P→V) 193

У

-уу (V→N) 110
-ууд (N→N) 48
-уул (V→N) 113
-уул (V→N) 114
-уул- (V→V) 161 (156)
-уул(аа) (N→N) 56
-ууль (V→N) 118
-уун (V→N) 110
-уур (N→N) 38
-уур (V→N) 114
-уур (V→N) 117
-уур (V→N) 118
-уурга (V→N) 114
-уурь (V→N) 118

Х

-х ($N \rightarrow N$) 40
-хай ($N \rightarrow N$) 41
-хай ($V \rightarrow N$) 121
-хан ($N \rightarrow N$) 43
-хан ($N \rightarrow N$) 44
-хи ($N \rightarrow N$) 40
-хила- ($P \rightarrow V$) 192
-хина- ($P \rightarrow V$) 193
-хира- ($P \rightarrow V$) 196
-хуй ($V \rightarrow N$) 123
-хуун ($V \rightarrow N$) 123
-хь ($N \rightarrow N$) 40

Ц

-ц ($N \rightarrow N$) 45
-ц ($V \rightarrow N$) 125
-ца- ($N \rightarrow V$) 147
-ца- ($V \rightarrow V$) 174
-цаг ($N \rightarrow N$) 45
-цалда- ($V \rightarrow V$) 169
-цгаа- ($V \rightarrow V$) 174

Ч

-ч ($N \rightarrow N$) 46
-ч- ($V \rightarrow V$) 176
-чи- ($N \rightarrow V$) 149
-чи- ($P \rightarrow V$) 183
-чигна- ($P \rightarrow V$) 195
-чин ($N \rightarrow N$) 46
-чих- ($V \rightarrow V$) 176
-чла- ($N \rightarrow V$) 149
-чууд ($N \rightarrow N$) 52 (48)
-чуул ($N \rightarrow N$) 52 (48)

Ш

-ш ($N \rightarrow N$) 10

-ш ($V \rightarrow N$) 126
-шаа- ($N \rightarrow V$) 151
-ши- ($N \rightarrow V$) 152
-ши- ($P \rightarrow V$) 197
-шира- ($N \rightarrow V$) 153
-шира- ($P \rightarrow V$) 198

参考文献

1. 辞書類

- Болд, Л., *Орчин цагийн монгол хэлний тонгоруу толь*, УБ, 1976.
保朝魯 等編, 『東部裕固語詞彙』, 內蒙古人民出版社, 1985.
Bürintegüs, *Mongyul kelen-ü jöb dayudaly-a jöb bičilge-yin toli*, 內蒙古教育出版社, 1977.
Clauson, G., *An Etymological Dictionary of Pre-13th Turkish*, Oxford, 1972.
Дамдинсүрэн, Ц., А. Лувсандэндэв, *Орос-Монгол толь*, УБ, 1982.
『達漢小詞典』, 內蒙古人民出版社, 1983.
恩和巴圖 等編, 『達斡爾語詞彙』, 內蒙古人民出版社, 1984.
哈斯巴特爾 等編, 『土族語詞彙』, 內蒙古人民出版社, 1986.
Igor de Rachewiltz, *Index to the Secret History of the Mongols*, Indiana University, 1972.
Lessing, F. D., *Mongolian-English Dictionary*, Berkeley and Los Angeles, 1960.
『蒙漢辭典』, 內蒙古大學蒙古語文研究室編, 呼和浩特, 1976.
Mostaert, A., *Dictionnaire Ordos*, New York / London, 1968 (rpt.).
Поппе, Н. Н., *Монгольский словарь Мукаддимат ал-Адаб*, England, 1971 (rpt.).
Ramstedt, G. J., *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.).
Šayji, *Mongyul üsüg-ün dürim-ün toli bičig*, Ulaγanbayatur, 1937.
Черемисов, К. М., *Бурят-Монгольско-Русский словарь*, Москва, 1951.
Цэвэл, Я., *Монгол хэлний товч тайлбар толь*, УБ, 1966.
- ### 2. 言語学
- Лувсанвандан, Ш., *Монгол хэл шинжлэлийн асуудлууд*, УБ, 1981.
Пагва, Т., *Хэл шинжлэлийн удиртгал*, УБ, 1976.
Porre, N., *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden, 1965.
Porre, N., *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955.
Ринчен, Б., *Монгол ард улсын угсаатны судлал, хэлний шинжлэлийн атлас*, УБ, 1969.
- ### 3. 文法 (音韻論, 形態論, 統語論)
- Барайшир, Ш., *Халхын аялгуу*, УБ, 1970.
Далхажав, Х., *Хуучин монгол бичиг өөрөө сурах ном*, УБ, 1977.
Жанчивдорж, Ц., Б. Рагчаа, *Монгол хэлний үг зүй*, УБ, 1970.

勝田 茂, 『トルコ語文法』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1984.

Lewis, G. L., *Turkish*, New York, 1976.

Лувсандорж, Ж., *Монгол авианы дуудлага*, УБ, 1975.

Luvсандžav, Šoj., *Učebnice mongolského písma*, Praha, 1982.

Лувсанвандан, Ш., *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг нөхцөл хоёр нь*, УБ, 1968.

Мишиг, Л., *Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэлзүй*, 1978.

小沢重男, 『モンゴル語の話』, 大学書林, 1968.

Orhan Türeli, *Türkçe Gramer ve Kömüştä*, Tokyo, 1968.

Отгонсүрэн, Д., *Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг*, УБ, 1982.

Poppe, N., *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954.

Poppe, N., *Mongolian language handbook*, Washington, 1970.

Ринчен, Б., *Монгол бичгийн хэлний зүй, өгүүлбэрзүй, дөтгөөр дэвтэр*, УБ, 1967.

Рудневъ, А. Д., 『蒙古文典』(山口茂一訳) 大正9年.

Sanzheyev, G. D., *The Modern Mongolian Language*, Moscow, 1973.

Street, J. C., *Khalkha structure*, Bloomington, 1963.

Шиотани, Ш., *Монгол хэлний үг зүй ба үгсийн сангийн судалгаа*, УБ, 2004.

ШУАХ, *Орчин цагийн монгол хэл зүй*, УБ, 1966.

Төмөрцэрэн, Ж., *Орчин цагийн монгол хэлний үгийн сангийн судлал*, УБ, 1964.

Цолоо, Ж., *Орчин үеийн монгол хэлний авиазүй*, УБ, 1976.

Чойжилсүрэн, Д., *Монголын хуучин бичгийн сурах бичиг*, УБ, 1974.

4. 學術論文

精松源一, 「動詞語幹につける接尾辞に就て」, 『朔風』第四号(精松源一教授御退官記念号), 1968, pp.17-27.

Аюурзана, Ц., ‘Орчин цагийн монгол хэлний нэр үг бүтээх дагавар’, *Багш оюутны эрдэм шинжилгээний бичиг*, МУИС, 1964.

Бямбасан, П., ‘Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдал’, *Хэл зохиол судлал*, УБ, 1970.

Дамдинсүрэн, Ц., ‘Шинэ үгсийн дүрмийн тухай ерөнхий зүйл’, *Монгол хэл бичгийн зарим асуудал*, УБ, 1959.

橋本 勝, 「中世モンゴル語の未来形動詞語尾について」『アジア・アフリカ文法研究』2号, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1973, pp.119-134.

Hashimoto Masaru, 'Some remarks on the Language of the Secret History of the Mongols with reference to the deverbial suffixes -müser, -msar', *Fourth International Congress of Mongolists Vol.2*, Ulan-Bator, 1985, pp.421-426.

服部四郎, 「蒙古祖語の母音の長さ」, 『言語研究』第36号, 1959, pp.40-54

Лувсанвандан, Ш., 'Монгол хэлний үгийн бүтцийн тухай асуудал', *Эрдэм шинжилгээний бичиг*, УБ, 1964.

5. 会話書

Лувсандорж, Ж., *Учитесь говорить по монгольски*, УБ, 1978.

Vacek, J., Dž. Luvsandordž, Čoj. Luvsandžav., *Učebnice mongolštiny, Hovorový styl*, Praha, 1979.

著者紹介

塩谷茂樹（しおたに しげき）

1960年石川県生まれ。

専門：モンゴル語学，モンゴル口承文芸。

現職：大阪外国語大学地域文化学科，アジア I 講座モンゴル語，助教授。

略歴：1991年，京都大学大学院文学研究科言語学専攻，博士後期課程単位取得退学。

1980-82年，モンゴル国立大学留学。

著書：『草原の国のむかし話—モンゴル—』能登印刷出版部 金沢 1995

『初級モンゴル語』（共著）大学書林 東京 2001

『モンゴル語日本語ことわざ比較研究』

大阪外国語大学学術研究双書 大阪 2004

Studies of Mongolian Morphology and Vocabulary Ulaanbaatar 2004

『モンゴル語ことわざ用法辞典』（共著）大学書林 東京 2006

論文：「蒙古語における deverbial verbal suffix -s- について」

『言語学研究』京都 1989

「ダグール語ハイラル方言の口語資料—テキストと註釈—」

『日本モンゴル学会紀要』東京 1990

『蒙古秘史』の動詞対 *üderi-üderid-*に見える末尾-d-の解釈をめぐる

『言語学研究』京都 1991

「蒙古語における《險》と《眉》を表す語の意味変化について—特にその語構造に言及して」

『アルタイ学報（韓国アルタイ学会）』ソウル 1994

「蒙古語における《ふいご》、《橋》、《馬乳酒の皮袋》及び《かぎタバコ入れ》を表す語の起源について」

『モンゴル言語学（モンゴル国立師範大学）』オラーンバートル 1998

「蒙古語族における《明日》を表す語の形態及び意味変化について」

『蒙古語文』呼和浩特 2001

「蒙古語における《鞭》を表す語の起源について」

『国際モンゴル学会紀要』オラーンバートル 2004

「蒙古語における《熊》と《子熊》を表す語の起源について」

『日本モンゴル学会紀要』大阪 2004

「モンゴル語族における《習慣》や《傾向》を表す出動名詞接尾辞について」

『大阪外国語大学論集』大阪 2005

「モンゴル語の出動名詞接尾辞 -*мхай*³ (-*мгай*³, -*мгай*³) の起源に関して—特に満洲・ツングース諸語と比較して」

『国際モンゴル学会紀要』オラーンバートル 2005 その他。

大阪外国語大学学術研究双書35
モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究

2007年3月9日発行

著 者 塩 谷 茂 樹

発 行 所 〒562-8558 箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
大阪外国語大学研究推進室編集部門

印 刷 所 〒531-0072 大阪市北区豊崎7丁目7番7号
(株)ア イ ジ イ

ISBN4-900588-35-0

無断転載を禁ずる。

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1. レフ・トルストイと革命運動 | エルヴィン・オーバーレンダー著
法 橋 和 彦 監訳・解説 |
| 2. ロシア語アクセント研究 | 神 山 孝 夫 著 |
| 3. 社会言語学
—言語は社会の不平等を克服するか— | ハーガー/ハーバーラント/バリース 著
乙 政 潤 訳 |
| 4. DWELLING SPACE IN EASTERN ASIA | Richard ZGUSTA 著 |
| 5. ラ・アラウカーナ (第一部) | 吉 田 秀太郎 訳 |
| 6. 私の精神鑑定集 | 志 水 彰 著 |
| 7. モンタベルティ・ベネヴェント仮説
—中世フィレンツェの驚異的發展の謎に挑む— | 米 山 喜 晟 著 |
| 8. 古代ブルガリア語文法 (語幹論) | イヴァン・ドブレフ 著
石 田 修 一 訳 |
| 9. 世界の中のポルトガル語 | 河 野 彰 監訳 |
| 10. ルーマニア語史概説 | アレクサンドゥル・ニクレスク 著
伊 藤 太 吾 訳 |
| 11. ロマンズ言語学入門 | 伊 藤 太 吾 著 |
| 12. ラ・アラウカーナ (第二・三部) | 吉 田 秀太郎 訳 |
| 13. Eine kontrastive Betrachtung
der japanischen und deutschen Sprache | Jun OTOMASA 著 |
| 14. カスティリャ語文法 | エリオ・アントニオ・デ・ネブリハ 著
中 岡 省 治 訳 |
| 15. バタビアの都市空間と文学
—近代インドネシア文学の起源— | 松 尾 大 著 |
| 16. ポルトガルの歴史に残った女性像と
ブラジル文学に現れた女性像 | 有 水 博 著
平 田 恵津子 |
| 17. タイ語の言語表現 | 宮 本 マラシー 著 |
| 18. Learner Difference and Japanese
Language Education
—A Study of Field Dependence/
Independence Cognitive Styles
and Japanese Language Learning— | Junko MAJIMA 著 |
| 19. 馬に乗ったマプーチェの神々
—チリ先住民文化の変遷— | 千 葉 泉 著 |

- | | | |
|--|-----------------------|---------|
| 20. 汉语与中国文化十讲 | 胡 士 雲 | 著 |
| 21. マラルメ作品における虚構の場
-「書物」をめぐって- | 高 階 早 苗 | 著 |
| 22. 砂の上の足跡
-或る中国モダニズム作家の回想- | 施 壘 存 治
青 野 繁 治 | 著 訳 |
| 23. ミシェル・レリス研究
-自己中心主義から芸術創造によるコミュニケーションへ- | 夏 目 幸 子 | 著 |
| 24. A STUDY OF BURMESE RAMA STORY | Toru OHNO | 著 |
| 25. 日・タイ表現例文集 | 宮 本 マラシー
- 宮 孝 子 | 共著 |
| 26. ラテン語からルーマニア語へ
-ルーマニア語史- | マリウス・サラ
伊 藤 太 吾 | 著 訳 |
| 27. Passif, causatif et autres constructions
en français et en japonais
-Quelques Critiques sur la
Grammaire Relationnelle- | Yoshiyuki KINOUCHI | 著 |
| 28. UNE JUIVE NOMMEE EVA
-Etude portant sur <i>Le château de la juive</i>
de Guy des Cars- | Sylvie FUJIHIRA | 著 |
| 29. イスラームの商法と婚姻・離婚法
『諸問題の解説』翻訳と解説 Towzîh al-Masâ'el | ボルージュエルディー
嶋 本 隆 光 | 著 訳, 解説 |
| 30. インドネシアに見られる
外国語から借用された接辞の要素に関する研究 | 森 村 蕃 | 著 |
| 31. Perl プログラミング-テキストデータ処理の基礎- | 田野村 忠 温 | 著 |
| 32. 手紙とEメールにおけるタイ語表現法 | 宮 本 マラシー | 著 |
| 33. モンゴル語日本語ことわざ比較研究 | 塩 谷 茂 樹 | 著 |
| 34. デンマーク語音のカナ転記方法の研究
-デンマーク語の固有名詞のカナ表記方法を視野に入れて- | 間 瀬 英 夫
新 谷 俊 裕 | 著 |

カバーデザイン 上野かおる

Publications of Osaka University
of Foreign Studies,
No.35 2006

ISBN4-900588-35-0

Shigeki Shiotani
A Study of the Derivational Suffixes
in Khalkha Mongolian

